

---

# スーパー口ボット大戦OG

謎人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スーパーロボット大戦OG

### 【Zコード】

Z6527F

### 【作者名】

謎人

### 【あらすじ】

オペレーション・オーバーゲートより数ヶ月後、世界は異星人の脅威に怯えながらも一先ずの平和に甘んじていた。だが一方で、地球連邦大統領グライエン・グラスマンは対異星人兵器の開発と大統領直属部隊の育成を進めていた。その頃、異世界『エンドレス・フロンティア』では長距離移動用の新型ゲートの完成セレモニーを間近に控えていた・・・OG外伝の個人的な続編です。OG未参戦のスパロボや関連作品をプレイ済みで事を前提とした所謂ネタバレ展開もございますので、苦手な方や未プレイの方にはあまりオススメ

出来ませんのDJへ承くだわこ（^-^;）

## 第1話 招かれた異邦人

極めて、遠く・・・

『この世界』はいくつもの世界が交じり合って誕生した。

機械科学が発達した世界もあれば、魔法科学が発達した世界もある。ここに住んでいるのは人間だけではなく、獣人や魔物、鬼とも呼ばれる種族も混在している。

遙か昔から、各世界はクロスゲートと呼ばれる、世界と世界を繋ぐ門で繋がっていた。

しかしそく最近、その門が消滅してしまった。

そして世界すべては混ざり合った。

ここは未知なる無限の開拓地。

『ハンドレス・フロンティア』

3

＜ハンドレスフロンティア・ツアイトクロコダイル移動中＞

リー「艦長。そろそろ目的地ですよ、起きてください。」

アシエン「艦長、目的地までもうすぐでござりますので、とつと起きやがりませ。」

アシエンはブリッジで爆睡しているハーケンをたたき起こした。

ハーケン「OK、アシエン。・・・最悪の覚ましどうも。」

「・・・って、まだ目的地すらみえてないじゃないか。」

アシエン「航行速度から計算してあと30分といったところです。」

相手が相手ですから

よだれの跡付けたマヌケ面のままだとヤバイので早いと  
こ身支度しやがりませ。」

ハーケン「そいつはビッグも・・・」

ハーケン「・・・ところで姫さん方の様子は?」

リーハー「ああ、それなら・・・」

神夜「はーい こちらにあります」

錫華「ほーほつほつほ

ハーケン「・・・いつからここに?」

錫華「ふむ、そちがあわれもない姿で大鼾をかいておったところからか  
らかのう?」

神夜「ハーケンさんの寝顔、ちょっと可愛かったですよ~」

ハーケン「おい、アシェン・・・」

アション「・・・せいぜい寝てる時もカッコ付けるよう努力しやが  
りませ。」

ハーケン「・・・ちよっと顔洗つてくる。ブリッジは任せや。」

神夜「どうやら言われた通りに身支度はするみたいですね。」

錫華「わらわ的には寝てる間に額に肉とでも書いておきたかったの  
う。」

アション「今回は笑いを取るような席ではないのでやつた場合全力  
で対処するぞナマコ姫。」

リーハー「姫さんといえどどういったところは弁えて欲しいものですな。

「

錫華「・・・無論、冗談であるぞ。」

アイнстの親玉、ヴァールシャインとの戦いから数ヶ月がたとう  
としていた。

クロスゲートを造ったアイнстを打ち倒したことで世界すべては  
混ざり合い

一つの新たな世界が誕生した。

新しい世界は広大で、今までのよだな交通手段では間に合わないことが多々あった。

そこでフォルミッドヘイムの指導者、エイゼル・グラナータは新たな交通機関としてクロスゲートを作ることにした。

無論、ゲートにエネルギーを送っていたAINストが消滅し、またクロスゲートそのものも

消滅してしまったので開発は困難を極めた。

クロスゲートを独自に研究し軍用化までに発展したフォルミッドハイムにとつても大元のクロスゲートが無ければゲートを起動させることすらできなかつたからだ。

そこで各国の協力を煽り、新型ゲートの共同開発を行つた。ロストエレンシアからはシュラーフェンセレストとマイティエーラのデータ、

神楽天原からは物質召還技術等々、

各国の科学・技術・魔術総がかりの一代理ジェクトであった。そして、何ヶ月にも渡る苦難の末、今晚、新型ゲートの初起動が行われるのだ。

その立会人として、各国の要人たちが招待された。

今回のハーケンの仕事は神楽天原と式鬼一族の要人の護送。そして新型ゲートの第一転送者としてゲートをツァイドーと潜ることであった。

ハーケン「・・・つたぐ、たまつたもんじやないぜ。」

ハーケンは顔を洗いながら呟いた。

今回の仕事はさほど難しいものではない。だが危険がまったく無いとは言い切れない。

もしゲートに万が一の事があればどのような事態になるかは想像で

きる。

だが彼がこの仕事を引き受けたのは高い報酬のためではない。  
彼自身、新しい世界を造った引き金を文字道理引いてしまったとい  
う責任を

少なからず感じていたからだろう。

実際、世界がこうなつて争いが起こらなかつたといえば嘘になる。  
数多くの小規模の戦争もあつた。

肉親と離れ離れになつた人達にも出会つた。

誰もがこの新しい世界を受け入れられるとは限らないとハーケンは  
この数ヶ月で思い知つた。

普段はニヒルを気取つてゐるように見える彼も、自分がした罪の重  
さを痛感したのだ。

だが自分が全ての人を救えるとはハーケンは思つてはいない。  
だから彼は彼なりに出来る事をすることが自分の罪滅ぼしになると  
考えたのだ。

今回の仕事もその一つなのだ。

アシェン「・・・長、艦長。」

ハーケン「・・・」

アシェン（D-T-D）「いゝカゲンにしないとボコッちやうよ？はー  
きゅん！」

ハーケン「おつとすまない、アシェン。だが多少無神経だな。  
男がナーバスなときは放つておくもんだぜ。」

アシェン（D-T-D）「だつてボク神経ないもん。アンドロイド  
だもん。」

ハーケン「（言つだけ無駄だつたか・・・）」

だがこつこつとき、彼女の無神経さがかえつて良い場合もある。  
下手に気遣つてくれるよりは案外いいかもしけないからだ。

アシェン「ところで艦長、宜しいのですか？お一人に最後のお別れの話をしなくて。」

ハーケン「なんで失敗すること前提で話すんだお前はあ？」

アシェン「宜しければ遺言を録音しちゃいましょうか？」

私が多少のアレンジを加えてドラマティック且つエキセントリックにいたしますが。」

ハーケン「話を失敗すること前提で進めるな。」

アシェン「・・・」

アシェン「正直、新型ゲートは未知数です。あらゆる結果を想定して行動すべきです。」

ハーケン「確かに向こうの話じや試作で何度も暴走しかけたそうだな。」

アシェン「はい。ですが苦難の末に実験に成功。その後の幾度のテストで安全性を高め

今に至っちゃうそつです。」

ハーケン「俺が最後のモルモットになる。それだけの話さ。」

アシェン「・・・」

ハーケン「本当はこの計画、最初から携わりたかったんだがあのスカルボスが中々許してくれなくてな、回ってきたら一番最後だった

つてわけだ、これがな。」

アシェン「艦長が責任を感じることはあります。エイゼル・グラナータも

それを察していたのでしょうか。」

ハーケン「・・・ま。いまさら駄々をこねても仕方ない。できる仕事をするだけや。」

アシェン「では艦長、ブリッジへ。お一人がお待ちしておりやがります。」

ハーケン「オーケイ。では旅路を祝して乾杯でもしようかね。」

アシェン「未成年に酒飲ます気ですか？このエロ銀髪」

ハーケン「やうこつは既に決じやないだろ。」

「フォルミッシュヘイム・バレリアニア塔前へ

エイゼル「よつひアフォルミッシュヘイムへ。この度は遠ごとにわを  
お越しいただき感謝する。」

神夜「い、いえいえ。ソレソレからじやむ久しぶりでござりますです。」

錫華「ビリヤのオンボロのよつて呪律が回らなくなつてあるが、神  
夜。」

アシエン「それ、誰かの嫌がらせですか？胸板姫。」

ハーケン「こんなところでドンパチは勘弁してくれよ。」

それでも王直々に御歓迎の挨拶とは恐縮いたします。

「

フォルミッシュヘイムに到着した一行は、新型ゲート前でオルケスト  
ルアーミーのメンバーと

落ち合つ予定だった。

ハーケンはキュオンかヘンネあたりだろうと思つていたがそんじ  
たのは

現フォルミッシュヘイム指導者、エイゼル・グラナータであった。

エイゼル「王といふのはよしてもらいたい。私はただの一指導者に  
過ぎん。」

国が正式に確立した後、もつとふさわしい者が王になれ  
ばよい。」

「??？」相変わらずよねえ、エイゼル。」

エイゼルの後ろから音も無く忍び寄つたのはトヨーネポリス代表のカツツェだ。

ハーケン「おや、キヤツトガイ。お早いお着きで。」

錫華「ぬぬ・・・。わらわ顔負けの見事な月面歩法ぞな。」

カツツェ「女の子に褒められても嬉しくなくてよ。」

エイゼル「カツツェか、久方ぶりだな。」

カツツェ「半年振りかしら？あなたに会えなくてアタシ、寂しかったわあん！」

アション「気色悪い声を出さないで下さい。カマ猫野郎。」

ハーケン「お前はもう口を出すな。毒舌口ボ。」

アション「その言葉を聞くとあのドチビ洗濯板娘を思い出してムカつ腹が立ちやがるので

やめてくださいませ。」

ハーケン「・・・！」

ハーケン「で、そのリトルデータモンがお前の後ろにいるわけだが・・・」

アション「！？」

アションが振り向いた先には戦術砲機を構えていたキュオンがいた。止めようとするヘンネを無視して発射体制万全である。何故か半泣きしているがそこに触れるのはよしておこう。

キュオン「誰がドチビ洗濯板だー！この毒舌マグロー！！」

アション「相変わらずのチビっぷりですね。まるで成長しておりますせんね。」

キュオン「せ、成長してるもん！毎日牛乳飲んでるもん！！」

アション「半年前のデータと比較しても身長、胸囲ほぼ100パーセント一致。

努力の無駄遣いです。牛乳に謝りやがりませ。」

キュオン「うう・・・」

ヘンネ「ハイハイ、そこまでだよあんた達。キュオンも泣くんじゃないよ。」

神夜「キュオンちゃん泣かないでね。そうそうーお豆にっぽい食べると良いみたいですよ。」

キュオン「キュオン信じないもん。もつ悪乳の言ひことなんか信じないもん。」

神夜「あ、あくにゅう・・・？」

カツツエ「女の子達は大分盛り上がっているみたいねえ」

ハーケン「ならこっちもそろそろ盛り上がり上がってもいいじゃないか？」

だら?」

エイゼル「そうだな、本題に入るべきだな。」

ハーケン「言われた通りにお姫さん方はお送りしたぜ。

次は俺の番だぜスカルボス。」

エイゼル「うむ。そちらの手配はすでに出来ている。

後は予定通りシアイトをゲート前方に移動させておけばよい」

ハーケン「オーケイ。リー、そつぱいことだよろしくたのむぜ。」

リー「アイアイサー。ところで艦長はこれからどちらへ?」

ハーケン「ここには何度も来だが上っ面だけで中身のほうはまるで見ちゃいない。」

発進までゲートの事を色々聞いておくことにするわ」

リー「じゃあ、しっかり勉強なさってください。」

こつちは先に行つて待つておきますんで。」

そう言うとリーはシアイトに乗り込みゲートがある方向に向けて移動を始めた。

ハーケン「というわけだ。スカルキング、解説を頼むぜ。」

エイゼル「うむ。初めてここに来た者もいる。改めて説明するとしよつ。」

カツツエ「はーい、よい子の皆、そういうことだから。痴話喧嘩はそこまで。

今からエイゼル先生と愉快な仲間たちからの小難しい説明がはじまるわよん。

解らない事があつたら恥ずかしがらずに手を挙げてね~

▽

神夜「はーい！」

錫華「おー！」

アシエン(DTD)「バッチコーイ！」

エイゼル「うむ。まずは新型クロスゲートシステム

『ヒュアキンティオス』から説明せねばならぬな。』

神夜「ひゅ、秘遊亜金帝雄？」

錫華「言いにくいくこと甚だしいぞな。」

エイゼル「簡単に言えば、バレリアニア塔のゲート干渉機能を基盤とし、

シユラーフェンセレストのデータをもとに造つたジエネレーターからの

エネルギーを経由させてゲートにエネルギーを送ると同

時に

転移座標の安定性を保つシステムだ。」

神夜「ぜ、全然簡単じゃ有りません。」

錫華「アシエンよ。今の説明聞いておつたか?」

アシエン(DTD)「うーん。ボクわかんない。」

ハーケン「このぐらいは理解してくれよアシエン。」

鞠音「でもそれだけでは説明不足ですわ。」

神夜「わっ！鞠音博士！」

錫華「ツァイトで見かけぬと思つたらフォルミッシュへイムにおつたのか？」

ハーケン「ドクターは一応このプロジェクトチームの第一人者だぜ。

旅の途中にいわなかつたか？」

アシェン「艦長は全く持つてお話しておりませんで」ございました。

鞠音「大変失礼ですよ、艦長。

でも今回はゲート開発の件もありますので良しとしまじょつ。

ハーケン「ドクターの寛大さに感謝するよ…」

神夜「じゃ、じゃあ鞠音博士、続きをお願ひします。」

錫華「先程の説明でなにか欠けておるところがあるとそちらは申しておつたが…」

鞠音「まず転移座標の安定はバレリアニア塔だけでなくマイティエーラからサルベージしたデータを元に補助システムを使用しています。

これには神楽天原の転移技術も使われております。

それにゲートそのものはフォルミットヘイムが十年戦争に使用した

軍事用ゲートを原型とし、この世界のあらゆる技術で大型化させたものです。」

ヘンネ「…。

『ゲート新造にはフォルミットヘイムだけでは出来なかつた。』

そう言いたいんだる。」

鞠音「はつきり言えばそうです。」

キュオン「で、でもフォルミットヘイムだつて凄いんだよ！

システムの大元のプランとか、軍事ゲートの発掘とか、

エイゼル「キュオン、もう良い。ヘンネの言つ通りだ。」

キュオン「…！」

エイゼル「澄井鞠音博士。

今回のプロジェクト、我らだけでは決して成し得なかつた。

そのことには幾ら感謝を述べても足りぬ。」

鞠音「私は新型ゲートの開発を自分の手でしたかつただけですわ。」

アシエン「つまり、」

アシエン（D-T-D）「べ、別にあなたのためじゃないんだからねー。」

アシエン「という事ですね。」

鞠音「ちょっと後でラボに来なさい。」

ネジ一つ残さず分解してあげますわ。」

ハーケン「後にしてくれ、時間の無駄だ。」

・・・

それでもよくもまあ半年足らずでゲートを実用化できたもんだな。」

エイゼル「この世界の技術力がそれほどまでだったという事だ。」

ハーケン・ブロウニング。」

ハーケン「・・・」

エイゼル「今思えば、24年前、マイティエーラが落下したときこうすれば

我們も戦うこともなく、王も死なずに住んだのかもしね。

」

ハーケン「・・・それは、『今思えば』だろ。」

エイゼル「む・・・」

ハーケン「今やることは過去を悔いる事じゃなく、前に進む事だろ。」

それに過去の過ちは必ずしも悪いことばかりじゃないから、これがな。」

エイゼル「だからこそこうして互いに協力関係を結ぶるよつてなつたのかもしだねな。」

ハーケン「言い方は悪いが結果オーライってヤツだ。」

アシエン「そうです。私はいつもそのやり方で通っています。」

「

錫華「ぬしの場合、話しが大きく違う気がするがのう。」

ヘンネ「ん？・・・どうやら時間のようだ。」

「

エイゼル「そうか、では頼む。」

ヘンネ「じゃあ、エイゼル。」

私とキュオンは管制室に行つてジェネレーターに火を入れて来るからな。

あとのことは任せるよ。」

そういうとヘンネとキュオンは一足先にゲートへ向かつた。

ハーケン「おやっまだ出発までにはだいぶ時間があるんじゃないのか？」

エイゼル「このゲートの幾つかの欠点としてエネルギーチャージの長さがある。

通常空間転移は次元転移より遙かにエネルギーが少ないが

それでもかなりの量になる。

そして以前ならばエネルギーは無尽蔵であつたが今はそうではない。」

ハーケン「成る程、節約つてわけか。

で、そのチャージつてのはどのくらいかかる？」

エイゼル「一度の転移につき、約一時間を必要とする。」

カツツユ「とんだ鈍行ダイヤねえ。」

神夜「でも町から町まで一氣に行けるのはいいですね。」

アシェン「場合によつては普通に行つた方が早い場合もありやがりますね。」

カツツユ「でも長すぎるつていう程でも無いのよねえ。」

エイゼル「故に、今のところゲートの設置は主要都市のみとするつもりだ。」

鞠音「ですが、ジョンネーターの改良を重ねれば

いずれチャージの問題も解決されるでしょう。」

錫華「今、幾つかと申したな？まだ他に問題があるのかえ？」

エイゼル「もう一つの欠点は他の世界を繋ぐ力までは備わつていな

いという事だが。

「こちらは改善するつもりはない。」

鞠音「それに、他の世界からもこのゲートを介して進入することは出来ません。」

ハーケン「出ることも入ることも出来ない。行けるのはこの世界のみ・・・

前のクロスゲートなら欠陥品だが、今はそれで十分。  
それにアインストの事を考えるとそつも言つていられないな。」

エイゼル「そもそもこのゲートは交通機関用だ。

それ以上の機能は持たせぬべきと判断したのだ。」

ハーケン「賢明だな。」

アシェン「・・・艦長、言ひ忘れましたがここからゲートまで歩いて20分ぐらいかかります。

早いとこ適当に繰り上げてツアイトに行つちやつた方が宜しいかと。」

ハーケン「そういう事はまず始めに言え。」

ハーケンたちは一度話を切り上げ、ツアイトに向かうことにした。  
だが、ハーケンたちが付く直前に、それは起つた。

エイゼル「・・・これは！」

神夜「わあ！これが新しい交鬼門ですか！

揺ら揺らとした輝きが綺麗極まりないです！」

錫華「阿呆！まだ交鬼門は起動しておらぬはずだぞよ！」

アシェン「でも完全に電源がオンになつていやがりますね。」

ハーケン「まだエネルギーはチャージ中のハズじゃないのか？」

ヘンネ「その通りさね！」

管制室からヘンネとキュオンが駆けつけてきた。

エイゼル「ヘンネ！状況を説明せよ！」

ヘンネ「見たまんまだよ。」

キュオン「ま、まだエネルギーはチャージ中だし。

それにゲートにはまだエネルギーは送っていないんだよ

！」

ハーケン「じゃあ何か！？」

ゲートがエネルギー無しで動き始めたって事か！？

神夜「そ、それってとても危ないことなんじゃ」

アシエン「ぶっちゃけ、とてつもなくヤバイです。」

錫姫「ぶっちゃけずとも解るわ！」

こうして話している間にもゲートはその光を増していた。  
それはゲート起動のカウントダウンに他ならなかつた。

鞠音「！？」

ゲートが起動を始めましたわ！？

ハーケン「どうなるんだ！？」

鞠音「予測不可能ですわ。この辺り一帯丸ごと吹っ飛んでしまうかも。」

錫華「さらりと恐ろしいこと言つな！！」

カツツエ「そいつはマズイ！エイゼル！すぐに全員の避難を！」

ヘンネ「ここに来る前に研究者から兵士までにすでに避難命令を出しておいた！」

あとは私たちだけだ！」

ハーケン「だつたら全員ツアイトに乗り込め！」

全速力でここから避難だ！」

ハーケンたちは急いでツアイトに乗り込み、ブリッジに駆け上がった。

リー「艦長！どういう事です！？」

まだ出発までは時間がありますが、  
ゲートが開こうとしています！？」

ハーケン「原因不明の暴走だ！」

全速力で後退だ！

急げ！時間が無い！！

リー「了解しました艦長！」

ツァイトクロコディール、フルドライブ！！  
皆さんしっかりつかもってください……」

だが、ツァイトが後退した次の瞬間、ゲートは光に包まれた。  
その光はクロスゲートの転移の時と全く同じものだった。

ハーケン「ぬああつ！！間に合わ……！」

神夜「きやあつ……！」

錫華「むうつ……」この感覚は交鬼門を潜るときの……

エイゼル「……世界を……超えるのか！？」

## 第1話 招かれた異邦人（後書き）

「ご意見、ご感想は大歓迎です。

戦闘以外の通常の会話・雑談等は表情や行動といった部分の説明をあえて少なめにしてスパロボの会話パートの雰囲気を再現を試みております。

「こうしたらより判り易い」

「この方法では判り難い」

といった意見は隨時募集しておりますのでよろしくお願いします。

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その1

<プリモルスキーネーチカ5????>

ミタール「・・・君のレポートは読ませてもらつたよ。

AI1プロジェクト、予定通りに進んでいるようだな。  
エルデ「ええ、AI0から得た良いデータもありましたし・・・」

ミタール「メディウスの発進準備は既に完了済みだ。

パイロットの方はどうだ?」

エルデ「既に合流ポイントで待機中です。

そこまでの移動ぐらいでしたらAI1と私の制御だけで  
十分ですわ。」

ミタール「うむ、だがあの男は私とのプロジェクトに

豪く恨みを持っておつてな。

・・・なんなら、無人機を幾つか持つていっても構わん  
ぞ?」

エルデ「それでしたらご心配なく。既に手は打つておりますので。」

ミタール「ふふ・・・やはり君は抜け目がないな。

ミッテ博士。」

エルデ「・・・それで、ザパト博士。やはり、サーベラスとガルム  
レイドの

搭乗者は・・・」

ミタール「ヒューゴ・メディオとアクア・ケントルムで決まりだ。」

エルデ「ですが・・・」

ミタール「確かにシミュレーションの結果は芳しくない。

だがそれはTEエンジンの出力不足によるものだ。

彼らの能力はむしろそれを補つている程なのだよ。」

エルデ「・・・・・・」

ミタール「ん？まさか後ろめたさがあるとでも言つのかね？」

確かアクアは君の・・・」

エルデ「そんなセンチな感情は持ち合わせてはおりません。ただあの二人があの子の相手として相応しくないと思つてゐるだけです。」

ミタール「『あの子』、か。確かに君のあれに対する接し方は、まるで親子のようなものだつたな。」

エルデ「・・・何故、TEエンジンをメディウスではなくあちらの機体に回したのです？」

あれの制御をAI-1に任せれば、より良い結果を出せると思うのですが？」

ミタール「ハンデだよ。

今のままでは釣り合いが悪いからな。

それに、いくらAI-1が優秀だからといってもDFCシステムを理解することなど

現状では不可能だらう？」

エルデ「感覚制御など・・・非効率且つ非常識ですわ。」

ミタール「だが、アクアのデータは

AI-1にとつても貴重な物となる。

君は不服かもしけんがこれが現実だ。」

エルデ「・・・いえ。

私のAI-1と博士の開発したラズナニウム。

この組み合わせが真価を發揮するには完全なTEエンジンが必要不可欠です。

これに関しては、彼らと博士にお任せするしかありません。」

ミタール「うむ。任せてもらおう。」

エルデ「最後に・・・メインターゲットは

例の三隻の戦艦でよろしいのですね？」

ミタール「そうだ、ハガネとヒリュウ改、そしてクロガネだ。」

機が

集まっている。

それに何かしらの勢力との対立にはこれらの艦が主力として扱われた事例が多い。

マークすれば、様々なデータ取得対象に出会えるだろう。

「エルデ、わかりました。

まずは近い場所から接触してみます。」

では、博士・・・」

ミタール「ああ、良い結果が出ることを・・・

いや、それは構わん。

ただ私の理論が正しかったことを証明してくれれば良い。私は最後まで付き合つて身を滅ぼす程馬鹿ではないからな。」

エルデ「・・・」

◀プリモルスキー　トーチカ5　食堂▶

アクア「・・・ちょっとといいかしじら・ヒューゴー！」

ヒューゴー「何の用だ？」

アクア「しらばっくれないでよ！」

さつきのシミュレーションの事よ。

どうして私の指示に従わなかつたの？

模擬敵の予測反撃パターン出したのに！」

ヒューゴー「全機撃墜、しかもタイムは8秒縮まった。

それに文句があるのか？」

アクア「そうじやないわ！」

そうして勝手に動いたのか、  
その理由を聞かせて！」

ヒューゴ「結果は出した。

それ以上に説明する必要も意味も無いだろ？」「

アクア「あるわよ！」

索敵と分析は私の担当なの！

それを無視するなんて。

これからもそんな調子でいらっしゃ  
たまんないわ！

私達が出すべき結果は、

ザパト博士達が望む結果なの。

いくらスコアが良くなつてそれじゃ意味が無いの！」

ヒューゴ「（あの男の望む結果か・・・）」

アクア「とにかく、私の指示を無視するのはやめてよね」

ヒューゴ「参考にはしている。」

アクア「ああ、そう。参考程度なんだ。

元特務部隊のパイロットさんにとっては

私の意見は参考程度にしかあてにしないのね。」

ヒューゴ「そういうつもりじゃない。ただ・・・」

アクア「ただ・・・何なのよ？」

ヒューゴ「あれが実戦なら、こちらが落とされていった。」

アクア「・・・！」

ヒューゴ「お前はT E H N D G N の出力調整に専念してくれればいい。

試作機の戦闘と操縦は俺に任せろ。」

アクア「・・・ああ、わかったわよ。

どうせ私は実戦経験なんて無いわよ。

でもね、いつかは私だっていつかは  
試作機のパイロットに・・・」

ヒューゴ「（口だけなら何とでも・・・）

「・・・！」

アクア「ん? どうかしたの?」

ヒューゴ「な……何でもない。」

悪いが、水を取つてきてくれないか?」

アクア「はあ? あ、あのねえ!」

何で私がそんな事しなきゃならないの?」

ヒューゴ「……頼む。」

アクア「……わ、わかつたわよ。」

お水でいいのね、お水で?」

ヒューゴ「ああ……。」

アクアが水を取りに行つている間も  
ヒューゴの苦悶の表情は消えなかつた。

ヒューゴ「(くつ……)」

「ここしばらくは大丈夫だと思つていたが……  
ミスターの野郎……」

アクア「はい、お水。」

ヒューゴ「すまないな……」

そういうとヒューゴはポケットから薬を取り出した。

アクア「ねえ、前から時々飲んでいるみたいだけど、  
それ、何の薬なの?」

ヒューゴ「……ただの風邪薬だ。」

アクア「ふうん、風邪ねえ。」

凄腕のパイロットさんも

意外とデリケートなところがあるんだ。」

ヒューゴ「悪いか?」

アクア「別に。」

薬を飲んで暫くするとヒュー＝ゴーが  
苦悶の表情が消えていった。

ヒュー＝ゴー「（・・・何とか。

・・・落ち着いてきたか。）」

アクア「早いトコ治しなさいよ？」

じつちにうつされたら、たまんないわ。」

ヒュー＝ゴー「大体、お前こそ風邪はひかないのか？」

DFCスースだつたか？」

そんな水着みたいな格好で。」

アクア「もう！」

私だつて、好き好んでこんな格好している  
わけじゃないんだから。

大体、あんただつて穴だらけの服着ているじゃない。」

ヒュー＝ゴー「だが、割と気に入っているんだろ？」

アクア「そうそう、

このままお風呂に入れるし・・・

つて違うわよ！

（私だつて、仕事じゃなきやこんな恥ずかしい服  
着られないわよ。

まあ、慣れてきたけど・・・。）

実はヒュー＝ゴーとアクアの衝突はこれが初めてではない。  
彼らには衝突や小競り合いが日常と化していた。

お互いが仕事上の関係以外のプライベートな事を  
知らなかつたせいでもあるし、

実戦で場数を踏んできたヒュー＝ゴーと

優秀とはいえ実戦経験のないアクアとでは  
意見が合わないのは当然だといえる。

だが彼らとて子供のようにいつまでも言い争つてるのは

馬鹿げている事だと理解している。

いつものように、互いのどちらかが話を切り上げて終わる。

それでいつもは済ませていた。

だが今日はそうはいかなかつた。

ヒューゴ＆アクア「！？」

突然基地が揺れ、爆音が響いた。

それも外からではない、内側からだ。

ヒューゴ「何だ!? 爆発だぞ！」

アクア「格納庫の方からよ！」

ヒューゴ「まさか、サーベラスかガルムレイドが！？」

アクア「何言つてんの、私達が乗つていのによ！」

ヒューゴ「じゃあ、メディウス・ロクスか・・・？」

アクア「それこそあり得ないわ！」

まだパイロットも決まっていないのに！

ヒューゴ「とにかく博士の所に行くぞ！」

ヒューゴとアクアは急いでザパト博士の部屋に向かつた。

ミタール「うぬ・・・、

格納庫のハッチが破壊されたか！」

アクア「博士！何が起きたんです！？」

ミタール「五号機が・・・、

メディウス・ロクスが

何者かに奪われたようなのだ。」

ヒューゴ「！」

アクア「そ、そんな・・・、

いつたい、誰が！？」

ミタール「すまんが、君達は

すぐにメディウスを追つてくれ  
あのがノイエDC残党にでも渡つたら  
大変なことになる。」

アクア「そ、そうだわ！」

ラズナニウムが悪用されたら、  
アースクレイドルの事例と

同じようなことが起きるかも・・・！」

ヒューゴ「（アースクレイドル・・・か・・・）」

アクア「わかりました、博士！」

メディウスは必ず私達の手で取り戻します！

ミタール「うむ。

追うならガルムレイドよりもサーべラスのほうが  
速い。すぐに発進準備をさせる。

・・・場合によつては機密のためだ。

メディウスを破壊しても構わん。」

アクア「は・・・はい！」

ヒューゴ「（手塩にかけた機体にも躊躇しない・・・

こいつらしいやり方だな。）」

ミタール「一人とも、くれぐれも頼むぞ。

（そう、くれぐれもな・・・フフフ）」

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その2

＜地球連邦軍 極東支部伊豆基地 管制塔＞

オペレーター「レイディバード、着陸完了しました。

続いて、機体と物資の搬出作業を開始します。」

ケネス「パイロットの方は？」

オペレーター「只今、到着手続きをしてると思われますが・・・」

ケネス「終わり次第、すぐに私のところへ通せ。」

オペレーター「了解しました。」

ケネス「（・・・フン。あいつ等め、よつやく来たか。）」

＜地球連邦軍 極東支部伊豆基地 司令室＞

キョウスケ「ATXチーム、キョウスケ・ナンブ以下4名、到着いたしました。」

ケネス「ふむ。カムチャツキー基地から」苦労。

まあ向こうではどうせ暇を持て余していたのだろう。  
だがここではそういうかないからな。」

キョウスケ「心得ております。」

ブリット「（偉そうな態度は相変わらずか・・・！）」

エクセルン「（ブリット君！いつかみたく逆切れはナッスイシングだからね。）」

ケネス「では早速だが、合同演習の準備にとりかかるでもらおうか？」

「ここは向こうとは違つて大変忙しいのでな。」

エクセルン「（うわっ・・・！）こまであからさまだと返つてムカ

ツク！」

クスハ「（ヒクセレン少尉、落ち着いて落ち着いて。）」  
キヨウスケ「・・・では失礼します。」

キヨウスケたちは部屋を後にして格納庫の方へ向かった。

ケネス「・・・フン。相変わらずだな。  
だがせいぜい、がんばつてもらわないとな。」

＜地球連邦軍 極東支部伊豆基地 格納庫＞

アヤ「キヨウスケ中尉、お久しぶりですね。」

キヨウスケ「お久しぶりです、アヤ大尉。」

お変わり無さそうで何よりです。」

リュウセイ「そちらこそ、カムチャツカからの長旅、

お疲れさまっす！」

ライ「リュウセイ・・・。」

『親しき仲にも礼儀あり』といふ言葉を知らんのか？』

ブリット「あれ？『行儀あり』じゃなかつたですか？」

エクセレン「んふふ」二人とも違うわよ。

正解は『妙技あり』よん

クスハ「そ、そうでしたっけ？」

キヨウスケ「間違つたことを教えるな。

『礼儀あり』であつてゐる。」

リュウセイ「でも俺、そういう堅つ苦しいのはビツも苦手で・・・」

キヨウスケ「俺は別にそれでかまわんが。」

エクセレン「そそ。もっとフランクな感じでいきましょ。」

クスハ「ところで、マイさんとヴィレッタ大尉はどうじり合って？」

リュウセイ「ああ、隊長とマイならART-1の調整に立ち会つて  
いるところだ」

アヤ「『後は私たちで済ませておくから』って、みんなを迎えて  
きたの。」

エクセレン「結構気がきくのよね~、ヴィレッタ大尉。」

リュウセイ「これでもう少しトレーニングが楽だったら・・・」

ヴィレッタ「樂だったら?」

リュウセイ「う、うわっ! 隊長、いつからそこに! ?」

ヴィレッタ「・・・リュウセイ、訓練が終わったら、

トレーニング10セットするように。」

リュウセイ「(まる聞こえだつたか・・・)」

マイ「ヤブヘビだつたな、リュウ。」

エクセレン「あらら。

ヴィレッタ大尉、お久しぶり。

マイちゃんも元気だつたかしら。」

マイ「エクセレン少尉もお元気そうで。」

アヤ「・・・隊長たちが、こちらにこむといつひとは

ヴィレッタ「ええ、準備は整つたわ。」

ATXチームが遙々伊豆基地までやつてきたのは、

SRXチームとの合同訓練をやるためにだ。

レイオスプランが始まつたばかりとはいえ、

現在の成果はART-1のみである。

だがART-1はあくまでもテストタイプに過ぎない。

本懐である『アルタード』が完成するにはまだまだ時間がかかる。

そして開発を進めていくうちに、現在のデータだけでは

不足しているということが判明した。

そこでオオミヤ博士は以前RシリーズをATXチームと戦わせて得  
たデータが、

後にRシリーズのプラスパーク考案の際に役に立つたことを思い出

し、

再びATXチームとの合同訓練を申請したのだ。

戦時のデータを利用よりも実際に戦わせた方がよりよいデータを得られるとの

ハミル博士の意見もあつたからだ。

始めは無理かもしれないと思つていたが、

意外にも早々に上層部から許可が下りたため（ケネス指令は快く思つていなかつたそつだが）

このたび合同訓練を行うことになつた。

ブリット「ATXチームとSRXチームの合同訓練か・・・」

リュウセイ「あん時はアルトに装甲殆どもつてかれただんだよなあ・・・」

キョウスケ「それを言つながらちばR-1に左腕を丸」と、だ。

エクセルン「そうそう！」

あの時ブリット君が駄々こねちゃつて大変だったのよね。

ブリット「別に駄々こねた訳じゃ・・・」

クスハ「でもあの時ブリット君がやめてくれなかつたら・・・」

エクセルン「一人は結ばれる事は無かつた・・・

つて言いたいんでしょ

クスハ「！」

ブリット「ななな、何言つてるんですか少尉！」

エクセルン「あらあら。

ブリット君、照れない照れない

マイ「・・・それ、本当なのか？」

エクセルン「そうなのよ～。

あの時、クスハちゃんがが式式に乗つてて、

んで、ブリットがヒュッケMk-IIで戦つたんだけ

ど、

何しろクスハちゃん、初めてだったから上手く操縦できなかつたのよ。

んでもつて、ブリット君がそれに気がついだけど、それでも続行指示がでたもんだから頭にきちゃつて戦うのやめちやつたつてわけ。

そして一人は戦いが終わつた後、ともに

大人の階段をかけあがつちゃのでありました メデタ

シメデタシ

マイ「そ、そうなのか。」

キヨウスケ「真に受けるな。あと妙な終わり方を付け足すな。」

エクセレン「そうかしら？ あながち間違つては無いんじゃない？」

ヴィレッタ「フフ・・・。でも今回はあるの時とは大分違うわ。」

リュウセイ「クスハはATXチーム側だし、お互に共に戦つた間柄だしな。」

エクセレン「戦場のラブロマンスは起きないってことね～。」

アヤ「・・・じゃあ皆、そろそろ時間よ。」

キヨウスケ「最初はアルトとART-1だつたな？」

リュウセイ「へへっ、今度はあん時みたいには行きませんよ？」

キヨウスケ「それはこちらもだ。二の轍は踏むつもりはないからな。」

「

かくして、SRXチームとATXチームとの合同訓練が始まった。だがこれが何者かによる意図的なものであることには誰一人として気づいていなかつた。

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その3

キヨウスケ「TCOS起動、ウェポンセレクトインファイト、ジハ  
ネレーター出力安定、

コンディションオールグリーン、アルトアイゼン・リ  
ーゼ起動！」

リュウセイ「TCOSよし、武装は近接格闘モードに固定、ジェネ  
レーターもよし、

T-LINKシステムコネクト、ART-1発進！」

駆動音とともにアルトとART-1が起動した。

マリオン「キヨウスケ中尉、兵装は全て模擬弾ですが、受ける衝撃は  
実弾のそれと同じですので注意してください。」

ロバート「リュウセイもちゃんと聞いたか？」

油断して気絶したなんて洒落にならないからな。」

リュウセイ「了解！」

キヨウスケ「了解した。」

ヴィレッタ「では、状況開始！」

「先手は貰うぜ！ランダムショーツ！…」

先手を出したのはリュウセイだった。

中距離からのHG・リボルヴァーの弾雨、

キヨウスケはこの手に少々驚いた。

「ほう？前のリュウセイなら無闇に突っ込んできたが、  
少しは学習したようだな。

・・・だがこの程度！」

弾雨はアルトには当たらなかった。

いや、アルトが全てかわしたのだ。

ただのP.T.やA.M.ならば当たっていただろう、  
だがアルトはただのP.T.ではない。

アルトの背部ユニットは端的に表せばスラスターの塊である。  
さらに姿勢制御にテスラドライブも使用している。

この距離なら避ける事はキヨウスケにとつては造作もない。

キヨウスケ「・・・この間合い、もらつた！」

リュウセイ「！」

弾雨をかわしたアルトは一気に間合いを詰めて  
A.R.T.-1の背後にまわった。

理論上は可能ではある。

だが普通のパイロットならその際の強烈なGに耐えられないだろう。  
だがキヨウスケは並大抵のパイロットではない。

キヨウスケ「一気にカタをつけさせてもらうー！」

アルトの右腕がキヨウスケの右腕に呼応して

A.R.T.-1を突き上げた。

それと同時にキヨウスケはアルトの切り札、  
リボルビング・バンカーの引き金を引いた。

凄まじい轟音と衝撃が辺りに響き、粉塵が立ち込める。

早くも勝負が決まつたと周りは思い始めた、だが。

キヨウスケ「（何だ？この感じは？）」

キヨウスケには妙な違和感があった。

何故ならバンカーが完全に極まつた時とは全く違う感触だったから  
だ。

リュウセイ「・・・へへッ。捕まえましたよ、キヨウスケ中尉。」

キヨウスケ「！」

A.R.T.-1は殆ど無傷だった。

キヨウスケが突き上げたのはA.R.T.-1が持っていたシールドだつ  
た。

リュウセイは激突の際に念動フィールドでバンカーの当たる方向を  
変え、

シールドに当たさせたうえでわざと突き上げられたのだ。

そうする事でアルトのセンサーを誤魔化したのだ。

さらにバンカーを突き上げたアルトは当然ながら隙が生じる。その隙をリュウセイが見逃すはずはなかつた。

いや、最初から狙つていたと言つべきだらう。

アルトが突き上げた衝撃でシールドから手を離し、

姿勢を低くして攻撃態勢を整えたART-1がそこにいるのだから。

リュウセイ「一撃粉碎！はああああ！」

一瞬の虚を突き、T-LINKブレードナックルがチエンソー特有の金切り声をあげ

アルトの右腕を切り裂いた。

キヨウスケ「！？

右腕マニユピレーター大破だと！？」

リュウセイ「よっしゃあ！もう一撃！！」

キヨウスケ「言つたはずだ、二の轍は踏まん！」

二度目の攻撃は当たらなかつた。

アルトがギリギリでかわしたのだ。

だが状況はキヨウスケにとって明らかに不利であることは変わらない。

バンカーが使えなくなつたうえにわつきの攻撃で一部のセンサーも使用不能となつていて。

だがリュウセイとて馬鹿ではない、今近づけばアルトの両肩のクレイモアを使われる。

こちらとてただでは済まない事ぐらいは理解していた。

アルトが後退している今が勝機。

念動フィールドを収束させ、必殺のクラッシュソードを極めねばリュウセイの勝ちだ。

後退している相手にとつて、この追い討は止めるだらう。

普通ならば全力で後退するだらう。

だがキヨウスケは逆に全力で前進して来た。

アルトの頭部のプラズマヒートホーンに電流が走る。リュウセイは急いで手持ちのコールドメタルブレードを使おうとするが

一足遅かった。

念動フィールドを突き破り、アルトのヒートホーンがART-1に突き刺さった。

キヨウスケ「両腕部に集中して薄くなつた念動フィールドなりヒートホーンでも貫ける、それに。」

リュウセイ「!?」

キヨウスケ「本当の切り札は最後まで取つておくものだ。」

アルトの本当の切り札、アヴァーランチ・クレイモアがその名の如く雪崩の様にART-1に降り注がれた。

<地球連邦軍 極東支部伊豆基地 格納庫>

ロバート「で、両機ともこのザマつてわけか。

ま、確かに油断するなとは言つたけどなあ・・・。」

大破したアルトとART-1を見ながら、オオミヤ博士は愚痴をもらした。

まあ、オオミヤ博士が愚痴をこぼすのも無理はない。

模擬弾を使い、訓練モードとはいえ、開始数分で2機とも大破すれば、

誰だつて愚痴をこぼしたくなるだろう。

・・・約1名を除いて。

マリオン「素晴らしいですわ。キヨウスケ中尉。

弱いとはいえ、ヒートホーンで念動フィールドを突き破

るなんて。」

キヨウスケ「いえ、アルトの推進力のおかげですよ。

それに実戦だつたらおれのほうがやられていたでしょ

う。」

エクセレン「イヤイヤイヤ。

つていうかフツーあそこまでのGに耐えられないでしょ？」

ブリット「うぶつ・・・

数値みでいるだけで吐きそ�です・・・。」

エクセレン「うん・・・

例えるなら、腰にロケットエンジン付けてローラースケートで走っている最中に

目の前からミサイルが飛んできて正面衝突したってト

「かしら？」

クスハ「そ、それってペシャンコじゃないですか？」

ライ「とか即死だな。」

マイ「そんなのに耐えられるキヨウスケ中尉つて・・・。」

キヨウスケ「人を人外みたいに言つた。

それをいうならリュウセイだつて相当なものだぞ。」

ヴィレッタ「念動フィールドの局部的な操作による攻撃誘導、ね。

確かに目を見張るものがあるわ。」

アヤ「T-LINK係数が余程高くないと出来ない事ですね。」

ライ「それに相手をひきつけてからのカウンターも悪くは無い。」

マイ「リュウも成長しているつて事だな。」

リュウセイ「いや。素直に褒められるとなんか照れるな。」

ヴィレッタ「でもその後念動フィールドを攻撃に回した事が仇になつたわね。」

ライ「浮かれて止めを刺そうとするからだ。」

マイ「リュウもまだまだ進歩が足りないと言つ事だな。」

リュウセイ「褒められた後のダメだしは勘弁してくれよ・・・。」

ロバート「だが貴重なデータがとれた。そのことにおいては感謝するよ。」

マリオン「具体的には？」

ロバート「ううん。やっぱり単機の装甲をよつ強化しないといけないな。

『アルタード』でも役に立つだらうし。』

ブリット「アルタードって確かSRXの後続機の名前ですかね？」

リコウセイ「うーん。厳密に言つと少し違うな。

SRXはその名の通り『TYPE-X』、試作機なんだ。

だ。』

ライ「そしてSRXで得た実戦データを元に開発するのが

アルタードというわけだ。』

クスハ「じゃあ、アルタードが完成したらRシリーズの機体はどうなるんですか？」

ブリット「やつぱり実験用に回されるとか解体されるんじゃないのか？」

ロバート「いや、SRXとアルタードとの決定的な違いはその運用方法にあるんだ。

SRXは通常PT形態で戦闘を行い緊急時に合体するのに対し、

アルタードは合体形態で通常運用するんだ。」

マリオン「つまりアルタードは合体したPTとこりもヤトに分離変形する特機と

解釈すればよろしいので？」

ロバート「その通りです。だけど現状のSRXでも判る様に合体するのまだ容易ですが、

戦闘中の高速分離となると中々難しくて・・・

カーカ「それに分離形態のアルタードはRシリーズを参考にしているとはいえる

今まではRシリーズをチューンしたほうがまだ効率が

良い。」

キョウスケ「だからPT単機での戦いで有利なアルトをぶつけたと言つ訳か。」

カーグ「そう言つ事だ。」

ATX計画のアルト以外には出来ない仕事だつた。」

マリオン「それ、褒め言葉と受け取つてもよろしいので？」

エクセレン「んじゃ、次は私のヴァイスちゃんとパワードなR-3ちゃんで」

ブリット「その次が参式とR-2パワードでしたね。」

ロバート「早速、と言いたいところだけぞ・・・」

わつきの戦闘でケネス指令にこいつ酷く注意されでな、『訓練の続きを見送れ』だとさ。』

キョウスケ「大方さつきの戦闘を見て下手に暴れられると経験や評価に傷が付くとでも思ったのだらう。」

エクセレン「あのタコ親父、ああ見えて肝つ玉が小さいんだから困るわよね。」

リュウセイ「大体、ART-1とアルトをぶつけたらどうなるか想像がつきそうなもんなんだがな。」

アヤ「でも、これで合同訓練はとりあえず終わりつて事かしら？」

エクセレン「んじゃ！ 気晴らしにショッピングにでも行きましょか！」

ヴィレッタ「残念だけど、ショッピングは無理みたいね。」

ATXチームは滞在中、哨戒任務に当てるつもりらし

いわ。「キョウスケ『いいように使つてくれるな、まつたぐ。』

キョウスケが愚痴をこぼしたとき、基地内にアナウンスが流れた。

アナウンス「キョウスケ・ナンブ中尉、ヴィレッタ・バディム大尉、

ケネスギヤレット指令がお呼びです。」

至急、司令室までお越しください。」「

エクセレン「……どうやら、早速こき使われるみたいね。」  
リュウセイ「勘弁してほしいぜ・・・・・・」

〈地球連邦軍 極東支部伊豆基地 司令室〉

キヨウスケ「・・・追跡任務、ですか？」

ケネス「そうだ、先程プリモルスキーベースから連絡があつてな、  
そこで開発中の機体が一機強奪されたそうなのだ。」

キヨウスケ「お言葉ですが、向こうの基地からも追跡部隊が出ているのでは？」

ケネス「だがな、強奪機と言つのが何でも次期主力機の試作機という話でな。

上層部からも追跡命令が出ている。」

ヴィレッタ「それで強奪機が伊豆基地の警戒区域内に入つてくるのを見計らつて

取り押さえると言つ事ですか。」「

ケネス「まあ、そう言つ事だ。」

すぐに出撃準備を急がせろ。」

ヴィレッタ「ですが、先程の模擬戦でアルトアイゼン・リーゼとA  
RT-1は出撃不能ですが。」

ケネス「・・・基地にある量産型ヒュッケバインで事が足りるだろうが。」

キヨウスケ「了解しました。では出撃準備に参りますので失礼します。」

キヨウスケ達は司令室を後にした。

ケネス「（フン。あの反抗的な態度、やはり氣に食わん。

だがここで強奪機を取り押さえればワシの評価も上がる。  
連中には頑張つて貰わないとな。）」

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その3（後書き）

戦闘パートは会話パートとは少々書き方が違うので中々難しかったです。

戦闘パートは今後ともこのようなスタイルで行きますが、御意見・御指摘等ございましたら遠慮なくおっしゃってくださいますよ、お願い申し上げます。

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その4

〈日本海 上空 ハガネ〉

エイタ「プリモルスキー基地から送ってきた情報だと、もうすぐこのあたりで接触します。」

テツヤ「PT部隊は？」

エイタ「全機体第一種戦闘配置完了、いつでも出撃できます。」

テツヤ「よし。各員現状を維持せよ。」

エイタ「・・・それにしてもいくら次期主力機の試作機だからって、ここまでやる必要あるんですかね？」

いくらバルトル事件があつたからって

ここまでは多少オーバーじゃないんですか？」

テツヤ「それだけじゃない。」

過去に奪われた量産型ヒュッケバインMk-IIは敵に量産された拳銃、マシンセルによつて変貌して驚異的なまでの戦闘能力を發揮した事例がある。

今回の任務、上層部がようやく重要性に理解してくれたつて事だろう。」

エイタ「！」

レーダーに感あり！』

テツヤ「強奪機か！？」

エイタ「い、いえ！数は一個中隊です！」

テツヤ「プリモルスキーからの追撃部隊か！？」

エイタ「ち、違います。これは！？」

レーダーに映つた影とその反応の正体はすぐに目視で確認された。リオンとバレリオンで構成されたノイエDC部隊だった。

NDCI兵「例の情報によれば、」のあたりだな。」

NDCI兵「ちよつとまでーなんでよつこよつてハガネが出ているんだよー。」

NDCI兵「ijiは伊豆基地の警戒区域だ、覚悟はしてはいたが・・・」

「

NDCI兵「だが試作機を奪えば」ちらのものー。  
さらにハガネを落としたとなれば俺たちの株も上がるってモンだ！」

エイタ「じつやら、例の強奪機の援護部隊のようですね。」

テツヤ「ああ。PT部隊を出撃させろー本艦も迎撃準備に移せー。」

エイタ「了解。PT部隊は直ちに出撃してください。」

<ハガネ 格納庫>

エクセルン「ちよつとキョウスケ、ホントにヒュックちゃんで出るつもりなの？」

キョウスケ「確かにアルトとはまるで違うがクセのない汎用機体だ。悪くはないさ。」

ブリット「それに武装には近接系のがありますし、アルトと似た戦い方も出来なくはないですよ。」

エクセルン「でもアルトちゃんとヒュックちゃんだと円とスッポンぐらいいの違いはあるでしょうが」

クスハ「（この場合、じつちがスッポンなんだらう~）」

キョウスケ「・・・四の五の言つていらん。アサルトー、出るー。」

<日本海>

キヨウスケ「アサルト1、及びATXチーム出撃しました。  
ヴィレッタ「SRXチームも出撃完了しました。」

リュウセイ、R-1の調子は?」

リュウセイ「全くもつて問題ナシっす。」

ART-1もいいけどやっぱR-1もいいなあ。」

ライ「感傷に浸っている場合じゃないうが。」

ヴィレッタ「でもART-1が大破したのはあなたの責任よ。」

後でトレーニング5セット追加。」

リュウセイ「とほほ・・・。」

アヤ「マイ、そっちこそヒュッケバインで大丈夫なの?」

アヤ「R-GUNやART-1がなかつたときはこちらの機体で戦つていたこともあるからな。」

心配しなくても大丈夫だ。アヤ。」

エイタ「全機、出撃完了しました。」

テツヤ「よし、戦闘開始!」

敵戦力は指揮官と思われるガーリオン3機、ヘビーバレリオン3機、バレリオン3機、そしてリオンが24機。合計戦力33機。  
対してこちらにはPTが9機、特機が1機、戦艦1隻。合計戦力1  
1機。

どう考えてもこちらが不利なのは子どもでも判る。  
だが敵はその戦力差はないものと考えている。

NDC指揮官「いいか!」

あいつらは曲がりなりにも過去の大戦の前線部隊共だ!  
1対1では絶対に勝てん。コンビネーションで落とせ!」

そう、彼らとて馬鹿ではない。

1対1で戦えば例えガーリオンでも数刻と保たないだろう。  
故に、フォーメーションで敵機を攪乱し、コンビネーションで確実  
に仕留める。

この指揮官の考え方は概ね正しい。

NDC兵「了解！各機散開！その後、コンビネーションで仕掛け……！」

だが彼らが唯一、そして重大なミスを犯していたとするならばそれはNDC兵「何だ！？」

・・・熱源反応が増大！？

10・・・20・・・40・・・ま、まだ増える！？

彼がその真実を目にしたときには、撃墜される寸前であった。エクセレン「ハウリングランチャーEモード！」

ヴァイスちゃん超・分・身「

増える熱源反応、その正体は

ラインヴィアイスリッターの高機動によるセンサーの誤認。

そしてヴァイスがその高機動を使用する際にハウリングランチャーから放たれる

エネルギー弾の弾雨である。

ライ「続けていきます！

ハイゾルランチャー・バースト、シューッ！！

さらにダメ押しにR-2パワードのハイゾルランチャー。

それも収束モードではなく散弾モードである。

ハウリングランチャー程の範囲や精密さは無いが、追い討ちには最適である。

NDC兵「い、今の攻撃でリオンの半数が……！？」

敵指揮官の唯一のミス。

それは、彼らがこういった状況においてのスペシャリストであるといふことだ。

NDC兵「隊長！バレリオンはまだいけます！距離をとつて遠方から射撃すれば……！？」

だが彼の判断は少々遅かった。

参式のドリルブーストナックルが彼の目の前に迫っていたからだ。

ブリッド「よし、これで……！」

アヤ「まだよ！」

念動集中・・・ストライクシールド、射出ッ！』

マイ「アヤ、援護に入る！」

レクタングル・ランチャー、ショートツッ！！』

リュウセイ「俺も行くぞ！」

ブーステッド・ライホウ！！』

続いては念動制御のストライクシールドと遠距離支援砲撃。

狙つた敵は逃がさないストライクシールドは戦意を失い始めた敵を容赦なく追い詰める。

運よく撃墜を免れた機体も砲撃の餌食となつていった。

テツヤ「こちらもいくぞ！」

対空機関砲、砲撃開始！続いて衝撃砲、1地番から4番、  
てーっ！』

ヴィレッタ「艦の援護に入る！」

ハイツインランチャー、『テッドエンドショート！！』

エクセルン「今日はアルトちゃんがいない分、ヴァイスちゃん張り切  
つちやうから

Bモードも持つていってね～』

トドメはハガネの連装衝撃砲、R·GUNパワードのハイツインラ  
ンチャー、

ヴァイスのハウリングランチャー・Bモード。

もはや決定打というよりもオーバーキルに近いものがある。

キョウスケ「・・・残るは、ガーリオン3機か。』

エクセルン「多分指揮官機ね。』

ま、早いトコ済ませちゃいましょか』

NDC兵「た、たつた数分で、30機のリオンとバレリオンが・・・

』

NDC兵「た、隊長、これ以上は・・・」

NDC指揮官「お、落ち着け！」

俺達の任務は試作機強奪の時間稼ぎ、あくまでオトリだ。  
「ひやつている間にも試作機はもつ・・・」

エイタ「！」

3時方向から新たな敵影です！」

テツヤ「敵の増援か！数は！？」

エイタ「い、1機です。識別信号は不明、  
例の強奪機と思われます！」

戦闘空域に現れたそれは周囲の空気を一変させた。  
禍々しい黒い機体『メディウス・ロクス』は、明らかに異様な雰囲  
気を漂わせていた。

キョウスケ「アレが強奪機か・・・」

エクセルン「うーん・・・」

キミ、残念だけど私の好みじゃないわねえ。」

リュウセイ「結構力ツコイインんだけど、悪役系の『ザイン』だよな、  
アレ・・・」

ライ「『ザイン』は関係ないだろ、『ザイン』は。

・・・それよりも、ヤツの出現が予想していた時刻よりも早  
い。」

キョウスケ「どのみち取り押さえるんだ。  
早いに越したことはない。」

NDC兵「じうじう」とだ!?

試作機は指定の場所で落ち合つはずだね？

NDC指揮官「おい！貴様！！いつたいどうじう・・・！」

指揮官が質問をしている間に、

メディウスは彼の『ツクピット』と躊躇なく切り裂いた。

NDCI兵「た、隊ちよ・・・!？」

そして、彼の部下達もまた、同じ運命をたどつた。  
断末魔よりも速く、メディウスはティバイデッド・ライフルで打ち  
貫いた。

その挙動には微塵の情けも感じられなかつた。

ブリット「!?!」「

クスハ「み、味方を? ?」

? ? ? 「フン。やはりガーリオン程度では話にならんか。」「  
? ? ? 「当然です。あの程度に手間をかけては次期主力機とはい  
ませんわ。」

? ? ? 「ところで、このメディウスの贅にする予定の連中は  
奴等が先に蹴散らしてしまつたようだな。」

? ? ? 「SRXチーム、ATXチーム、それにハガネ・・・  
いかがいたしますか?」

? ? ? 「まずは、このメディウスとA.I.に実戦の恐ろしさを教え  
てやらねばならん。

さつきの戦いではまるで意味がない。」

? ? ? 「恐ろしさ・・・ですか?」

? ? ? 「そういうものなのだろう? A.I.は」

? ? ? 「この子に感情など必要ありませんわ。」

? ? ? 「フン・・・まあいい。」

それより、やつらは追つて来ているか?」

? ? ? 「ええ、間もなくここへ現れます。」

? ? ? 「ならば、これでお前達の『辻褄合わせ』が上手くいくわけ  
だな。」

？？？「計画と書いてください。」

リュウセイ「な、何だあいつ？乗つているのはノイエDCの連中じやないのか？」

キヨウスケ「ならなおさらこちらに来る意味がない。

避ける気があるならコースなんていくらでも修正できるだろう。」

エクセレン「ま、それは本人に直接聞いた方がいいんじゃない？」  
「…とりあえずBモード、いただいちゃって」

放たれたハウリングランチャーの弾丸は、

不意に、だが正確に、そして静かに撃たれた。

緊張感と緊張感の間を突く攻撃を避けられる者はそうはない、だが。

？？？「・・・フム、悪い手ではないがな。」  
メディウスは避けた。

その動作にはあわてた様子は全く見られない。  
？？？「今度はこちらの番だ。

ディバイデッド・ライフル、ロングレンジモード。

避けるとほぼ同時にメディウスは反撃を行つた。

その動きに、エクセレンはついでこれなかつた。

これらの一拳一動、全てには新兵や野党には見られない熟練した腕が垣間見えた。

エクセレン「うわっ！？」

ちょっと油断したかしら？でも・・・

エクセレンは普段の言動で誤解されがちだが、

その本質には冷静で知的なものがある。

そんな彼女が油断するような理由は一つしかない。

キヨウスケ「避けるとは意外だったな。

だがこの間合い・・・！」

下方向からのキョウスケの接近にメティウスは気がつかなかつた。いくら機体のセンサーが反応するとはい、いかなるパイロットであれば、

意識が一方に向かれているときには数瞬だが反応が鈍る。故に複数機による連携は単機よりも勝るものはあるが、互いの呼吸が合わなければ成立しないものである。

しかし、キョウスケとエクセレン。

このコンビにおいて、それはどうの昔に解決している問題である。キョウスケ「G・インパクトステーキ、避けられると思うなよ！」

「？？？」

「ぬう！？」

少々奴等を甘く見たか？」

量産型ヒュッケバインMK-IIの携行武装は

キョウスケ用に近距離使用のものに選択されている。

その中でも最も威力の高い武装がこのG・インパクトステーキである。

アルト程の威力は無くとも、彼にとつては最も扱いに長けた武装といえるだろう。

キョウスケの呼吸に合せて、ステークと装甲の間に火花が散つた。

「？？」左腕部装甲中破、機能には問題ありません。

・・・しかしこの連携、プログラム無しでここまで出来る

といふの？」

「？？」「あいつらの連携は本来、アルトイゼンとヴァイスリッターのだが

ほどんどのモーションをマイコアルで行つてゐるらしいといつ話は聞いたが、

「どうやら本当だつたようだな。」

ステークはメティウスの装甲を深々と傷付け、内部のフレームをむき出しにさせた。

キョウスケ「この手じたえ・・・やはりアルトのよつこまいかんか。

エクセレン「でもまあ、上出来じゃない？」

「これで機体バランスとれないでしょ。

黒トゲちゃん、そろそろおロープ頂戴いたしてもらいましょうか？」

エイタ「！？

強奪機と同方向から再び反応あり！

連邦の識別信号を受信しました！」

テツヤ「プリモルスキーの追跡部隊か？

ようやくおでましたな。」

エイタ「で、でも識別信号は一つしか確認できません！」

テツヤ「何つ！？」

？？？「来たか・・・」

青と白の鋭角的な印象を持つシェントル・プロジェクトの産み出した番犬  
メティウスを追つてきた『サーべラス』がようやく姿を現した。

ヒュー＝ゴ「追いついたぞ、メティウス・ロクス！」

アクア「さあ、その機体を返して頂戴！」

？？？「・・・」

ヒュー＝ゴ「こちらには撃墜命令も出ている。

機体を盾にするような真似をしても無駄だぞ！」

？？？「（フフフ・・・。それが今のお前か、ヒュー＝ゴ。）

アクア「応答なしね。

どうする、ヒュー＝ゴ？」

ヒュー＝ゴ「武装のセイフティを解除しろ、全部だ。

それとハガネに至急連絡を入れる。」

アクア「わかったわ。」

リュウセイ「あれ？まさか追撃部隊つてあの1機だけか？」  
ヴィレッタ「見たところ知らない機体だけど強奪機に似通つた雰囲  
気があるわ。」

あの強奪機と同時期に開発された試作機といったところかしら？」

エクセレン「でもたつた1機だけって・・・」

キヨウスケ「余程の自信があるのか、単に動ける機体がアレだけだ  
つたかの

どちらかだろう。」

ユン「形式不明機より、通信です。」

テツヤ「回線を開け。」

アクア「こちらはプリモルスキーベース所属、

アクア・ケントルム少尉とヒュー・ゴ・メディオ少尉です。

現在、我々は奪取された試作機『メディウス・ロクス』の  
追跡中です。

申し訳ありませんが、こちらの援護をお願いします。」

ライ「メディウス・ロクス・・・それがあの強奪機の名称か。」

リュウセイ「援護つつても、こっちはそっちの部隊と

挟み撃ちするつもりだつたんだけどなあ・・・」  
ヴィレッタ「元より今回の任務、あつちが当事者なわけだし、  
向こうの援護をするつていいうのがセオリーよ。」

ライ「つまり、四の五の言うなどの事だ。」

リュウセイ「へい、へい・・・」

テツヤ「・・・エイタ、照会はすませたか？」

エイタ「は、はい。」

二人ともプリモルスキーベースのテストパイロットだそうで

す。」

テツヤ「こちらは伊豆基地所属テツヤ・オノデラ少佐だ。」

了承した。そちらを援護する。」

キヨウスケ「元からそういう任務だ。」

エクセレン「んじゃ、仕切り直しつてわけね。」

「…仕掛けてくれるやつだな。」

「データ収集は続けてありますので引き続きお願ひします、少佐。」

「俺はもう軍人ではない、少佐はやめてもらおう。」

「わかりました。」

アクア「THEエンジン出力調整…！」

くっ…駄目だわ！

イエローゾーンから出られない。

それに、メディウスの行動パターンも予測しないと…！」

ヒューロ「落ち着けアクア。

索敵も俺に任せろ。

お前はエンジンの出力調整だけをやっていればいい。」

アクア「冗談じゃないわ！」

私だってテストパイロットなのよ！

ちゃんと役割を果たしてみせる！」

ヒューロ「（初めての実戦だからな…）

緊張するのも無理はないが…」

リュウセイ「お、お…」

大丈夫なのかよ、あいつら？」

エクセレン「んふふ~

「いつのもの苦労してヤツじゃない？」

「どうやら、THEエンジンの出力調整が上手くいっていない  
ようですね。」

「聞いていた以上のじゃじゃ馬らしく、THEエンジンとい

うヤツは。」

? ? ? 「（アクア・ケントルム。

やはり、あなたはその程度なのかしら？）」

アクア「もうー・どうしてこうなの！？」

シミヨーレーションでは上手くやれてたのにー。」

ヒューゴ「イエローズーンで構わん！  
行くぞ、アクア。」

アクア「え、ちょ、ちょっとまってよー。」

ヒューゴはアクアの静止も聞かずメディウスに向かって突っ込んだ。

? ? ? 「さあ来い。

そしてこのメディウスの贊となれ。」

ヒューゴ「ターゲット・ロック、ポッド展開！  
ヤツを追い詰めろ！」

サーベラスの背部に設置してある有線式オールレンジ攻撃用兵器『  
マシンガン・ポッド』が

メディウスを取り囲んでいく。

ヒューゴ「まだだ！ラディカル・レールガン、セット！  
撃ちまくる！」

マシンガン・ポッドはその特性から自動運用可能だが、

それ故にAI制御特有の『穴』が生じる。

ヒューゴはそれを携行武器の『ラディカル・レールガン』で補つた。  
? ? ? 「ほつ？ 中々いい手だな。

だがこの程度でメディウスを止められると思うな！」

メディウスはこの猛攻の中、尻下がるどころか迎え撃つてきた。  
実弾とエネルギー弾の雨の中をかわしながら

? ? ? 「サーベラスの力、お前の力、みせてもらひー。」

アクア「き、来た！

はや、早く行動予測パターンを！」

ヒュー「いやべるなアクア！」

舌を噛むぞ！」

メディウスはディバイデッド・ライフルで弾幕を打ち落としながら急接近してきた。

そして一気にサーベラスの懷に飛び込むと同時にコーティング・ソードで切り裂いてきた。

サーベラスとメディウスの間に火花が飛び散った。

「……ほう、中々の反応だな。」

サーベラスは無傷だった。

ヒューゴもメディウスと同様に、既にコーティング・ソードを持っていたおかげで

攻撃を切り払うことが出来たのだ。

ヒューゴの今回の戦法は弾幕の中、一気に懷に飛び込みコーティング・ソードで

切り裂くというものであった。

だが、メディウスもそれと同系統の戦法で対応してきたのだ。

ヒューゴ「……？」

「この動き、この戦い方

・・・まさか！？」

「……フン。奴め、中々どうして悪くないな。」

「……とりあえずは、メディウスと戦える力は持つているようですね。」

「……ああ、そうでなければ意味が無い。」

アクア「！？」

「どうしたの、ヒューゴー？」

ヒューゴ「……いや、なんでもない。」

「……！」

A.I.1に拒絶反応？

いつたいどうしたの、A.I.1！

「ふつ・・・ふははは！」

？？？「何がおかしいのです！」

？？？「奴は感じたのだろう。初めての実戦の恐怖を……！」

？？？「この子に感情などありません。

ましてや恐怖を感じるなど……」

？？？「まあいいだろつ。とりあえずの任務は完了した。

後退する、と言いたいところだがこの損傷では少々難しいか。」

？？？「このぐらいなら問題ありません。

・・・ラズナニウム、自己修復機能作動。」

メディウスの装甲がラズナニウムによつて修復されていく。その様子は生物のようでもあり、この異様な光景に周囲の雰囲気が変わつた。

キヨウスケ「！-

自己修復機能だと！？」

エクセレン「うわ～・・・

みるみる治つていいくわ・・・

ヴィレッタ「この修復力・・・

まさかマシンセル！？」

？？？「フフ・・・

さすがの奴らもおののいているな。」

？？？「今のうちに後退を。」

？？？「わかつておる。」

一同が驚いている隙に、修復を完了したメディウスはその場から全速力で離脱した。

ヒューロゴ「くつ、メディウスめ。

なんてスピードなんだ。

アクア、こちらも追うぞ！」

アクア「・・・もう無理よ。」

ヒューロゴ「何つ！？」

アクア「駆動系と推進系のバッテリーももう空っぽなの！」

メティウスと違つて、THEエンジンだけじゃ追いつけるまでの出力が足りないの！」

ヒュー・ゴー「・・・」

エイタ「艦長、メティウスの反応。

・・・ロストしました。」

テツヤ「周囲に敵影は？」

エイタ「あ、ありません。」

テツヤ「よし、本艦は引き続きメティウスの追跡を・・・

エイタ「ま、待ってください！」

伊豆基地から連絡です。」

テツヤ「大方、ケネス指令の愚痴だらう。

回線をまわせ、私が聞く。」

エイタ「いえ、違います。

ハガネは至急伊豆基地に戻り、補給と整備が完了次第、プリモルスキーベースと合同でメティウスの討伐任務に向かえとの事です。」

テツヤ「何だと！？」

エイタ「艦長、どうなされますか？」

テツヤ「・・・PT部隊を収容させろ。サーベラスもだ。

パイロット達から詳しい事情を聞きたい。」

エイタ「了解です。」

テツヤ「（このタイミングでこの指示、いったい上層部は何を考えている？）

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その4（後書き）

長い、とにかく長い！

しかも話しの密度は薄田という結果に・・・

途中で区切りを切ろうか切るまいか悩んだ挙句

切らずにそのままやつていたら今までで一番長くなりました。rz

スパロボで言えば

戦闘 敵増援 味方増援 敵撤退 戰闘終了

という一般的な流れなのに今までで一番難産でした。rz

「読みにくい！解り難い！だからこうするべきだ」という感想は大歓迎ですのでどうかよろしくお願ひします。m(—\_)m

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その5

＜ハガネ ブリッジ＞

アクア「アクア・ケントルム少尉、ならびにヒューゴ・メディオ少尉。

ただいま参りました。」

ヒューゴ「先程の戦闘、」協力いただき誠に感謝しております。」

テツヤ「それはこちらの科白もある。二人には感謝するよ。」

アクア「い、いえ！ 滅相もございません！」

それに結局はメディウスを取り逃してしまったわけですし。

・・・あ！ その、すいません！

けけ決して少佐殿を批判したわけではなく、その・・・」

ヒューゴ「責任は我々にあります。

基地の近くでメディウスを捕らえる事が出来ていれば、少佐達に迷惑をおかけすることもございませんでした。（それとアクア、お前は少し黙つたほうがいい。

少しは落ち着け。

呂律が回らなくなつてきているぞ。」

アクア「（お、落ち着けるわけ無いじゃない！

前大戦の英雄の艦長が目の前にいらっしゃるのよー。

大体落ち着いていられるあなたのほうがどうかしてるじ

やない！）」

テツヤ「・・・まあ、責任の所在の話はともかく、

君達から機体の事について詳しく聞きたいのだが・・・」

アクア「は、はい。

まず、私達が乗ってきたサーベラスは動力源として  
ターミナス・エナジーを利用してあります。

私達『ツェントル・プロジェクト』ではTEを動力としている

機動兵器を通称TEアブソーバーと呼称しております。」  
ヒューゴ「サーベラスはPT型TEアブソーバーとして設計されましたが、

もう一機、特機型として開発された試作機『ガルムレイド』が存在します。」

テツヤ「ター・ミナス・エナジー・・・

聞き慣れないエネルギーだがどういったものだ?」

アクア「はい。

ミタール・ザパト博士が新しく発見したエネルギーで、重力・電磁力・強い相互作用・弱い相互作用といった4つの力の他に、

その存在が予言されていたものです。」

テツヤ「新エネルギーという事か・・・

具体的にはどのようなものだね?」

アクア「ターミナス・エナジーは理論上どこにでも存在しているのですが、

その収集と動力変換、出力調整が非常に困難なものなのです。

それで、現状では駆動系や推進系にはバッテリーで補つているのが現状です。」

テツヤ「つまり、エネルギーには困らないが、コントロールが困難な代物というわけか。

(まるでエクサランスの時流エンジンだな・・・)

アクア「はい、ですがTEエンジンが完全なものとなれば、TEアブソーバーは

理論上、無限に活動することが可能です。」

テツヤ「夢のような話だな。」

ヒューゴ「だがそう上手くいかないのが現実です。

現状では問題点が数多く完成するのにはあと数年かかるとも言われております。」

テツヤ「・・・ところでアクア少尉、その格好も数多くの問題点の一つなのかね？」

まるで、その、なんと云つか、水着のようだ少々田のやり場に困るのだが・・・」

アクア「し、失礼しました！」

これはTEアブソーバーのコンピュータ制御やTEエンジンの出力制御に

ダイレクト・フィードバック・コントロール・システムを採用しているため、

は、肌を少々露出させるように設計された特別なスースでして・・・

テツヤ「あ、ああ解った。

では、強奪機のメディウス・ロクスとは？

あれもTEアブソーバーという奴なのか？」

アクア「いえ、メディウス・ロクスは動力こそ通常の核融合ジョネレーターを使用しておりますが、その代わりにフレームと装甲には『ラズナニウム』という自立性金属細胞が使用されています。」

テツヤ「(さつきの機体の自己修復はそのせいか・・・)

・・・無尽蔵のエネルギーと自己修復機能か。

到達点はメンテナンスフリーの機動兵器の開発といったところか。

アクア「はい。

ですが現状ではそこまでには至ってはおりません。」

テツヤ「ところでラズナニウムと言つたな、

あれと同じような物を我々はアースクレイドルで目撃しているのだが。

・・・まさかラズナニウムはマシンセルを改良したものな

のか？」

ヒューゴー「……いえ、イーグレット博士が開発したマシンセルも博士自身も

もうこの世には存在しません。

ラズナーワムはザパト博士が以前から研究していたもので、

マシンセルとの共通点がいくつかはありますが全くの別物です。

（何よりそれは俺が身を持つて知っているからな……）

「アクア「でも現状ではマシンセル程の力はございませんが、その分、マシンセルより扱いやすいはず……」

それにもし強化されでもしたら……」

テツヤ「アースクレイドルの時のような事が起ころうる、と言つ事か。

・・・どうあれ、楽観視は出来ないわけだな。」

アクア「はい、ですから一刻も早くメティウスを……」

テツヤ「その事なんだが、先程伊豆基地から連絡があつてな、ハガネは伊豆基地に帰還し、補給搬入を終えた後にメティウスを追跡せよとの事だ。

無論、君達も同行するようとの事だ。

後で正式な転属辞令が来るとは思うが……」

ヒューゴー「（この艦に乗れだと……？）

今回の任務、俺達だけ向かわせたのは

事を大事にさせないためと思っていたが……」

テツヤ「ヒューゴ少尉、どうかしたのか？」

ヒューゴー「……いえ、なんでもありませんよ。」

アクア「て、転属の件、了解いたしました。

え、栄光のハガネに同行できるとは、感激極まりなく思つております。」

ヒュー『「・・・では、以後よろしくお願ひします。』

テツヤ「つむ。まあ、そう硬くならずに、よろしく頼むよ。」

ヒュー『たちは緊張しつづけを後にした。

エイタ「・・・どう思います、艦長？」

テツヤ「まあ、悪い人間じやなさそうだ。」

アクア少尉は少々硬くなっていたがな。』

エイタ「緊張しつぱなしでしたしね、彼女。」

テツヤ「だが、彼らのバックが気になるな・・・」

エイタ「このプリモルスキーツて基地、そんなに大したトコロじやないですが・・・

このプロジェクト名は氣になりますね。』

テツヤ「・・・『センター・プロジェクト』

あのイェツットを産み出した連中か・・・

イェツット、それは人によつて歪められたアイнстの成れの果て。だが最後には制御できずに暴走し、

ツェントル・プロジェクトの施設『トーチカー』を破壊、あげくの果てに妖機人なる異形を呼び寄せた。

だがそれらはアクセルの意思の力によりアイNSTでなくなつたアルフィミィと

彼女によつて蘇つたアクセル、そしてハガネとクロガネの仲間達の手によつて滅び去つた。

エイタ「まさか、艦長。

メディウスがイェツットみたいになると考へてゐるのです

か？』

テツヤ「さあな。

だがまた一騒動起つるのは間違いないだろ？

まあ、考えたところでメティウスが捕まってくれるわけでもないがな。」

エイタ「そうですね・・・。」

テツヤ「・・・これより、艦は伊豆基地へ帰還する。全艦、伊豆基地へ向かって微速前進！」

エイタ「了解！微速前進！」

テツヤ「（ヒュー・ゴ・メディオ中尉・・・

あの表情から見て今回の転属の件に違和感を抱いているようだが、

まあ、当然だろうな・・・。」

テツヤは嫌な予感を抱きながら伊豆基地へ帰還するのであった。嫌な予感と言うものはよく的中するが、それがド真ん中であることを思い知るのはまだ先の話である・・・。

<伊豆基地 格納庫>

ヒュー・ゴ「・・・妙だとは思わないか？

何故俺達がハガネに乗る必要がある？」

アクア「そう？

私は別になんとも思わないけど？」

ヒュー・ゴ「・・・追跡を出すなら、

隠密系の部隊やゲリラ戦に特化した部隊を差し向ければいいだけの話だ。

何故わざわざ見つかりやすいスペースノア級を向かわせる必要がある？」

アクア「それだけこの任務の重要性が高いってことじやないの？」

ヒュー・ゴ「それに、この根回しの良さも気になる。」

まるで上層部は初めてからいつなるとわかつてていたように  
しか思えんほどにだ。」

アクア「うへん・・・

そう言われば、ね。

確かに今回の事件、引っかかる所もあるわね。  
簡単にメティウスが盗まれた事とか・・・

ヒューゴ「プロジェクト内で手引きした奴がいると見て考えるべき  
だな。」

アクア「もしかして、ザバト博士が？」

ヒューゴ「それならメティウスだけ盗まれた理由がわからん。

他の勢力に売るつもりならTEアブソーバーももつて行  
かせる筈だ。

（あの男なら間違いなくどうしているはずだが・・・）

アクア「そうよね。

プロジェクトの成果を売るんだつたら、  
ラズナニウムとTEエンジンをセットにしないと・・・  
(それともメティウスには私達の知らない機能があるとで  
もいうの？）

ヒューゴ「（・・・俺にはあのメティウスの、  
いやメティウスに乗っていた奴のクセには見覚えがあ  
る。

だが有り得ない・・・あの人気が・・・戻ってきたなど・

・・・」

エクセレン「あ～もう！

全く！若い一人が何うつむいてんだか！

先生もう我慢できません！」

ヒューゴ「は？」

アクア「な、なにこの人？」

エクセレン「い～い？」

立ちはだかる困難や向かい風もあるでしょう。

でもそういう時こそ挫けちゃダメよ。

こういうときは女は男を頼り、

男は女と愛を誓い、そして一人はいざ行かん、さらなる荒波の中へー

キョウスケ「適當な事をぬかすな。

それに色々と端折りながら進めていいか?」

ブリット「それに今の話、最終的にバッジエンドみたいなんですか  
ど・・・」

エクセレン「ままた。

細かいところは気にしないの 」

アクア「・・・え、え」と。

あ、あなた方はもしかして・・・」

キョウスケ「ATXチーム、キョウスケ・ナンブ中尉だ。」

エクセレン「おなじくエクセレン・ブロウニング少尉よ。

ンフフ、エクセ姉さまってよんでも構わないわよん  
アクア「ア、アクア・ケントルム少尉です!

さ、先程はあっけに取られててすいませんでした!

キョウスケ中尉、エクセレン少尉・・・じゃ無かつた!

エ、エクセお姉さま?」

キョウスケ「別に気にしていない。

あとこいつの話は話半分で聞いておいていい。

アクア「は、はあ・・・」

ブリット「オレはブルックリン・ラックフィールド少尉。

ブリットで結構です。」

クスハ「わたしはクスハ・ミズハ少尉。

わたしもクスハで結構です。」

アクア「ふ、二人とも随分と若いんじゃない?」

ブリット「え? 19かそこらですが別に珍しくは無いんじゃないですか?」

エクセレン「そうそう、それを言つたら教導隊のラトちゃんだつて

まだ15もいっていられないんだから。  
若さつていゝわよね～

アクア「（ま、負けた・・・歴戦の勇士つて聞いていたから、  
みんなカイ少佐ぐらいの年齢かと思つていたのに・・・）

ヒューゴ「なに悲壮感出してんだ、お前は？」

キョウスケ「ところで、サーベラスの操縦をしていたのはお前のほうか？」

ヒューゴ「申し送れました。ヒューゴ・メディオ少尉です。  
先程の戦闘はどうもありがとうございました。」

エクセレン「ムムッ！」

キョウスケ張りのムツツリとブリット君張りのマジメ

君と見たわ。」

ヒューゴ「む、むつづり？」

キョウスケ「茶化すのも大概にしる。」

エクセレン「あ～ん。

キョウスケのいけずう。

ヒューゴ「どうも調子が狂うな・・・

（あのイエツトを最終的に倒したのはこいつらだと聞  
いていたが・・・

もしこいつらがもつと早く駆けつけていれば・・・

いや、彼らを恨むのは筋違いか・・・）

キョウスケ「ん？」

俺の顔に何か付いているか？」

エクセレン「わお！」

もしかしてもしかするとキハ、ロッヂのショミヘ・

ヒューゴ「いえ・・・

ただあのアルトアイゼン・リーゼに乗っている男と書つ  
のが

一体どんなヤツかと思っていたもので・・・」

アクア「そついえば、さつきの戦闘ではアルトアイゼン・リーゼは出撃していませんでしたが……？」

エクセレン「ああ、それだったら、

あの子も呼んだほうがいいんじゃない？」

アクア「あの子？」

エクセレンは格納庫を走り回っているリュウセイを指差した。

リュウセイ「ぜえ・・・ぜえ・・・腕立て伏せ100回、

腹筋100回、格納庫20周、終わり・・・まひた・・

・  
ヴィレッタ「まだ後、スクワットが残っているわ。

そしてそれが終わってようやく5セット目終了。

あとまだ10セットあるわよ？」

リュウセイ「す、少ひ、休まふえて、くらはい・・・

ヴィレッタ「・・・まあ、搬入作業もあるし、ひとまずは良しこするわ。

そのかわり定時になつたら再開すること。

1分遅れるごとに1セット増やすから、そのつもりで。

リュウセイ「（お、鬼・・・）」

エクセレン「あらら～・・・

「シテリヒシゴかれてるわね。」

アクア「あの？彼は・・・？」

エクセレン「えっとね。

あそこでバテて死にかけるのがSRXチームのリュ

ウセイ君で、

階級は私と同じ少尉。

その隣のイカしたお姉さんが隊長のヴィレッタ大尉よ

ん。」

アクア「……彼、随分と厳しい訓練を受けている様ですが、一体何があつたのでしょうか？」

エクセレン「あ……

それをひつくるめてリュウセイ君に話して貰いたかつたんだけど、

あれじゃ無理っぽいわねえ……」

半ば屍と化している倒れたリュウセイを眺めながら、エクセレンはつぶやいた。

ライ「……なんなら俺達でよければ話しますが？」

アヤ「ええ。

リュウの分の説明ぐらいは出来ますし」

マイ「それに後でリュウにも説明しておかないといけないしな。」

アクア「え……もしかして……」

ライ「紹介が遅れました。

SRXチームのライティース・F・ブランシュタイン少尉だ。」

アヤ「同じくSRXチームのアヤ・ゴバヤシ大尉よ。よろしくね、アクア少尉。」

マイ「アヤの妹のマイ・ゴバヤシ曹長だ。」

アクア「（フ、ブランシュタインつていつたら名門中の名門じゃない……！）

それに、マイ曹長つてまだほんの子供もじやない……あまけにそろいもそろつてみんな若じいし……」「

クスハ「……なんだか面食らっているみたいですね。」

エクセレン「まあ、ほら、アレよ。

私達結構個性豊かだし。」

ブリッド「それを言つたら

彼女のパイロットスーツも個性的ですよ。

「いくらシステムの制御に必要とはいえ……」

アヤ「まあ、私も人の事は言えないんだけどね……」

エクセレン「ねねね。キョウスケ、こうなつたら私も……」

キョウスケ「変に張り合つな。

大体、パイロットスーツというものは  
その目的や用途に応じて設計されているものだ。  
お前の気分一つで口口口口かわるもんじゃないだろ？」

「に。

エクセレン「もう、夢が無いわねえ……」

「んじゃ氣イ取り直して説明の続きを……」

エクセレンがアルトの説明を始めようとしたそのとき、  
間の悪い事に整備員が駆けつけてきた。

整備員「あの～。すいません。

「プリモルスキー基地からのものですが……」

ヒューゴ「ああ。お疲れ様です。」

整備員「はい。

それで、ガルムレイドとその他の積荷が到着しましたので、  
ご確認のサインをお願いいたします。」

アクラ「解りました。」

ブリット「ガルムレイドって、確かグルンガストと同じ特機タイプ  
でしたよね。

「宜しければ、モーションデータとか見せてもらえないません  
かね？」

ヒューゴ「ああ、それだったら良いが、これからも参式のデータを見  
せて欲しい。」

ガルムレイドの武装の一部は、グルンガストを参考にし  
たものもあるが、

何分特機のデータは貴重だからな、色々と参考にしたい

んだが・・・。」

ブリット「ええ。それでしたら喜んで。」

エクセレン「そんじゃま、その新顔ちゃんをみんなで見に行きましょか!」

リュウセイ「よっしゃあーみんな行くぞ!」

マイ「リュウ、体はもう大丈夫なのか?」

リュウセイ「おう!」

新しいスープーロボットが来るって聞いて

おちおち寝てもいられないだろー?」

ライ「相変わらずだな・・・」

ヴィレッタ「その元気をもう少し別のことを使えないのかしら?」

少々あきれながらも皆はガルムレイドを見に行くことにした。

整備員「あ、それからヒューゴ・メディオ少尉。

ミタール・ザパト博士から少尉宛に医薬品が届いております  
すが・・・

ヒューゴ「ああ、それはそこに置いといくれ。

あとで俺が持つていいくから。」

整備員「はあ・・・ではこちらに置いておきますのでよろしくお願いします。」

ヒューゴ「(ミタールめ、俺をここに縛り付けておくつもりか?

だが薬が大量にあるのはありがたい。

・・・)このところ効きが悪くなっているからな)

アクア「ヒューゴー何やつてんの!」

おいでいくわよ!」

ヒューゴ「・・・ああ、わかつてゐる。今行く。」

リュウセイ「おおひー!

「いつがガルムレイドか！」

ブリット「大きさはグルンガストとほぼ同じですね。  
リュウセイ「くうーつ！」

真っ紅なボディに加えて両肩には牙、たまんねえぜー。」

マイ「うーん。私はバーンブレイドのほうが好きだな。」

リュウセイ「だけどこの配色！この牙！そしてこの顔！

いや～設計者はいいセンスしてるぜ！」

アクア「あの・・・バーンブレイドってなんですか？」

アヤ「ああ・・・アニメよアニメ。」

リュウは根っからのロボオタクで、ああいう機体を見ると熱が入っちゃってああなっちゃうの・・・」

アクア「ア、アニメですか？」

アヤ「おまけにマイも感化されちゃって

今ではすっかり・・・

ああ・・・あの子の将来が心配だわ、ホント。」

アクア「（私、ひょっとして聞いちゃいけない）と言ひちやつたのかしら・・・」

ブリット「成る程・・・。

この『ブラッティ・レイ』と『ファング・ナックル』はグルンガスト系統のものですね。」

ヒューイ「思うんだが、何で特機つてヤツは腕をバコバコ飛ばすんだ？」

戻つてこなかつたら文字道理お手上げ状態だらうが・・・

まあ、実際乗つている俺が言えた義理じやないか。」

キョウスケ「特機は元々、PTでは対処できない大型の敵を想定して造られたものだが、

その意匠や武器には敵に対する威圧も兼ねてあるからだと聞いたことがある。」

エクセルン「よつするごと力かくて目立つてインパクトを利かせた武器で

相手をビビらせるってこと?」

ブリット「となると、腕を飛ばすっていうのは相手に相当なインパクトを与えますね。」

リュウセイ「それになんと言つても、ロケットパンチはスーパー口ボットの代名詞だからな。」

あ、そうだ! こんどロブに頼んでアルタードにも付けてもらおうか!」

ライ「・・・ただでさえ間接が弱いアルタードの強度をこれ以上下げてどうする?」

それに腕を飛ばす機能を付けると設計を1からやり直さなくてはいけないし、

そうなると念動フィールドの出力制御や火器管制のシステムが大幅に増える

ことになるが、それをお前が全部やるとでも?」

リュウセイ「・・・スマセン、許してください。」

キヨウスケ「他の武装は、膝のチェンソーによる『サンダー・スピーエッジ』と

エネルギーを開拓・収束させて突撃する『バーニング・ブレイカー』か。」

エクセルン「ART-1ちゃんのブレードナックルといい、流行つてんのかしら、チーンソー?」

クスハ「さ、さあ・・・?」

ブリット「ところで、このTEアブソーバーって1人じゃ操縦できないんですね?」

となると、1機余る事になりますが・・・?」

ヒューイゴ「操縦の方はまだなんとかなるが、TEエンジンの出力調整となると

アクアが欠かせないからな、どうしてもそうなつてしまふな。」

アクア「(へえ)。ヒューイゴの奴、なんだかんだで私を認められてる

のね。」

ヒューゴ「だが、先程の戦闘で結構無茶をしたからな、

サーべラスは当分控えるべきだろ。」

キョウスケ「ん？ 特に異常な点は見られなかつたが？」

ヒューゴ「サーべラスは本来、アルトアイゼン・リーゼと同じく陸戦機なんです。」

エクセレン「え、でも思いつきり飛んで登場してきたじゃない？」  
ヒューゴ「・・・空中戦使用的データ採りをやるつもりだったんですよ。」

まあ何とか戦えましたし、試作スラスターも戦闘終了では

問題なかつたんですけど、

かなり負荷がかかってしまつてもう使えないんです。」

クスハ「でも、換装式のテスラドライブあるじゃないですか？」

アクラ「残念だけどサーべラスもまだ試作段階でね、

まだ一般規格に合せる様にはなつていないの。」

ヒューゴ「それに、ガルムレイドならメディウスと同じく単独飛行が可能です。

無理に陸戦機のサーべラスで戦う必要は無いかと。」

リュウセイ「うーん。残念だな。」

サーべラスのこの『ターミナス・キャノン』についての  
1度見たかつたんだけどなあ。」

キョウスケ「だが時と場合によつては、

サーべラスを使わざるを得ない状況にもなると思つが

？」

ヒューゴ「多少の無茶は承知の上です。」

キョウスケ「フ・・・いい心がけだな。」

エクセレン「あ！」

そういえばブリット君にクスハちゃん、

あなた達、テスラ研に出張予定入つていたけど、

、

今回のことで、どうなっちゃうの？キャンセル？

クスハ「それでしたら、さつきケネス指令から連絡がありましたよ。

「ブリット「要約すると、『やつと済ませて帰つて来い』だそうです。」

リュウセイ「何だ？」

もしかして、また龍虎王が目覚めたのか？」

クスハ「・・・それも、前よりもはつきりと。」

ブリット「ゲージを突き破らんばかりの勢いだったそうです。

今は、おとなしくしているようですが・・・」

ヴィレッタ「まさか、また妖機人が！？」

クスハ「それは解りませんが、最近、妙な胸騒ぎがするんです。」

ブリット「俺もクスハと同じです。」

・・・リュウセイ達は？」

リュウセイ「・・・いや、実を言つと俺達もなんだ。」

アヤ「この妙な感じ、何だと思う・・・？」

マイ「僅かに、だがどうしてもぬぐいきれないこの感じ・・・」

アクア「なんだか話が見えてこないんだけど・・・」

ヒューゴ「彼らはT-LINK適合者、俗に言つ念動力者だ。」

アクア「確かにT-LINKシステムが使える人達のことよね？」

それが何か関係があるの？」

ヒューゴ「俺が聞いた話だと、なんでも念動力者の嫌な予感つてのは妙に当たるんだそうだ。」

リュウセイ「なんか・・・エラい言われようだな俺達・・・」

ヒューゴ「で、龍虎王っていうのは」

アクア「テスラ・ライヒ研究所で保管・管理されている

超機人っていうカテゴリーの特機でしょう？」

ヒューゴ「なんだ。知っていたのか。」

アクア「けど、いくらなんでも遺跡から発掘されたって言つのは・・・

・・・

ブリット「俺達だって、実際にこの田で見るまでは信じられなかつたんですから

無理は無いですよ。」

アクア「（ホ、ホントだつたんだ。）」

ヒューゴ「それで、龍虎王が目覚めたといふのとその胸騒ぎの関係は？」

クスハ「龍虎王は遙か古に造られた超機人の生き残り、

その使命は人界の救済、つまり人を守る事なんです。」

アクア「人を守る巨人・・・

まるでどこかの神話ね。」

ブリット「以前もアイнстの襲撃の際に龍虎王は俺達に力を貸してくれました。

そして、龍虎王は再び眠りについたんです。

ですがその龍虎王がまた目覚めたと言うことは・・・

ヒューゴ「・・・アイнст、いやそれ以上のものが現れると？」

クスハ「そこまでは詳しくは解りません。しかし、

アイнст殲滅後にもう一度目覚めたケースがあるんです。

」

ヒューゴ「何・・・!?」

ヴィレッタ「妖機人、簡単に言えば悪の超機人が襲撃したときに龍虎王が覚醒したのよ。」

キョウスケ「だがその妖機人を追い回しているときに、とんでもないものに出くわした。」

ヒューゴ「『イエツツト』・・・ですね。」

ライ「お前達が知っているといふのは、当然と言えば当然か。」

エクセルン「私達、さつき軽くこのプロジェクトについてレクチャー受けたんだけど、

『ツェントル・プロジェクト』って名前を聞いたときはさすがの私もびっくりしちゃったわ。」

アクア「・・・イエツツトに関しては、もはや弁明の処置もありま

せん。

私達だって、最近このプロジェクトに入つて知つたばかり  
なのですが、

またかあんな物を造つていたなんて・・・  
リュウセイ「・・・まあ、イエットも殲滅したし、  
あんた達は当事者じゃないわけだし、  
別に気に負つ必要はないとおもつよ。」

アクア「え・・・!？」

エクセルン「ウチの部隊、イロイロとワケありの子が多いから、  
もつお腹いつぱいつていつか、じちやうわまつていつ  
か。

ま、一々気にしていたら体に良くないってことよん。  
アクア「それって、ポジティブなんだかネガティブなんだか・・・」

キョウスケ「色々気にしないのもどうかと思うが。」

リュウセイ「要するに、これから共に戦うんだからアロシクリて事  
だ。」

アクア「は、はい！」

「ひいらじょよろしくお願ひします！」

ヒュー・ゴー「（共に戦う、か。）

フォリア・・・

クライウルブズもこんな感じだったつけな・・・

不思議だな、たつた数ヶ月なのに、随分と昔の「」との  
ように思えるよ・・・」

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その5（後書き）

ようやく第一話が終わりました。

説明口調が多い会話ばかりで申し訳ありません。

ガルムレイドの扱い悪っ！

仮にも主人公機なのに

もう一つの主人公機、

サーべラスも出しやばり過ぎたためクギを刺されてしまいましたね。  
まあ、主人公機の扱いが酷いのはスパロボの宿命みたいなモンです  
(苦笑)

クスハとブリットはいきなり左遷もとい分岐です。

文句がある人は龍虎王に言ってください(苦笑)

文章を上手く纏められる本家スパロボ脚本家はホントに凄いですよ  
この内容だったら実際にプレイするとして30分とかかりませんね  
○ r n

それなのに一週間以上かかる自分が悲しいです(Ｔ－Ｔ)

### 第3話 過去との再会 その1

<地球連邦軍 北米支部ラングレー基地 教導隊事務室>

ラトウー「失礼します。少佐、この間の事件の報告書、全員分終わりました。」

カイ「うむ。わざわざすまないな。そこに置いといてくれ。」

ラトイー「あと、これローランド少佐から・・・」

カイ「娘さんの焼いたクッキーだろ?」

アラドから話は聞いている。

中々のものだそうじやないか。」

ラトウー「はい。とつても。」

カイ「・・・それよりも、この間の任務、

お前達には辛い思いをさせてしまったな。」

本来なら、無関係の者を向かわせるべきだったかもしれん。」

ラトウー「いえ。私達以上の適任者はいなかつたと思います。」

オウカ姉様を利用していると知つたら、なおの事です。」

「

ここ最近、北米付近で改造P.Tを使用したテログループの攻撃が相次いで起つっていた。

軍人、民間人含せて死亡者156人、そのうちの76人はまだ幼い子どもだつたという

見境の無い卑劣なものだつた。

ラトウー達の任務はローランド少佐率いるテロ対策隊との合同による鎮圧であった。

特殊戦技教導隊の目的はP.Tの戦技研究とその構築ではあるが、秀でたパイロットがそろ多くない今の連邦ではこのような任務を任

されるは珍しくも無い。

だがラトウー二達が任された理由はもう一つあった。

このテロに使用されている改造P.T.に

スクール出身者、オウカ・ナギサのモーションパターンが使用されていることが判明したからだ。

オウカ・ナギサはラトウー二達がいたスクールの出身者であり、彼女達に慕っていた大切な姉でもあった。

前大戦中には幾度と無く記憶を書き換えられ、

最後には人格を消去されて彼女達の前に立ちはだかってきた。

だがラトウー二達の必死の説得と

スクールの研究者クエルボ・セロによつてその人格と記憶を取り戻した。

そして彼女はア・スクレイドルでラトウー二やアラドそしてゼオラや他の仲間を守るために

共に戦い、その命を投げ出して皆を救つてくれた。

そんな彼女を利用している奴等をラトウー二達が許すはずも無かつた。

何日もの張り込みの末、遂にテログループの鎮圧に成功したかに思えたが、

彼らの1人が捕まる間際に改造P.T.の自律モードを起動させてしまった。

その自律A.I.にはオウカ本人のモーションパターンが組み込まれていたのだ。

A.I.とはいえ、オウカの実力は並大抵のものではない。

何よりも、それをラトウー二達は一番良く理解していた。

それでも彼女達は1歩も引かなかつた。

任務だからではない、これ以上戦わせられている姉を見ていられなかつたからだ。

決意の元、彼女達は連携を駆使して姉の鎖を断ち切ることに成功した。

だがそれは彼女達に再び敬愛する姉に別れを告がせる事を意味していた。

実はカイにも似たような経験がある。

ホワイトスター攻略戦、失踪していたと思われていたかつての教導隊隊長、

カーウアイ・ラウ大佐が変わり果てた姿で自分達の前に立ちはだかってきたのだ。

彼にはラトウー一達よりも長く生きている分多くの経験がある。

辛いことや悲しいことも含めてだ。

だがそれでも、自分のかつての隊長をこの手で葬つたときの感触は決して忘れられない。

そのことを思うと、今回の任務でラトウー一達にまた心に背負い込んでしまうのではと懸念していたが、彼女達は彼が思っているよりもずっと強く成長していた。

カイ「（強くなつたな、ラトウー一。）」

ラトウー一「……じゃあ、報告書類とクッキー、ここに置いておきますね。」

カイ「ああ、ありがたくいただくとするよ。」

ラトウー一「ところで、少佐。

随分と溜まつていてるようですね、書類。」

カイ「ほんとだが、あちこちの基地からの訓練要請関係の物だ。

・・・が？」こいつは違うな？」

カイ少佐は書類の山の中から、1束の書類を抜き出した。

ラトウー一「なんなんですか？」

カイ「・・・ふう。

こりや、上からの教導隊への引き抜きリストだな。」

ラトウー一「？」

移動願いではなくて?」

カイ「インスペクター事件以前は、新教導隊は俺とお前、あとライディース少尉だけだったからな。

人手は多いほうがいいと思い、上に申請していた事があつてな。

それが今になつてようやく来たつて事だ。」

ラトウー二「ですが、今でも人手不足には変わりないでしょ? 別に今のままで良いと言つ訳ではありませんし。」

カイ「まあ、そりやそうだがな・・・

今さつと目を通して見たんだが、

このリスト、この間の「ゴタ」「タのせいいか、かなり古いんだ。」

ラトウー二「古い?」

カイ「・・・俺が知つてゐるだけでも、死亡したものまでいるんだ。後で、情報部か人事部に問い合わせないとな。」

ラトウー二「また仕事が増えちゃいましたね。」

カイ「もう慣れたさ。」

それよりも、この中から選抜するのが一苦労だよ。  
どいつもこいつも一癖も二癖もありそうな連中ばかりだ。」

ラトウー二「フフ・・・。」

それ、今に始まつたことじやないでしょ?」

カイ「身も蓋も無いな。」

ラトウー二「それでは下がらせてもらいますね。」

これ以上、長居すると仕事の邪魔になつてしまひますから。

カイ「ああ、もつすぐ昼飯だからぼちぼち仕事を切り上げるよう伝えておけ、特にアラドにはな。」

ラトウー二「はい。」

あ、少佐。

私、選抜の件、今から楽しみにしていますから。」

「ラトゥーー」はそのまま部屋を後にした。

カイ「フフ・・・・。

まるで転入生を待っている学生のようだな。

・・・本当なら、そのぐらいの年頃だから仕方はないがな。」

カイ少佐はまだ30代半ばだが、16歳になる娘がいる。

ラトゥーー やアラド、それにゼオラとはちょうど同世代だ。

そのせいか彼女達に対しても父親のような接し方をしがちである。彼女達の境遇のせいか、あるいは遠くにいる娘に重ねているのか、おそらく両者だと思われる。

カイ「どれどれ・・・

ふむ、結構面白いな。だが少々俺には甘すぎるかな。

娘、か・・・

・・・日本に帰れるのはこれを片付けた後かな・・・

山積みの書類を前に、カイは少し虚しい様な悲しい様な気分になつた。

クッキーが少しショッぱい味がしたのは氣のせいだと自分に言い聞かせた。

ラミア「佐・・・カイ少佐。」

カイ「おおっ！？」

ラ、ラミアか？

・・・脅かすな、いつからそこに？」

ラミア「さつきラトゥーーと入れ違いで入ってきたやうになりましたが？」

一応、声をおかけしちゃいましたが、

反応が無かつたものでございましたので。」

カイ「ああ、そりや悪かった・・・

で、なにか用事か？」

ラミア「基地周辺の巡回任務、完了しましたのでその報告であります。

・・・あと、先程から少佐ちゃんのモニターに  
通信が入っちゃっているようなので、一声かけた次第でござりまする。」

カイ「わざわざすまんな。

通信？

・・・」つや情報部からか？」「

カイ少佐はモニターの通信を開いた。

モニターに映つたのはよく知つている男だ。

ギリアム「こちらは情報部のギリアム・イエーガーです。」

カイ「ギリアムか、随分と久しぶりだな。」

ギリアム「何分、良い様に使われている身ですので。」

カイ「それはお互い様だろう。」

ラミア「・・・それで、

別に世間話をしにわざわざ通信をしてきたわけでは  
無いのでは」「ざこませんでしょう？」

ギリアム「ラミアか、こりやまた手厳しいな。」

カイ「それで、何か用か？」

ギリアム「以前、そちらに頼んでおいた件ですが。

何か進展はありましたか？」

カイ「・・・いや、先日もテログループを鎮圧したが、  
奴等が絡んでいたと言う証拠は見られなかつた。」

ギリアム「・・・そうですか。」

ラミア「少佐、いつたいどういった依頼だったのですぞ」「ますので  
しうか？」

ギリアム「……そうだな、君も俺と同じで無関係とは言えないからな。

話した方が良いのかもしれん。」

「ラミア「少佐と私もしゃや、シャドウ//ワードー！？」

カイ「その通りだ。」

ギリアム「ここ最近、微弱ではあるが地球圏のあちら側で重力異常が確認されている。」

それも、一度や2度ではない。」

ラミア「……シャドウ//ワードーは首謀者のヴィンデル・マウザーを含め、

幹部を多く失い、残存勢力もホワイトスターと共に消え去りました。

私やアクセル隊長以外は……」

ギリアム「……だがそれは『こちら側』に辿り着けた連中の話だ。」

「ラミア「……話が見えてきちゃいました。」

少佐がおっしゃりたいのは、所在不明になつた残りの半数の内の幾つかが、

こちらにやつて来ちゃいましたかもしれないということです。」

ギリアム「そうだ。」

リュケイオスは俺と言うコア無しで次元転移を行つた。

それ故にリュケイオスの制御システムには大幅なブレが生じたはずだ。」

ラミア「その通りでござりますです。」

順番で言えば、殿を務めたアクセル隊長が真っ先に

『こちら側』に転移して来ちゃいましたぐらいですから。」

ギリアム「そして、連中の真の恐ろしさは任務のためなら

どんな状況下であつても遂行しようとする妄信じみた執

念だ。」

カイ「つまり、例えリーダーを失つたと知つても連中がやることは変わらんと言つことか。」

ラミア「それで、カイ少佐に重力異常が起きた地点の調査やテログループに連中の痕跡が無いか依頼したということですざいますね。」

ギリアム「今のところは俺の取り越し苦労で終わつてはいるがな。カイ「それで終わつてくれれば良いが、だからと言つて連中を軽視するわけにもいかん。」

引き続き調査は続ける。

連中では無いかもしぬないが、何かの前触れとも十分に捉えられるからな。」

ギリアム「すいません。」

カイ「気にするな。」

いまさら仕事の1つや2つ増えたところで大して変わらん。」

ギリアム「でも正直なところ猫の手も借りたいと言つたところでしょうが？」

カイ「上もそれを見かねてか、さつき教導隊への引き抜きリストみたいなモンを

よこして来たんだが、いかんせん情報が古くてな。」

ギリアム「引き抜きか・・・

そちらがよろしければ手を貸しましようか？  
1人心当たりがいるのですが。」

カイ「ほう？』

少し聞かせてくれないか。」

ギリアム「俺が今調査している事件の関係者なのですが、元軍人でその後は民間で契約社員ではあるがテストパイロットから教導官役までこなしていたそうです。」

・・・まだそいつにはそういう話はしてはいなし、

OKするかどうかは解りませんが、

話をしておくだけでも価値はあると感つのですが。」

ラミア「こなしていた?

つまり今はフリーと言つて、「やることますですね?」

ギリアム「まあそんな所だ。」

カイ「テストパイロットだけならともかく教導官になると並大抵の腕では勤まらんな。」

ギリアム「だが今は療養中で、

パイロットとして働くならリハビリが必要との事だそう

です。」

カイ「それでもOJS構築や教導官役なら十分に腕を發揮できる。もしそいつがそいつた役職でなければ俺は考えておくよ。」

ギリアム「わかりました。

それでは、調査の件よろしく頼みます。」

ギリアムはそのまま通信を切った。

ラミア「・・・少佐、今の話本当に受けたつもりでしゃうか?」  
カイ「人手不足なのは事実だし、上からもそういう命令が来ている。それにギリアムの好意を無下にはできんしな。」

ラミア「色んなモンに挟まれていらっしゃるのですね。」

カイ「中管理職っていうのはそういうもんだ。」

ラミア「ところで、重力異常の調査。

何も怪しいところは見つかなかつたのでありんすか?」

カイ「逆に何も無いのが不気味でならん。」

解つたことと言えば、この北米付近での重力異常の回数が比較的多かつたと

言つことぐらいだ。」

ラミア「なるほど、それでこの辺りで調査を行つていたと

こうじでござりますですね。」

カイ「結果はまだ何とも言えんが・・・」

だがそのときである。

アナウンス「特殊戦技教導隊所属カイ・キタムラ少佐、至急、管制室までお越しください。  
繰り返します、カイ・キタムラ少佐、至急、管制室までお越しください。」

ラミア「噂をすれば何とやらうつやつでっしゃるつか。」

カイ「ふう・・・。」

「そりこひといらじい。」

◀ラングレー基地 管制室 ▶

カイ「・・・重力余震?」

一般兵「はい、それもこのパターンは転移が行われる直前のものと推測されます。」

カイ「(ギリアムの嫌な予感が的中したか・・・?)  
了解した。」

至急、予測転移座標を割り出してくれ。

解り次第、すぐに現場に急行する。」

一般兵「了解しました。」

カイ「(さて、鬼が出るか蛇ができるか・・・)」

### 第3話 過去との再会 その1（後書き）

カイ少佐大好きです（爆）  
あの渋さとダンディは反則ですよw  
個人的に結構書きやすいキャラです。

反対にラミアの崩壊言語は書いてるとゲシュタルト崩壊起こしそうですw

冒頭の話はOGクロニクルVO・2収録の  
栗橋伸祐先生作「護るべきもの、乗り越えるべきもの」です。  
一応あらましを書きましたが、漫画を読んだほうが手っ取り早いです（笑）

ギリアムが紹介した人物、知っている人は直ぐに分かるでしょうが登場するのはもう少し先の予定なので気長にお待ちください。

### 第3話 過去との再会 その2

<北米 荒野地帯 ラングレー基地より50km地点>

ラトゥーー「予測した座標だとこの辺りです。」

カイ「うむ。全機そのまま警戒体制をとれ。」

アラド「・・・了解っス。」

カイ「おーアラド。」

しつかりせんか、いつもの元気はどうした?」

ゼオラ「あの・・・

昼御飯の途中だったから・・・

カイ「ああ、そういうことか。」

アラド「・・・グス。」

だつてまだ3杯しかお替りしないんスよ。

それにもまだオカズ残つてたし・・・」

カイ「食欲旺盛なのは大いに結構だが、もう少しは限度つてものを考える。」

昔から腹八分と言つだらうが。」

ラミニア「それに過度の栄養摂取は身体機能不全を起しあらむと聞く。」

今後のためにも控えた方が身のためだ。」

アラド「カイ少佐もラミニア少尉も冷たいっス・・・」

ゼオラ「あなたの体のためを思つていつているんだから、そんなこと言わないの。」

アラド「わ、わかってるよ。」

カイ「・・・それにしてもまだ何も見当たらんな」

ラトゥーー「このまま何も無ければいいのですが。」

ラミニア「それに万が一、転移してきたとしてもここは無人地区だ。」

人的被害は最小限で済む。」

アラド「思つ存分、暴れられるつて事つスね。」

ゼオラ「もし市街地だつたら大変な事になりましたね。」

カイ「だがここはあくまでも予測地点の1つだ。

実際にどこに出るかは分からん。

俺達と同じように他の予測地点にも部隊が出ではいるが  
だからと言つて気を緩めるなよ。」

アラド「りょ、了解つス！」

ラトウー「・・・！

ビリヤー、その心配は無用のよつです。」

カイ「何つ！？」

ラトウー「・・・来ます！」

ラトウーのビルドラプターはラングレー基地のセンサーと同調している。

そのセンサーがこの区域に重力余震の警戒を示したのだ。

カイ「総員、迎撃準備！」

カイの指令の直後、空が太陽よりも眩しい閃光に包まれ周囲に轟音  
が鳴り響いた。

そしてその光の中から何かが落ちてきた。

カイ「・・・全員、大丈夫か？」

ラトウー「・・・対閃光防御、なんとか間に合いました。」

ラミア「機体も大丈夫です。」

アラド「俺も何とか大丈夫つす。」

ゼオラ「私も・・・。

それよりも、敵は！？」

全員が迎撃体勢をとつた。

もし転移してきたのがシャドウ//ラーだつたら、生半可な対応では済まないからだ。

だが周囲にはゲシュペNSTはあるか、ソルプレッサやフルギアも見当たらなかつた。

そこにいたのは一隻の地上戦艦と思しきものだつた。

アラド「な、なんスかあれ？」

ゼオラ「地上戦艦・・・？」

ラトゥー二「でも・・・ライノセラス級とはまるで違つ。」

カイ「『向こう側』の戦艦か？」

ラミア「いえ、私も知りません。

初めて見るタイプです。」

ハーケン「うつ・・・

皆、大丈夫か？」

神夜「こ、こつちは何とか無事です。」

アシエン「問題はナッシングなり。」

錫華「こ、腰を痛めてしもうたかのう・・・？」

キュオン「えへん。

キュオン転んだよ。」

カツツエ「んもう、皆だらしないわねえ。

少しはアタシを見習つてクルクルシユピンと着地できないのかしら。」

ヘンネ「あたしゃ猫じゃないんだ、んな」と出来るか！」

エイゼル「そう気立てるなヘンネ。

皆が無事だつただけでも良しとしよ。」

リー「むう・・・

少々、クラクラしますな。」

鞠音「私も無事ですがツアイトが心配です。

まあ、今の衝撃で壊れるようなタマではありませんが。」

ハーケン「……ツアイトもそうだが、まず状況を確認する方が先だ。」

アシエーン「艦長、どうやらエライ事になつていいよつでやがります。上空に未確認物体が4つと地上に一つ、おまけにどこにもこいつも田測で20mぐらいあります。なデカブツです。」

あの羽の生えたヤツは40mはあります。」

神夜「うわあ……。

綺麗な観音様ですね。」

カツツヒ「いやいや、天使様でしょ？」

錫華「うむ。

ならここは少なくとも地獄ではないな。  
わらわ的には天国も地獄も御免こつむるがのう。」

ヘンネ「あたしはなんだか気に入らないねえ……」

ハーケン「あっちのビッグエンジェルはさておき、その隣に座るやつは

ゲシュペNSTじやないのか！？」

アシエーン「マイティエーラから得たデータと比較しましたが、合致率は60パーセント以下です。

パチモンかバッタモンの類かと思われます。」

鞠音「私はあのゲシュペNSTもですが、周りの機体も気になりますわ。」

キュオン「うん。

キュオンあんなの見た事ないもん。」

エイゼル「……ここはもしや、

ハーケン、お前がいた世界なのか？」

リー「となると、私たちは世界を超えてしまったのでしょうか？」

ハーケン「俺がいた世界がどうかはまだ分からんが、

まずは連中とコンタクトを取つた方がいいだろう。

見たところ迎撃体制をとつてゐるようだ。」

話もしないでドンパチやられひき酒落になります。」

アシロン「了解しました。

色々な電波を飛ばしてみます。」

ハーケン「変なのは飛ばすなよ。」

カイ「・・・妙だな。

攻撃のそぶりがまるで無い。」

ゼオラ「シャドウリーラー や修羅なり迷わざこいつを攻撃していくぞ  
しそうからね。」

アラド「ただ単に動けないだけじゃないんスか?」

ラトゥー「それなら何かしらのコントラクトを取つてくれるはず・・・

」

ラミア「・・・むー?

少佐、じつや向こうから飛び込んタクトが来たようだ。

しかし、これは・・・。

カイ「何か問題が?」

ラミア「複数の波長やコードで呼びかけているようなのですが、  
その一つがシャドウリーラーの秘匿コードのようだ」それがま  
すです。」

アラド「じゃ、じゃあ、あの戦艦シャドウリーラーなんスかー?」

カイ「まだ分からんが、その可能性は高いな。

ラミア、回線をこちりて回せ、俺が話してみる。」

ラミア「了解しました。」

ラミアはカイに回線を繋げた。

アシロン「艦長、じつや繋がったようですが、通信モニターに回し  
ます。」

カイ「こちりは地球連邦軍特殊戦技教導隊所属、カイ・キタムラ少  
佐だ。」

貴艦の所属と目的を明らかにせよ。」

錫華「腹の立つ鬚親父が何やら長つたらしい文句をぼやこでおるな。

「アシエーン「要するにお前は何モンだとぼやいておりやがります。」  
ハーケン「どうやら軍人らしい。」

お前らが出ると話がこじれそうだ。俺が出る。」

神夜「頑張つてください、ハーケンさん」

ハーケン「…通信が遅れています。」

こちらは地上戦艦ツアイト・クロコディール艦長、

ハーケン・ブロウニングだ。

現在、新型クロスゲートの暴走から要人を守るため乗船させている。

「こちらに攻撃の意思はない。」

至急、救援を要請する。」

ラミア「（ブロウニング…だと…）」

カイ「おーラミア、まさか…」

ラミア「…いえ、シャドウミラーはブロウニング姓は一人だけです。」

アラド「じゃあ、一体何なんスかね？」

カイ「…では率直に聞こう、お前達はシャドウミラーか？」

神夜「し、書道木乃伊？」

アシエーン「シャドウミラーです。」

検索したところ、

我々が元いた世界に存在した特別任務実行部隊の名前です。

Wシリーズはその部隊が開発したものです。」

ハーケン「だがこの雰囲気。

俺がはいそうですと言つたらドカンとやられそうな感じだな。

さて、どうしたものか…」

カイ「もし」ひらぎの質問に答られない場合は手荒なマネをする」とい  
になるが・・・

ハーケン「オーケイ、そつカリカリするなよマスタッシュダンディ。

「カイ「マ、マスタッシュー?」

ゼオラ「何だか随分と軽いノリね。」

アラド「・・・何か、悪いやつじや無こっぽいっスね。」

ハーケン「(とりあえず、ここは正直に答えた方が身のためだな。)

あんた達とそのシャドウ//トニーとのに何があったかは知らないが、

その口振りからするとお友達ってわけじゃなさそうだ。  
確かに、ここにいるアシロンといの俺はしが、他の連中は無関係だ。

俺とアシロンはともかく、他のやつらに手荒なマネはよ  
してくれ。」

ラミア「・・・アシロンー?」

ま、まさか、アシロン・ブレイデルか!?

ラトゥーー「ラミア少尉!-?」

カイ「どうしたラミア?」

そのあわてよつはー?」

ラミア「・・・少佐、回線をひらぎに繋げて下さい。」

お願いします。」

カイ「・・・解った。」

カイはラミアに回線を繋げた。

ハーケン「!?

おいおい鄙ダンディが消えたと思つたら  
こいつは一体・・・!?

神夜「ア、アシロンさんのおつづさん!?

錫華「古来よりクリソツな人間は世界に3人は居るそつだと聞くがの・・・」

ラミア「・・・アシエン・ブレイデルに変わってくれないか?」

ハーケン「・・・あ、ああ。」

ハーケンはアシエンに通信を変わった。

カイ「・・・こいつは!?」

ゼオラ「ラ、ラミア少尉!?」

ゼオラ「で、でもえらくメカっぽいっスよ!?」

ラミア「・・・W07、アシエン・ブレイデルで間違いないな。」

アシエン「何故私のナンバーを知っている?」

「・・・お前は何者だ?何故私の顔をしている?」

ラミア「それは、私のこの顔はお前を元に作られたからだ。」

私の名はラミア・ラブレス。

開発ナンバーはW17。」

アシエン「!?!?」

神夜「つて事はアシエンさんの妹さん!?」

錫姫「ということはこ奴、からくりなのか?」

カツツエ「でもアシエンちゃんより随分と生っぽいわねえ。」

ハーケン「こいつは驚きだな。」

だがこれでほぼ確定したな。」

アシエン「やはりこの世界、我々が本来いた世界だったようだな。」

ラミア「・・・いや、ここは我々がいた世界より極めて近く限りなく遠い世界だ。」

鞠音「つまりここは艦長達が元いた世界に極めて近い世界と言つ」とですわ。」

キュオン「でもどのぐらい近いのかな?」

カツツエ「まあ、カレーライスとライスカレーぐらいの差じやない?」

ヘンネ「それ、全然例えになつてないよ。」

ハーケン「一体何の因果か知らないが、こりゃまた随分とややこしい事になつてるな。

アシエン、とりあえず身の安全は保障するよ！」  
に言つてくれないか？」

アシエン「W17、いやラミア・ラブレスと言つたな。

我々の目的は先程艦長が言つた通りだ。

そちらに危害を加えるつもりは無い。

至急、救援を要請する。」

アラド「どうします、少佐？」

彼ら、見たところ悪い人じや無む邪じやうです  
助けても良いんじやないんスか？」

ラトウー二「でも、こちらを油断させるための演技かも。  
カイ」・・・解つた。

至急基地に連絡する。

応援が来るまで待つていてくれないか？」

アシエン「了解した。」

ゼオラ「少佐！？」

ラトウー二「彼らが敵でない保障は無いのですよ？」

カイ「それは承知の上だ。

だがまだ何とも言えん。

单なる遭難者ならここで手を打たなければ向こうさんに向い  
だろ。

それに敵であるならここで相手の手に乗るのも一つの手だし、  
応援は呼んだ方がいい。

どちらにせよ俺たちのやることは変わらんと言つ事だ。」

ラトウー二「・・・それもそうですね。」

アラド「それにしてもあのアシエンって人がWシリーズって事はわ  
かつたんスけど、

あのハーケンって奴は何者なんスか？」

「フミア「・・・私にも解らない。」

ラトゥー「さつき、プロウニング姓は1人だけっておっしゃつていましたが」

「フミア「そうだ。」

Wシリーズ開発者レモン・プロウニングただ1人だ。」

ゼオラ「だとしたらあの男は一体・・・？」

カイ「とりあえず応援が来るのを待て。」

連中と話をするのはそれからだ。

（それにしても連中のあの落ち着き様、

まるでこいついた状況に慣れているようだが・・・）

アシエーン「艦長、適当にしゃべくなつたら向こうさん

あつさつとOKだしましたが、どうしゃがりますか？」

ハーケン「とりあえずあちらさんの出方を待つとするわ。」

「どうせこいつちは何も出来んしな。」

エイゼル「それに情報が少なすぎる。」

「ここがどういった世界なのか今の会話では不十分だ。」  
ヘンネ「解ったことはこいつがエンドレス・フロンティアじゃないってことや。」

キュオン「キュオン達、無事に帰れるかなあ・・・」

鞠音「向こうの反応を見る限り、こちらにゲートが存在していない可能性は高いですわ。」

カツツヒ「それにあの態度・・・」

「どうもこの世界に前に来た異邦人は

みんな悪い子ちゃんばかりみたいな感じだわねえ。」

神夜「それって迷惑極まりないです！」

リーフ「全く、礼儀を知らん連中がいると困りますな。」

錫姫「それ、そちが言えた事かいの？」

ハーケン「・・・アシエーン、お前はどう思う？」

アシエーン(DTD)「そう言つハーケンはどうなの？」

ハーケン「・・・井、俺はこつもの調子でやるだけさ、これがな。

」

### 第3話 過去との再会 その2（後書き）

第1話からやつとこも転移してきました。  
最初にエクセレン達と会わせる案もあったのですが、  
説明するのに都合がいいのでシャドウマスターをよく知っているハリ  
アと先に会わせる事にしました。  
ムゲフロの連中とのGの連中って微妙にノリが違うので書くのがや  
やこしいです（トロト）

### 第3話 過去との再会 その3

暫らくするとラングレー基地から応援がやって来た。

護衛用の量産型ヒュッケバイン Mk - 2が3機、護送用のレイディバードが2隻だ。

レイディバードには救護チームと医療チーム、それに武装した部隊が乗っていた。

またレイディバードならば50ミ級のシャイトを運ぶことも可能である。

エイゼル「どうやら救援が来たようだな。」

ハーケン「こりゃまた随分とドテカイ連中だな。

あのマッシュブな飛行機は100メートルは超えてるぞ？

錫華「あれで基地まで運ぶつもりかの？」「..」

神夜「私、あんなおつきな船に乗るの初めてです。」

ヘンネ「あたしゃ自前があるから別にいいけど、

今日は甘えさせてもらおうじゃないの。」

キュオン「キュオンも賛成！」

鞠音「・・・艦長、まさかあんなのこのシャイトを乗せる気ですか？」

ハーケン「そう気を立てるなよ・・・

あの衝撃だ。

どうせソニアイトは今動けないんだろう？」

鞠音「恥ずかしながら、今は動かすだけで精一杯と言つたところですわ。

ちゃんと修理すれば、連中なんか振り切つてやりますよ。」

ハーケン「そいつはベターとは言えないな。

ト手したら俺達、この世界でお尋ね者になるぞ。」

リー「はつきり言つて賞金稼ぎがフダシキとなつては身も蓋もあり

ませんからな。」

鞠音「・・・わかっていますわ。」

レイティバードが着陸すると同時に、武装した部隊がツアイトを取り囲んで行った。

その雰囲気はただ事では無いことをハーケン達は悟った。

神夜「な、なんだか厳つい人たちがたくさん出てきましたけど・・・」

錫華「詫び寂びの無い連中よな。」

アショーン「艦長、このメンツならフルボッコにする事も造作もありませんが。」

ハーケン「そいつは勘弁してくれ。」

さつきの俺の話を聞いていなかつたのか?」

アショーン「きれいさっぱり聞いておりませんでした。」

ハーケン「とにかく抵抗はするな。」

ここで連中の信用を作つておきたいしな。」

カツツ「それにここで暴れたら、せっかくの玉のお肌も傷だらけよん?」

神夜「そ、それは困ります・・・」

錫華「それ以前に死んでしまうぞな。」

ハーケン「・・・一応、さつきのダンディに話しておくか。」

アショーン、さつきの回線を繋げ。」

アショーン「それぐらいてめえでやりやがりませ。」

ハーケン「艦長を働くなよ。」

ハーケンは渋々と回線を繋げた。

ハーケン「えーっと、カイ少佐と言つたな?」

「こちらに危害を加えるつもりはないと言つたが?」

カイ「悪いが、よその世界からの来訪者とのコンタクトは今まで最悪なケースばかりだつたからな。

氣を悪くするのも無理は無いが、

本来ならこれの倍投入しても足りないぐらいだ。

医療チームも待機している。

早急に下船してもらおうか。」

ハーケン「全員大した傷じやない。

今からそちらに全員で投降する。

・・・手厚い歓迎に感謝するよ。」

カイ「すまないな。」

アシェン「それでは皆様、唯今からこのオンボロ船からあの下種な野郎共の飛行機にお乗換えです、お忘れ物の無いようにお願いいたしかります。」

神夜「ハーキ」

錫華「オー」

ハーケン「さあ、盛り上がつて来た所で新世界の大地に下りてみるとするか。」

ハーケン達はツアイトクロコティールを下船した。

ヘンネ「こりゃまた随分と物々しいね。」

キュオン「やっぱり近くで見るとデッカイね。」

エイゼル「ふむ。

周りにいる兵士たちの武装、銃か何かか?

見たことが無いタイプだな、服装も初めて見る。」

カツツ「これだけのもの造るのに一体いくらかかるのかしら?」

鞠音「・・・艦長、後でのロボット分解したいのですが構いませんかね?」

錫華「バラした後は邪鬼銃王に組み込んでみても面白いかもしだね。

「神夜」「じょ、冗談に聞こえませんよ・・・」

ハーケン「マッドぶりも程々にしてくれよ。

ドクターもへそプリンセスも「

リー「そうですよ。

弁償するとなるといくらかかるのか想像もしたくありません。

「

ハーケン達は物珍しそうに兵士たちやヤーを見た。だが彼ら以上にカイ達の方が驚いていた。

ゼオラ「な、何なのあの連中?」

アラド「ガイコツ男に猫人間!??」

ラトウー「あの女性の背中の羽と女の子の尻尾、アクセサリーでしちゃうか?」

ゼオラ「よく見るとあの小さい女の子、頭に角生えてるじゃない?」

カイ「・・・それにも驚いたが、

連中の服装、妙だと思わんか?」

アラド「ええ、あのボンキュッポン、たまんないっスねえ!」

ゼオラ「そういうことじやないでしょ!」

ラミア「あまりにも統一性が見られない、

とこいことでございまでつしゃるひつ?」

カイ「ああ、同じ世界からやって来たにしてはあまりにも纏まりが無さ過ぎる。」

ゼオラ「ただ単に別々の国の出身とも考えられますか?」

ラトウー「そうだとしても違いが大きすぎる。

单なる文化の差とは言い難いもの。」

アラド「あいつら、一体どんな世界からやってきたんスかね?」

カイ「・・・話を聞いて解ると良いのだが。」

カイは外部スピーカーのスイッチを入れて、ハーケン達に指示を出した。

カイ「すまないが、武装を解除してからこちらに来てくれないか?  
失礼は重々承知のつもりだ。」

アシエーン「丸腰で来いと言う事か。」

ハーケン「・・・ま、当然といえば当然だな。」

錫華「わらわの邪鬼魔王、このよくなとこひで置いては行けぬ。」

キュオン「キュオンもいやー!」

神夜「キュオンちゃんも錫華ちゃんも我慢しましょ。」

きつと後で返してくれますよ。」

錫華「そうだといいのだがのう・・・」

錫華や神夜、それにオルケストラーミーの面々はそれぞれの武器を『召喚』した。

それは彼らにとつては日常茶飯事の事だが、周囲の兵士達は驚きを隠せなかつた。

アラド「あ、あいつら何も無いところから武器出してきたつスよ!?

ゼオラ「て、手品かしら?」

ラミア「あの斧と刀、身の丈ほどありますね。」

ラトゥー「あの小型サイズのロボット、一体どこから・・・?」

カイ「ああいう連中は、どうも心臓に悪いな・・・」

エイゼル「このコアクティブマークも脱いだほうがよいだらうか?

?」

ハーケン「それがOKならあんた持つてる斧だつてOKだらうが・・・

・」

神夜「でもそれ脱いじゃつと何か寂しいですね。」

エイゼル「問題ない。」

同様のデザインの非武装のものもある。」

ハーケン「（あ、あるのか？）」

ハーケン達は持つている武装を全て地面に置いて両手を挙げた。錫華は最後まで嫌がつていたが、渋々邪鬼銃王を地面に置いた。

カイ「これで、全部か？」

ハーケン「・・・ああ。

あとツアイトの武器庫に幾つかあるが、手持ちの武器はこれで全部だ。

これ以上は逆さに振つても何も出ないぜ。」

カイ「念のため、簡単なボディチェックを済ませてから搭乗してもらう。」

錫姫「む？』

まさかそちがわらわたちの体を触るのか？』

カイ「心配するな。』

お前さんがたは女性のスタッフが担当するから、問題ないだろつ。』

カツツエ「あら？』

ならアタシはどうなるのかしら？』

ハーケン「バイセクシャルキャット、少しほ黙つてくれ、

あんたは男だろ？』

カツツエ「ムフフ。』

まあ、女の子に触られても嬉しくなくてよ？』

アラド「何か、いろんな意味で調子狂うつスね・・・』

ゼオラ「ま、まあ、世の中ああいう人はいるんだし。』

ラトゥー「（人じやなくて猫だと思つけど・・・）』

ハーケンたちはボディチェックを済ませた後、レイディバードに搭乗した。

当然、部屋の出入口は武装兵で固められているが。

ハーケン「全く、用心深い事だな・・・」

錫華「わらわ的にこの女の周りをうろちょろされるのは勘弁して欲しいのう。」

アシェン「艦長、この後我々どうなると思つていやがりますか?」

ハーケン「十中八九、尋問だな。

エイゼル「あとは連中の捕虜に対する礼儀によるな。」

エイゼル「下手をすれば拷問もありえるな。」

ハーケン「それよりも話すだけ話して後ろからズドン、

なんて事もある。」

神夜「そ、それって恐ろしいこと極まりないです・・・」

ハーケン「だがこの連中はその辺はしっかりしているらしい。」

錫華「その根拠は?」

ヘンネ「アタシらに対しての扱いを見れば大体わかる。

連中、こういった捕虜や護衛にそれなりの心構えがあるフシがある。」

エイゼル「だが、我々を見る目は少々奇異だな。」

カツツエ「熱視線は大歓迎だけど、こういった冷たいのはイヤねえ。」

ハーケン「多分連中にはあんたらが珍しいんだろ?」

兵士や医療チームを見たが、全員同じ種族のようだ。」

リー「となると、艦長のような連中と見た目が同じの人達はともかく、

私は大丈夫でしょうか?」

ハツキリ言って私の毛皮は三流品ですが。」

カツツエ「アタシは剥製になつても綺麗でいられる自信あるわよ?」

ハーケン「早々に覚悟を決めるのはまだ早いだろ。」

「..

アシロン「・・・エンジンの起動音を確認。

どうやら飛び立つみたいです。」

神夜「ち、ちょっと緊張しますね。」

錫華「シュラーフロン・セレストを登りきった時の事を思えばなんて事はないのう。」

かくして、異邦人達を乗せた飛行機はラングレー基地に向けて出發した。

アラド「俺達も帰還ですか?」

カイ「連中の尋問は第一接觸者の俺達がするべきだろ。」

シャドウミラーの関係者かもしれんと思えばなあそりだ。」

ラトゥー「了解しました。」

ラミア「・・・少佐。」

カイ「ん?」

ラミア「その・・・

ありがどうござりますです。」

カイ「・・・気にするな。」

敵を倒すだけが仕事では無いからな、俺もお前もな。」

ラミア「・・・!」

はい。」

### 第3話 過去との再会 その3（後書き）

武器の召喚設定は斎藤和衛先生のムゲフロの「ミカライズからです。神楽天原の面々はハツキリと召喚と言っていますが、オルケストルアーミーにはそういう発言はありません。キュオンしか登場していませんし。

しかし漫画のキュオンの登場シーンを見ると最初は武器を持つていないのに名乗りのシーンではしつかり持つてるので召喚設定にしました。（単なる作画ミスという見方も・・・）

何よりエイゼルのマックス・アックスでかいですし、ゲーム中でも技術レベルは神楽天原と同等以上という発言もありますし、ワープで退場していますので十分に通る設定だと思います（＾＾；）

### 第3話 過去との再会 その4

＜地球連邦軍 北米支部ラングレー基地 教導隊事務室＞

カイ「・・・以上が、現時点での連中のデータだ。

ギリアム、どう思う?」

ギリアム「少なくとも『向こう側』の世界の住人でない事以外は俺にも解りません。

カイ「・・・すいません、力になれなくて。」

カイ「いや、俺も連中の事はまだ理解できなくてな。これから、連中と話をするつもりだが・・・

お前もよければ参加して欲しい。」

ギリアム「・・・確かに今回の来訪者、

シャドウミラーの関係者を名乗る者がいるのでしたら、俺はそれを無視する事は出来ません。」

カイ「すまんな。

では、よろしく頼む。」

カイは通信機のスイッチを切った。

ラミア「それでは少佐、こちらはいつでも大丈夫でござりますです。

ラトゥー「回収班からの報告では彼らの兵装には分析不能な点が多いそうです。」

ゼオラ「それにあの地上戦艦の事も

基地に運んで調べないと解らない事だらけみたいですよ。」

アラド「こういうのを謎が謎を呼ぶって言うんスかね?」

カイ「今回の会談で、その謎が少しは解ればいいのだがな・・・

ハーケン「ふう～・・・

結構疲れたな。」

アシェン「出力15%低下。」

艦長、おやつが食べたいです。」

神夜「あ！私も食べたいです。」

キュオン「キュオンはご飯の方がいいーーー！」

錫華「連中のあの視線、気疲れすることこの上ないぞな。」

ヘンネ「全くだよ。」

人をジロジロ見やがって・・・！」

カツツエ「気付いた？』

連中の目、アレはどう見ても恐怖が勝っていた感じだったわよねえ。」

リー「ハツキリ言って気に入りませんな。」

エイゼル「心配無用、我はあいつた視線には多少慣れている。」

ハーケン「（そりやアンタはそうだろうぞ・・・）」

鞠音「私を見たとき、何人かは別の意味で驚いていたようですが。」

アシェン「おそらく専門的なシユミの方々だったと推測されます。」

鞠音「・・・後でツアイトに戻つたら分解しますわよ？」

ハーケン「趣味はともかく何らかのエキスパートだったのは間違いないな。」

驚いていたのは白衣とか作業着を着てた連中だったしな。」

エイゼル「それにしてもあの飛行機といいこの基地といい、何もかもが巨大だ。」

キュオン「ホントだね。」

この建物だけでもエスマーラルダ城塞の数倍はあるよ。」

錫華「大昔に緑色の巨人族でもおつたのかのう？」

ヘンネ「いや。この基地は建てられてからそつ年月は経つていない。

せいぜい2、30年が良いト「だろ。」

キュオン「い、いたりたで困るけど……」

ハーケン「それよりも連中、中々来ないな。」

アシェン「……いえ、こちらに近付いて来る動体反応をキャッチしちゃいました。

やつとこさ来やがつたようです。」

ハーケン「これでやつと話せるな……」

数回ノックした後、何人かが部屋に入ってきた。

第一発見者である教導隊の面々だ。

皆一様に緊張していたがそれはむしろ当然の反応といえるだらう。

カイ「改めて紹介する。地球連邦軍特殊戦技教導隊所属

カイ・キタムラ少佐だ。

先程の無礼は許していただきたい。

(こうやつて直に見るとどうも緊張していかんな……)

ハーケン「(さつきのミスター・ダンディか……)

当然の反応だとこちらは理解している。

こつちが突然現れたのだしな。」

ラトナー「同じく教導隊所属、ラトナー・スウボータ少尉です。

(彼らの格好……リュウセイが言つてたコスプレってヤツかしら?)」

ラミア「同じくラミア・ラブレス少尉だ。

(W07……最後に見た時は何も感じ無かつたが……  
何だ……この気持ちは……)」

神夜「わ~。」

見れば見るほどアシロンさんにそっくりですね～。」

錫華「見た目は気に入らんが、こ奴本当にからくりなのか？」

ネジ「つ見当らんが・・・」

カツツエ「でもどう見ても人間よねえ。」

ハーケン「積もる話は後だ。」

（そんな調子じゃ先に進めんだ）

ゼオラ「えっと・・・」

ゼオラ・シユバイツァー曹長です。

（あの子の頭、どう見ても角よね・・・）

羽とか、尻尾とか生えてる人もいるし・・・）

アラド「右に同じでアラド・バルンガ曹長っス。

（いや～、それにしてもあの胸あの太もも、たまらんっス。）

（）  
カイ「・・・後、通信だがもう一人参加させてもらひうが、ようしい  
か？」

エイゼル「我らの存在を他所に漏らしても良いのか？」

カイ「彼は信用できる人間だ。

それあながち無関係とは言えんのでな・・・」

アシェン「そちらが宜しければ問題はナッシングでござりますです。

（）  
ハーケン「それはオレの科白だろ、アシェン？」

ラトゥーは持っていたポータブル通信機を繋げた

ギリアム「・・・地球連邦軍情報部のギリアム・イエーガー少佐だ。

（聞いてはいたが・・・彼らの構成、これは・・・）

ハーケン「オーケイ、ミスター・ミステリアス。

俺たちは全然構わないぜ。」

アシェン「宜しくちゃんです。」

ハーケン「それにしても、ダンティ少佐やミスティック少佐、それに生アションを除けば、

若い連中ばかりだな？」

アシロン「少なく見積もつても、およそ13から17歳といったところだと思います。

あの私の妹設定の付いたヤツは不明ですが、負ける気は毛頭ナッシングでやんす。」

ラミア「妹設定？」

アラド「何か、ラミア少尉をつくりつスけど、口が悪い」というか、ケンカ腰というか……」

ハーケン「気を悪くしたのなら謝る。

「いっぽいつもこんな調子でな。」

アシロン「艦長、部下の不躾は上司の責任です。

ゼオラ「キッチリ落とし前を付けやがりませ。」

ハーケン「とりあえずコントローラーのぐらぐらして血口紹介とこあますか。」

カツシ「話の尺とこりのもあるしねえ。」  
ラミア「（尺……？）」

ハーケン「俺はロストレンシア出身のハーケン・ブロウニングだ。人呼んでさすらいの賞金稼ぎさ。」

カイ「（ブロウニング……）

やはりシャドウマリーの……？」

アシロン「同じくその無能な艦長の下で工を使われてゐしがないアンドロイドの

アシロン・ブレイデルと申しちゃつたりいたします。」

ゼオラ「（ハーケンって人、苦労してやつ……）」

ラトナー「（あの手足……）

見たところ何かしらの兵装のよつだけじ……」

リー「私はエルフテイル出身でシャイーの副長で操舵手も担当し

ております

リイ・リーです。

御覧の通り虎の獣人ですので、中の人を期待していた人はあります。

ラミア「中の人？」

ギリアム「（獣人まで存在する世界・・・普通ではありえないはず・・・）」

ラトウーー「（獣人・・・伝説や神話に登場する亜人類種。

総じて知能は低いとされているけど・・・）」

アラド「お、俺は食つても旨くないっスよ！

いや、マジで！」

リー「ご心配なく、筋っぽい男の肉なんかこっちから願い下げです。それよりもこちら方の方がハツキリ言つて旨そうですね。」

ゼオラ「え、ちょっと！？」

鞠音「いたいけな子どもを怖がらせてどうするんですの、リー副長？」

リー「勿論冗談ですよ、ドクター。

最近生きた肉はご無沙汰なモンでつい。」

アラド「（や、やつぱり食うんスか！？）」

鞠音「私は澄井鞠音。すみい まりあ 神楽天原の出身で

ツァイトのメンテナンスやその他のメカニックを担当しております。

正確には副長と同じエルフエテイルの妖精族エルフと神楽天原の人間とのハーフですが。」

アシェン「そのため年齢不詳ですが、

性格の歪み具合からしてかなりの歳かと思われます。」

鞠音「・・・余計な補足をどうも、お礼に後で分解して差し上げますわよ？」

アラド「マ、マリオン博士そっくりっス！？」

鞠音「そういうえば何人かこここのスタッフが私をそう呼んで驚いています

ましたが？」

カイ「……以前、ここの中基地で進めていた強襲人型機動兵器計画というのがあってな。

その研究主任の名前がマリオン・ラドム博士というのだ。鞠音「あの反応を見れば解りますわ、さぞ優秀な人物だったのですね。

でも、私だって負ける気はしませんわ。

ふふふ……」

アラド「（）うちの博士は別の意味でぶつ飛んでるスね……）」  
ギリアム「（他の世界では）こつた事は珍しくは無いが……）」

神夜「はい

私は鞠音博士と同じく神楽天原出身の楠舞神夜と申します  
一応、悪を断つ剣なんですが。」

アラド「いや、目のやつに困るスね。」

眼福、眼福。」

ゼオラ「ちょっとアラドー。」

人前でそんなこと言わないの……」

ラミア「（ナンブという姓……それに悪を断つ剣……）」  
ラトゥー「（キョウスケ中尉とゼンガーレ少佐が混ざってる……）」

錫華「わらわは錫華、神楽天原の由緒正しき式鬼一族の姫である。」

アラド「お、お姫様なんスか？」

ゼオラ「その角……やつぱり本物なの？」

錫華「そち、無礼であるだ？」

神夜「ほらほら、錫華ちゃん、そんなに怒っちゃダメですよ。」

錫華「おぬしはもう少し姫としての自覚をもて。」

仮にも皇族の姫である……」

カイ「皇族？」

姫さんが姫さんのお印付けなのか？」

ハーケン「女の秘密を詮索するのは無粋つてモソンだぜ？」

アシェン「過去に同じ事を聞いたキザ野郎が言つと説得力が違いますね。」

ハーケン「ダメだしは勘弁してくれよ・・・」

カツツエ「んじゃ、次はアタシね。」

アタシはカツツエ、カツツエ・コトルノスよん。

ツアイトのリー君と同じエルフエテイル出身で、これでもエルフエテイル西部デューネポリスの砂漠都市マーカス・タウンの代表な。」

アラド「オレ、獣人って言えば、もつとこう猫耳とか尻尾付きとか思つてたんすが・・・」

ハーケン「いや、そういうやつもいるにはいるんだが・・・」

ラトウー「（い、いるの？）」

アシェン「とんだボッタクリの糞忌々しい腹黒猫なので、素人にはオススメ出来ません。」

アラド「夢も希望もないっス・・・」

エイゼル「最後は我々だな。」

私はフォルミッドヘイム代表のエイゼル・グラナータだ。また特殊任務実行部隊オルケストルアーミーの隊長でもある。」

アラド「（近くで見るとすっげえ怖いっス・・・）」

ラトウー「我々・・・

と言つと、後の二人も？」

キュオン「そうだよ

キュオンはキュオン・フリー・オンつて言つた。

ヨロシクね」

ハーケン「見た目で判断するなよ、こつ見えて相当の腕前だからな。」

キュオン「へへ、キモキザも少しあはわかつてきたんだね。」

アラド「見た目云々より、口が達者つスね・・・」

ヘンネ「アタシも同じくオルケストルアーミー所属の

ヘンネ・ヴァルキュリアだ。

・・・もしアタシらを剥製とかにしようつて考へてんなら、  
「」ちがその皮剥いでやるよ。」

アラド「（力、カチーナ中尉より怖いつス・・・・・）」

カイ「・・・それにしても多種多様だな。」

ラトゥーー「今の会話だけで、地名だけでも5種類。

人種も見た限りでは7種類以上です。」

アラド「時代はグローバルつて言つスけど、ここまで極端になるも  
んスかね？」

ギリアム「通常ではありえない事だ・・・

・  
これだけの種類の人類が同じ場所に共存する世界など・・

・  
エイゼル「確かにそれは困難であろう。

1つの世界しかないのであるならばな。」

カイ「何！？」

ギリアム「どういうことだ？」「

ハーケン「口だけで説明するのも難しいだろう。

アシェン、モニターに繋いで映像記録を見せてやれ。」

アシェン「メンド臭いです。

自分で勝手にやりやがりませ。」

ハーケン「このメンバーじゃお前しか出来んんだろうが。」

アシェンは文句を言いつつもモニターに映像を繋げた。

アシェン「どの辺から説明いたしちゃいましょうか？」

ハーケン「そうだな、とりあえず1年ぐらい前の映像を出せ。  
以前とは随分と変わったしな。」

エイゼル「説明するにしても、そのぐらいが丁度良いだろう。」

アシェン「解りました。」

ではまずはロストエレンシアから

アシェンは今から1年前のロストエレンシアを映した。

ハーケン「これがロストエレンシア、俺とアシエンの故郷だ。

科学の発達した世界で、住んでいるのは人間のほかに  
アンドロイドやミコータント、それに他の世界からの出

身者も多い。」

アラド「へ、でつかい都市つスね。」

ゼオラ「都市の周りは見渡す限りの荒野・・・

ということはデューネボリスの近くなのかしら?」

ハーケン「いや、ロストエレンシアには都市はここだけだ。」

ラトウー「・・・どういうこと?」

カイ「では先程の地名は一体・・・?」

ギリアム「・・・まさか、先程の地名は国では無く  
世界そのものの名前なのか!?」

ハーケン「ビンゴ!」

正直、理解が早いと助かるぜ。」

カイ「つまりお前達は別々の世界の出身なのか?」

ギリアム「しかし一体どうやって・・・」

ハーケン「アシェン、見せてやれ。」

アシェン「ラジャーなのです。」

アシェンはまだ稼動していた頃のクロスゲートの映像を見せた。

ラトウー「これは・・・!?」

エイゼル「これが世界と世界を繋ぐ門、クロスゲートだ。」

神夜「神楽天原では交鬼門こうきもんつて呼んでます。」

アラド「でつかい輪つかつスね・・・」

ゼオラ「これ、あなた達が造ったの!?」

ハーケン「いや、俺たちの世界じゃ大昔から存在しているものだ。」

数千、数万年前ともいいうやつもいれば、

始めから存在しているとも言つ奴もいる。

・・・誰が造つたのか見当が付いたのは最近の話だが、

それは後で説明するよ。」

ギリアム「（異界への門・・・やはり実在していたか・・・）」  
ラトゥー「あなた達はこのゲートに対して何の疑問も抱かなかつたの？」

錫華「太古から存在してあるものに何の疑問が沸くと云うのかのう？」

ハーケン「クロスゲート無くして俺たちの世界は語れないのぞ、これがな。」

アシェン「では艦長、次いきます。」

神夜「アシェンさん、次は神楽天原でお願いします」

アシェン「了解しました、乳牛姫。」

画面は神楽天原に切り替わった。

当然一年前の姿である。

ゼオラ「これが神楽天原・・・」

カイ「あの奥のでかいのは桜の木か？」

神夜「はい。

不死桜と言います。

根元には都の武西城たけとりじょうがあります。」

アラド「桜と言えば花見、花見と言えば「ゴチゾウつスね～。」

ラトゥー「でも、シーズンによるんじゃ・・・」

ハーケン「こっちのチエリー・ブロッサムはどうか知らないが、

不死桜は一年中満開だ。」

カイ「なら一年中春なのか？」

アラド「オレはゴチソウがあれば何だつていいつス！」

錫華「風情の無い輩ぞな。」

「アシエーンよ、わらわの城も見せてやれ。」

アシエーン「ラジヤーです、ペタン」「姫。」

アシエーンは映像をスキップさせた

カイ「今度は紅葉か」

ゼオラ「あれ？」

さつき桜は一年中つて。」

錫華「それは南半分の事ぞ。」

北半分は一年中紅葉ぞな。」

アラド「紅葉と言えば秋、秋と言えば秋刀魚、松茸、柿、梨、葡萄・

・

それに紅葉狩り・・・

たまんないつス！」

ラトゥー二「アラド、紅葉は食べ物じゃない。」

ハイキングよ。」

錫華「・・・こやつ、頭の中は食い物の事しか入つておらぬのか？」

ラミア「あの一際目立つ島は？」

錫華「アシエーンの妹にしてはいい目をしてある。

あれこそがわらわ達式鬼一族の城、滅魏城である。<sup>めきじょう</sup>」

アラド「まんま鬼ヶ島つスね・・・」

錫華「風情があると言わぬか。」

ハーケン「ちなみに俺達のロストエレンシアとは違い

神楽天原は魔法や呪術が発達した世界だ。

住んでいるのはそれを扱える人間や妖怪、

あとその錫華姫のような鬼だ。」

ギリアム「（魔法に呪術、それに妖怪・・・

まるで御伽噺だな。）」

カイ「成る程な。」

先程、何も無いところから武器を出したのもその技術の一端

か。  
」

ラトゥーー「ではあの小型のロボットも？」

錫華「ロボットなど無粹なからくりと一緒にするでない！」

あれは邪鬼銃鬼ジャキガント、わらわが造つた

由緒正しき伝統攻芸『戦術からくり』であるぞ。」

アラド「どうやって動いてるんスかあれ？」

ラトゥーー「回収班からの報告には電子頭脳はあるが、動力も無かつたつて言つけど・・・」

錫華「アレはこの扇子から出す妖氣の糸で操つておるのでな、そこいらの技術者風情に解るはずも無かるう。」

アラド「・・・何か、突拍子も無い言葉が出てきたつス。」

カイ「機械工学しかない俺たちにとつては、信じがたい話だが・・・」

ハーケン「そうあんまり気にするなよ。

そんなんじや白髪が生えてナイスミドルになつちまつぱい。

カイ「何を言つか。

オレはこれでもまだ30代だ！」

錫華「ほう？

人は見かけによらぬと言つのつ。」

アシエーン「2世紀以上生きている奴が言つと説得力が増しますね。」

錫華「・・・はよう、次にいかぬか！次！」

錫華が文句を言つそばで、アシエーンはエルフエテイルを映した。

リー「ここが私ら獣人や妖精族のテリトリーの  
エルフエテイルです。

森や滝や湖などの自然豊かな世界です。

技術的に言えば、魔法科学が発達しておりますな。」

錫華「神楽天原とは趣が大分違うがの。」

カツツヒ「こう見ると、結構感慨深いわねえ。」

ゼオラ「わ～・・・

映画で見る魔法の国みたいだわ。」

アラド「ゼオラってこういうの好きだけ?」

ゼオラ「な、何よ。

私だって一応女の子なんだから別にいいじゃない。」

ハーケン「・・・残念だがファンタジー・メルヘンの世界もリアリティ満載だ。」

鞠音「エルフエテイルは過去の大戦で壊滅的な打撃を受けました。西部は大戦時に使用された魔法兵器の影響で完全に砂漠化していますわ。」

カイ「兵器による自然破壊・・・

どこの世界でもそういうたとこには変わらんか・・・

リー「ハツキリ言って悲しいですがコレが戦争なのです。」

カツツエ「その西部の事を『ユーネボリス』って言つんだけど、今でも戦災難民が多いのよねえ。」

ゼオラ「ジビアな話ですね・・・」

カツツエ「そこで活躍するのが移動要塞都市ジャイアントマーカス号ってわけ。」

画面が砂漠地帯に切り替わった。

アラド「デ、デッカイ猫型戦車!?」

ラトウー「・・・あれが丸ごと都市なの?」

カツツエ「正確にはジャイアント・マーカス号の上に都市のマーカス・タウンが乗っかってるの。砂漠を移動して難民を救済するのが目的よん。ちなみにウチの名物は砂風呂とサウナ。」

アタシが経営する取引所ナイスガイズもヨロシクねん

ゼオラ「お世辞にもいい環境とは言えないけど、映っている人、

みんな活き活きしてこる。」「

カイ「いい町なのだな。」

カツツエ「ムフフ・・・

渋いオトコに惚められるのってやつぱりイイわねえ。」「

錫華「こやはいつもこんな調子ぞな・・・

エイゼル「では、次は我らだな・・・」

映つたのはフォルミッシュヘイム、今までとは全く雰囲氣の違つ世界だ。

アラード「お、おどりおどりしい事この上ないっス・・・」「  
エイゼル「これが我らの世界、フォルミッシュヘイムだ。

都市は黒い雷雲の上空に存在しており、

住んでいるものは他の世界からは悪魔や魔物と呼ばれて  
いる

種族で構成されている。

技術的には高度に発達した機械工学と魔法科学が融合し  
ている。」

ヘンネ「ちなみに軍事技術はどんな世界も凌いでいるさね。」「

キュオン「召喚も転送もお手の物だよん」「

鞠音「悔しいですが、事実ですね。」

アラード「あんまり観光には向いてなさそうつスね・・・」「  
ゼオラ「えーと・・・

これで世界の紹介は終わりなのかしら?」「

ハーケン「いや、もう一つ残つている。」「

アシエン、映してくれ。」「

アシエーン「艦長、そろそろ疲れました。」「

休んでもよろしいですか?」「

ハーケン「もう少し張り切つてくれよ・・・」「

アシエングが次に映したのは水の世界ヴァルナカナイだ。

ハーケン「この中に出身者はいないが、一応説明しておくか。

海の世界ヴァルナカナイ。

住んでいるのは人魚とか半魚人といった水棲種族が住んでいる。

連中は他の世界とは積極的に交わろうとしないため、俺達もこの世界についてはよく解っていない。」

アラド「人魚つて、やっぱボンキュッな感じっスか！？」

ハーケン「まあ、確かにグラマラスなマーメイドがいるにはいたが・

アシェン「うちのケチな艦長は、口説こうとしたところ鱗が無いと  
いう理由で

無様にフられました。」

アラド「ロマンの欠片もないっス・・・」

ラトゥー「単に種族の差と思つけど・・・」

ハーケン「以上が、俺達の世界の全様だ。」

カイ「ふう・・・

「こりや何とも言いがたいな。」

アラド「そうっスね。

なんかこう、現実離れしていると言つか・・・」

ゼオラ「そうね、私達からすればまるでおどぎの国だわ・・・」

錫華「わらわからすれば、おぬし達の世界も十分おどぎの国の住人  
だがのう。」

ハーケン「ちなみに

この幾つもの世界が重なり合つた世界を

俺達はこう呼んでいる。

未知なる無限の開拓地、

『エンドレス・フロンティア』、と。』

エイゼル「……だが今まで見せた映像は今から約一年前の、  
……かつての世界の映像に過ぎない。」

ギリアム「……何！？」

アション「……そしてコレが、現在のエンドレス・フロンティア  
の映像です。」

アションが最後に見せたのは混沌と化した大地の姿だつた。  
その光景に誰もが驚きを隠せなかつた。

カイ「……こいつは！？」

ラミア「今まで見た景色が全て混ざり合つてゐる……！」

ギリアム「（全てが混ざり合つた混沌……）

彼らの世界はまるで……」

アラド「い、一体何が起きたんスか！？」

ハーケン「……全ては、この世界に一隻の巨大飛行戦艦が  
次元を超えて落下してきた事から始まる……」

### 第3話 過去との再会 その4（後書き）

今回は極めて薄く限りなく長い説明パートです（＾＾；）  
ムゲフロの世界観の説明を会話を交えて書こうとしたらあつとこつ  
間に一万字を超えてしました（爆）  
しかし分割してもまだ相当かかりそうです（泣）

01 / 05 / 09 17 : 00

科白の一部を修正。

### 第3話 過去との再会 その5

ゼオラ「飛行戦艦・・・?」

アション「名前はトライロバイト級万能戦闘母艦『ネバーランド』・・・」

「ラミア「・・・!」

やはり・・・やうなのだな・・・」

カイ「知つてゐるのか、ラミアー?」

ラミア「・・・は!」

トライロバイト級はシャドウミラーが所有してゐた大型艦でござりますです。」

ラトゥーー「シャドウミラーとの戦いの時に出ていた彼らの旗艦ね。」

「ラミア「・・・そして、トライロバイト級の一つの一隻、『ネバーランド』は

『リュケイオス』で真つ先に跳ばされちまつたことです  
のよ。」

錫華「何故それが、わらわ達の世界に来てしもつたのだ?」

ギリアム「転移装置『リュケイオス』による次元転移は不安定かつ不確定要素が多い。

例えるなら、濁流の中で蜘蛛の糸を辿るようなもの・・・  
そのため、どのような事態が起きても不思議ではない。  
特に、俺というコア無しではな・・・」

ハーケン「何だと!?

じやあ、アンタも!?」

ギリアム「そうだ。

俺もラミアと同じく『向こう側』から來た人間だ。

向こうではヘリオス・オリンパスと名乗つていた・・・」

エイゼル「その名は『ネバーランド』に記録してあつた。

「

『システムXN』の第一人者にして

次元転移の第一被験者と……」

ハーケン「オーケイ、ミステリアスジャンパー。

無関係じゃないつてのはそういう意味か。話の理解が早い理由も解つたよ。」

カツツエ「だけどその後は行方不明……」

アタシ達が知っているのはそこまでよ。」

ギリアム「……その後この世界に辿り着き、元の世界へ戻れなくなつた俺は

ギリアム・イエーガーと名乗りこの世界で生きる決意をした。

そして後続者が現れるのを待ち続けた。

システムXNのコアである俺を狙つてくる連中を……」

ハーケン「それが、シャドウミラーというわけか……」

神夜「でも、そこまでの危険を冒してまで世界を渡る理由がわかりません……」

錫華「観光ではない事は確かよな。」

ハーケン「連中の目的ってのはなんだ?」

ラミア「シャドウミラーの目的、それは彼らの理想の世界、永遠に闘争が継続する世界の創造する事だ。」

ヘンネ「一体それのどこが理想の世界なのさね?」

リー「ハツキリ言つてサッパリ意味が解りませんな。」

ラミア「平和とは緩やかな腐敗でしかない、

だが闘争が日常である世界ならばそれは永遠に起ることはない。」

これがシャドウミラーの持論だ。」

神夜「それって戦わない人にとって、はた迷惑極まりないです!」

錫華「というより、思いつきり屁理屈よな。」

ハーケン「だが、それを他の世界でやる意味は無いはず……」

リー「ハツキリ言つて無責任ですが、そちらの世界で勝手にやれば

いいだけの話では?」

ラミア「彼らはその理想の元に連邦に対し反旗を翻した、だが……

「

ハーケン「読めたぜ。

結果ボロ負けしたもんだから、

他所の世界に逃げ込んで再起を計ろうとしたのか。」

エイゼル「その手段として使用されたのが『システムXN』と言つわけか。」

ラミア「その通りだ。」

エイゼル「……データを見る限りでは、大型で装置自体の転移は不可能だが

一度に大量に転移可能な『リュケイオス』で

もう一つの小型だが装置ごと転移可能な『アギュイエウス』ごと部隊を転移させ、

その後追跡できぬよう、残った『リュケイオス』を自爆させたといった所か。」

ハーケン「よくそこまで頭が回るもんだぜ……」

ヘンネ「自分達が通つた後に道を潰す……」

撤退戦のセオリーさね。」

ラミア「だが、ギリアム少佐抜きでの次元転移の成功率は低い。

そこで、少しでも成功率を上げるために『ネバーランド』で試運転を行つたのだ。」

アシエン「私はさしづめモルモットと言つわけか。」

神夜「でも、なんでそんなひどい事を……」

ラミア「まず第一に『ネバーランド』に

搭載されていた戦力は凍結処分された初期生産型のWシリーズだけだつたからだ。

例え消滅してもこちらの被害は少なくて済む。」

ラトゥー「その、初期型つて……」

アシエン「私の事でござりまするね。」

キュオン「でも、なんでそんな扱いを受けたのかな?」

鞠音「確かにアシエントはオツムはアレですが、戦力としてはそこそこですわよ?」

アシエント「……後で蹴り倒すことよ?」

ラミア「我々の戦争は機動兵器が主流だ。

故に機動兵器の操縦が困難な

白兵戦特化型の初期型のWシリーズは無用と判断されたのだ。

それに初期型の仕様では隠密活動にも不向きだ。」

アシエント「そしてお前の様な10番台以降はその点を考慮した

機動兵器の操縦と隠密に特化した仕様と言つわけか……

カツツエ「あ、なる……

それだつたら口ボ分が無い理由もわかるわ。

人間じゃないってバレちゃつたら元も子も無いし。」

ハーケン「おまけにそんな扱いじゃ、無事につけたとしてもマトモに使つてくれたかどうか

怪しいもんだぜ……」

ギリアム「そして辿り着けなかつた場合は

最悪、次元の狭間に呑まれて消滅してしまつたかもしぬない……

ハンドレス・フロンティアに辿り着けたのは不幸中の幸

いだな。」

アシエント「……今、こうして生きているだけでも奇跡というわけか。」

ラミア「……もう一つ、『ネバーランド』が実験台に選ばれた理由があるのだが、

それ故にどうしても腑に落ちない点がある。」

カイ「どういうことだ?」

ラミア「それはハーケン・ブロウニング、お前と言つ存在だ!」

ハーケン「何……！？」

アラド「どういう事つスか、ラミア少尉？」

ラミア「なぜなら『ネバーランド』には人間は1人も乗っていなかつたからだ！」

ゼオラ「ええっ！？」

ラトウニー「じゃあ、アシェンさんと同じ……？」

ラミア「……だがこの男には白兵戦用の兵装は見られない。

それにこの反応、間違いなく人間だ！」

アシェン「相当優秀なセンサーを積んでいやがりますのね。」

ハーケン「そりや、お前より後に作られたんだから当然だろうが。」

ラミア「答える！」

お前は何者だ！？

シャドウミラーを語るならまだしも……！」

ハーケン「開発者レモン・ブロウニングの名を語る輩は許せない、か？」

ラミア「貴様ツ……

しらけるのもいい加減にツ……！」

ラミアは怒りに任せての行動に出た。  
それはラミアにとって初めての事であった。

ゼオラ「ラ、ラミア少尉！？」

アラド「ラミア少尉！」

落ち着いて！…落ち着いて下さいっス！…！」

アラドの肉体は大人数人分のポテンシャルがある。  
だが怒りに任せたラミアの力には程遠かつた。

アラドはいとも簡単に振りほどかれた。

そして自制のきかなくなつたラミアはハーケンの胸座をつかもうとした。

カイ「落ち着かんか！」

ラミア・ラブレス「！」

「ラミア「……？」

だが、カイの喝がそれを止めた。

ラミアは突然の事で、体が硬直していた。

カイ「……ラミア、こっちを向け。」

カイはラミアに思いきり平手打ちをした。  
部屋中にその音が響き渡った。

ラミア「しょう……さ……？」

カイ「少しば目が覚めたか？」

ラミア「わ、私は……私は……」

カイ「……人間は時に理性より感情に身を任せて行動を取つてしまふ場合がある。

産みの親を侮辱されたと思つたお前はそれが許せなかつた。」

ラミア「……申し訳ありませんです……」

カイ「確かにお前がしようとしていた事は、重大な違反行為だ。

・・・だがお前のその気持ちは決して間違いでない。」

ラミア「え……？」

カイ「そして怒つた事に対して後悔する気持ちがあるならばそれでいい。

・・・それが、人間というものだ。」

ラミア「……はい。」

ハーケン「オーケイ、アンガーガール。

少しば、頭を冷やしたかな？」

錫華「このチャラ衛門めが！」

誰だつて産みの親を馬鹿にされたと思えば怒るに決まつておろうが！」

ハーケン「俺は普通に話していただけなんだがな・・・」  
アシヨン「おそらく艦長のチャラつぶりが拍車をかけちまいやがつたようです。

素直に謝りやがりませ。」

神夜「そうですよ！ハーケンさん！

ラミアさんに謝つてください！」

ハーケン「・・・すまなかつたな、ラミア・ラブレス。

怒らせるつもりは無かつたのだがな・・・

ラミア「・・・いや、怒りに任せた私が悪かつた。

もう少しでお前を殴つてしまつところだつた・・・

アラド「あの・・・？」

ラミア少尉、

頬、痛く無いんスか？」

ラトウニー「かなり大きな音がしましたけど・・・

ラミア「問題無い。

Wシリーズの表皮はこの程度の衝撃では傷1つ付かない。  
むしろ心配なのは少佐の方だが・・・

カイ「・・・俺のことは気にするな、話を続ける。」

カイは直ぐに隠したがハーケンには見えていた。  
カイの手のひらは真つ赤に腫れ上がつていた。

ハーケン「（男は辛いな、ミスター・・・）」

ラミア「では、話を続けてもらおうか。」

ハーケン「オーケイ・・・

『ネバーランド』が落下してきた時からだつたな。」

ラミア「そうだ。」

ハーケン「本来、この世界に転移するはずだった艦は  
エンドレス・フロンティアに辿り着いた。

だが、さらに不測の事態が起こつた。」

ラミア「何！？」

エイゼル「艦は転移する直前に空中分解を起こし、

前半分と後半分に分かれて方々に落下したのだ。」

アラド「マ、マジっスか！？」

ハーケン「このとき、前半分はエイゼル達のいるフォルミッドヘイムに、

後半分はロストエレンシアに落下したのさ。

今から24年も前の事だ……」

カイ「何だと！？」

ゼオラ「そんなに昔に……？」

ギリアム「（24年……それほどまでの誤差が出てしまったのか・

・）」

ラトゥーイ「……でも、それならますます解らないわ。

あなたはどう見ても20代そこそこのもの……」

ラミア「ならお前は一体……？」

ハーケン「……たまたま落下に居合させた、俺の育ての親、  
賞金稼ぎのジョーン・モーゼスが

落下してきた艦の側にいた赤ん坊を抱いた一体のアンドロイドを拾つたのさ。」

アシエン「それが、私と艦長でござりまする。」

ラミア「ならお前は24年も稼動し続けている事になるのか！？」

ハーケン「お陰で相当人間臭くなつちましたがな。」

ゼオラ「でも何で赤ちゃんなんか抱いていたのかしら？」

アラド「その辺から拾つてきたとか？」

ハーケン「残念だが、艦の周囲数十キロは見渡す限りの荒野、

人っ子一人住んでいないぜ。」

ラトゥーイ「ならやはり『ネバーランド』から？」

ゼオラ「じゃあ密航者が乗つていたのかしら？」

その子の両親とか・・・」

ハーケン「悪いがその後の調査で人間の遺体なんて見つかなかつたのさ、これがな。」

カイ「だとしたら余計に腑に落ちんな、ワザワザ赤ん坊を乗せる意味など無いだろうに、

ましてやたつた一人で・・・」

リー「あの時、私も生存者の確認のため、簡単な調査を行いましたが、

人っ子一人見当たりませんでした。

おまけに艦はいつ倒壊するか分からなかつたので、すぐにその場を立ち去りました。」

鞠音「私は改修したアシェンから、何かしらの情報を引き出そうと試みましたが、

当時のアシェンはボディは元より、電子頭脳、特に記憶回路に相当のダメージを負つていました。

自分の名前、製造番号、

それと赤ん坊の名前以外の全ての記憶を失つておりましたわ。

「アシェン「その後遺症で未だに言語機能はぶつ壊れたままでござりますです。」

ハーケン「そしてその赤ん坊はハーケン・ブロンニングと名付けられ、

「一人そろつて親父たちの『厄介になつたと言つ訳だ。』

ラトナー「その後は？」

アシェン「その後私と艦長は先代と共に賞金稼ぎの一家の一員として世界の方々を回りました。

そして数年前、先代は今の艦長にツアイトを譲り引退し、政治家に転向してあつという間にロストエレンシアの代表になりました。」

ハーケン「そしてようやく『ネバーランド』の探索許可が下りたのです。

落下して実に23年後の事だ・・・」

カイ「その間、誰も近づこうとはしなかったのか?」

アシエン「ぶつちやけた話、『ネバーランド』と同じく異世界から落<sub>ト</sub>してきたと思われる

超巨大戦艦があり、その全容は未だに知られておりやがりません。」

カイ「超巨大戦艦?」

ラトウーー「先程の映像にうつすらと艦のよつた影が都市の向こう側に見えましたが、

あまりに巨大なため、見間違いかと思っていましたが・

アシエン「我々はその戦艦を『シユラーフェン・セレスト』と呼称しております。」

ハーケン「それに比べたら『ネバーランド』は

ちっぽけなものに過ぎないというわけです。

それに、艦は厳重にロックされていましたし、

わざわざやってくる物好きもないだろ?」

アラド「そういわれればそうスね。」

ハーケン「その後、何度も中止したり妨害を受けたりもしたが、俺達は調査を続けた。

そして・・・見つけちまたのさ・・・

ラミア「何をだ・・・?」

ハーケン「・・・アシエン、記録をみせてやれ・・・」

アシエン「・・・はい。」

アシエンは再びモニターに映像を繋げた。

ゼオラ「何かの研究室のようだけど・・・?」

アラド「かなりボロボロつスね。」

ラトゥー二「目の前にあるのは・・・」

壊れた調整槽のようだけど・・・？」

カイ「何か、プレートのようなものが見えるが・・・」

ハーケン「・・・拡大しろ。」

アシエンは無言でハーケンの指示に従った。

モニター上に映っているプレートはかなり錆付いていたが、そこに書いてある文字は何とか読むことが出来た。

#### 『W00 ハーケン・ブロウニング』

カイ「な・・・!?

ゼオラ「え・・・!?

ラトゥー二「まさか・・・!?

アラド「これって一体・・・!?

ハーケン「俺の搖り籠さ・・・

寝心地はあんまり良いとは言えそつに無いがな。」

ラミア「だが・・・お前は・・・」

ハーケン「・・・最初のWシリーズは生身の人間だったのさ。遺伝子レベルでの身体強化と

先天的に機動兵器の操縦技術を刷り込まれてはいるがな。」

アシエン「おまけに専用機体とセットでの運用を考えていたようなのです。」

ラトゥー二「（ある意味、私達よりも酷い・・・）」

ギリアム「（文字通り、人間兵器と言つ事が・・・!?)」

カイ「（シャドウミラーめ・・・）」

よくもまあ、そんな事を思いつくもんだな・・・」

ハーケン「唯一の救いは、

俺のよつなタイプは俺1人だけと言つ事ぐらいだな。」

ラミア「どういふことだ?」

アラド「いついつのつて、大概クローンとかでたくさんいるもんなんじや・・・」

ハーケン「例えどんなに強化したと言えども、素体は限りなく生身の人間だ。

成人になるまでは普通の人間と同じよつて育成する必要がある。

即戦力にはなりえん。

俺は試しに作られたに過ぎないと言つわけや、これがな。

「カイ「連中にはそんな時間も余裕も無いはずだったから、なおさらだな・・・」

アシエン「そして計画は凍結され、

以降は私のよつなアンドロイドタイプに移行したと言つて訳だ。」

アシエンは自らモニターとの接続を絶つた。

ハーケン「俺がシャドウミラーの関係者と名乗ったのはそういうことさ・・・」

ラミア「・・・・・・・」

ハーケン「ん?」

「どうかしたのか、急に黙りこくつて・・・?」

アラド「・・・何故、お前はそんな顔でいられる?」

「・・・何故、笑つていられる?」

「・・・自分が造られた人間だと知つてなお・・・」

ハーケン「何だ?」

「そんな事か。」

ゼオラ「あなたは何も思わないの!?

だつて、あなたは・・・

ハーケン「リー、お前は自分が獣人であることをどう思つてゐる?」  
リー「そんな事考へた事もありませんな、私は今の自分に満足して  
おりますので。」

ハーケン「エイゼルの旦那にヘンネにキュオン、アンタらはどう思  
う?」

ヘンネ「愚問だね。

アタシは自分の翼に誇りをもつてゐるさね。

他人がどう思おうと知つたこっちゃ無いよ。」

キュオン「確かに、キュオン達は他の種族から嫌われるかもしれ  
ない・・・

でもキュオンはキュオンの事が好きだよ。」

エイゼル「例え他の種族に忌み嫌われようとも、我は我が種族を否  
定したことは無い。」

なにより、我は我が種族を誇りに思つてゐる。」

カツツヨ「つまり、そういうことなのよねえ。」

ラトウー「え・・・?」

ハーケン「生きていくのに、そんなのは些細な事つてことか、  
これがな。」

ギリアム「・・・強いのだな、お前達は。」

錫華「こやつの場合ただ単に一ついだけだ。」

鞠音「それに種族だの生まれだので一喜一憂しては身が持ちません  
わ。」

エイゼル「特に我等の世界ではな。」

ラミア「・・・アシヨン・ブレイデル、

お前もそうなのか・・・?」

アシヨン「私は私以外の何者にもなれない。」

それだけの話だ。」

ラミア「・・・そうだな。」

(私も二つかお前のようになれるのだろうか・・・)」

ハーケン「ラミア・ラブレス、一つ聞きたい事があるんだが……」

ラミア「……なんだ?」

ハーケン「レモン・ブロウニングの事だ……」

ラミア「……」

ハーケン「お前達の会話や雰囲気から察するに、

シャドウミラーがどうなったのかは大体見当が付く。

多分、レモン・ブロウニングも……」

ラミア「……」

ハーケン「やはりそうなのか……」

ラミア「……余計なかつたのか?」

ハーケン「まあ、な。

お前がWシリーズと名乗ったとき、  
もしかしたらと思つたんだがな……」

ラミア「……残念な思いをさせてしまつたな……」

ハーケン「……どういう人だった?」

ラミア「……つかみどりがなく、不思議で、それでいてどこか  
寂しそうな方でした。

・・・そして、我々Wナンバーズの良き母でした。

ハーケン「それだけ聞ければ十分だ。

礼を言つよ。」

錫華「チャラ助が礼を言つとは……

明日は槍でも降るかのう?」

キュオン「ううん、キュオンはミサイルだと思つ!」

ハーケン「(お前達の頭の中の俺はどんな奴なんだよ……)」

### 第3話　過去との再会　その5（後書き）

普通に書いていると「教導隊とハーケン達で振り返る無限のフロンティア」になってしまい、マンネリ化しそうなので色々とカラミを入れた結果、余裕で2万字を超えてしまったためまた分割です。お詫びなみに私が1万字前後にこだわるのは読みやすさを優先した結果だからですが、読む人は読むんだろうなあ・・・ああ、はやく第4話が書きたい（ＴＴ）

### 第3話 過去との再会 その6

ギリアム「……」これで幾つかの疑問が解けたと言つ事か。

錫華「まだ本題にはこれっぽっちも入っていないがのう。」

カイ「そうだな、お前達のあの崩壊した世界についての途中だつたな。」

ラトウーー「あの世界の変わりよう……」

『ネバーランド』の落下が原因とは思えないもの。」

エイゼル「……では、我から話そう。」

有る意味、元凶を招いたのは我らフォルミニッドヘイムと言えるからな……」

ラミア「どういうことだ?」

エイゼル「『ネバーランド』の前半部分がフォルミニッドヘイムに落下したのは話したな。」

ゼオラ「ええ……」

エイゼル「調査開始に23年もの月日がかかつたロストエレンシアとは違ひ、

我らはすぐに調査を開始した。

そして、幾つかのデータの解析に成功した。

カイ「何のデータだ?」

エイゼル「一つはパーソナル・トルーパーと呼ばれる機動兵器のデータだ。」

我らはそれらを元に人型機動兵器を完成させた。

ゼオラ「パーソナル・トルーパーを!?」

錫華「大きさはわらわの邪鬼銃王と大差ないがのう。」

アラド「一体どんなのを造つたんスか?」

エイゼル「一つは重兵装陸上戦闘機アルトイゼン・ナハト。」

もう一つは高機動空中戦闘機ヴァイスリッター・アーベ

ントだ。」

カイ「アルトとヴァイスだと！？」

アラド「確か、『向こう側』のアルトって……！」

ラミア「キヨウスケ中尉、いやベーオウルフのゲシュペNST Mk - IIの事だ。」

ラトゥー「でも『向こう側』のヴァイスは聞いた事がない……」  
ラミア「『向こう側』ではヴァイス……」

Mk - IVはプランだけの存在だった。

（そのデータが『ネバーランド』に搭載されていたのは初耳だがな。）

ハーケン「その様子だと、こっちにもあんのか……？」

ラミア「『向こう側』と大きく異なるのは

アルトは扱いの難しさゆえ、制式採用が見送られた事と  
ヴァイスが実在すると言つ点だ。」

カイ「同じ理由でヴァイスも制式採用はされなかつたがな。」

ハーケン「（いずれにしろアレが20mサイズで存在するのは間違いないのか。

考えただけでゾッとするぜ……）

ギリアム「では、その他のデータは？」

エイゼル「・・・エンドレス・フロンティア以外の  
異世界への転移座標だ。」

カイ「何！？」

ラミア「転移座標・・・ならばこの世界へのか？」

ギリアム「だが座標はシステムXNのもの……」

そう簡単には転用出来ないはずだが……」

エイゼル「その通りだ。

クロスゲートに転用するまでに実に10年の歳月を要した。

そして我等は、1つの世界へのゲートの開通に成功した。

ラトゥー「……もしかして、それでこの世界に？」

「

カツツエ「残念だけど、今話しているのは13年も前の話よ。

それに、繋がったのはこの世界じゃないわ・・・」

エイゼル「・・・繋がったのは『アイнстー』と呼ばれる異形の者達の世界だった。」

ゼオラ「！？」

ラトウー「アイнстー？」

アラド「なんでよりによつてあいつらの！？」

ハーケン「おいおい・・・

まさか連中もこの世界に？」

カイ「その通りだ。

こちらの世界でもアイнстーと呼ばれる謎の生命体が来襲してきました。

連中の親玉は『静寂なる世界の創造のために』と言っていたが・・・

神夜「問答無用極まりないです・・・」

ラミア「連中は幾つかの種類があり、おおよそは20メートルサイズだったが

中には100メートルを超える個体も確認されている。」

アラド「ラスボスは40km超えてたつスもんね・・・」

カイ「・・・言うな！

思い出したくもない。」

ハーケン「俺達の世界じゃせいぜい2~3メートル、でかくて5mがいいトコだったが・・・

インフレにも限度つてモンがあるだろ・・・

ヘンネ「アタシはそんなのをぶつ潰したあんたらの方が驚きだね。」

ハーケン「英雄譚は後で聞かせてもらつとするよ。」

エイゼル「開通後、その世界に興味を持つた

前フォルミッドヘイム王シュタール・ディープは

アルトアイゼン・ナハト、ヴァイスリッター・アルベン  
ト、そしてアークゲインと

親衛隊を引き連れて向こう側へ渡ったのだ。」

カイ「む？」

今、初めて聞く名があつたが……」

ラミア「アークゲイン……？」

エイゼル「『ネバーランド』調査の際に艦に搭載されていた兵器だ。  
両腕部にブレード、両脚部にカノン砲を備えた細碧の徒  
手格闘アンドロイド。」

アラド「腕にトンガリ、それに青くて徒手格闘って……」

ハーケン「おい、まさか……」

カイ「……こいつを見てくれ。」

カイはデータベースにアクセスし、一体のロボットの映像をモニタ  
ーに映した。

ハーケン「冗談キツいにも程があるだろ……！」

ヘンネ「この姿、どう見てもアークゲインだね。」

キュオン「色々足りない気もするけど……」

ラミア「シャドウミラー特殊部隊隊長アクセセル・アルマーが駆る機  
体、

その名はソウルゲイン。」

神夜「魂を、獲する者……」

錫華「こやつを小さくしたのか、闇騎士を大きくしたのかは知らぬが  
ややこしい事甚だしいぞな……」

ラミア「いや、私もそのような機体が搭載されているとは知らなか  
つた。」

エイゼル「我等はWシリーズに使用される軀体製作の際の試作機と  
考えていたのだが……」

ラミア「……すまないが、

私がロールアウトしたのは『こちら側』に転移する少し前・

初期段階のWシリーズに関するデータは殆ど持っていないのだ・・・」

ギリアム「真相は闇の中というわけか・・・」

ゼオラ「それはそうと、AINST世界に行つた王様達は・・・?」

エイゼル「・・・」

ラミア「全滅か・・・?」

エイゼル「・・・帰還したのは王と3体の機動兵器だけだつた。」

アラド「命からがら逃げて来たんスね・・・」

ヘンネ「悪いけど、アンタが思つてはいるよりずつとまざい事がおきたのさ。」

エイゼル「帰つてきた機動兵器達は

異常なまでの戦闘能力と自己修復能力を備えていた。  
そして王は全世界に向けて戦争を仕掛けたのだ。

・・・『静寂なる世界のために』、と。」

ラトウー「それつて・・・まさか!?」

ギリアム「・・・AINSTに洗脳されたのか?」

カツツエ「そうだつたらどれほどよかつたものか・・・!」

ゼオラ「・・・?」

エイゼル「帰つて来た王は王ではなく、『王の姿をした何か』だつたのだ。

・・・そしてそれは王そのものに見えた。」

カイ「何!?」

ゼオラ「それよりも、王様がいきなり戦争を始めると言つ事に  
あなた達は何の疑問も浮かばなかつたの?」

エイゼル「フォルミニッドヘイムにおいて、王の命令は絶対だ。

疑念があるうとも、証拠が無い限り動くことは出来ぬ。」

カイ「(過酷な環境ゆえの絶対王政か・・・)」

ラトウー「ヘンネさんや、キュオンさんは・・・?」

ヘンネ「アタシはその頃、前線の傭兵部隊にいた。

お偉いさんが偽者かもしないなんて考える余裕なんかありやしないよ。」

キュオン「キュオンは後方支援部隊にいたけど、そういうことは分かんなかつたよ。」

エイゼル「……どうしても確証が持てなかつた私は、

当時のオルケストル・アーミー副隊長の

カツツェに王の身辺調査を依頼したのだ。」

カツツェ「……出来ればエイゼルの予感が外れて欲しかつた。

だが調べれば調べるほどその疑惑は確固たるモノに変わつていつた。」

エイゼル「その後の調査で証拠を見つけた我々は王に返答を申し出た。

・・・そして奴はその本性を現した。」

カツツェ「隔離塔ノース・オリトリアでの死闘の末に、アタシ等はソイツを倒す事に成功した。

その戦いでオルケストル・アーミーは全滅。

生き残つたのはアタシとエイゼルだけだ・・・

エイゼル「大戦開始から10年

・・・あまりにも遅すぎた。」

カイ「長い戦争だつたのだな・・・」

ギリアム「だが先程の映像を見る限りでは

世界全体の被害はむしろ少なすぎると思うのだが・・・

？」

ハーケン「フォルミッドヘイムのクロスゲートが繋がつていたのは隣の世界エルフエテイルだけだ。

連中の軍事用ゲートを備えた拠点もあつたしな。だから実質的にはフォルミッドヘイムと

エルフエテイルとの戦争だつたと言える。」

ラトナー「でも、そこの中には他の世界へのゲートがあつたの

では？」

アシェン「オリジナルのクロスゲートは常に安定しているわけではありません。

何日も開きっぱなしの時もあれば、何ヶ月も閉じちゃってる時もあります。」

ラミア「それ故に侵攻が遅れたと……？」

ハーケン「そのおかげで俺の世界、ロストエレンシアは侵攻による被害は殆ど無かった。」

リー「それもありますが、ヴァルナカナイへのゲートはその世界の連中ぐらいしか所在を知りません、

おまけに深海の世界、

フォルミッドヘイムだって容易に侵攻は出来なかつたでしょう。」

ゼオラ「入り口が分からなければ入りようがないものね……」

ギリアム「……では神楽天原は？」

アシェン「神楽天原へのゲートはフォルミッドヘイムのゲートのすぐ近く、

おまけに結構安定しまくつていやがりました。」

カイ「だが、先程の映像では戦災の跡すら見られなかつたが……」

ハーケン「……神楽天原は戦争が始まつて間もなく、

籠国カーリングを行つた。

そのため被害を全く受けずに済んだのさ……」

ゼオラ「うつこく？」

アシェン「簡単に言えば、ゲートを完全に封鎖する事です。」

錫華「だが、事は簡単とは程遠いと言える……」

アラド「どういう事つスか？」

神夜「……籠国を行うためには、

不死桜内部にある使者の間で儀式を行う必要があるんです。」

ラトウー「儀式……？」

ハーケン「あの巨大なフェリーブロッサムはそれ自体がゲートに干渉するための装置、

そのエネルギー源は楠舞皇族の靈力・・・

ましてや10年もゲートを閉鎖するほどいの靈力を消費すれば・・・」

ゼオラ「そ、それじゃあ・・・！」

神夜「当時、儀式を行つたのは楠舞羽衣なんぶうい」

私のお母さんです。」

アラド「そんなのつて・・・！」

ギリアム「・・・非情かもしけんが、戦うといつ選択肢もあつたのでは？」

アシェン「エンドレス・フロンティアでは、

盗賊や野獸による襲撃や権力争奪のための争いで命を落とす事はそう珍しい事ではあります。

昔ほどではありませんが・・・」

鞠音「売られたケンカを買うのは当たり前の考え方と言えますわ。」

リー「この戦争で、賞金稼ぎから国王にまでし上がった奴もいるほどですからな。」

カイ「弱肉強食と言つやつだな・・・」

ハーケン「だから神楽天原が籠国すると聞いて一部の連中は腰抜けと罵つた・・・」

神夜「だけどそんな世界にも平和を望む人もいます。

お母さんがそうだったように・・・」

ゼオラ「でも、止める事も出来たはず・・・」

錫華「わらわ達とて必死で説得はした・・・」

だが民のために自ら命を投げ出す覚悟を決めた者を誰が止めることが出来ようか・・・？」

アラド「神夜さんは・・・悲しくなかつたんつスか・・・？」

神夜「私だって哀しい事極まりないです・・・」

でもお母さんのおかげで神楽天原の民の血が流れることはあ

りませんでした。

その事を考えたら泣いてなんかいられません。

お母さんの思い、無駄にしたくはありませんから。」

錫華「よいよ。

その笑顔なら、羽衣も安心しておるわ。」

エイゼル「・・・神楽天原の話はハーケンから聞いていた。

もし、我等が門を開かなければ・・・

そなたの母は・・・

そしてそなたも・・・

ハーケン「おつと、いい話の途中だがそこまでだ。」

キュオン「ちょっと！割り込まないでよ、キモハゲ！」

錫華「チヤラノブが、少しは空気を読めぬのか？」

ハーケン「・・・スカルボス、あんたはその気持ちがあつたからこそ

後始末も手前で片付けようとしたんだろう？」

アラド「後始末・・・つてなんスか？」

エイゼル「王に成り代わったAINストを倒した私は

エルフェテイルと和平を結び、戦争を終結させた。」

カツツエ「そしてアタシはオルケストル・アーミーを辞めて、

最も被害が酷かつたデューネポリスで難民の救済活動を行つ事にした。」

ラミア「それがマーカス・タウンと言つわけか。」

ゼオラ「じゃあ、エイゼルさん達もその手伝いを？」

エイゼル「・・・王を倒し、AINスト世界へのゲートを完全封鎖したもの、

彼らは少數ではあるが

依然として世界に存在し続いていることが判明したのだ。

そして戦争終結時に3体の機動兵器も行方不明に・・・

カイ「何だと！？」

エイゼル「私は新たにオルケストル・アーミーを再編成し独自に調査を開始し、

『ネバーランド』から新たにサルベージに成功したデータから

追撃用の機動兵器ゲシュペNSTを製作した。』

アラド「今度はゲシュペNSTつか！？」

アション「どんなプログラミングをしたか解りやしませんが、

世界中のあつちやこつちやを引っ搔き回しまくったせい

で、

『ファンタム』の通り名で賞金首に指定されやがりました。

カイ「追跡者が目を付けられると、シャレにもならんな・・・」

ハーケン「補足すると、そいつの制式名称はゲシュペNST・ハーケン。

俺の専用機体さ。」

ゼオラ「ある意味、もの凄い因縁ね・・・」

鞠音「ちなみにファンタムはその後艦長達が回収し、

ツァイトの戦力として生まれ変わりましたわ、この澄井鞠音が！」

アラド「どんなマ改造したのか想像したく無いっス・・・」

ハーケン「見た目や武装に変化は無いが、

俺達の言つ事を聞くようにしたぐらいのもんだぜ？

まあドクターの改造のおかげ思わぬラシキーを運んでくれたワケだしな。」

ラトナー「どういう事・・・？」

アション「後のアルトやヴァイスとの戦いでの事ですが、連中をボコボコにした後

ゲシュペNSTが勝手に命令系を並列化しやがりました。』

アラド「要するに味方にしたって事つスか！？」

ハーケン「おかげで戦力は大幅にアップしたのさ、これがな。」

ラミア「では、アークゲインも・・・？」

ハーケン「いや、奴はそうなる前に自爆しやがった。

後で破片を回収してドクターに調べさせたが、

あらかじめそういう機能があつたという事ぐらいしか解らなかつた。」

鞠音「おそらく機密保持のための自爆装置だつたのでしょうか。」

ラニア「（もしゃ、コードATA？）

いや、それならば破片も残らんはずだが……）

ハーケン「ちなみにそいつらはツアイトに積んである。

調べたけりや好きにしてくれて構わないぜ。」

鞠音「……艦長？私は許可した覚えはありませんが？」

ハーケン「……訂正する、調べるのはドクターの許可の下でやつてくれ。」

アラド「（やつぱ世界が違つても、マイオン博士はマリオン博士つス……）

カイ「ではそちらは後ほどようしく頼む。」

鞠音「その代わりといつては何ですが、そちらの機体を分解しても構いませんかね？」

カイ「分解されちゃこつちが困る。

見るだけにしてもらおうか？」

鞠音「まあ。今回はそれで我慢しましそう……」

ギリアム「（小型のゲシュペNSTか……

興味があるな……）」

ラトゥー＝「オルケストル・アーミーが動き出した頃、ハーケンさん達は何を……？」

ハーケン「その頃俺達は『ファンтом』の話を聞いて捜索を開始したんだが、

その途中でバックにオルケストル・アーミーが絡んでいたと知つた。

連中と何度も接触し、ドンパチやらかしたしな。」

ラトゥー＝「話そつとはしなかつたの……？」

アシェン「秘密任務だ、シークレットだとございて一向に話を聞きやがりませんでした。

大方、次の戦争の下準備だと思いましたので、

吹つかれられる前に早めに息の根を止めておこうかと。」

アラド「か、過激つスね・・・」

エイゼル「事情を知らぬ者達を巻き込むわけにはいかなかつた。

なにより、我等の罪は我等自身の手で償うべきだと思つたからだ・・・」

ハーケン「そう気に負つことはないさ。

どんな結果になるかは誰も予想出来なかつたしな・・・

それに最後にはあんた達は俺達を信じて全てを話し後を託してくれた。

それでいいじゃないか。」

エイゼル「・・・そうだな。」

ギリアム「・・・それで、行方不明の機動兵器達はハーケン達によつて回収されたわけだが、

アインストのほうはどうなつたのだ?」

「ヘンネ」・・・アインストが世界中で確認された頃から、奇妙な結晶体があちこちで発生し始めたのさ。」

ラミア「結晶体?」

エイゼル「蒼と紅の二種類が確認され、

我等はそれを『ミルトカイル石』と呼んでいた。

その石は限りなく無機物でありながらも生きていたのだ。

「ギリアム「生きている・・・だと?」

エイゼル「ミルトカイル石は不思議なエネルギーを発していた。

その力に触れたものは自分の持つ力を限界以上に引き出すことが出来た。」

錫華「それに目を受けた滅魏城の主、守天は

諦めきれずについた神楽天原転覆を目論んだほどだ・・・」

「ミニア「だが、それほどまでのエネルギー……

代償が無いと考えるのは不自然か……？」

カイ「それに出現発生時の状況から判断するに、

AINスト絡みであることは間違いないな……」

ハーケン「その通りだ、ミスター・ダンティ。

ミルトカイル石の力に当てられた連中は、  
揃いも揃つてAINストにコントロールされちまつたの  
さ。」

ラミア「おまけにミルトカイル石の周りには雑魚AINストがどこ  
からともなく

わんさかうじゃうじゃ湧いてきやがりました。」

ギリアム「では、ミルトカイル石はAINストの卵のようなものな  
のか？」

ヘンネ「出てくるところを見たわけじゃないが、増殖していたのは  
間違いないさね。」

セオラ「そのミルトカイル石ですが、対処法はあつたんですか？」

ハーケン「後に開発された特殊弾頭、あるいは強烈な衝撃を加えれ  
ば石は破壊できた。

それに石の純度にもよるが小さくなればその力を保てな  
いらしい。」

ラトウリー「AINストに支配された彼らは……？」

ハーケン「その支配も完全では無く一種の催眠状態に陥れる程度の  
モノだった、

多少ショックを『えればアッサリと解けちまつたのさ、

これがな。』

ギリアム「その程度だったのは不幸中の幸いだつたな。」

エイゼル「だがミルトカイル石の解析を進める際にあることが判明  
した。」

ヘンネ「・・・ミルトカイル石はただの受信機、エネルギーの大元  
は別にあつたのさ。」

「トゥー」「だけど、世界中に結晶体を発生させるほどのエネルギー……」

「一体どこから……」

ハーケン「クロスゲートさ……」

ギリアム「大方の予想は付いたが、やはり……！」

アラド「じゃあ、ゲートをぶつ壊してしまえば万事解決っスね！」

ゼオラ「馬鹿アラド！」

「そんな事したらどうなるかわからんないでしちゃが！」

ヘンネ「それに壊す必要は無い、

ゲートから出てくるエネルギーを遮断すれば言いだけの話

さね。」

ギリアム「だが、ゲートを遮断する方法となると……」

ラミア「先程の不死桜か……？」

エイゼル「いや、AINストやミルトカイル石の調査、それに機動

兵器の追跡は

「フォルミッドヘイムが独自に行っていた。」

錫華「それに不死桜の力はそう易々とは使えぬ。」

カイ「ならば、他に方法があつたのか？」

エイゼル「・・・フォルミッドヘイムの中央に聳えるバレリアニア

塔の力を使えばな。」

キュオン「元々、軍事用ゲートのコントロールタワーだからね。

オリジナルのゲートにも干渉する事は出来るよ。

「改造して、パワーを調整すればけど……」

ヘンネ「さすがに神楽天原の不死桜ほどの力は無いが、

意図的にゲートを不安定にさせる事ぐらいは出来た。」

ハーケン「だがそれはあくまでも一時しのぎ……」

「インストの侵攻は遅らせる事は出来るが、

それ以上のことは出来なかつた。」

ヘンネ「それにゲートが不安定ということは、

普段繋がっていない世界からの侵入の危険性もあつた。」

ギリアム「だが次元を不安定にさせるとこいつとはそれ自体が世界崩壊の危機……」

早急に別の対抗策を打たねばならなかつたのでは?」

ハーケン「毎度毎度理解とシッコミが速くて助かるぜ。」

エイゼル「この事をハーケン達に話した時に、楠舞 神夜が申し出たのだ。

『神楽天原に任せて欲しい』、と。』

ゼオラ「それってまさか籠国……!?」

ラトゥー「だけど、そのためには……」

神夜「不死桜を使い、全ての交鬼門を閉じる……

・・・あの時、私が出来うることはそれしかありませんでした。』

アラド「ハーケンさん達は止めなかつたんスか!?!?」

アシェン「我々は籠国がどの様にして行われるのか全く知りませんでした。』

ハーケン「・・・それに神夜は俺達に何も話してくれなかつた。』

籠国することも、それで自分の命が失われる事も……」

エイゼル「・・・だが、AINSTの手は我等の遙か先に伸びていたのだ。』

カイ「籠国の妨害か!?!?」

錫華「・・・それ以上のことがな。』

ハーケン「AINSTはあるうじとか不死桜を乗つ取ろうとしたのさ。』

アラド「な、なんだつて!?!?」

ラミア「だが、不死桜は楠舞皇家の者でしか扱えないはずだが……」

?』

ヘンネ「忘れたのかい?』

ウチの王様がAINSTに取つて代わられた事を……!』

ラトゥー「・・・まさか!?!?」

ハーケン「そう、AINSTは神夜のコピーを創り出して

不死桜のコントロールを得ようとしたのです。」

アショーン「勿論ただのコピーではありません。

容姿、体型、戦闘能力、はては特有の靈力まで寸分違わ

ない

パー・ペキな物でした。

それも4体も。」

ゼオラ「か、神夜さんが4人も！？」

アラド「別の意味で驚きつス！？」

ラトウニー「では、不死桜は・・・？」

錫華「いや、寸での所で阻止する事ができ、使者の間も無事だつた。

神夜「だけど、いつまたアイнстがやつてくるか分かりません。

私はハーケンさん達を見送った後、すぐに儀式の準備に入りました・・・」

アラド「い、いくらなんでも急ぎすぎじゃないんスか！？」

錫華「・・・不死桜は満月の夜にしかその力を使つことが出来ぬ。

そして、その夜は満月だった・・・」

フニア「・・・だが、こうして彼女が生きているということは、何か別な方法があつたのか？」

ハーケン「・・・そうだ。

俺は帰つた後、トレイン・シユタットにいる親父に呼ばれ、籠国の中を聞いた。

・・・俺は親父に懇願し、他の方法は無いのかと聞いた。

ギリアム「・・・あつたのだな。」

ハーケン「ロスト・エレンシアにあるシュラーフェン・セレスト、

あれは空中戦艦などの類ではなく、かつては次元を旅する艦であつたのではないかと聞かされた。」

ギリアム「・・・次元転移戦艦、とでもいうのか？」

ハーケン「そしてシュラーフェンの主砲は攻撃用ではなく、

転移フィールド発生装置だと親父は言つた。」

アシェン「そして、そこにアイнст世界への転移座標を加えれば・

・・・

ハーケン「奴等の本拠地に殴りこみに行けるつていう才法さ。」

カイ「だが、それはあまりにも・・・！」

ハーケン「『樂しかつた』・・・」

カイ「？」

ハーケン「神夜が別れ際に言つた言葉さ・・・

18の娘が言つていゝ科白じゃないだろ・・・

まだ何もやり遂げちゃいねえだろうに・・・」

アシェン「それに籠国を行つたとしても、所詮は時間稼ぎ。

その間に何も対抗策が見つからなければ・・・

ギリアム「・・・だが、お前の策では・・・」

ハーケン「確かに傍から見れば“厚い”ギャンブルじゃない。

だが、やるからにはオールベットでいく・・・！」

それに、男が命を賭ける時は一つしかねえだろ・・・

フニア「（感情や情緒に任せた上での行動か・・・

かつての私なら理解不能だった・・・だが今は・・・）

神夜「・・・そして私もハーケンさんの賭けに乗らせていただく感じで

使者の間からさらつて貰いました」

ラトゥー「でも、それでは・・・」

鞠音「いえ、今思えば艦長の判断は正しかつたといえます。

彼が神夜を連れ出した直後に全てのクロスゲートが暴走を始めたから。」

錫華「神楽天原では満月が昇る前の頃だつたかのう。」

アラド「ギリギリセーフスね。」

ギリアム「そして転移装置を作動させてアイнстの世界に渡つたと言つて貰か・・・」

カイ「だが、そこは連中のテリトリー、

相当の数のアインストがいただろ。」

ハーケン「……いや、その世界にいたアインストは一体だけだった。」

錫華「おかげで分かりやすかつたがのう。」

ラミア「……どういうことだ？」

ハーケン「アシェン……」

アシェン「……艦長、大分疲れまくりでござりますです。

正直言つて、繋げたり切つたりでもうダリイです。

エネルギー維持のため、これよりお<sup>シエスター</sup>寝モードに移行します。」

アラド「（物臭極まりないっス……）」

ハーケン「そんなモードついてないだろ。」

もつとやる気を出せ。

・・・大体さつきから手え抜いてんのは分かつてんだよ。

アシェン「……目敏いですね、艦長。」

ハーケン「……いいからさつととやつてくれ、

このままじや話にならん。」

アシェン「了解、では演算処理能力強化のため、特殊コードを発動します。」

ゼオラ「特殊コード？」

ラミア「おそらくは、コードコードだ。」

アラド「なんスかそれ？」

ラミア「熱暴走によつて一時的に性能を向上させるコードだ。」

実装されているのは私と、私の元になつたアシェンブ・レイデルだけの筈……

神夜「え！？」

ラミア「さんにも付いてるんですか？」

錫華「……アレまであるとは……」

「これは本当に姉妹と言つて良いな・・・」

カイ「・・・?

何故そんな呆れた顔をしているんだ?」

ヘンネ「・・・見ればわかるさ。」

アシエーンは特殊コード『DTD』を発動した。  
頭部シールドと緑色のインナースーツが展開され、周囲には蒸気が立ち込めていた。

アシエーン（DTD）「・・・」

ギリアム「これが『ードDTD・・・』

アラド「うーん・・・

確かに露出度は上がったつスけどそんなに呆れるほじじゃ  
あ・・・」  
アシエーン（DTD）「あーしんどい!メンド臭い!やんなつちやう!  
ハーキゅん、ホント人使いが荒いつたらありやしないよ!」

ラミア「な・・・!?

ゼオラ「なにコレ!?」  
アシエーン（DTD）「ああ?何見てんの!?

ムツツリヒゲにでかメロン!

それに肉まんにエロガキに根暗メガネに紫ワカメ

!」

ゼオラ「に、肉まん!?」

ラトウーニ「(根暗メガネ・・・)」

ラミア「メロンとは私の事か?」

アラド「余計な所まで暴走してるつスね・・・」

ギリアム「・・・

カイ「・・・成程な。

これがさつきのお前達の反応のワケか・・・

・・・頭が痛くなるな・・・

ハーケン「・・・ホント、これさえ無ければな。

おい、アシロン!」

アシロン(DTD)「なに、ハーキュン?

ボク今めちゃんこ機嫌が悪いんだけど?」

ハーケン「機嫌もヘツタクレもないだろうが。

何のために熱暴走モードになつたと思つてゐんだ?」

アシロン(DTD)「わかつてゐつて!

ハーキュンの赤裸々なメモリーをヒードぶちまければいいんだよね

ハーケン「・・・そんなもんぶちまけてみろ、跡形もなく消し飛ばしてやる。」

アシロン(DTD)「じょーだんじょーだん。分かつてゐつて。

そんじやいくよ~

レッヅー・プラグイン!】

アシロンは意氣揚々とモニターに回線を繋げた。

カイ「むづ・・・!?

ハーケン「・・・こいつが、俺達の見た連中の世界さ。」

ギリアム「(我々が知つてゐる)インスト空間とは別物のようだな・

・・・」

アラド「あ、あのデカイ奴つて確か・・・!?

ラトナー「『コードネーム』ヘッド』・・・

AINST・レジセイア・・・

ゼオラ「でも、なんだか様子がおかしい・・・」

アシロン(DTD)「これつてさ、カンペキに化石化しちゃつてるんだよね~。」

ラミア「化石化だと?」

鞠音「おそらく数万年前から活動を停止してゐると思われます。」

ハーケン「だが意識はまだあつたらしく、

『ご丁寧に代理人、いや分身を創つて出迎えて来たのさ。』

ギリアム「それが、お前達がこの世界で会つたAINSTと言ひの訳か。」

ハーケン「俺達が会つてきた中でも異質で、少しだが話す事が出来た。

確かに、ヴァールシャインとか名乗つていた・・・

カイ「AINSTの話か・・・」

神夜「彼は言つていました。

元の世界に帰りたくてゲートを開いた。

でもいくら開いても元の世界には繋がる事は無かつた、と。』

ハーケン「そして数万年が経ち、現在に至つたそうだ。」

ラトウー「では、エンドレス・フロンティアを創つたのは・・・

!？」

ゼオラ「AINSTだつたつて事！？』

ギリアム「その話から察するに、彼もまた、異邦者だつたといふ」とか・・・

カイ「はぐれAINST・・・とでも言つべきか？」

鞠音「帰れなくなつた原因是、未だよく分かつていませんが・・・」

ラミア「（・・・『こちら側』でのAINSTとの戦いが原因とも考えうるな。）」

ハーケン「その後そいつは俺たちに襲い掛かり、見事に返り討ちにあつたわけだが、

最後の力を使つて転移しようとしたのさ。』

アショーン（DTD）「そん時ハーキュンのぶつ放した一発でAINSTは消えちゃって、

そのせいかどうかは知らないけど、

世界があんな風になつちゃつたつてわけ。」

ギリアム「それが先程の混沌とした世界の正体と言つ訳か・・・」

アクションはモニターとの接続を断ち、通常モードに戻った。

ラミア「だが、AINSTが消滅しても世界がこうなつてしまつては・・・」

ラトゥーー「相当の混乱が起きたでしょうね・・・」

カツツエ「あら?」

別にそんなことは無かつたわよ?」

ゼオラ「え・・・!?

リー「まあ、ハツキリ言って少々驚かされました。」

アラド「あ、あんな事になつて感想はそれだけっスか!?!?」

ハーケン「エンドレス・フロンティアは元々が何でもアリな世界、いまさら驚いたつて仕方が無いってことさ。」

リー「とある王様は、自分の国が無くなつてガツカリしておりますがな。」

ヘンネ「それにアタシらのバイタリティ、舐めてもらつちゃ困るね。」

カツツエ「そうそう、意外にしぶといのよ、アタシ達。」

アラド「しぶといつてレベルじゃねえっス・・・!」

エイゼル「だが、そうでないものもいるのは事実だ。」

小規模の戦争もあれば、

肉親と離れ離れになつてしまつたものも少なからずいた。誰もが世界を受け入れられたと言つわけではなかつた・・・

・

カイ「・・・むしろそれが当然だらうな。」

エイゼル「そこで我等フォルミッド・ハイムは、救済プロジェクトの一環として、

新たなクロスゲートの開発を試みた。」

ギリアム「何!?!?」

ハーケン「もつとも、単なる長距離移動用のものではあるがな。」

アラド「それだったら、飛行機とか自動車とかでもいいんぢゃない

んスか？」

ゼオラ「何ももつ一度造らなくとも……！」

リー「こちらの世界ではどうかは解りませんが、

そういうのはハツキリ言つていい選択とはいえませんな。」

「フニア「何故だ？」

現にお前たちは地上戦艦を所持しているではないか？」「アション・エンドレス・フロンティアは元々それほど広いと言つわけでは無かつたので、

そういうった交通手段は発達しやがりませんでした。

我々のように所持しているのは極稀なのです。」

ヘンネ「それにそういうのは盗賊からすれば絶好の力モなのぞ。アタシのような有翼人種もいるし、空だつて同じさね。」

キュオン「海だつて安全とはいえないしね。」

カイ「海・陸・空ともに安全ではないと言う事か。」

ハーケン「そして考え出されたのがクロスゲートと言つ訳さ。アレなら警備もそこに集中すれば良いだけだし、移動時間も殆どかからない。」

それに俺たちには馴染み深いしな。」

ギリアム「だが、オリジナル無き今、開発は困難なのでは？」

エイゼル「……フォルミッド・ヘイムの力だけならばそうであった。

だが苦難の末、各国の協力を得る事に成功したのだ。  
かつての世界ならば、不可能な事であった。」

ゼオラ「新しい世界もまんざら悪い事ばかりじゃないって事ね。」

エイゼル「各国の協力を得て、新型ゲートの開発は飛躍的な速度で進められた。」

そして遂に完成を祝して開通セレモニーを行う事になつた。

それがほんの数時間前の事だ……。」

ハーケン「そして俺達はそのセレモニーの

下準備に呼ばれた訳なのだが……

ギリアム「事故が起きたのだな……」

ハーケン「ああ……」

ゲートが突然暴走し、それに巻き込まれたのさ。」

ラミア「それで、この世界に来てしまったと言う訳だな。」

ヘンネ「だが、ゲートにはまだエネルギーは送られていなかつた。」

キュオン「それに設計段階で次元転移機能は取り除かれていたのに。」

・・・

鞠音「私も開発に関わっていましたし、起動実験に何度も立ち会いましたわ。

次元転移が起つた要素はゼロと書いて良いですわ。」

ラトゥー「では、この世界に辿り着いた理由は一体……？」

アシェン「全く持つて不明ちゃんとございます。」

ギリアム「（可能性としては、彼らが『来た』のではなく『招かれた』と考えれば……）  
・・・だがそうとしても一體誰が……」

### 第3話 過去との再会 その6（後書き）

これでようやく長ったらしごとくホンダレス・フロンティアのありすじが終わりました。

これでようやく話が進められます（＾＾；）

所々説明不足箇所や誤り、それにオリジナルの解釈等が含まれておりますが、あえて説明しなかった部分もあります（ナムカブキヤラとか）ので、ツツノリ等などはその上でお願いします（――）

m

一応、次回で第3話は終了する予定です。

### 第3話 過去との再会 その7

ハーケン「・・・以上が、俺達が話せる事全部だ。」

アシェン「何か分からぬ事があれば、何なりと艦長に聞きやがりませ。」

ハーケン「俺に丸投げにするなよ・・・」

アラド「う～ん・・・」

正直、色々な事がありすぎて何がなんだかサッパリツス。  
カイ「無理も無いな。

俺達にとって、突拍子も無い内容ばかりだったからな。」

錫華「この世界も十分突拍子もないと思うのだがのづ。」

ギリアム「だが、彼らの話が事実だとすると、

彼らは望んでこの世界にやって来たのでは無いと言つ訳

か。

エイゼル「そちらの会話や雰囲気から察するに、

我等のような存在は異端であることは理解している。」

ヘンネ「だからアタシ達としても早急に元の世界に戻りたい訳なんだが・・・」

ゼオラ「残念だけど、

私達の世界にはあなた達が言つクロスゲートは存在していないの・・・」

ハーケン「それは何となく気付いていたさ・・・

だが、次元転移装置はあるんじゃないのか？

システムXN『アギュイエウス』は。」

ラトゥーー「何故そう思つの・・・？」

鞠音「異世界からやつてきた技術は未知の技術である事が多い。

ましてや転移装置、その利用価値は計り知れませんわ。」

アシェン「ですので、シャドウミラーをぶつ潰した後、

ぶん捕つとして研究しているものと考えるのは当然だと

思いますが。」

ギリアム「……残念だが、『アギュイエウス』は破壊した。

俺がこの手でな。」

錫華「なぬ！？」

それはまことか？」

ラミア「私もその場に立ち会いました。

間違いありません。」

アショーン「アレを使えば色々出来てウハウハだと思うのですが。」

ギリアム「『向こう側』で俺はアレで自分がいた本来の世界に帰ろうとした……」

だがその結果、新たな戦禍を招いてしまった。

一度と使われないよつにするにはこいつするしかなかつたのだ……」

エイゼル「全ては……『己』が罪を償い続けんがため……か……」

ギリアム「……」

ハーケン「オーケイ、ミスター・エトランゼ。

アンタの覚悟、伝わったよ……」

神夜「じゃあ、私達帰れないんですか？」

錫華「うむ……これは由々しき事ぞな。」

エンドレス・フロンティアの住人たちは皆一様に黙り込んでしまった。

ラトナー「（……急に静かになつた……）」

ゼオラ「（無理もないわ……だつてもう一度と帰れないかもしないと思えば……）」

アラド「（誰だつて落ち込……）」

リー「うむ……」

なら獣人の私らは山奥にでも住まなければなりませんな。

ハツキリ言つて不満ではありますか。」

カツツヨ「あら?

山奥で一人きりで余生を楽しむのも中々などおもづわ

よ。

ムフフ・・・

ヘンネ「誰も二人きりだと言つていないだろ?が・・・」

エイゼル「カツツヨの話はともかく、

この世界では異形である我も身を隠さねばなるまいな。」

アシェン「私も面倒なので右に同じで。」

錫華「わらわ的には身を隠すなど我慢ならぬな。」

ヘンネ「アタシも今回ばかりは同意見だね。」

キュオン「だつたらそのツノ、引っこ抜かなきや。」

鞠音「あなたもその羽、隠すなり切り落とすなりしたほうがよくてよ?」

錫華「そ、それだけは勘弁して欲しいぞな。」

ヘンネ「アタシも羽も伸ばせない人生なんて真つ平御免さね。」

神夜「でも、キュオンちゃんや博士もちょっと微妙なんじゃないんですか?」

ハーケン「違ひは耳ぐらしのモンだがな。」

鞠音「その程度、髪や帽子等で隠せば問題なさそうですが。」

キュオン「キュオンも同意見~。」

ラミア「・・・これっぽっちも落ち込んでいな~」よひで「それこままです。」

ギリアム「といつより、むしろ前向きだな。」

ゼオラ「どうしてそんなに落ち着いていられるのかしら?・・?」

ハーケン「悪いが、ボンバーガール。」

俺達はこういった状況には慣れっこなのさ、これがな。」

ラトゥー「え・・・!?」

アシヨン「我々の世界では、いついた事態はむしろ日常茶飯事で

すので。」

アラド「で、でもエンドレス・フロンティアじゃないんスよ、ここ  
！？」

錫華「どのような世界であれうとも世界を渡るには

それ相応の危険があるのは同じだと思うがのう？」

ゼオラ「だ、だけどう帰れないかもしないのよー？」

エイゼル「ならばこの世界に住む決意をするまでだ。」

アション「私達、こうこう覚悟は完了しまくつてこるわけです。」

ラトゥー「でも、いつも早く・・・」

ヘンネ「じゃあ、何か？

涙の一つでも流せば良いってのかい？

それで元の世界に帰れるのかい？」

ラトゥー「・・・」

神夜「・・・これでも私達なりに動搖はしているんです。

でも嘆いたり悲しんでばかりいるより前向きに考えるべきだ  
と思つんですね。

それに後ろ向きな事ばかり考えたらお腹が空くだけですから  
」  
ハーケン「確かに事は重大だ、だからといって人生そう悲觀するも  
んじやないのさ。」

錫華「どうせ生きるなら、最後まで楽しんで生きたいしのう。」

キュオン「それに、生きていればいつかは帰れるかもしれないしね

」

カイ「・・・凄まじいバイタリティだな。」

アラド「凄まじい過ぎて呆れるしかないっス・・・」

ラミア「だが、当分は我々の管轄下に置かれる事になるだろつ。」

ハーケン「・・・解つていいさ。」

当分は検疫だの尋問だの調査だので自由には動けないん  
だろ？」

リー「特に私のような獣人はそうでしょうな。」

錫華「それ以前にわらわ達は異邦者であるからな。」

カイ「まあ、な・・・」

エイゼル「我としては身の安全さえ保障してくれれば、出来うる限りの協力をしよう。」

カツツエ「それが帰還への糸口になるかもしれないしねえ。」

ヘンネ「リーダーがそう言つているんだ。」

アタシもそうさせてもらひつよ。」

キュオン「キュオンも賛成。」

鞠音「私はあのロボット達をじつくじと研究できるのであればなんだつて良いですわ。」

ハーケン「・・・とまあ、俺達全員の意思は大体同じだ。」

アシェン「出来れば尊重しやがりませ。」

錫華「それが人にものを頼む態度か、ポンコツよ?」

カイ「そいつは可能な限り善処する。」

一応、この世界にはジュネーヴ条約というものがあつてな。

・  
アシェン(DTD)「愛して<sup>ジユテーム</sup>いる条約?」

カツツエ「もしかして性別の関係なくラブラブオーケイって事?」

なんてステキな世界のかしらん」

ハーケン「話をこれ以上拗らせるな、

ダンディがナイスミドルになつちまうだろ?が、

ラトウニー「(それってどう違うのかしら?・?・?)」

ラミア「ジュネーヴ条約・・・

旧西暦に締結れた捕虜に対する扱いについて定めた条約だ。主に戦争犠牲者を保護し、戦闘不能になつた要員や敵対行為に参加していない個人の保護を目的とするものだ。

ゼオラ「確か、国際人道法の一つでしたよね。」

神夜「わ、解り辛い事極まりないです・・・」

アラド「俺も解んないつス・・・」

ギリアム「要するに我々は君達を保護する立場にあると言つ事さ。」

ハーケン「つまり、妙な人体実験や解剖モロモロは無しつて事か。」

神夜「それなら安心極まりないです。」

エイゼル「……だが、それが必ずしも守られているとは少々言  
いがたいがな。」

エイゼルはラトゥー二達を見てそう思つた。

カイ「とりあえず一旦話はここまでにして少しばかり休憩とする。

後のことは、折り返しこちらから連絡する。」

ハーケン「オーケイ、少佐殿。

俺もさすがに疲れたしな。」

カイ「……わざわざすまなかつたな、ギリアム。」

ギリアム「いえ、礼を言つるのはこちらの方ですよ、少佐。

それでは……」

ギリアムはそう言つと通信を切つた。

ハーケン「俺達はこの部屋で待機、と言つわけか。」

カイ「まあ、な。

拘留室に入れるわけにもいかないしな。

ゆっくり・・・とは言えんが、少しの間休んでくれ。」

ハーケン「ならせめて食料と水ぐらいは出して欲しいな。

腹の虫が鳴りそうな奴が何人かいるんでな。」

カイ「了解した、後で手配しよう。」

ハーケン「わざわざすまないな。」

カイ少佐達は軽く敬礼をした後、部屋を後にした。

エイゼル「……彼等をどう思つ?」

ハーケン「まあ、悪い連中じゃなさそうだ。」

それに俺達を必要以上にどうするつもりもなさそつ

だ。

錫華「わらわ的にはワンパターンな反応ばかりで退屈であつたぞ。」  
神夜「まあまあ、錫華ちゃん。

この世界の人達にとっては私達は奇天烈極まりないみたいで  
すから、

仕方がないよ  
」

錫華 おぬしが言うと不思議と説得力が増すのう・・・」

カツツヨー それよりも帰る手段が無いっていいうのは少しキツイわね  
え。  
-

ヘンネ「無理なものは仕方が無いさね。」

リリ・・・・セセ、これがソレ

の世界で生きていこうとしても、歸る方法を深めにしても清

報は必要ですか。」

神夜 - その前に私は何か食べたいです・・・

アシエン「私も大分小腹が空きまくりで

カツツユ「んじゃとりあえずは食事が来るのを待つといふ事で」

# ハーケン—オーレイ、ハンケリーズ

腹が減つては何事も出来んしな。

カイ「普通取調べってのは」ひちが耐え忍ぶもんじやないんだがな。

ラトウニー「でも、彼等の証言の内容は驚くべきものばかりです。」

ゼオラ「幾つもの世界が重なり合って成り立つ世界……

そこに迷い込んだWシリーズとアインスト……

そして世界の崩壊……」

アラド「……コレ、上にはどんな風に報告すれば良いんスかね……？」

カイ「……彼らの歴史云々は別として、

異世界からやつてきたことは報告せねばならんな。」

ラミニア「……上手い事、もみ消しとか出来ませんでつしゃるうつか？

私のように……」

カイ「彼らを目撃し保護したのが俺達だけならばそれも出来たかも

しれん。

だが、この基地だけでもかなりの人数が彼らを知つてしまつた。

ラミニア「……」

ラトウニー「それに何人かは私達とは姿形が大きく異なります。

あれでは異世界の住人では無いと言い通す方が無理があります。」

アラド「あれは映画の特殊メイクチームも真っ青つスよ……」

カイ「だが、出来うる限りの事はする。

・・・彼らはいわば漂流者だ、

手を差し伸べる事に誰にも文句は言わせんさ。」

ラミニア「……寛大な配慮、ありがと「ゼ」ります、少佐。」

カイ「当然の事だ、気にするな。」

ゼオラ「じゃあ彼らの食事、私が運んでおきますね。」

ラトウニー「……そういえば私達、お昼御飯の途中だつたね。」

アラド「んじや続きと行きますか

オカズまだ残つてたしな~」

「フニア、「あれから数時間は経つてゐる。

既に下げるといふと思つが。」

ラトゥーー「……それにこの時間だと、昼のメニューはもう無いわ。」

アラド「お、俺の昼飯……」

カイ「そういうえばこのゴタゴタで昼飯を抜いていたな……」

ゼオラ「じゃあ、少佐も今から遅めの昼食にしませんか?」

アラド「もう昼のメニューは無いつスけどね……グス……」

カイ「いや、お前達だけで済ませてくれ。」

今回の件を上に報告せねばならんし、それに仕事も溜まつているからな。」

ラミア「いくら訓練された軍人とはいえ、

栄養摂取を怠れば、業務に差し支えまくります。

集中力の低下によつて些細なミスが連発しちやつて

余計に仕事が増えちまつだけです。」

カイ「……いつからお前は俺のカミさんみたいな事を言つよつこなつたんだ?」

「フニア、「せめて人間臭くなつたと言つちやつてくださいまし……」

<??>

? ? ? 「 . . . ハニ . . . は . . . ?」

ハーケン達がカイ少佐達と接触した時とほぼ同時刻に  
もう一つの存在が誰も知らぬ土地に転移してきた。

彼は深く傷ついていた。もはやその体と命を保つことは出来ないだ  
ろ。」

彼はただひたすらに故郷への帰還を望んでいた。

そして最後の力を使い転移を行つた。

だが・・・

？？？「ここは・・・静寂なる・・・世界・・・では・・・な・・・

もはや・・・する力は・・・

我は・・・消え去る・・・の・・・か・・・

・・・い・・や・・・だ・・・」

？？？2「汝、静寂なる・・・世界を望むか?」

？？？」・・・？」

彼が消え去ろうとする直前に何者が現れ、彼に話しかけてきた。それは黄色の髪に白に近い灰色の肌の青年の姿をしていた、だがその目と表情は人のそれではなかつた。

？？？2「私は汝に問う・・・静寂なる世界を望むか?」

？？？」だ・・れ・・だ・・・？」

？？？2「お前と同じ・・・静寂なる世界の・・・」

？？？」我・・・は・・・帰還を・・・静寂なる・・・へ・・・」

？？？」2「その願い・・・叶えられぬ・・・なぜなら・・・」

？？？」3「静寂なる世界・・・滅ぼされた・・・

望まぬ世界の・・・者達によつて・・・」

奥の暗がりからもう1人現れた。

それは金のメッシュが入った黒髪に赤いジャケットを着た青年の姿をしていた、

だが彼も同じく、目と表情は人のそれではない。

？？？」そう・・・か・・・静寂・・の・・は・・・

？？？」3「お前が・・・自らの滅びを・・望むのであれば・・・俺

達は・・何もしない。」

？？？」2「だが・・汝が・・・新たなる・・・

静寂なる世界の・・・創造を望むのであれば・・・

? ? ? 3 「お前が・・・望まぬ世界の・・・破壊を望むのであるな  
らば・・・」

? ? ? 2 & ? ? ? 3 「今一度・・・汝に・・・力を・・・」

? ? ? 2 「・・・でき・・・る・・・の・・・か・・・」

? ? ? 2 「我はエタ・・・新たなる・・・依代を・・・力を・・・」

? ? ? 3 「俺は・・・手に入れた・・・世界を超える・・・力を・・・

・」

? ? ? 「・・・」

? ? ? 2 & ? ? ? 3 「汝に問つ・・・静寂なる世界を望むか?」「

? ? ? 「我・・・は・・・

・・・望む・・・静寂・・・世界・・・の・・・」

? ? ? 2 「ならば唱えよ・・・汝の名を・・・」

? ? ? 3 「・・・俺は『過去』・・・」

? ? ? 2 「・・・我は『現在』・・・」

? ? ? 「・・・我は・・・

・・・『可能性』・・・」

『過去』と『現在』、そして『可能性』・・・導き出されるは『未  
来』

### 第3話　過去との再会　その7（後書き）

前々からの反動のせいか今回は割と短めです。  
どんな世界の住人でも腹は減つては戦は出来ぬといつ事です（^\_^；  
）

そして明確な敵組織がようやく登場しました。  
『向こう側』の彼がいるのは特典ドラマCDの話の延長上だと思つ  
てください。詳しくは後の話で書きます。  
そして依代となつた彼は・・・

## 第4話 彼方からの落とし子 その1

＜北米クロラード テスラ・ライヒ研究所 上空＞

クスハ「・・・！」

やつとテスラ研が見えて来たけど・・・

ブリット「こいつは一体・・・！」

ブリットとクスハの目に飛び込んできたものは、無残にも半壊した研究所の姿だった。

ブリット「・・・壊れ方からして内側からみたいだな・・・  
といつことはやつたのは・・・」

クスハ「龍王機と虎王機・・・」

どうしてこんな事を・・・」

ブリット「・・・それよりも、博士達が心配だが・・・」

クスハ「・・・！」

ブリット君、見て！

あれ、カザハラ博士じゃない？」

ブリット「ふう・・・

一応、無事みたいでほつとしたよ・・・

クスハが飛行機の窓から指を指した先には出迎えてきたカザハラ博士がいた。

＜テスラ・ライヒ研究所 管制室＞

カザハラ「ブリットにクスハ君、久方ぶりだな。」

クスハ「こちらこそ、カザハラ博士。

すこしく心配しましたよ。

まさか研究所があんな風になつてゐるなんて・・・

ブリット「やつたのはやはり・・・」

エリ「そう、龍王機と虎王機よ。」

リシュウ「えらく暴れてな。」

研究所はこの様な有様じやが、職員は全員無事じや。」

ブリット「リシュウ師匠！」

クスハ「あの・・・お怪我は？」

リシュウ「ご覧の通り無傷じや。」

伊達に修行は積んでおらんて。

じゃがいきなり連中が目の前で暴れだした時には少々寿命が縮んだわい。」

ソフィア「・・・ええ。」

あの時は逃げるのが精一杯でしたから。」

クスハ「でも、どうして彼らはそんな事を・・・」

エリ「・・・これは推測だけど、彼らは貴方達を迎えて行こうとしたのだと思うの。」

ブリット「俺達を・・・!？」

カザハラ「・・・彼らが向かおうとしていた方向は西、

つまり、君達がいる基地の方角だ。」

ソフィア「でも彼らは突然その行動を中断したの。」

その時刻は貴方達が日本を離れたときの時刻とほぼ一致するわ。」

ブリット「彼らが辞めたのは、迎えに行く必要が無くなつたのを知つたからですね・・・」

クスハ「・・・！」

そういえば、フイリオ少佐達がいませんが……  
まさか……！」

カザハラ「いや、彼らは仕事で他所の基地に出張っているよ。  
むしろこっちが心配されたぐらいだ。」

ブリット「……不幸中の幸いでしたね。」

クスハ「でも研究所が……」

リシュウ「心配せんでもええ。」

壊された施設は使えるが、幸いデータは無事じゅったのでな。」

エリ「それに彼らのおかげで、復旧作業は順調よ。」

ブリット「彼ら？」

ブリット達が会話している途中に、誰かが部屋に入ってきた。

ジョッシュ「エリ博士、超機人の格納庫収容、終わりました。  
リム「仮設ラボの設置もほぼ完了です。」

入ってきたのは二人の男女、若いながらもどことなく老成した雰囲  
気を持つ青年と、  
快活でまだ幼さが残る印象を持つ女性だ。

エリ「二人とも、お疲れ様。」

ジョッシュ「……いえ。」

これからガレキの撤去作業の方を済ませますので、失  
礼します。

どうもお取り込み中のようですので。」

カザハラ「いや、構わんよ。」

少し休んでいったらどうだい？」

リム「じゃあ、わたし飲み物でも持ってきますね！」

カザハラ「……！」

エリ「・・・・・」

ソフィア「・・・・・」

彼女が『飲み物』と口にした瞬間、博士達の空気が一変した。だが、ブリットはこの雰囲気を知っていた。

クスハ「（どうしたのかしら、みなさん？）」「  
ブリット「（なんか・・・似ているな・・・）

クスハのアレと・・・）」

リショウ「じ、嬢ちゃん、儂は甘いものは嫌いじゃないんだが・・・  
その・・・」

ジョッショ「・・・リム、お前はここで休んでいろ。

飲み物ぐらしオレが持ってきてやるからや。」「  
リム「じゃあ、わたし、ロロアで！」

ジョッショ「他の方はいつものようじいとして、そちらののむー  
人は？」

カザハラ「ああ。彼らにはコーヒーをお願いするよ。」「

ジョッショ「解りました。では。」

青年はそう言つと部屋を出て給仕室の方へ向かつた。

ブリット「・・・なんだか、随分とマジメそうな人ですね。」「

リショウ「ふむ。

随分と気配りの利く若者でな、儂らもいろいろと助かつ  
とるよ。」

クスハ「見かけない顔ですが、新しいスタッフの方ですか？  
一人ともお若いようですが。」

カザハラ「ああ、そうか。

そういえば、一人にはまだ紹介していなかつたな。

エリ博士からの紹介でね、もう一月になるかな。」

クスハ「エリ博士の……といふ」とは考古学の?

お若いのに凄いんですね。」

リム「い、いえ、そんなんじゃ。

私達のお父さんがエリ博士の知り合いつてだけですかから。考古学とかはあまり……」

カザハラ「いやいや、君達もなかなか良い筋をしていろ。

あの教授の子ども達という事はあるよ。」

リム「えへへ……

わたしは養子何ですけどね。」

ブリット「博士はご存知なんですか、彼らの父親を?」

カザハラ「ああ、ラドクリフ教授と言えば、私達の間では割と有名人だ。

「ここ数年は行方不明と聞いていたがな……

クスハ「え……?」

ジョッショウ「……お待たせしました。」

先程の青年が8人分のコップを持って部屋に戻ってきた。まだ数分も経っていないと言つのに。

ブリット「（ち、ちょっと速すぎないか……!?)」「ジョッショウ「すいません。」

流石に8人分となると時間がかかりまして。」

クスハ「（じ、十分速過ぎるとおもうんですけど……!?)」

リム「お兄ちゃん、ココアちゃんと濃い目にしてくれた?」

ジョッショウ「そう焦らすなよ。」

俺達よりも、お密さんや博士達の方が先だろ?」

青年はそつと全員に飲み物を配り始めた。  
手際がよく、一分の無駄のない動きだった。

カザハラ「では、飲み物も行き渡つたところで改めて紹介しよう。

彼がジョシュア君、彼女がクリアーナ君だ。」

ジョッシュュ「ジョシュア・ラドクリフです。

ジョシュアで結構です。」

リム「わたしはクリス・・・

じゃなくて、クリアーナ・リムスカヤです。  
よろしくお願ひします。」

ブリット「俺はブルックリン・ラックファイールド。

ブリットでいいよ。」

クスハ「私はクスハ、クスハ・ミズハです。」

リム「話はエリ博士達から聞いています。

伝説の超機人に選ばれた運命の人達・・・  
わたし、ちょっと憧れちゃいますね。」

ブリット「い、いや、別にそんな・・・」

ジョッシュュ「・・・頼むから、下手な事は言つなよ。

二人とも連邦軍の将校さんなのだからな。」

クスハ「そんな気を遣わなくてもいいですよ。

齡も近いですし、それに私、そういうの慣れてません

から。」

ジョッシュュ「・・・まあ。

そちらがよろしければ・・・」

ブリット「そういうえばさつき、養子つて言つてましたけど、やはり・・・

ジョッシュュ「ええ。

リムは孤児で、小さい頃俺の親父に引き取られたんで

すよ。」

リム「でもお兄ちゃんもわたしも別に気にしていないから、  
変な気遣いはなしつて事で。」

カザハラ「まあ、私はラドクリフ教授に子どもがいたことすら知ら  
なかつたわけだがな。」

ジョッシュ「親父はそういう事は人に話さない奴でしたから……」  
ブリット「……あの、ジョシュアさんのお父さんって科学者なんですか？」

カザハラ博士が言うには有名人だそうです。」

ジョッシュ「……有名……か……」

確かに親父達はある意味ではそう言えますね。」

カザハラ「……気を悪くしたのなら謝るよ。」

別にリ・テクを批判するつもりでいったわけじゃないんだ。」

ジョッシュ「別に構いませんよ。」

親父達はそういう連中ですから。」

リム「（お兄ちゃん……）」

クスハ「あの……」

リ・テクってなんなんですか？」

「どうも話が見えてこなくて……」

リム「……エリ博士達が、超機人のようなオーパーツや

EOTのような超技術を研究する科学者ということは知っていますよね？」

クスハ「ええ、それはもちろん。」

ジョッシュ「その中でもリ・テク……」

リ・テクノロジストと呼ばれるグループは異端中の異端なんです。」

同じ学者連中からも白い目で見られているぐらいです

から。」

ブリット「なぜ、そのような……？」

エリ「彼らが研究しているのは南極遺跡と呼ばれている施設だからよ。」

ブリッド「な、南極遺跡……？」

クスハ「南極にそんなものがあるなんて……！」

エリ「……発見された場所は分厚い氷床の遙か下、軽く見積もつ

ても

遺跡が造られたのは3000万年前になるわ。」

ブリット「3000万年前つて・・・人類の誕生は500万年前じゃないですか！？」

ソフィア「詳しく言えば、我々の直系の先祖の出現は5万年前よ。

それ以前の人類が文明を持った痕跡は見つかっていないわ。」

ブリット「だつたらなおさら凄い事じゃないですか！」

人類誕生以前に文明が存在していた事になるのでは・・・！？」

クスハ「もしかしたらその遺跡、異星人のものなんじゃ・・・！？」

カザハラ「そういう発言は當時でもあつたさ、だがその確証は得られていない。

・・・それにもう正式には調査は行われていないのだからな。」

ブリット「（当時・・・？）」

クスハ「ですが・・・そんな大事件、知らない方がおかしくないですか？」

ブリット「まさか・・・メテオ3のような情報規制が・・・！？」

カザハラ「いや・・・発見そのものは世界中で話題になつたさ。

ニュースのトップに挙げられた時は私も心が震えたもんさ。」

クスハ「ならどうして？」

ジョッショ「・・・ただ単に忘れられて久しいだけですよ。」

ブリット「忘れられている・・・？」

エリ「・・・南極遺跡は、メテオ3落下以前の遙か以前、

今から30年程前に発見されたの。」

クスハ「そんな昔に・・・！？」

エリ「発見された当時は世紀の大発見と称され、世間を騒がせたわ。

私が所属しているL.T.R機構も、そのときに発足した組織が

原型なの。」

クスハ「でも、そんなに凄い遺跡がどうして世間に知られていないんですか？」

カザハラ「遺跡はその古さにも関わらず、歴史的な発見も得られなればかりか、

「解析不能のシロモノばかりだったからさ。」

エリ「おまけに調査は難航を極めるどころか、、

「当時、他の場所でそれ以上の未知の技術は得ることが出来なかつたため、

「長い間、南極遺跡は政府の頭痛の種とされていたわ。」

ソフィア「・・・だけど、その種も吹き飛ばされる事になったの、

「十数年後メテオ3が落下してきた事によつて。」

クスハ「余計に増えそうなものだと思うんですが・・・？」

カザハラ「いや。

「メテオ3の方が南極遺跡より遙かに解析しやすく応用が利く事が分かつたとたんに、

「連邦政府は遅延していた遺跡の調査を一方的に打ち切つた。」

「以降はメテオ3解析に力を入れる事にしたのさ。」

リシュウ「それに人の噂は所詮一過性のものじや。」

「誰が造ったのかも分からんようなもの、

「いつまでも人の関心を集め続けられる筈もなかろうて。」

カザハラ「こうして南極遺跡は人々の記憶から忘れられていったと言ふ訳さ。」

ブリット「なんだか、散々な話ですね・・・」

ジョッシュ「にも関わらず、未だにあきらめずに研究し続けているのが

「親父達、リ・テクノロジストというわけです。」

エリ「でも、LTR機構も完全に遺跡から手を引いたわけじゃないの、

数年に一度彼らとの接触して情報を得ているわ。

私も何度かその場に立ち会つたことがあるわ。」

リム「お父さんがエリ博士と知り合つたのはその時だつたと聞いています。」

エリ「成果はお世辞にもいいものだつたとはいえませんが・・・」  
クスハ「でも、そんな得体の知れない遺跡を何十年も研究し続けるなんて・・・」

ジョッシュュ「他の事に無関心なだけです。」

現に近くにエアロゲイターが来た時だつて

誰一人遺跡から離れようとはしませんでしたから。」

ブリット「（例の南極事件の時か・・・）」

カザハラ「だが、彼らとて、無駄に年月を過ごしてきた訳では無い事が

ジョシュア君とクリアーナ君が持ち込んで来た物で知ることが出来た。」

ジョッシュュ「・・・よしてください。」

あんなものを造れたところで、今更・・・」

エリ「いえ、謙遜する事はないわ。」

ある意味ではあなた達は我々より数段上を行つてゐるかもしないのよ。」

リム「そうだよ、お兄ちゃん。」

こうじう時はもつと自信を持つていいんだから。」

ジョッシュュ「（だが・・・お前は・・・）」

ブリット「・・・一体何を持つてきんですか？」

カザハラ「・・・ジョシュア君、『ガナドウール』は今どこに？」

ジョッシュュ「直ぐに撤去作業に入れるよう、ガレキの近くで待機させていますが。」

カザハラ「では、こうじよう。」

『ガナドウール』を格納庫に移動させて解析を先に済ませよう。」

せよう。

撤去作業はその後で良い。」

リム「だけど、超機人の解析もあるんじゃ……？」

エリ「それは構わないわ。

どうせやるなら、一度にやつたほうがいいとしても都合が良いわ。」

ジョッシュ「……分かりました。

では、先に行つておきますね。」

カザハラ「ああ、よろしく頼むよ。」

ジョシュアは部屋を後にして、『ガナドウール』の方へ向かった。

クスハ「あの、『ガナドウール』って……？」

それが、ジョシュアさん達が持つてきたものなんですか……？」

ソフィア「正確に言えば『乗つてきたもの』といつたほうが正しいかしら。」

ブリット「乗つてきた……？」

まさか……超機人の類……！？」

カザハラ「……まあ、見れば分かるさ。」

我々も格納庫の方へ向かうとしよう。」

カザハラ博士とブリット達は龍虎王とまだ見ぬ『ガナドウール』が待つ格納庫の方へ向かった。

## 第4話 彼方からの落とし子 その1（後書き）

やつとりで出来ました（汗）

ハツキリ言つて今まで一番苦労した話かもしけません（<^>・）  
『D』からジョッショウとリムが登場です、ストーリー的には南極に行く前の話です。

正直、D主人公達のキャラを殆ど忘れていたので、『D』をプレイしながら書きました。

某萌えスレの影響があるかもしれません、その辺はツッコんでくれて構いません（爆）

OG3は据え置きが無理でも声付きにして欲しいですよね。ジョッショウは野島健児さんでリムは桑島法子さんで・・・  
妄想が止まらないなのでこの辺で失礼します m（— —）m

## 第4話 彼方からの落とし子 その2

<テスラ・ライヒ研究所 格納庫>

クスハ「これが・・・ジョシュアさん達が乗つて来たって言うガナドウールですか？」

リム「はい。そうです。」

ブリット「人型機動兵器・・・

大きさはP.Tと同じくらいか・・・？

でもこの意匠・・・超機人とはまるで違いますね。」

ジョッショ「実際その通りです。

こいつは、超機人のように発掘されたものではありません。

造られたのは僕最近です。」

カザハラ「サイズ的にはP.Tと同じだが、高出力で、内臓武器を多数装備している。

どちらかと言えば特機に近い。」

ブリット「ならこいつは、遺跡を解析してそれを元に作られた兵器なのですか？」

リシュウ「当たらずとも遠からずといったところじゃのう。」

ブリット「??」

リム「・・・確かに武装は奇抜なものが多いけど、それらは全て開発者の独自設計なんです。」

クスハ「開発者？」

ジョッショ「名前はクリフォード・ガイギヤクス。」

親父とは旧知の仲で、オレ達にとつては兄貴みたいなもんです。」

カザハラ「もつとも、少々性格に難がある人物だそうだが。」

リム「悪い人じゃないんですけどね・・・」

クスハ「・・・当たらずとも遠からず・・・」

では、解析された技術は他の部分にあるんですか?」

リシュウ「ふむ。それが正解じゃ。」

リム「使われているのはインターフェイスとジェネレーターなんですよ。」

ジョッショウ「インターフェイスは『シウンパーティア』、

ジェネレーターは『レース・アルカーナ』と呼んでいます。」

ブリット「もしかして、超機人の五行器のようなものですか?」

エリ「似て非なるもの・・・というのが現段階での推測よ。」

クスハ「推測・・・ですか・・・?」

カザハラ「『レース・アルカーナ』はジョシュア君が

ガナドールに搭乗する事で始めて起動することが出来

る。

エネルギー効率から見て、

五行器のような永久機関といつても差し支えないものだ。

「ブリット「そのあたりは龍虎王と似ていますね。」

エリ「でも、ジョシュア君はあなた達のような念動力者では無いし、『レース・アルカーナ』がどこから無尽蔵ともいえるエネルギーを得ているのかも、

そもそもどの様なメカニズムなのかも分かつていないの。」

カザハラ「・・・『レース・アルカーナ』とはラテン語で謎、そして神秘。」

その名の通りブラックボックスと言つ事さ。」

ジョッショウ「実際、リ・テクの連中もそれ以上の解析は出来ませんでした。」

とりあえず、ジェネレーターとインターフェイスの代わりになる事は

分かったから、組み込んで動かしているだけなんです。

「ブリット「ち、ちょっと待つてください。」

「そんな謎だらけのシステム、危険性はないんですか！？」  
ジョッシュ「使ってみなければ、危険性の有無なんて分かりませんよ。」

「…オレがそのことを知ったのは今から半年前、ガナドウールに乗つて一年ぐらい乗り続けた後ですがね。」

クスハ「…じ、じゃあ、ジョシュアさんは実験台つて事なんですか！？」

リム「それがきつかけで、お兄ちゃんはわたしを連れていり・テクから出て行つたんです。」

ジョッシュ「…オレだつて人が乗らなきゃ

動かないシステムの実験台にされたと知れば、親父達とこれ以上一緒にいる訳にはいかなかつた…」

「クスハ「（ジョシュアさん…）」

ブリット「…そもそも、どうしてジョシュアさんはガナドウールに乗つたんですか？」

ジョッシュ「…まだガキだったからですよ。」

ブリット「え…？」

リム「ごく稀にですが、

遺跡を襲いに武装したカルト集団が攻めてくる事があつたんですね。」

それにエアロゲイターがやつてきた事もありましたし…」

クスハ「じゃあ、ジョシュアさんは皆を守るために…」

ジョッシュ「…当時はそいつらを撃退出来るつて、喜んで乗りましたよ。」

「親父達を守れるつてのもありましたし、

「こいつを造った親父達を尊敬していました。

真実を知るまでは……」

クスハ「ジョシュアさん……」

ジョッショ「……それに、オレが出て行つた理由はもう一つあるんです。」

カザハラ「……クリアーナ君か?」

ジョッショ「ええ……」

ブリット「どうごうことですか?」

ソフィア「……それだけが理由なら

クリアーナさんまで連れ出してまでいく理由としては薄いからよ。」

リシュウ「実験台がおぬしのみなばの。」

クスハ「もしかして……クリアーナさんも……」

ジョッショ「……『レース・アルカーナ』の原型は

オレ達が子どもの頃に既に完成していました。

そして、そいつを起動させたことが出来たのはオレと、妹のリムだけだったんです。」

ブリット「な、何だつて……!？」

リム「造られた『レース・アルカーナ』は全部で、4つ。

2つがお兄ちゃん、もう2つはわたしに反応したんです。」

ジョッショ「そしてそれらは全て、ガナドールのように

機動兵器のジェネレーターとして組み込まれました。」

ブリット「アレと同じものが、あと3体もあるのか……」

クスハ「じゃあ、ジョシュアさんは妹さんのために……」

ジョッショ「ええ……

オレ達が『レース・アルカーナ』と繋がり続けている限り、

今後どのような影響が出るか分かりませんからね。」

ブリット「だつたら!」

そいつを破壊すれば……」

ソフィア「・・・それはむしろ危険よ。」

ブリット「何故です！？」

エリ「『レース・アルカーナ』と彼が何らかのリンクをしているのであれば、

破壊や強制的な切断は命に関わるかもしないからよ。

(そう、特にクリアーナさんは・・・)」

カザハラ「だからこそ、ここでガナドールを解析し、

彼らとのリンクを安全に断ち切る方法を見つけ出す必要があるんだ。

もつとも、事は簡単には行きそうにはないがな。」

クスハ「悲しいですね・・・

信じてた人達に・・・それも自分のお父さんに裏切られてたなんて・・・」

リム「・・・そんなに気にしないで下さい。

これはわたし達の問題なんですか。」

ジヨッショ「それに今はガナドールの解析よりも超機人の方が先です。

オレ達の方は時間がかかりますから。

そのために、お2人は来たのでしょうか?」

クスハ「ええ・・・

それは、そうですが・・・」

ブリット「・・・

虎王機達は、静かにしているようですね・・・

ブリットとクスハはガナドールの隣の虎王機と龍王機の方に目を向けた。

2体はまるで眠っているかのようにピクリとも動こうとはしなかつた。

数時間前の騒ぎが嘘のようになつた。

エリ「・・・妙ね。

2人がこれほど近くにいるのに、まるで反応しないなんて・・・

・

ソフィア「データは休眠時と全く同じ・・・  
2人を求めていたのなら、覚醒状態に至つてもおかしく

ないはずよ。」

カザハラ「2人と話す準備をしているのか・・・？」

それとも・・・」

エリ「・・・とりあえず、このままでは話にならないわ。

2人とも、準備して。」

クスハ＆ブリット「はい・・・！」

2人はT-Linkシステムを起動させ、龍王機達と話す準備をした。

龍王機と虎王機はそれぞれが独立した意思を持つている。  
だが彼らは人間のように話すことは出来ない。

そこで修復の際に取り込んだグレンガスト参式のT-Linkシステムを介して、

搭乗者、つまりクスハとブリットと意思を疎通するのだ。

<超機人 意識下>

クスハ「教えて・・・龍王機。」

「どうして、私達を呼んだの・・・？」

龍王機「・・・」

ブリット「・・・虎王機・・・また妖機人が来るのか・・・？」

虎王機「・・・」

ブリット「（なんだ？・・・眠っているのか・・・）

違う・・・話そうとしないだけ・・・？」

クスハ「お願い・・・龍王機、虎王機。

私達を呼んだのは・・・あなた達が目覚めたのは・・・人を、世界を、百邪から守るためなんでしょう？」

龍王機「・・・」

ブリット「（・・・！？）

何だ・・・？

この思念・・・今までのものとは違う・・・）

クスハ「（冷たくて・・・暗くて・・・寒い・・・）

「これは・・・」

虎王機「・・・心せよ・・・」

ブリット「・・・？」

龍王機「・・・無間の底より・・・湿婆の王が降臨せしめん。三千界を滅ぼさんがために・・・」

クスハ「湿婆の王・・・？」

龍王機「汝らを、人界を守護するのが吾らの使命。だが・・・吾らの力、湿婆の王に遠く及ばぬ・・・」

虎王機「故に・・・今一度汝らに・・・」

ウウウ・・・」

龍王機「オオオ・・・」

クスハ＆ブリット「・・・！？」

<テスラ・ライヒ研究所 格納庫 仮設ラボ>

ブリット「ぐあああつ！？」

クスハ「ああああつ！？」

ソフィア「心拍数上昇・・・！」

それにこの脳波パターンは・・・？」

エリ「いけない！」

「のままでは一人は・・・！」

カザハラ「システム強制解除だ！」

急げ！！」

博士達は2人の急激な変化に驚き、システムを強制的に解除した。クスハとブリットは意識を失い、医務室へ担ぎ込まれた。

2人はあきらかに意識を失つていながらも、

まるで何かに怯える様に体を震わせ呻き声を上げ続けていた。

・・・そして、2人が意識を失つて数時間が経過しようとしていた。

〈テスラ・ライヒ研究所 医務室〉

リム「・・・あの、クスハさん達、大丈夫でしょうか・・・？」

ジョッショウ「見たところ、大分落ち着いてきたように見えますが・・・」

ソフィア「・・・彼らのバイタルは正常値に近づきつつあるけど、まだ安心はできないわ。」

リム「そうですか・・・」

ジョッショウ「・・・強制的にシステムを解除したのが原因でどうか？」

リシュウ「いや。

原因は超機人達じゃな。」

ジョッショウ「・・・？」

カザハラ「・・・彼らの症状は、念の逆流が起きた際における身体への影響と同じだが、

「ここまで酷い症状が出たのは初めてだ。」

エリ「おそらく、龍王機と虎王機が2人に對して

これまでにない極めて強力な念を送つたのだと推測されます。

「

ジョッショ「では、あの2体が静かにしているのにも何かしらの関係が?」

エリ「その可能性は高いでしょうね・・・」

龍王機と虎王機は格納庫で休眠に入っていた。  
外からのあらゆる刺激に一切反応しないその状態はまるで石像の様であつた。

だがその姿は何かを待つていてるかのよつにも見えた。

リム「どうして、龍王機と虎王機はそんな事を・・・?」

カザハラ「・・・理由は分からんが、2人が龍王機達からなんらかのメッセージを受け取ったのはまず間違いないだろう。」

ジョッショ「それを聞き出すのは難しいようですが・・・」

誰もが暗い表情を隠せなかつた。

未だに意識不明の2人、物言わぬ超機人達、  
謎は深まるばかりである。

先行きにこうも暗雲が立ち込めれば、誰だつてそうなるだろう。

・・・だが、その空気を裂くかのように、爆音が鳴り響いた。

その衝撃は研究所全体を揺らし、建物の倒壊を進行させるほどだつた。

そして、衝撃と爆音は鳴り続けた。

リム「きやああ!!--」

ジョッショ「・・・何だ一体!?」

連邦一般兵『力、カザハラ所長!』

こちら管制室!

げ、現在連邦軍所属のPT部隊から襲撃を受けていま

す!』

カザハラ「れ、連邦だと!?」

リシュウ「そんな馬鹿な冗談があつてたまるかい!」

連邦一般兵『ほ、本当です!見間違えるはずはありません!』

あれは、ウチの基地の・・・』

ジョッショ「・・・!?

管制室!管制室!…』

カザハラ「くつ!

『のままでは状況も分からん・・・!』

ジョッショ「・・・リム、お前は博士達とこにいり。

『こなら多少は頑丈な造りになつてゐるはずだ。』

リム「お、お兄ちゃん!?」

ジョッショ「オレだつて通信機の操作ぐらいはできる。

・・・オレが戻つてくるまで、博士達と待つていてくれ。』

リム「で、でも・・・」

カザハラ「おつと待つた。

私達も付いて行かせてもらひよ。』

ジョッショ「・・・!?

しかしカザハラ博士、管制室の状況は不明です。  
最悪の場合を考えて行動すべきです。』

エリ「だからこそ、よ。』

ジョッショ「え・・・!?

リシュウ「聞いておらんかつたかの?』

この研究所、以前インスペクターに乗つ取られた事が  
つてQ、

それに比べればこの程度屁でもない。』

ソフィア「それに私達、こうみえて結構タフなのよ。』

ジョッショ「・・・分かりました。』

だけどリム、お前はここで2人の様子を見てやつてくれ

れ、

流石に誰もいないのはまずいからな。」

リム「うん・・・」

カザハラ「では、決まりだな。」

ジョッシュ「急ぎましょう・・・!」

<テスラ・ライビ研究所 管制塔>

リシュウ「こりゃまた酷い有様じやのう。」

エリ「半分は消し飛んでるわね・・・

・・・でもまだ使えるわ!」

ジョッシュ「・・・博士!」

まだ通信装置は生きています。」

カザハラ「近くの基地に至急連絡を・・・!」

それと通信回線をオープンチャンネルで開いてくれ!

あと、敵P.T.のデータ照合を急げ!」

ソフィア「了解です・・・!」

ジョシュアと博士達は持ち前の手際のよさでそれぞれの仕事を始めた。

見た目のダメージは酷かったが、

幸いにも内部の損傷は軽微だったため、作業は直ぐに終わった。

エリ「カザハラ博士、通信回線の準備終わりました!」

カザハラ「よし、では繋げてくれ。」

エリ博士はすぐさま回線を繋げた。

カザハラ「……」ちらはテスラ・ライヒ研究所所長のジョナサン・カザハラだ。

諸君らの所属と目的を明らかにして欲しい。」

その呼びかけに応じてか、PT部隊は破壊活動をやめ、カザハラ博士の言葉に耳を貸した。

？？？』・・・』

カザハラ「諸君らの目的がこの基地の制圧なら、これ以上の破壊行為は無意味だ。」

現に先程の攻撃でデータが大量に失われた。

「これ以上攻撃を続ければ君達が手にできるものは何もないぞ。」

？？？』・・・』

カザハラ「（何の反応もない）・・・

「ただ単に黙りこくつてるだけか・・・？」

ソフィア「・・・照合しました！」

「い、これは・・・！」

カザハラ「どうかしたのか！？」

ソフィア「は、はい。」

彼らは「ロロドスプリングスのエント基地所属のPT部隊・・・

正真正銘の連邦軍です！」

エリ「エント基地つて、すぐ近くの基地でしょ・・・？」

確かに、ここに駐在している連邦兵もその所属・・・

リシュウ「なら、なおさら腑に落ちんな。」

連中、儂らとは何度も出合つておるが、どのような事をするそぶりなど・・・」

カザハラ「ジョシュア君、至急エント基地に！」

ジョッショ「駄目です博士・・・！」

先程から何度も試していますが、ビジとも繋がりません！

なにかしらのジャミングがされているとしか・・・・・・」  
リシュウ「なんじゃと・・・？」

ジョシュア達に新たな疑問が浮き上がったのも束の間、無言のPT部隊は再び基地の破壊活動を始めた。テスラ研究所は軍事基地よりは劣るが高い耐久性を持っている、だが、そういうつまでも長くはもたない。

エリ「ああ・・・・！」

カザハラ「（くつ・・・・万事休すか・・・・！？）」

ジョシュア「・・・・カザハラ博士、オレのガナドールでしたらいつでもいけます。」

カザハラ「何つ・・・・！？」

ジョッショ「オレが連中の目を引き付け、研究所から引き離す事ができれば、

これ以上の被害を受ける事はありません。」

リシュウ「確かにアレは目立つがのう・・・・」

エリ「だけど相手は訓練された軍人、あなたもそれなりの腕を持つてはいるけど、

そう長くは持たないわ。」

ジョッショ「ここで黙っているよりはマシです。

それにここで死んだら元も子もありませんから。」

カザハラ「他に選択肢は無いようだな・・・・」

リシュウ「・・・・じゃが、数はそう多くは無いとはいえ、

一筋縄ではいかぬ相手じゃぞ・・・？」

ジョッショ「それは百も承知です。ですが・・・・」

ソフィア「・・・・？」

ジョッシュ「分の悪い賭けをするつもりはありません・・・！」

ジョシュアはそう言つと、格納庫の方へ走つて行つた。

## 第4話 彼方からの落とし子 その2（後書き）

ハツキリ言つて急展開極まりないですな（へへ；）  
伏線もバリバリ張つてますし（汗）

その割には文章がうまく纏まらないのがくやしいですorz  
次回はバトル一色&更なる急展開の予定です。  
でもこれ以上やると流石に詰め込みすぎかなあ・・・？

## 第4話 彼方からの落とし子 その3

ジョッショ「『レース・アルカーナ』出力安定、武装プロテクト解除、

『シウンパティア』正常に作動……  
行くぞ！ガナドウール！』

掛け声とともにガナドウールは起動した。

？？？「任務……守護者のしもべを……」

？？？「世界の……新生を……」

ジョッショ「……？」

ジョシュアは通信装置を管制塔に繋げた。

ジョッショ『……博士、聞こえますか？』

カザハラ『ああ、この距離なら通信に支障はないそうだ。』

ジョッショ『それよりも、連中の通信を傍受したのですが……』

エリ『ええ、それはこちらでも確認したわ。』

ソフィア『……どうやら彼らは何かしらのコントロールを受けているようですね。』

リショウ『守護者のしもべ……』

連中の狙いは超機人か。』

エリ『それにあの物言いは……』

まさか・・・！？』

ジョッショ『……来ます……！』

PT部隊はガナドウールに目掛けて突起してきた。

？？？『障害は・・・破壊・・・』

？？？『静寂なる・・・ために・・・』

ジョッショ「・・・どうやらこちらの手に乗つてくれるようだな。

だがこの戦力差・・・そしてこの状況・・・』

ジョシュアの思惑通りに彼らの注意を引きつける事は出来るようだ。だが相手は量産型ヒュッケバイン Mk-IIが5機、何機かは研究所から離す事が出来ても

残りが研究所を破壊してしまうのは目に見えている。

それに彼らが何かしらの洗脳を受けているのであれば、撃墜するわけにもいかない。

第一、ここで機体が爆発すれば研究所に被害が及ぶ。

ジョッショ「・・・研究所を守り、かつ彼らの破壊活動を停止させるには・・・！」

？？？「・・・！」

ヒュッケバインのフォトン・ライフルの銃撃が容赦なくガナドールを襲う。

だがガナドールは避けなかつた、いや避ける事は出来なかつた。ガナドールの前方投影面積はヒュッケバインよりも広いが避けようと思えば避けられる。

しかしここで避けてしまつては研究所に被害が及ぶ。

故にガナドールは研究所の被害を最小限にするために

敵の攻撃を受け続けなければならない。

特機に近いガナドールの装甲は小型とはいえたより厚い。

ライフルの銃撃ごときでは墜ちはしないが、立て続けに受ければそう長くは持たない。

ジョッショ「くつ・・・！」

流石は制式採用機だな、だが・・・！  
フイガ、照準固定、モードアクティブ・・・  
射出！」

銃撃の最中、ガナドゥールは特殊自律兵器フイガを敵にめがけて発射した。

？？？「回避・・・」

だが、それはあっけなく避けられた。

フイガの攻撃モーションはスラッシュ・リッパーに近いものがある。

スラッシュ・リッパーはG系に広く装備された事もあるポピュラーな兵器だ、

それ故にそれに対する回避パターンはあって当然である。だが両者には決定的な差がある。

？？？「攻撃再か・・・！」

攻撃を再開する直前に、後方から何かが深々と突き刺さった。

先程大きく外れたはずのフイガがヒュッケバインの動力バイパスを貫いたのだ。

フイガはスラッシュ・リッパーと違い、

高性能の自動追尾機能と遠隔操作機能が備わっている。

数こそは少ないものの、R-3のストライクシールドと同じ様な事が可能である。

ヒュッケバインは力尽きたように前のめりに倒れた。

動力部を狙うだけならば簡単ではある。

しかしそうすれば機体は爆散し一次被害が出てしまう。

そこでジョシュアは動力バイパスに狙いを定めたのだ。

例え出力を最大にしてもバイパスが切断されてしまえばPTは動けなくなるからだ。

並大抵の腕ではそんなことは不可能である。だがジョシュアはそうではない。

ジョッシュュ「・・・まずは一つ！」

？？？「パターン・・・変更・・・」

ヒュッケバインの動きが変わった。

闇雲に突起するのではなく、連携で攻めて来るようだ。

ジョッシュュ「フォーメーションか・・・

させむか！」

ジョシュアは連携を組まれる前に崩そうと突起してきた。だがそれは研究所の守りをがら空きにする事になる。しかしじョシュアはそれを承知で突っ込んできた。

ジョシュア「出力調整・・・

ジェノサイドクロー、セット・・・！  
フィガ、リアクティブ・・・！」

ジョシュアはガナドウールの盾に内蔵されている光学式非実体剣ジェノサイドクローを起動させ最も近いPTに向けて突起した。しかしこの戦術はあまり賢いとは言いがたい。

闇雲に突っ込む事は避けられるばかりか、カウンターを取られる場合が多いからだ。

こういった戦術はアルトアイゼンのように

急加速して強力な近接武装で攻めるのが妥当である。

生憎ガナドゥールにはアルトのような瞬発力も無ければ強力な近接兵器もない。

だが・・・ガナドゥールにはガナドゥールの戦い方がある。

？？？「・・・な・・・に・・・！？」

ヒュッケバイン達はガナドゥールとは正反対の方向から攻撃を受け、メインモニターを潰された。

だがこちらはガナドゥール1機、味方機などいるはずがない。

視覚を潰されて混乱する暇もなく、彼らはジェノサイドクローの餌食となつた。

ジョッシュュ「パターン『アルティメット・ランサー』・・・

やはり使えるな。」

彼らを攻撃したもののは正体・・・

それは最初のヒュッケバインの機能を停止させ、突き刺さつたままの筈のフィガだつた。

ガナドゥールに内蔵されているフィガの弾数は僅か2機、この手の武装としてはあまりにも数が少ない。

だがそれでいいのだ。

何故ならフィガは使い捨ての武装ではないからだ。

通常、攻撃終了時にフィガは自動的にガナドゥールに戻つてくる。

グルンガストシリーズに見られるブーストナックルと同じようなものだ。

だがジョシュアはあえてそれをせず、フィガを使い捨ての武装の様に見せかけ、

わざと突起して隙を見せ、その瞬間に待機させていたフィガを再起動させたのだ。

ジョッシュ「これで3機……」

？？？「・・・突起・・・」

今度は向こうが突っ込んできた。

内臓バルカン砲とフォトン・ライフルで牽制しつつ、片手のビームソードで切りつけるようである。

敵が完全にガナドウールに狙いを絞ったのはジョシュアにとっては好都合だ。

後は迎え撃つだけで済むのだから。

しかしこの間合いで、ジョノサイドクロードで切り払うのは難しい。ジョノサイドクロードの収束率はビームソードよりも低いからだ。

元々ジョノサイドクロードは切りつける武装ではなく突き刺す武装であるため

取り回しが利くようにあえて射程は低く抑えられている。

その穴を狙う彼らは良い軍人と言えるだろ？

だが彼らはガナドウールの全てを知ったわけではない。

ジョッシュ「このフォルシオンセイバー、なら……！」

ジョシュアは

もう一つの非実体剣フォルシオンセイバーを起動させた。

それはビームソードなど比べものにならないほど収束率が高く、間に

命とも長い。

？？？「なん……だと……？」

ジョッシュ「もう一撃……！」

彼が驚いたのも束の間、切りつける前にヒュッケバインは2機とも切りつけられた。その瞬間、2機のパワーはカットされた。

2機とも同じ場所、動力バイパスを正確に破壊されたのだ。

ジョッシュュ「ふう・・・」

ジョシュアは深呼吸をした後、再び管制塔に回線を繋げた。

ジョッシュュ・・・博士、全機の無力化に成功しました。

生体反応は6・・・  
全員無事です。』

カザハラ『いやいや。

話には聞いていたが、かなりの腕前だな。』

リシュウ『伊達に修羅やNDC残党を相手に生き残つただけはあるのづ。』

ジョッシュュ『NDC残党の場合、大抵は気づかれる前に逃げていましたが、

戦わざるを得ない状況もありました。

それに修羅の連中は問答無用でしたから。

・・・こいつと縁を切るためにここまで来るのに、  
こいつを使いこなせるようになつてしまだなんて、  
変な話ですよ。』

エリ『でも助かつたわ。

そのおかげで今回は難を逃れる事が出来たから。』

ジョッシュュ『お礼なんて良いですよ。

それよりも彼らですが・・・』

ソフィア『ええ。

ハッチを開けて彼らを回収して。』

カザハラ『だが作業はガナドールに乗つたまま行ってくれないか。

下手をすれば暴れて君に襲いかかって来るかもしけんからな。』

ジョッシュュ『分かりました。

一応、簡単な尋問も試みてみますので、通信はつなげたままでおきます。』

カザハラ『ああ、わかつた。』

ジョシュアは倒れたヒュッケバインの方に向い、作業を始めた。

ジョッシュュ「（それにしても連中を殺さずに済んで助かった。）

・・・あの連携の手際のよさや、崩されたときの建て直しの速さから察するに

相当の腕前だと分かる。

下手をすればこちらが持たなかつたかも知れない。  
・・・ともかく、話してみるか。」

ジョシュアはヒュッケバインのハッチを開け、  
外部スピーカーのスイッチを入れて搭乗者に声をかけた。

ジョッシュュ「・・・ヒュッケバインのパイロット、聞こえるか？」

一般兵「う・・・うう・・・

「こ、ここは一体・・・？」

ジョッシュュ「ここはテスラ・ライヒ研究所、オレはここのパイロットだ。

そちらの所属を言つてもらおうか？」

一般兵「じ、自分はエント基地所属のPT部隊の者です・・・」

ジョッシュュ「・・・どうやら話は出来るようだな。」

一般兵「え・・・？」

ジョッシュュ「答えてもらおうか。

・・・何故研究所を襲撃した？」

一般兵「研究所・・・襲撃・・・？」

ジョッシュュ「・・・お前達は突然この基地に現れ、研究所を破壊を

試みた。

それを止めるために、機体を破壊させてもらつたがな。

「

一般兵「・・・そ、そういうえば・・・薄つすら記憶が・・・」  
ジヨツシユ「（・・・洗脳が解かれたのか？」

まあ、そのほうが手っ取り早く助かるが・・・」  
一般兵「あ、あの・・・何故自分達は・・・このような事を・・・」  
ジヨツシユ「それを聞きたいのはこちらの方なんだが・・・」  
・・・何か覚えていることはあるか？」

一般兵「は、はい。

自分達は基地周辺の哨戒任務に当たつていました。  
ですが、突然奇妙なエネルギー反応を感じしまして。  
確認のため、その反応の方へ向かつたのですが・・・」

ジヨツシユ「エネルギー反応・・・？」

一般兵「え、ええ。

なんというかあれは巨大な・・・」

だが、彼が言いかけている途中で彼の話は終わってしまった。  
何故なら、突然大地が揺れ始めたからだ。

一般兵「おわああつ！？」

ジヨツシユ「おおつ・・・！？」

エリ「じ、地震・・・？」

違う・・・これは転移反応！？」

ソフィア「・・・過去のデータと一致・・・？」

「、これは・・・シャドウミラーです！？」

カザハラ「何だと！？」

空が歪み、それらは地に降り立つた。

蒼い鋼鉄の体、怪しく光る紅い眼の機械の群像が現れた。

ジョッシュ「あれは確かゲシュペNST……!?

・・・それに今、突然出現したような現れ方をしたが・

・・一体・・・

ジョシュアが南極から出たのは今から約半年前だ、それ以前は殆ど南極暮らしだったため、

彼が知りうる情報は民間人が得る情報以下と言つていい。

それにこの半年で戦つた敵と言えば、修羅やゾンビ残党ぐらいのものだ。

彼がシャドウマーナや転移技術に関する疎いのは当然と言える。

カザハラ「あれらが『向ひの側』の量産されたゲシュペNST部隊か・・・

話には聞いていたが、こゝ見ると壮观だな。」

リシュウ「感心しとる場合じやなかろう!」

? ? ? 「・・・」

博士達の雑談を他所に、ゲシュペNST達はテスラ研へ進撃を開始した。

その動作はまるで部隊そのものが生物として機能しているかのようなものだった。

そして、正確無比に獲物を狙うM950マシンガンの弾雨は動けなくなつたヒュックバイン達にとっては防ぎよつが無かつた。

一般兵「うつ・・・うわああああああーー!」

ジョッシュ「・・・くつー」

ヒュックバインが爆発し、ジョシュアの目の前で名も無き連邦兵は

爆炎に呑まれていった。

それは、他のヒュッケバイン達も同様である。ジョシュアは田の前にいながらそれを黙つてみて居るしかなかった。

エリ「こ、こちらに仕掛けてきた！？」

ソフィア「問答無用・・・と言つ事かしら。」

カザハラ「目撃者を生かす氣は無いという事か・・・。」

リシュウ「万事休すか・・・！」

爆発や銃撃の影響でテスラ研はみるみる崩れて行き、もはやその機能を保てなくなつていった。

さすがの博士達もこれには少々参ったようだ。

リム「はあっ・・・はあっ・・・！」

は、博士・・・！」

その最中、突然リムが管制室に入ってきた。

彼女は息を切らせ、汗をかき、動搖を隠せないでいた。彼らのことを伝えるために、必死でここまで来たのだ。

カザハラ「クリアーナ君！？」

ソフィア「ど、どうしてここに・・・？」

エリ「クスハさんとブリット君は！？」

リム「そ、それが2人とも・・・」

いきなり田覚めて、そのまま格納庫の方へ・・・

リシュウ「何じゃと！？」

エリ「そ、そんな！？」

とても歩けるような状態じゃないのに・・・？」

クスハ「龍王機・・・！」

龍王機「・・・」

ブリット「虎王機・・・！」

虎王機「・・・」

崩れ行くテスラ研の中、二人は超機人の目の前に立っていた。  
しかし彼らの顔色は死人の様に白く、目の下の隈は墨で塗ったように黒く、

体中から冷や汗が止まらず、体は震え続けていた。  
その姿はまるで深い絶望の中にいるようにも見えた。  
・・・だが彼らはそれでも倒れることは無かった。

クスハ「全部受け止めたわ・・・

あなた達が私達に何を伝えたかつたのか・・・

そしてあなた達が今何を感じているのか・・・」

ブリット「正直・・・今すぐにでもここから逃げ出したい気持ちで  
いっぱいだ・・・」

クスハ「・・・でも私達は逃げたりなんかしない！」

ブリット「・・・そしてそれをばら撒くそいつを黙つて見逃すつも  
りも無い・・・！」

なぜならば、それでもなお彼らの眼は死んでいなかつたからだ。  
輝きを失わず、真つ直ぐと前を見据えていた。

クスハ「そのためには・・・

龍王機、虎王機・・・！」

ブリット「共に行くぞ！」

涅婆の王から、世界を救うために・・・」

龍王機＆虎王機「ならば、今一度唱えよ・・・！」

我らと共に・・・！」

ブリット＆虎王機「必神火帝つ！」

クスハ＆龍王機「天魔降伏つ！」

クスハ＆ブリット＆龍王機＆虎王機「「「龍虎つ合体つ！-！」」

「

＜テスラ・ライヒ研究所 屋外＞

ジョッショウ「くつ・・・！」

全装甲大破・・・

それに『レース・アルカーナ』の出力がもう・・・！」

ガナドールは先程の戦闘に加え、突如転移してきたゲシュペンスト部隊の攻撃を受け続けていたため、もはやあと幾許も保たない。そんなガナドールに出来ることは、たった一つだけだ。

ジョッショウ「・・・博士、急いで避難を！」

「こはオレが殿になります！」

それは博士達が脱出するまでの間、囮になる事である。

リム『お、お兄ちゃん、それじゃあ・・・！』

ジョッショウ『リム！お前も急げ！』

ガナドール・・・もう長くは保たない！』

リム『で、でも・・・

ガナドール・・・もう長くは保たない！』

でも・・・!』

ジョッショ『心配するな。後で脱出する。

・・・博士達をよろしくな。』

ジョシュアは交信を断つた。

ジョッショ「・・・何が脱出装置だ。

そんなもの、当の昔に壊れてるのにさ・・・  
すまんなガナドゥール、分の悪い賭けだつたようだ。』

田の前に迫るゲシュペNST達を見て、ジョシュアは覚悟を決めた。

? ? ?『その役目、私達に任せてくれさい!』

ジョッショ「そ、その声は! ! ?』

格納庫から光の柱を上げ、龍の咆哮と雷鳴と共にそれは現れた。

我 激 燃 超 機 人 無 敵 蒼 龍 龍 虎 王

ジョッショ「あ、あれが龍虎王・・・!』

エリ「ク、スクハさん? ブリット君?』

大丈夫なの?』

ブリット「・・・はい。大丈夫です。

龍虎王も分かつてくれたようですし。』

カザハラ「い、一体これはなにが・・・! ?』

クスハ「話は後です!

今は彼らを止めます!』

ゲシュペNST達は怯むことなく龍虎王に向かつてきただがそれが彼らの敗因となつた。

クスハ「・・・行きます！

九天応元雷声普化天尊！

龍王爆雷符！

龍王機、七十一の術符の一つ爆雷符は広範囲にわたつて雷を呼びよせる。

この技にかかれば電子機器は勿論、生物とてひとたまりも無い。それによつてゲシュペNST達は指一つ動かすことも出来なくなつてしまつた。

クスハ「今です・・・！

龍虎王、移山法！

神州靈山！移山召喚！

急々如律令！

天に暗雲が立ちこめり、上空から巨大な岩石がゲシュペNST達を押しつぶした。

空間転移によつて靈山の一部を召喚したのだ。

これではゲシュペNSTと言えども、叩き潰された蠅と同じだ。

ジョッショ「あれだけの数のを・・・

一瞬で・・・！？」

20機はあるうゲシュペNST部隊は一瞬にして壊滅した。決してゲシュペNST達が弱いのではない。

あまりにも龍虎王が強すぎるのだ。

リシュウ「龍虎王・・・

完全に目覚めおつたか・・・・！」

エリ「計測は出来ていませんが、

見る限りでは以前より力が増しているように見えます。」

カザハラ「彼らの念動力によるものか・・・・？」

それとも・・・・

クスハ『・・・・！

博士・・・安心するのはまだ早いようです・・・・！』

カザハラ「！？」

ソフィア「・・・エ、エネルギー反応が増大しています！？」

エリ「このパターンは・・・

・・・ア、アイнстです！」

リシュウ「なんじやと！？」

エネルギー場の中心にいたのは、破壊をかるうじて免れた一機のゲシュペNSTだつた。

だがそれが機械で無いことはすぐに分かつた。

何故なら、剥がれた装甲の下は無数の生物的な触手で覆われていたのだから。

ジョッシュ「あ、あいつは一体・・・・！」

? ? ? 「オオオオオオ・・・・！」

ゲシュペNSTはおぞましい雄叫びを上げ、体内の触手を伸ばし、周囲の残骸はおろか、パイロットの遺体までも取り込んでいった。その様子はとても直視できるものではなかった。

リム「う・・・何あれ・・・・」

エリ「取り込んでいるとでも言つの！？」

ゲシュペNSTはあらゆる物を取り込み、新たな姿を創り出した。  
角を象った頭部のブレード、両肩には炸裂弾を詰め込んだコニット、  
右腕の炸薬式バンカー、

背部の過剰ともいえる程の大量のアフターバーナー・・・  
それはクスハ達にとって、とても馴染み深い姿をしていた。

クスハ「あ・・・あれはまさか!?」  
ブリット「ア、アルト・・・アイゼン!?!?」

## 第4話 彼方からの落とし子 その3（後書き）

色々あつて書くのが遅れました( ^ ^ ; )

半分以上は3日ぐらい前から出来ていましたが、途中で練り直しました。  
くつたのでこうなってしました。

追伸：この話が終わったら、今後の展開のためにもう一度スパロボ  
をプレイしたいので少し間が開くと思いますのでご了承ください。  
というかホントにすいません。○\_○

## 第4話 彼方からの落とし子 その4

ジョッショ「・・・クスハ達は、あの機体を『』存知なので?」

ジョシュアはクスハ達の反応を見て、  
アレが彼らが見知っているものではないかと直感した。

ブリット「あ、ああ。よく知っている・・・

アレはアルトイゼン・・・

俺達、ATXチームの隊長機だ。」

ジョッショ「それが何故、あのような形で?」

・・・そもそもアレは何なのですか?」

クスハ「あれらは・・・おそらくアイNSTOです。」

ジョッショ「アイン・・・スト?」

ブリット「詳しいことは後で話すが、

奴らはインスペクター事件中に突然現れた化け物共だ。」

ジョッショ「(化け物・・・インスペクター事件・・・?)

まさか・・・!?)」

クスハ「・・・彼らは以前、アルトイゼンをコピ―して来た事が  
ありました。」

ジョッショ「成程・・・

では前回と同じ手を使つてきた、と言つ事ですか。」

クスハ「いえ・・・今いるアレは以前とは違うんです。」

ジョッショ「・・・どう言う事ですか?」

ブリット「奴らがコピ―したアルトイゼンはシルエットや武装【】とは似通  
つているものの、

もつと有機的なデザインだった。」

そう、目の前にいるアルトイゼンは、以前のアイNSTOトイゼンと

は異なり、

見た目は機械アルトイゼンそのものだった。

違つ点を挙げるとすれば、細部のデザインが異なり、武装はどうちらかといえば改造機のアルトイゼン・リーゼに近く、何より機体の色は蒼い色をしていた。

クスハ「それに、残骸を取り込むなんて事は一度もなかつたんです。  
第一、AINSTOシリーズは全て消滅したはずなんです。」

ジョッショ「では、こいつはそれの生き残り……ということでしょうか？」

クスハ「恐らくは……」

（でもこの思念は以前から感じていた胸騒ぎとは違つ……  
ならいつたい……）

ジョッショ「謎が多いですが、いずれにせよ倒すべき敵だという事は理解できました。」

ブリット「ああ。どのみちやつらを野放しには出来ない！  
敵は奴一体……ならばッ！

クスハ「ええ！」

ブリット「必神火帝つ！」

クスハ「天魔降伏つ！」

ブリット&クスハ「虎龍！ 合体ツ！！」

龍虎王が光に包まれたかと思つと、

炎の柱を上げ、虎の咆哮と共にそれは現れた。

我 咆哮 超機人無敵白虎虎龍王

ジョッシュュ「こいつが・・・虎龍王か・・・」

ブリット「行くぞ！虎龍王！！

神速槍っ！..！」

虎龍王は神速槍を召喚し、目にも留まらぬ速さで一気に間合いを詰めた。

ブリット「化け物め！」

「覚悟しろ！..！」

? ? ? 「それはこちらの科白だ・・・」

ブリット「！..!？」

ブリットは神速槍で貫く刹那に声を聞いた。  
その声は彼がよく知つてゐる者の声だった。  
そして神速槍が敵を貫くことは無かつた。  
なぜならば、その穂先は打ち貫かれていたのだから。

ブリット「な・・・に・・・！？」

ブリットがそれを認識した直後、火花が散り、凄まじい金切り音が辺りに響いた。

それはこのやり取りが僅か一瞬の出来事であつた事をブリットに認識させた。

ブリット「くそつ！」

「だがそれならっ！..！」

ブリットは直ぐに槍を手放してランダム・スパイクを召喚した。  
この近距離ならば取り回しの利くランダム・スパイクが有利だからだ。

だが、その動作は相手にとつてはあまりにも遅い動きだった。

？？？「噛み砕け・・・！」

ブリット「な・・・！？」

その声は虎龍王の後方から聞こえた。

だが虎龍王は相手に背を向けてなどいない。

相手が一瞬で虎龍王の背後をとつたのだ。

事実、ブリットはその動きに付いていく事は出来なかつた。

そしてブリットが気付いた頃には相手のステーキが虎龍王の背後を

貫いた。

だが・・・

？？？「手ごたえが・・・ない・・・？」

貫いたかに見えた虎龍王は霧のように姿を消した。

ブリット「そいつは分身だッ！」

「ヴァリアブルドリルウツ！？」

虎龍王の能力、身分身の術はその名の通り分身を作り出す。ブリットはとつさにその術を使って難を逃れ、カウンターを取る事に成功したのだ。

？？？「くつ・・・」

とつその事で反応することが出来なかつた相手は殴り飛ばされた。そのままでは地面に激突して大きなダメージを負つてしまつだらう。だがアルトモドキは背部のアフターバーナーで勢いを殺して難を逃れた。

しかも、虎龍王から受けた傷は不気味に再生を始めていた。  
だがそれ以上に、ブリットやクスハはそいつに対して奇妙な違和感  
を拭いきれずにいた。

「ブリット……クスハ……氣付いたか……？」

「クスハ……ええ。

「あの動き……あの戦い方……そしてあの声……」

以前に戦つたアインストシリーズはパワーこそあれど、その戦い方は本能的なものだった。

だが、こいつはそうではない。

そしてブリットとクスハはこの戦い方を知っていた。  
だからこそ身分身でギリギリ躲す事が出来たのだ。

それ故に初めに感じていた奇妙な違和感が徐々に増していくのだ。  
突撃に対してのカウンター、その後の急加速での反撃、そして聞き慣れたあの声……

「……やはり寄せ集めではこの程度が限界か……」

「だが……さすがは守護者の僕……と言った所だな……  
故に……その力は……！」

「ブリット……！」

両者は互いの殺氣を感じ取り、共に構えを取つたまま硬直した。

先程の戦いを見れば、両者の力はほぼ互角、ならば先に隙を見せたほうが負ける。

あるいは第三者が隙を作れば勝機はあるが……

「ジョッショウ『ガナドゥール』……損傷率80パーセントオーバー……

・全兵装使用不能……

「くそつ……！オレは……！」

しかしジョシュアの駆るガナドウールはもはや歩く事すらままならない。

先程のダメージはそれほどまでに深刻なものだつた。  
・・・ジョシュアはただ黙つて見ている事しか出来なかつた。

「？？？」

「この・・・反応は・・・」

アルトモデキは何かを感じ取り、その方角を向いた。

ブリット「（・・・なんだ？）

（戦闘中に余所見だと！？）

「？？？」

「ククク・・・フフ、フフフフ・・・

ハハハ・・・ハハハハハアツ！」

間違い・・・ない、奴だ・・・奴だアツ！..！」

クスハ「な・・・なんのこの感じ・・・

これは・・・憎悪と歓喜・・・？」

ソフィア「・・・！」

「こちらに急速で近づいて来る反応が・・・！」

カザハラ「まつたく、次から次へと・・・

今度はなんだ？

インスペクターか？それともエアロゲイターか？」

エリ「カザハラ博士、冗談とはいえ、不謹慎ですよ。」

リシュウ「もうここまで来ると大概の事じや驚かんぞい・・・」

カザハラ「・・・で、数は？」

ソフィア「・・・！」

該当データでした！

数は2！

マスター・シュマンとレッド・オーガです……

リショウ「何じゃとつ！？」

荒野の彼方から風を切つて現れたそれはその場の空氣を一変させた。

蒼い巨人と紅い魔人……

どちらも、ここにいる殆どの人間が知つてゐる。

その力の強大さと搭乗者の強さを。

ブリット「ソウルゲイン……！」

それにペルゼインだと！？」

クスハ「アクセルさんとアルフィミィちゃん！？」

ジョッショ「ま……また新しい敵か！？」

アクセル「……ちつ！」

少し遅かつたか……！」

アルフィミィ「研究所……」

大分壊されているようですね。

……でも人は殆ど大丈夫のようですの。」

アクセル「だが、それよりも奴だ……！」

先程のゲシユペニスト共で分かつてはいたが……」

？？？「ハハ……ハハハハアツ……！」

久しぶりだなあ。

アクセル・アアルマー！！」

アクセル「その姿……その物言い……そしてこの悪寒……

やはり貴様か……！」

ベーオウルフ「ベーオウルフッ！！」

ベーオウルフ「あああ、そうだ……その声だ……！」

その声を聞く度に、

お前から受けた傷が疼いて疼いて仕方がないぞ……

！

フハハ・・・ハ・・・ハ・・・・!

クスハ「ベーオウルフって確か・・・」  
ブリット「『向こう側』のキヨウスケ中尉の・・・」  
ジヨッショウ「・・・な、何なんだ・・・」  
「いづひ・・・?」

アクセル「・・・『こちら側』とはいえ、

再びこの場所でお前と出会う事になるとはな・・・

ベーオウルフ「つぐづく、因縁だなあ・・・」

アクセル「貴様を叩き潰す前に1つ聞く・・・

どうやって『こちら側』に辿り着いた?」

ベーオウルフ「貴様が残してくれた転移装置のおかげだ・・・」

アクセル「リュケイオスか・・・!?

自爆させたはず・・・

・・・だが、貴様がここにいるということは失敗したのか・・・」

ベーオウルフ「否ア・・・

貴様が転移した直後、確かに俺は爆炎と共に消え去った・・・」

アクセル「何・・・?」

ならば何故・・・?」

ベーオウルフ「・・・それ以上・・・貴様に言つ必要があるのか?」

アクセル「何・・・?」

ベーオウルフ「・・・ここで消える貴様にいいつ!」

痺れを切らしたかのよつて、アルトモドキ・・・  
いやゲシュペンストMK-IIはソウルゲインめがけて突撃してきた。

アクセル「ぐつ・・・!」

ベーオウルフ「ハアア・・・・ツ！」

アアアアクセエエルウウ  
・・・アアアアル

ウマアアアアア  
ツ！！

貴様だけはあ・・・貴い様だけはあああああーー!」

Mk-IIIの主武器、破裂式パイルバンカー『リボルビング・ブレイカー』が特有の撃鉄音を鳴らしソウルゲインの装甲を貫いた。

たが、アケセルは身動き一つしなかった。

「…多少は話せるようになつたかと思つたが…」  
「…悪化しただけのようだな、こいつは…」

ベーオウルフの咆哮と共に、Mk-IIIIはさらに加速した。ブースターが焼き切れんばかりに火を噴き、ソウルゲインごと岩山に向かつて突っ込んだ。

ベーオウルフ「全弾・・・もつていけ・・・！」

岩肌に激突する瞬間、Mk-IIIの両肩に仕込まれている近距離指向性炸裂弾

『レイヤード・クレイモア』のハッチが開き、チタン製の鉄鋼弾が目標にめがけて発射された。

アクセル「ぬかつたか・・・！」

岩山は粉塵を上げて無残にも崩れ去つた。

Mk-IIIはソウルゲイン共々崩れ行く岩山の下敷きとなつた。

クレイモアは射程が短いうえに射角が広いため近接しなければ目標以外に着弾してしまう、一方で近接して使用すれば跳弾によつて自身に誘爆してしまうため扱いが非常に難しい武装である。だがそれは搭乗者がマトモな人間で、MK-IIIIが設計図通りの機体である事が前提での話だ。

ベーオウルフ「フフ・・ハハハ・・ハハハハハハ・・・！  
ハアーハツハツハ・・・！」

Mk-IIIIは何事もなかつたかのように瓦礫の下から這いで、勝利の雄たけびを上げた。

ジョッシュュ「あ、あんな無茶苦茶な戦い方をして・・・無傷だとつ！？」

クスハ「違うわ・・・ダメージは受けているけど、その場で自己修復しているだけよ・・・  
(でも・・・あの速度は・・・)」

クスハは冷静に分析したが内心では動搖していた。

過去のアインストにも自己修復機能はあつたが、あれ程までの速度は備わつていなかつたからだ。

アクセル「・・・何を勝ち誇つている？」

ベーオウルフ「な・・・に・・・！？」

ガレキの下から眩い光の柱が天へと貫き、瓦礫をMk-IIIEと吹き飛ばした。

ベーオウルフ「おああああああー！？」

Mk-IIIIは宙を舞い、激しく地面に激突した。

油断していたせいかダメージはかなり大きなものだった。

アクセル「最大出力の青龍鱗・・・貴様とはいえ、この距離では避けなかつたようだな・・・

だが・・・！」

アクセルは相手より一手先を打つ事に成功したにも関わらず何故か残念な表情を見せた。

アルフィイミィ「アクセル、どうしましたの・・・？」

アクセル「弱い・・・弱すぎるぞ・・・ベーオウルフ・・・！」

貴様の実力はこんな甘つちやろいモノではなかつた筈だ

！..」

ベーオウルフ「フフ・・・フハ・・・ハ・・・」

起き上がつたMk-IIIIは攻撃をする構えをしようとはしなかつた。

それどころか、その体は泥人形のように崩れ始めていた。

ベーオウルフ「やはり、寄せ集めでは・・・ここまでが限界か・・・

「アクセル・・・何？」

アルフィイミィ「アクセル・・・あれは・・・!？」

装甲が剥げたコクピットブロックから現れたのはパイロットなどではなかつた。

人間の死体に無数の触手と機械類が絡みついた人の形をした何かだつた。

クスハ「うつ・・・あ、あれって・・・」

ブリット「さつき取り込まれた人達か・・・」

ジヨッショ「あ、あんなのがアレを操っていたのか・・・?」

アクセル「ベーオウルフ・・・その姿は・・・?」

人の形をしたそれはその問いに答えた。

ベーオウルフ「・・・言わなかつたか?」

「この体は寄せ集め・・・おれの僕と血肉と鋼で創り上げたモノだ。」

アルフィミイ「それを・・・あなたは操つて・・・?」

ベーオウルフ「貴様には分かるようだな。」

アルフィミイ「どうやら、おれの嘗ての同胞のようだが・・・?」

アルフィミイ「わたしはもうアイнстではありますんの。そして、あなたは私の知るキョウウスケではありませんの。」

アクセル「迎合するつもりはないということだ、これがな。」

ベーオウルフ「ならば・・・こちらも、だ・・・」

会話の最中も機体はさらに崩れていった。

ベーオウルフ「もう・・・この体も・・・保たぬ・・・か・・・  
だが・・・次は・・・こうはいかんぞ・・・  
貴様がもたらした新たなる力で・・・  
この世界で出会った同胞と共に・・・  
この世界を・・・そして・・・静寂・・・を・・・」

アクセル「薄気味が悪い・・・!」

「・・・もう何も喋るな!・!」

アクセルはソウルゲインの玄武剛弾で崩れゆくMk-IIIIを文字

通り粉微塵にした。

ベーオスルフ「フハ・・ハ・・・  
また会おう・・・アクセル・アルマー・・・  
ハハ・・・クハハ・・・ハハハ・・・ハハ・・・」

完全に姿が崩れ去ったにもかかわらず、不気味な笑い声だけが辺りに木霊し続けた。

ジヨッショウ「何だつたんだ・・・奴は・・・?」

アクセル「相変わらず何を言つているのか分からん奴だつたが・・・  
本人じゃないことは確かのようだな。」

アルフィミイ「ええ、あれは只の人形・・・

可哀想な人形ですの・・・」

ジヨッショウ「あんたたちはアレがなんなか知つているのか?」

アクセル「詳しくは俺も分からん。

だが奴とは因縁がある。

それだけは間違いないのさ、これがな。」

アルフィミイ「・・・それにわたしも無関係ではありませんので。」

クスハ「(やはりあのアルトは・・・)」

ジヨシュア「・・・取り敢えず情報を交換したほうが良さそうだな、互いのために。」

## 第4話 彼方からの落とし子 その4（後書き）

虎龍王が噛ませつぽいのは龍虎王伝奇からの伝統みたいなモノです  
(苦笑)

今回搭乗したゲシュペNST Mk - 3は見た目はオリジナル（ナハト）と同じですが、搭乗者が遠隔操作で本領が発揮できないし本人もまだ本調子ではない+急改造したために本来の性能が再現されないばかりか長くは保たないって事で弱体化を計りました( ^ ^ ; )  
本物はもの凄いチート機体ですから序盤はこのぐらいが妥当かと(詳しく述べる)ドラマCDで)

でも本編に出すときはそれ以上のチートっぷりでいきたいと思います、その頃になると主人公勢もチート集団になつてますから(笑)  
次回は説明パートです。

後付たつぱり、伏線バリバリ、脳内妄想大盛りでいきますのでご了承ください(汗)

## 第4話 彼方からの落とし子 その5

<テスラライヒ研究所 屋外>

戦闘が過ぎ去ったあと、彼らは互いの情報交換のための話し合いの場を設ける事にした。

だがこのままの状態ではいささか問題がある。

博士達がいる建物は倒壊寸前のため危険極まりない。

クスハ達パイロットにとつては、機体に搭乗したままで十分な情報は得られ難いと言える。

結論として、全員が屋外に出てその場で話し合つ事になった。

アクセル「……」いやって直に話すのは初めてだな。

超機人のパイロット。

確か名は・・・

ブリット「・・・ブルックリンだ。

だがそう言われればそうだな・・・

互いの会話は戦闘中の通信のみだったからな。

アルフィミィ「あの時は・・・お互い敵同士でしたものね。

それにイエッジやソーディアンのときは状況が状況でしたから。」

クスハ「でも、いいじゃないですか。

今はこうやって話し合えるんですから。」

アクセル「フ・・・そうだな。」

アクセルとアルフィミィ、クスハとブリットは搭乗機から降りて、互いの再会を噛み締めていた。

いや、『再会』と表現するのは多少違うのかもしれない。

彼らは互いのことを通信でしか知らないのだ。

本当の意味で彼らは今日始めて互いの顔を知ったと言える。

カザハラ「ほう・・・

」「いつがマスタッッシュマン・・・いや、ソウルゲインか。

リシュウ「儂も戦場で見たことはあったが、やはり中々の機体じやな。」

ソフィア「それにペルゼイン・・・レッド・オーガ・・・エリ「100%アインストの技術で造られた機体ね。

ある意味で、これも超機人といえるのかしら?」

一方、倒壊寸前の管制塔から降りてきた博士達はソウルゲインとペルゼイン・リヒカイトに並々ならぬ興味を抱いていた。

両者ともデータはあるものの未知の技術の結晶である。それが目の前にあれば、学者でなくとも興味を引かれるのは当然の事だろう。

リム「なんだか、みんな盛り上がりしているみたいだね」

ジョッシュ「遠くて会話は聞き取れないが、

あの様子だと久しぶりに会つた昔の知り合いといったところか?」

リム「うーん・・・ちょっと違つてないだね。

博士達も一人が乗つてきた機体に興味津々みたいだし。

知り合いだつたら、ああいう反応はないとおもうんだけど・・・

・?」

ジョッシュ「・・・別に誰だつていいさ。

彼らが敵でないのならば、

重要なのは彼らが何者なかつて事よりも、襲つてい

た敵が何のかつて事さ。

互いのことを知るのは情報をやり取りしてからでも出来る。」

リム「……なんか、お兄ちゃん冷たいね。」

ジョッシュ「冷静といつてくれ、冷静と。」

ジョシュアとリムは双方の輪に加わらずに、ガナドールのシステムチェックを行っていた。

ガナドールが先程の戦闘で致命的なダメージを受けていたのではれば、それによつて彼らに何らかの影響を及ぼす可能性が極めて高い。レース・アルカーナと彼らがリンクしている限り、互いにどの様な影響が出るかは全く分かつていなからだ。

リム「……で、どうなの？」

ガナドールの調子……？

ジョッシュ「……サーボモーターや装甲はもう駄目だな。

フレームも数箇所はオシャカだ。

だがメインはほぼ無傷だ……

当然、レース・アルカーナもな。」

リム「頑丈に作つてくれたお父さんやクリフに感謝しないとね。」

ジョッシュ「あ、ああ……」

幸いにもレース・アルカーナは頑強な防御ブロックに守られていたため損傷は無かつた。

だがジョシュアはその事に対し複雑な気分になつた。

少なくとも自分達に影響が出るのが免れたのが嬉しくもあつたが、反面、頑強な防御ブロックを施した父親達リ・テクがレース・アルカーナ損傷の際の搭乗者への影響が

早い段階で懸念されていた事を知つていた事に怒りを感じていた。

そして妹のリムがその影響を最も受けているにも関わらず、そんな親父達に対して笑つて感謝している様子を見てそんな自分が虚しくなった。

自分がいかに矮小で弱く、リム達がいかに強いのかを改めて痛感した。

アルフィイミイ「……ところで、彼らとあの機体は……？」  
アクセル「機体の方はテスラ研が造つたにしては大分趣が違うし、連中も軍人には見えんな。」

クスハ「南極遺跡調査団の人達です。

あの機体もそこで造られたそうです」

アクセル「南極遺跡……？」

聞いたことがないが？」

ブリット「……俺達もついさつき知つたばかりだ。

普通の人達にはまず知らないようだし……」

アルフィイミイ「……」

アクセル「ん……？」

どうした、今日はやけに大人しいな。」

アルフィイミイ「いえ……」

（何でしょう……あの機体……？

何か……不吉なモノを感じますの……）

嘗て、アインストの眷属であつたアルフィイミイだけには、ガナドウール、いや『レース・アルカーナ』に対して直感的ではあるが、不穏な影が見えたような気がした。  
だがもはやアインストでない彼女にはそれが何なのかを知る術は無かつた。

ジョッシュ「……何見てるんだ？」

アルフイミィ「あ・・・あの・・・  
べ、別に・・・その・・・」

ジョッショ「どうした？」

そんなに慌てて・・・？」

リム「もひ、お兄ちゃん！」

いきなり話しかけたら誰だつてびっくりしちゃうでしょう？」

ジョッショ「・・・それもそうだな。

驚かせてすまなかつたな。」

アルフイミィ「いえ・・・別に大丈夫ですの。」

ジョッショ「オレは名前はジョシュア、こいつは妹のクリアーナつて言つんだ。」

君の名前は？」

アルフイミィ「うふふ・・・

わたしはアルフイミィと申しますの・・・  
以後・・・宜しくお願ひいたしますの・・・」

リム「よ、宜しくね。アルフイミィ・・・ちゃん・・・？」

（・・・なんだか、不思議な感じの子ね・・・

変わつた喋り方だし、服装も妙だし・・・

（こういうのを浮世離れつていうのかな・・・？）

アクセル「・・・お前があの機体のパイロットか？」

ジョッショ「そうですが、あなたは・・・？」

アクセル「・・・アクセル・アルマーと言つう。」

ソウルゲイン「・・・あの蒼い機体のパイロットだ。」

お前の機体、かなりのダメージを受けているようだが・・・

・？」

ジョッショ「メインは生きているので、修理すれば問題ありません  
よ。」

アクセル「・・・奴を相手にしてこの程度で済んだ事を幸運に思う  
んだな。」

奴が本気ならば、撃墜は必至だった筈だからな。」

ジョッショ「奴・・・?

あのアルトアイゼンとか言つやつのことですか?」

アクセル「・・・それ以外に誰がいる?」

ジョッショ「残念ですが、この損傷はそいつのせいじゃありませんよ。」

アクセル「何・・・!?

ならばどいつも・・・?」

クスハ「・・・あのゲシュペNST部隊ですよね?」

アクセル「なに・・・!?

ゲシュペNSTだと・・・!?

ブリット「俺達が出撃したとき、

ジョシュアさんは先にガナドウールでテスラ研の護衛にまわっていた。

・・・そのときにはかなりの損傷を負つていたんだ。」

ジョッショ「それだけではありませんよ。」

最初に現れたのは味方であるはずの連邦軍でしたから。

「クスハ「え・・・!?

ブリット「な、何だつて・・・!?

アクセル「どういうことだ・・・話がまるで見えんが・・・?」

アルフィミィ「すいませんが・・・最初から説明してもらいたいのですね。」

この一人が知らない事も含めて・・・」

ジョッショ「分かりました。」

ですが、オレにも分からぬ点があるので博士達も呼んできます。」

ジョシュアは機体の整備と調査にあたつていた博士達を呼びだし、話し合いのための場所のセッティングを始めた。

モニターにパイプ椅子、ホワイトボード等々、

瓦礫の中からまだ使えそうなものを搜してかき集め、簡易的な会議場を作った。

その一連の動作における無駄なさと、ついでにお茶まで用意してしまつぽいの手際のよさに周囲は唖然とするしかなかつた。

ジョッシュ「すこません、とりあえず使えそなものを集めてきましたが、

「ぐらり」と

ありあわせのものですし……」

カザハラ「いや十分すぎるよ。

流石はジョシュア君だ。」

リシュウ「本当によく出来た若者じやの。」

ブリット「やつぱり……速過されるよな……？」

クスハ「う・・・うん。」

アクセル「手際がいい……とか言つレベルじゃない気がするんだが、な。」

アルフィミイ「これ、美味しいですの……」

状況に慣れていないクスハ達は飲み物を片手に呆然と突つ立つていた。

アルフィミイだけは貰つたレモネードを飲んで「満悦のよつだ。

ジョッシュ「それでは、今回の事件のあらましを説明しましょ。」「なぜなに解説といつやつですね。

アルフィミイ「むむ……！」

なぜなに解説といつやつですね。

アクセル、BGMと着ぐるみの準備を……」

アクセル「……そんなものは無い。

あつたとしても出さん。」

アルフィミイ「ノリが悪いのですね……」

リム「あの……何か……？」

アクセル「何でもない……！」

「気にせず続けてくれ。」

ジョッショ「ではまずは龍王機と虎王機の説明からです。

彼らの不可解な行動も関係していると思われますので。

「アクセル「不可解な……？」

カザハラ「今から数日前のことだ。

オペレーション・オーバーゲート以来休眠状態にあった

超機人が

突然目覚めて暴れだしたんだ。

お陰で研究所は半壊、地下ドックも使用不能さ。

アクセル「成程な。

テスラ研のこの有様は奴らのせいでもあるのか。」

ブリット「その知らせを聞いた俺達は研究所に急行したんだが……

「エリ「その頃、あれほど暴れていた超機人達は気が変わったかのようには暴走をやめて、

再び休眠状態に入つたわ。

その時刻はクスハさん達がこちらに向かつた時刻と一致する

わ。」

アルフィイミィ「守護者のしもべは……彼らを迎えて往こうとしたのですね。」

アクセル「そして往く必要がなくなつたと分かり、寝て待つ事にした、か。

「迷惑かつマイペースな奴らだな。」

アルフィイミィ「ですが……腑に落ちませんの……

守護者のしもべがそのような行動をとるなんて……

「ソフィア「私達もその辺りが気になつてクスハさんたちに依頼して

彼らとの対話を試みたわ・・・

でも・・・

アルフイミイ「・・・？」

アクセル「・・・その様子ではしくじつたのか？」

ジョッショ「しくじつたかどうかは不明だが、

超機人達はクスハさんとブリットさんに對して強力な思念を送り、

その結果、心身ともに衰弱して危険な状態に陥った。

アクセル「そうなのか・・・？」

あの一人を見る限りではそんな風だつたとはとても思えんがな・・・？」

ソフィア「何があつたのかは私達もまだ彼らから聞いていないわ。」

エリ「・・・クスハさん、ブリット君、話してくれる？」

彼らはあなた達に何故、あのような事を？」

ブリット「龍王機と虎王機は・・・俺達の覚悟を問つためにしたんだと思います。」

リシュウ「覚悟じやと・・・？」

クスハ「彼らは言いました。

無間の底より、湿婆の王が降臨せしめん。

三千界を滅ぼさんがために・・・

人界を守護するのが吾らの使命。

だが吾らの力、湿婆の王に遠く及ばぬ。

故に今一度汝らに問う・・・と」

アクセル「・・・もつたいぶりすぎてサッパリ意味が分からんな、こいつは。」

アルフイミイ「わたしにもサッパリですの。」

エリ「無間・・・仏教思想における無間地獄の事ね。」

リシュウ「確か八大地獄の八番目・・・地獄のどん底だつかの。」

エリ「はい。」

苦しみが無間に、つまり絶え間なく続く地獄で、

その苦しみは他の二つの地獄が夢のよつたな幸福に感じるのはどうだとか。」

アクセル「そんな場所の底つて」とはどん底のどん底という事か・・・

・  
俺は自分は地獄行きだとは思つてはいるが、流石にそんな所は御免だな。」

エリ「湿婆は・・・三大神の一柱、シヴァ神の事ね。」

アクセル「今度は神サマか・・・

どうせろくなヤツじやあるまい。」

エリ「シヴァは三神一体論においては

世界の破壊を司り、次の世界創造に備える役目をしているとされているわ。」

ブリット「・・・その辺りはアイNSTがやろうとしていた事に近いな。」

アクセル「ならば湿婆の王とはアイNSTかそれと同質のもの・・・つまりはあるの連中の事を指しているのか?..」

クスハ「いえ・・・

超機人はアイNSTの事を羅喉神と呼んでいました。

湿婆の王とは、おそらくは全く別の存在を指していると思います・・・」

アクセル「それにしても二千界やら人界やら訳が解らん言葉が多くなるな・・・

語感からすると世界の事を指していくように思えるが・・・

・?

エリ「半分正解よ。

超機人たちが言う人界とはおそらくこの世界や地球の事を指していると思うけど、

三千界・・・つまり三千大千世界は少し違うわ。」

カザハラ「どう違うのかね・・・?」

エリ「仏教思想では一つの世界の事を須弥山世界と呼びますが

三千大千世界はそれが1000の三乗・・・10億個集まつた空間を指します。」

ブリット「じ、10億個！？」

リム「それって・・・どのくらいの数なの？」

カザハラ「私も詳しくは知らないが、

確かに銀河系の生命体が存在する可能性がある星は、

楽観的に見積もつても1000万、低くて20前後だと聞いた事がある。」

ジョッショウ「なら10億ならば、前者だと100倍、後者だと500万倍になりますね。」

リム「そ、その倍率の数つて・・・そのまま銀河の数つて事になるんだよね・・・？」

アクセル「何ともスケールがでかい話だな、こいつは。」

カザハラ「となると、湿婆の王というのは新たな異星人が、もしくは宇宙の破壊者という事になるな。

それも今までとは比較にならない力を持つ・・・」

ブリット「ですが・・・もう一つ可能性があります・・・」

アクセル「何が言いたい・・・？」

クスハ「龍虎王が指す『人界』が地球ではなく、

『世界そのもの』を指しているのだとするならば・・・」

カザハラ「・・・！」

湿婆の王とは並行する世界を崩壊させる存在である、と

！？」

アクセル「もしそうならば、話は更に厄介だな・・・」

クスハ「あくまでも直感ですが・・・」

リム「並行する世界つて・・・？」

ジョッショウ「おそらくパラレルワールドの事だらう。

こことは違う分岐を選択した世界、

こことは似て非なる世界の事だ。」

リム「物知りだね、お兄ちゃん。」

ジョッショウ「だがあくまで空想の範疇……

それが実在しているとは言い難いが……」

アクセル「……俺がお前が言つ『空想』から来た人間だとしたら？」

ジョッショウ「え……！」

カザハラ「彼は、アクセル・アルマーはことは違つ可能性を持つた世界、

『向こう側』から来た人間だ。

それが妄言でない事は私達が保証するよ。」

ジョッショウにわかには信じられないが……」

アクセル「貴様が信じようが信じまいが勝手だ。

だが俺は『世界』の危険性についてはそれなりに理解しているつもりなのさ、これがな。」

リム「わたしは信じるよ。

あなたがそつて言つならきつとそうなんだし、博士達が嘘をつく理由なんかないもん。」

ジョッショウ「お前はもう少し疑うという事をだな……」

リム「それよりもお兄ちゃん……

あの子……」

リムはうとうとしているアルフィミイを指差した。  
彼女は器用にもジュースを飲みながら寝ていた。

アルフィミイ「…………はづ……！」

ね……寝てなんかいないです。

ちゃんと聞いていましたの。」

アクセル「道理で静かだと思っていたが……こいつは……」

アルフィミイ「むう……だつてさつきからムズカシイ話ばつかりですの……」

リム「まあ、そうだよね。

実はわたしも半分・・・

ジョッショ「お前はもう少し聞け・・・」

リム「・・・はい。」

アルフィミィ「・・・で、結局どうこうですの・・・？」

アクセル「搔い摘んでいえば、

とてつもなく嫌な所からとてつもなく嫌な奴が現れて世界を壊しに来る。

超機人の力じゃそいつには敵わんらしい・・・

ということだそうだ。」

アルフィミィ「・・・そしてお一人に今一度・・・覚悟を決めていただくために・・・

死にかけてもらつた・・・といふ事でしたのね。

理由はさっぱりですけど。」

カザハラ「ああ。

彼らを死にかけさせた事と覚悟を決めさせる事に一体何の関係が？

エリ「正確には一人が瀕死になる程の強力な念を龍虎王が送つたという点ですが・・・」

ブリット「周囲にはそう見えたんですか・・・？」

ソフィア「ええ。

あなた達は意識を失つていながらも、まるで何かに怯える様に体を震わせ呻き声を上げ続けていたわ。」

アクセル「・・・想像したくない光景だな。」

クスハ「龍虎王が私達に送つた念は、

これからと湿婆の王との戦いの時に感じるであろう、ある感情であると同時に、

彼ら自身が感じていたもの全てだと言えます。」

エリ「龍虎王が感じていたもの・・・？」

ブリット「ええ、俺達にとつては最も根源的で忌むべき感情・・・

『恐怖』です。」

カザハラ「恐怖だと！？」

エリ「確かに彼らは一定の意思を持つてはいるけれど・・・

彼らが恐怖するなんて・・・」「

それは、長年に亘つて超機人を研究していたエリ博士に至つても信じがたい事だつた。

龍王機と虎王機は機械の塊ではなく、半分は生きているとも言える存在だ。

それに彼らには高度な自己認識能力、言つなれば感情や意思を持っている。

彼らが恐怖や怨恨といった負の感情を持つてもなんら不思議ではないが、

数千年の時を経て戦い続けた彼らの精神力は人間のそれとは比較にならない程高いと推測される。

彼らが恐怖に屈したという事は、折れないはずの心が折れたという事なのだ。

クスハ「彼らは私達に伝えたかったんです。

自分達が感じているモノ、そしてそれが何なのか分からなくて・・・

どうしようもなくなつてしまつて・・・」

アルフィミィ「恐怖・・・それに屈するはずのない彼らが、それに屈してしまつたのであるならば・・・」

アクセル「・・・暴れるのも無理は無いな。

恐怖にかれられた奴は何をするか分かつたもんじやない・  
・！」

ブリット「それに彼らは同時に理解しました。

自分達の心を折つたこの感情が、湿婆の王の予兆である  
といふ事に。」

クスハ「それで、彼らは私達に問うことにしてたんです。

こんな自分達ともう一度共に戦ってくれるかどうかを。  
もし戦ってくれるとしても、

これから訪れる嘗て無い恐怖という感情に私達自身が耐えられるかを。」

エリ「兵士であり、超機人に選ばれたあなた達にそれ程の事をするなんて・・・

よっぽどのことだったのね・・・」

カザハラ「『勝てる見込みはあるで無く、どうしようもなく恐くてたまらない。

そして、それでも立ち向かうのであるならば君達は自分達以上の恐怖を感じてしまうだろ?。それを知つてなお、共に戦ってくれるか?。』

・・・これが龍虎王のメッセージか。』

ソフィア「そして、彼らはそれでもなお立ち向かう事を選んだのね。その心が折れてなお・・・」

リシュウ「・・・こんな言葉を聞いたことがある。

不屈とは、折れた事がない事ではなく、折れてなお立ち上がれる事じゃと。」

アクセル「・・・奴らは兵器などではなく、俺達と同じ心を持つた戦士であるという事だな。」

アルフィミィ「アクセルがそう言つなんて・・・なんだか不思議ですの。」

アクセル「学んだのを、リミア・ラブレスから、な。」

カザハラ「・・・そして、君達も戦うことを選らんだのか。」

クスハ「はい。」

龍虎王は私達の覚悟を認め、体を万全の状態にしてくれました。

これから戦いに向けての彼らなりの気遣いだと思つています。

・・・それに彼らが言つては、漫遊の王は恐怖を広める者だそうです。」

ブリット「そんな奴を黙つて見過しすわけにはこきませんから。」

リシュウ「（二人とも良い目をしておるわい。

龍虎王が彼らを選んだのは正しかつたのう。

我が先祖も誇りに思つとるじやろうな。」

クスハとブリット、龍王機と虎王機。

古の戦士達と若き戦士達。

彼ら4人のこの先の戦いに、幸あらんと願いたいものだ。

## 第4話 彼方からの落とし子 その5（後書き）

今回ばぶつちやけ、第三話解説・龍虎王編です（汗）データが消えたり、推敲を繰り返したり、内容が煮詰まつたりした結果がこれだよ！

前回の投稿から一週間以上が経過してしまいましたね・・・おまけに字数がもの凄い事になりそなので今回も分割せざるを得ませんでした。

龍虎王にも負の感情はあると思っています。

彼らの強さは、力や術ではなく、それを乗り越えようとする心の力なのだと。

だからこそ古代人は彼らに感情を与えたんだと思います。（脳内補正甚だしいですね・・・）

あとアルフィミィがどうやって寝ながらジュースを飲んでいるのかはご想像にお任せします（笑）

ちなみにレモネードに特別な意味はありません。

当初はイチゴ牛乳でしたし。

よつするにノリで書いただけです（＾＾；）

## 第4話 彼方からの落とし子 その6

カザハラ「……となると、龍虎王が目覚めたのは全く別の理由であるという事になるな。」

リシュウ「連中に襲われて目覚めたと思っておつたが、

それは偶然が重なっただけという事か。」

ジョッショウ「その偶然に助けられたオレは運がよかつたというべきですね・・・」

エリ「ですがこれで彼らの覚醒と、あの敵との関連性が無いことが解ったわ。」

アクセル「同時にアインスト以上に危険な存在が目覚めつつある事も解ったがな。」

アルフィミイ「・・・これから先のことを考えると・・・気が重くなりますの・・・」

リム「そうですね・・・」

一同に重たい空気が立ち籠み始めた。

龍虎王覚醒の謎が分かつただけでもこの様だ。  
先行きが不安になるのも無理はない。

ジョッショウ「・・・とにかく、話を先に進めましょ。」

時系列的にはクスハさん達が気を失い、

龍虎王に搭乗して出撃するまでの間の話になります。」

アクセル「・・・確か貴様は最初に襲ってきた連中は連邦軍の兵士だと言っていたな?」

ソフィア「それは本当よ。

照合もしたから間違いないわ。」

アクセル「今までの流れを考えると、クーデターといつ線はまずありえんな。」

ジョッショ「ええ。

彼らは何者かのコントロール下にあつたと推測されます。

彼らの通信を傍受しましたが、その内容は支離滅裂としか言いようがありませんでした。」

アクセル「どういった内容だ……？」

ジョッショ「……世界の新生とか、静寂がどうとか……」「ブリット」……それではまるで……！」

アルフィミイ「アインスト……そのもの……」

アクセル「確かに……エクセレン・ブルウーニングはアインストの影響で

一時的ではあるが、お前達と敵対したことがあつたな。  
もしや今回も……？」

アルフィミイ「それは無理ですの……」

アインストがエクセレンを引き込めたのは……  
彼女の体がわたしのペルゼインの中で修復されたから……

体と魂を調べられたから……」

リム「ち、ちょっと待つて……！」

あなたのペルゼインがアインストのモノって事は……  
あ、あなたは……」

アルフィミイ「わたしは……その後にエクセレンを元にして造られました……」

アインストの目的のために……」

アクセル「だがアルフィミイはもはやアインストとは関係ない。

最終的には自らの意思でアインスト殲滅の手助けをした

そうだ。」

ジョッショ「……彼女が我々の味方であるならば、それ以上はもう聞きませんよ。」

あなたと同じくね。」

アクセル「・・・？」

俺がこいつどつるんぢいる理由は聞こひとはしないのか  
？」

ジョッショウ「今話すべきことはそれではありませんので。

そういう事は、後で個人的に聞かせてもらいますよ。  
この事件について、自分なりに理解もしたいので。」

アクセル「（・・・随分ハツキリと割り切る奴だな、こいつは。）  
リム「じゃあ、AINSTは無差別に人をコントロールする事は出  
来なかつたんですね。

だとすると一体・・・？」

ジョッショウ「・・・オレはAINSTについてはまだ殆ど知りませ  
んが、

人知を越えた何かであることぐらいは理解しているつ  
もりです。

ですが・・・それ故に腑に落ちない点が・・・」

カザハラ「どういうことかね・・・？」

ジョッショウ「・・・博士達は、彼らの狙いが超機人だとおっしゃい  
ましたね。」

リシュウ「ああ。

あやつらが言つておつた『守護者のしもべ』とは龍虎王  
の事じや。」

エリ「それを破壊するよつな旨の言葉も発していましたし、間違  
ないわ。」

ブリット「・・・当然といえば、当然だな。」

アルフイミイ「AINSTがここを狙つたとすれば・・・

それ以外の理由は考えられませんものね・・・」

ジョッショウ「オレにはどうしてもピンとこないんです。

あれ程の力を持つ彼らが、

何故たつた一体のロボットを狙つて襲つてきたのかが。

エリ「成程ね・・・

何も知らないあなたから見ればそう映るわね。」

ジョッショウ「確かに龍虎王は現代の特機系を遙かに超えるスペックや数々のオーバーテクノロジーを持つていますが、それだけではどうも・・・」  
ブリスト「・・・龍虎王は古代においてアイNSTと戦っていたんだ。

そして現代ではアイNSTの統率者を殲滅する役割の一端を担っていた。」

アクセル「つまり奴等にとつて、龍虎王は仇敵と言つ事になるな。

だとすれば、そいつの寝首を搔こうとするのは当然だな。」

ジョッショウ「両者にはそれほどの因縁があつたのですか・・・」  
アルフイミイ「（やうやく）守護者のしもべは・・・脅威でしたの。」

臺灣のわたしにとつても・・・」

クスハ「その・・・やつをジョシュアさんが言つていた操られた人達の事ですが、

彼らは私達が出撃したときには、もつ既に撃墜されていました。

もしかして・・・ジョシュアさんが・・・？」

ジョッショウ「・・・」

ブリスト「・・・君は操られていたとはいえ、襲つてくる者に對して皆を守りうと

抗おうとした、そこに罪は無い。」

それに彼らが君を撃墜しようとしていたのであるならば、

君が彼らの命を奪つたとしても誰も責めたりは・・・」

ジョッショウ「・・・オレは彼らを撃墜してなどいない。」  
ブリスト「え・・・？」

カザハラ「ジョシュア君が言つてこむことは本当だ。」

彼はあの猛撃の中、

研究所の盾になりつつ彼らを撃墜することなく沈静化させることに成功したんだ。

あの手際の良さには頭が下がるよ。」

ジョッショ「相手はヒュッケバインが5体だけでしたし、これといったカスタムもされていませんでした。

確実に沈静化させるために動力バイパスを狙うのは難しかつたですが。」

アクセル「二次災害を未然に防ぎ、かつ相手も無事に済む攻め方を選んだわけだな。」

ジョッショ「はい。

彼らが操られているだけなら無闇に命を奪うのは酷だと判断しました。

それに、彼らが生きていれば尋問も可能ですので。」

アクセル「甘いように見えるが、情報が不足した状況ではそれがベストだな。」

ブリット「（だが・・・口で言つほど簡単な事じゃないはず・・・！）」

クスハ「も、もし・・・爆散していたら・・・二次被害どころかパイロットまで・・・」

ジョッショ「そのぐらいの覚悟は承知のうえです。

だからといって分の悪い賭けをするつもりはありませんよ。」

アクセル「フッ・・・

中々肝つ玉が据わってるな、おまえ。」

アルフィミィ「（アクセルが人を褒めるなんて・・・！

・・・明日は間違いなく雨ですの。）」

ジョッショ「ですが成功させてもその後油断したのが命取りでした。パイロットの尋問中に突然現れたゲシュペNST部隊に

沈静化させた全機体は全滅させられましたから。」

アクセル「パイロット共には氣の毒としか言えんな、こいつは……」

ブリット「今、尋問したと言いましたが……彼らと話すことが出来たんですか?」

ジョッシュ「ええ、幸いにも洗脳が解かれたパイロットを確認することが出来たので、

その場で尋問を行つてていたのですが……

彼は……オレの目の前で……」

ブリット「(流石にそういうのは割り切れないか……)

俺だつてそうだらうしな……」

アクセル「……

そいつからは何か聞き出せたか……?」

ジョッシュ「……はい。

自分がテスラ研の近くのエント基地所属の兵士である

事、

哨戒任務中に奇妙なエネルギー反応がありそこに向か

何かを見た後の事はぼんやりとしか覚えていなかつた  
事、  
意識がハツキリしだしたのは、オレの攻撃の直後である事、ぐらいです。」

カザハラ「……彼らは無意識下で操られていた、と考えるのが妥当だらうな。」

ブリット「それに……何かを見たとは……?」

ジョッシュ「いえ、それはオレにも……」

巨大な何か、とまでしか聞けませんでした……」

アクセル「巨大な何か、か……」

クスハ「え……?」

アルフィミイ「わたし達がここに来た理由は……」

その事を伝えるためだったのです・・・

アクセル「テスラ研ならば、オレ達のことを知っているからな。

情報を伝えるにはそれが手つ取り早い。」

ブリット「い、いったいなにを・・・？」

アクセル「・・・」いつだ。」

アクセルはモニターにソウルゲインの戦闘記録映像を映した。

リシュウ「何と・・・！」？

ブリット「こ、これは・・・！」？

アクセル「・・・ここからそう遠くない基地、いや『基地』だったものの映像だ。

『面影はどこにも見当たらないがな。』

アルフィイミィ「おややく操られていた兵士達の基地だったと思いますの・・・」

そこに映っていたものはおよそ理解しがたいものだった。

それは基地全体が巨大な紅い結晶体によつて埋め尽くされていた光景だった。

よく見ると、基地の周辺にも同サイズのものがいくつあるのが分かつた。

エリ「これは・・・巨大なクリスタル・・・？」

アルフィイミィ「はい・・・わたし達はこのクリスタルのエネルギー反応を感じ、

その場所を探していましたの・・・」

ジョッショ「そして・・・見つけたのがこいつか・・・！」

アクセル「・・・もし俺達が反応をキャッチした時にこいつが出現したと言つ事ならば、

一時間足らずで基地は壊滅した事になる。」

ブリット「な、何だつて・・・！」

クスハ「でも・・・このクリスタル・・・どこかで見た気が・・・」

？」

アルフィミィ「これは本来・・・AINSTの世界にあったもの・・・

あの世界では『ごくありふれたものです』」

ブリット「AINST空間にあったアレか・・・！」

クスハ「・・・じゃあ、基地を壊滅させたのはAINSTなの・・・

？」

アルフィミィ「おそらくは・・・

このクリスタルのエネルギーは・・・AINSTのそれと同質のものでしたので・・・」

アクセル「・・・連中が操られたのもおそらくはこいつのせいだろう。

試しに近付こうとしたが、危うく意識を持つていかれそうになつたからな。」

カザハラ「近付いただけでそつなるのであれば、基地にいた彼らは・・・

・・・

クスハ「・・・・・・」

アクセル「それだけじゃない。」

このクリスタルのエネルギーを浴びたソウルゲインは通信系が一時的に使用不能になつた。

俺が意識を失いかけたのもそのときだ。」

カザハラ「通信系の類はこちらも同じだ。」

彼らが襲撃してきた際、救難信号を発しようとしたが使えなかつた。」

ジョッシュ「長距離通信がつながらなかつたのはそのせいだったのか。」

アクセル「あと・・・この映像も見てくれ・・・」

アクセルは映像を早回しし、特定の箇所を映し出した。

そこに映っていたのは、この基地を襲つたあの者達の映像だった。

ジョッショウ「これは、ゲシュペNST・・・・?」

カザハラ「それもかなりの数だな・・・・!」

アクセル「ああ、俺も最初は驚いた。

まさか・・・奴らが『こちら側』にやつて来ていたとは  
な・・・

クスハ「奴らつて・・・

まさか・・・・!

アクセル「地球連合軍特殊鎮圧部隊ベーオウルブズ・・・

ジョッショウ「・・・もしや彼らもあなたと同じく、『向こう側』の  
?」

アクセル「ああ。

・・・俺が所属していた部隊、

特殊任務実行部隊シャドウミラーを壊滅させた連中さ。  
結果、俺達は『こちら側』に転移せざるを得なくなつた。

お前も奴らと戦つたのならば、その恐ろしさが分かるは

ずだ。」

ジョッショウ「ええ。

彼らは突然何も無いところから出現し、いきなりこちらを攻撃してきました。

・・・あの攻撃力と統率力はまさに驚異的でした。

くやしいですが、反撃の余地すらありませんでした。

アクセル「何・・・?

連中は転移してきたのか?」

ジョッショウ「ご存じ無かつたと・・・?」

アルフィミイ「わたし達の場合は・・・すでにその場におりました  
ので。」

アクセル「それは・・・本当なのか・・・?」

ソフィア「本当よ。

「それも、シャドウマリナーの転移反応でね・・・」

アクセル「なに・・・!?」

クスハ「ど、どういう事ですか!?」

「確かに、シャドウマリナーの転移装置は・・・」

カザハラ「完全に破壊されたと聞いている。

ギリアム少佐とラニア少尉が立ち会っていたそうだから、間違いないだろうな。」

アクセル「・・・ならば、考えられる可能性は一つだけだな。」

ブリット「知っているのか!?」

アクセル「お前達が破壊したのは転移装置アギュイエウス・・・そいつを解析して作り上げたもう一つの転移装置リュケイオスが存在する。」

ラミアからは聞いていなかったのか?」

ブリット「あれが・・・もう一つ・・・!」

アクセル「だがリュケイオスは『こちら側』には来ていない。

アレには装置ごと転移させる力は無いからな。

それにオレが『向こう側』で転移した直後に

自爆するようにセッターしておいたはず・・・!」

ソフィア「ならば・・・爆破が失敗し、彼らが追撃してきたと・・・?」

アクセル「いや・・・自爆そのものは成功したらしい。」

「その場にいた奴自身が言っていた事だ、まず間違いないだろう。」

ブリット「なら、何故『こちら側』に?」

アクセル「・・・解らん、だが転移反応がリュケイオスのものであると言う事は、

連中がそれを使っていると言つ事になる。

もう存在していない筈のものを、な。」

リシュウ「ふむ・・・

文字通り矛盾しておるな。

これも謎の一つといふことじやな。」

クスハ「謎といえば、彼らが転移装置を使ってきたことがそもそも謎です。

アイнстは独自に転移能力を持つていたはず・・・  
なんでわざわざ・・・?」

アルフィミイ「アイнстが持っている力は本来・・・  
彼らの世界とこちらの世界を行き来するためのもの  
ですの・・・

ですから・・・」

カザハラ「・・・ではアイнстの転移は次元転移のみであると・・・?  
・?」

アルフィミイ「それに・・・もうアイнстの世界は存在しません  
ので・・・

もしその力を使つたら・・・」

アクセル「・・・どうなるかは目に見えているな。」

リム「ど、どうなつちゃうの・・・?」

カザハラ「・・・そうだな。

クリアーナ君、目隠しして車で目的地まで行けるかい?」

リム「そ・・・そんなの無理に決まつてます・・・!」

行けるかどうか以前に、絶対に事故つちやいますよ!」

カザハラ「つまり、アイнстが無理に力を使うことはそうこう  
となのむ。」

ジョッショ「辿りつく可能性はゼロに等しい上に、消滅する危険性  
が極めて高い・・・

「ということですね。」

アルフィミイ「わかりやすい解説・・・どうもですの」

アクセル「その話が本当ならば、連中は空間転移にリュケイオスを使  
っている事になるな・・・」

エリ「・・・彼らが転移してきたとするならば、それ以外ないわね。」

「ジョッシュュ「空間転移・・・俗に『ドリーレポート』ですか？」

ソフィア「そうとらえて間違いないわ。」

カザハラ「だとすれば連中はこの世界・・・

それも地球圏のどこかに潜伏していると言つ事になるな。

「アクセル「だが連中がそう簡単に見つかるような場所に隠れているとは思えん・・・」

奴がついているならばなおさらだ、これがな。」

ジョッシュュ「奴、とはあのアルトアイゼンの搭乗者ですか・・・？」

「確かにあなたはベーオウルフと言つていましたが？」

アクセル「あの部隊長の通り名だ。」

あの機体の本当の名は『ゲシュペンストMK-II』・・・

『こちら側』ではアルトアイゼンと呼ばれている機体だ。

「カザハラ「付け加えて言つと、その『こちら側』のアルトアイゼンのパイロットは

クスハ君やブリット君の直接の上司にある。」

アクセル「・・・俺は『こちら側』にたどり着いて奴の存在を知つた。」

もし奴が『向こう側』の奴と同じ存在ならば危険以外の何者でもない。

俺はそれを懸念して何度も奴と戦つた。

・・・結果的には俺の取り越し苦労だったがな。」

ブリット「こっちからすれば身に覚えのない事で因縁つけられたようなモンだったからな、

シャレにならないぞ、全く・・・」

アルフィミィ「そうですのアクセル・・・

ちゃんと謝つてももらわないといけませんの・・・」

アクセル「（お前が言えた義理じやないだろ？が・・・！）」  
ジョッショウ「・・・さつきの奴の力を見れば、その心配は当然とも  
言えますが・・・

その様子では『こちら側』の奴は・・・？」

アクセル「ああ、ただの人間だった・・・

それが分かつただけでも良しとしないとな。」

アルフィミイ「はい・・・『こちら側』のキヨウスケには・・・

何も手を加えていませんので・・・

でも・・・おそらく『向こう側』のキヨウスケは・・・

・

ブリット「（そうか・・・！

確か『向こう側』のエクセレン少尉は・・・！」

クスハ「（だから・・・キヨウスケ中尉が・・・）」

アクセル「だが、先程戦つた奴のあの機体・・・

奴が言つには、どうやらあれは奴自身ではないらしいが・

・

何か知つているか？」

クスハ「・・・私達が龍虎王でゲシュペNST部隊を殆ど撃墜した  
直後の話です。

半壊した1機のゲシュペNSTが周囲の残骸や、パイロットの死体を取り込んでいく、

最終的にあの姿になつたんです。」

ジョッショウ「オレのガナドウールはその時には既に動けない状態になつていましたが

なんとか避わす事ぐらいはできました。

・・・もし撃墜されていたら取り込まれていたのかも

しません。」

アルフィミイ「あらゆるものを取り込んで・・・あの姿形に・・・

アクセル「なるほど・・・

お前の機体が大破した理由がベーオウルフではないとい

うのがようやく分かつた。

奴があの姿を人形といった理由もな。」

アルフイミィ「はい・・・あれはただ僅かな間だけ・・・

あの機体を操るためだけに・・・意思をより伝えやすくするためだけに

作り出された・・・可哀想な人形ですの・・・

アクセル「・・・あえていうならば人形ではなく、  
マリオネット

オートマトン  
傀儡という事か・・・

いずれにせよ木偶には変わらんがな・・・

カザハラ「過去に、AINSTが他の物質を吸収しようとした例はあるにはあるが・・・

明らかに今回は今までとは異質なものだな。」

クスハ「彼らはインスペクター事件時にSRXを取り込もうしました。

結局はあきらめたようでしたが・・・

ブリット「吸収とは違うが、こちら側の機体が連中に奪取されてAINSTによって変質した例もあった・・・」

アクセル「俺達はイエツツトがPTやAMの残骸を取り込んでいるのを見たが、

そいつは自己を保つ事は出来なかつたようだ。」

アルフイミィ「時間をかければ・・・出来ないことはありません・・・

しかし・・・無理にしようとすれば・・・

ジョッショウ「・・・その話からすると、

AINSTは他の物質を変化させたり取り込む事は出来ますが、

それに伴う変質が短時間の吸収の場合、自意識が耐えられな

いようですね。」

ブリット「だが今回の奴は短時間の吸収でありながら

AINSTとしての自己を保っていた・・・！」

アクセル「そして奴は同時に人間であったベーオウルフとしての記憶を持つていた。

イカレ具合は進んでいたようだがな・・・！」

ジョッショ「・・・もしそいつが人間としての思考を持つていたとするならば

今回の事件はただの破壊活動ではなく戦略的行動といえますね。」

リム「え・・・どういうこと？」

よくわかんないんだけど・・・」

ブリット「彼らの目的が超機人ならばただここを攻めればいいだけだ。

他の基地まで襲う理由は無い。」

クスハ「事実、以前のアインストの戦略は物量戦のみで、その戦い方は本能的なものでした。」

アクセル「・・・今回の作戦はおそらくはこうだらうな。

まず周囲の基地を潰しジャミングをかけて退路を絶ち、第一陣は自分達ではなく、その場で洗脳した兵士を向かわせた・・・」

カザハラ「おそらく龍虎王に対する刺激を極力避けるためだらうな。」

アルフイミィ「アインストが直接赴けば・・・」

「彼らが目覚めるのは目に見えておりますの。」

アクセル「・・・その後、第一陣と戦っている超機人の不意を突く形で

ゲシュペNST部隊を転移させて袋叩きにし、

Mk-IIIIでトドメを刺すつもりだったのだろうな。

そして基地にいた部隊はテスラ研への注意を逸らすため

のオトリ・・・」

「回りくどいやり方だ・・・！」

ブリット「でもそのためには予めこちらの情報を知つておかなければ

ばならないはず・・・」

クスハ「どうやつてこちらの情報を・・・？」

まさか基地の人達から！？」

カザハラ「確かにあの基地には君達のテスラ研へのフライトプランは伝えてはいたが・・・」

君達の健康状態の良し悪しなんて彼らが知る筈もない筈だ。」

エリ「それに彼らが事前にあなた達が超機人のパイロットだと知っていたのなら、

なおさら仕掛けにくいけれどよ・・・！」

リム「じゃあ、どうして・・・？」

エリ「・・・これはあくまで推測だけど、

あのクリスタルがジャミングやコントロールだけでなく、広域探知能力を備えていたとするならば・・・」

クスハ「・・・！」

アクセル「・・・辻褄は合う、な。」

ジョッショウ「・・・それに最後に自壊した奴の言葉が正しければ、

奴らは再び出現してくる事になりますね。」

カザハラ「・・・無差別洗脳・通信搅乱・広域探索能力を備えたクリスター、

周囲の物質を吸収してパワーアップする能力、

さらには人間のように高度な戦術を組むことが出来る・・・」

リシュウ「もはや卑怯を通り越しておるのう。」

リム「な、なんとなく物凄いことだけは分かった・・・よつた気がする・・・」

アルフィミイ「そうですね・・・お弁当で例えるなら、

豪華ミックステンプル盛り弁当♪割引・・・といったところです。」

リム「そ、それは凄い・・・！」

ジョッシュ「その例えで理解するなよ、その例えで。」

アルフィィミィ「でも割引はワケアリだつたりしますのよ……これがが。」

クスハ「え……？」

アクセル「この映像を見てくれ……これが最後だ。」

アクセルはゲシュペNST隊との戦闘映像を早送りにした。  
……すると、映像にある変化が現ってきた。

リム「え……なになに？」

別に何も変わったト「ないけど……？」

ジョッシュ「よく見てみろ……クリスタルの色を……」

リム「あ！」

紅から蒼になつていてる……！

でも、色が変わつたぐらいで別にこれと言つて……？」

アクセル「……よく観てみる。

色の変化に伴つて、ゲシュペNST共の動きが鈍くなつているのさ。」

アルフィィミィ「それには……あのエネルギーも徐々に下がつてあります。」

アクセル「……最後までは撮つてはいけないが、

おそらく今頃、あのエネルギーは消え失せている筈だ。」

ソフィア「あのクリスタルの力はそう長くは保たないということね。」

アクセル「それだけじゃない。

ベーオウルフが龍虎王に対してとつた行動は、作戦に反している……

作戦失敗ならば追撃などしても無意味だからな。

おまけに俺を見るや否や、田標を無視して俺を潰しにかかった。

制限時間付きの身であるにも関わらずに、な。」

ジョッシュ「よほどの自信があつたか、あるいは判断も出来ないほど錯乱していたのか・・・

いざれにせよ、奴が出てきたおかげで連中の事をここまで分析する事が出来ました。

それに彼らの洗脳能力もそう強い物ではなさそうですしね。」

カザハラ「一見無敵に思える彼らの能力は実のところ不完全で穴だらけであり、

自身の感情や情緒も制御できていない、と言うわけか。」  
アクセル「それも一時間足らずで分析解つてしまふあたり、たかがしれるな。」

リム「・・・つまり、大した事ないってことなの・・・？」

ジョッシュ「弱点がハツキリしだしたって事だよ。

いずれにしろ脅威である事には変わりないんだからな。」

「アルフイミィ「ですがそれは『今』の彼らの話ですの・・・  
・・・いつまでも・・・欠点だらけのままのはずがありませんの・・・」

リム「え・・・？」

アクセル「『向こう側』に居た時の奴の力はあんなものではなかつた・・・！」

単純にパワーもだが、奴自身の能力自体も下がっていた。  
・・・その気になれば奴だけでも研究所を制圧できた筈だ。」

ジョッシュ「それをせずに、回りくどい方法で攻めてきたと言つ事は・・・」

アクセル「・・・奴はまだ本調子ではない。

だからこそ、傀儡や僕を使って攻めてきたのだろう。

ならば攻め込むなら今だが、奴らの居場所が分からん限

りはそれも出来んしな・・・

リシュウ「・・・厄介な連中じやのう。」

アルフィミィ「それに・・・気になることが・・・

でもひょっとしたら氣のせいかもしけませんの・・・

以前とは随分と変わつてしましましたので・・・

アクセル「・・・ここで聞かなければ余計に氣になるだけだ。

「言つてみる。」

アルフィミィ「彼らから・・・思念を感じましたの・・・それも複数の・・・」

ブリット「なん・・・だと!?」

クスハ「確かに私達も感じたけれど・・・そこまでは・・・」

ジョッショ「何故そこまで驚いているんですか?

敵は複数でしたし・・・当然では?」

エリ「アインストは我々とは違つて、

種全体が一つの意識を共有しているの。  
むしろ彼女のよう自分的意思を持つている存在のほうが特

別なのよ。」

アクセル「複数・・・か・・・

「どういったものか分かるか?」

アルフィミィ「・・・少なくとも3つ・・・

歪んだもの・・・搖らぐもの・・・そして・・・

「彼方より出でしもの・・・」

アクセル「・・・漠然としていて分からんな、こいつは。」

アルフィミィ「わたしにも・・・幽かにしか分からなくて・・・

アクセル「・・・だがこれで確証はできた。」

「確固たる確証が、な。」

リム「えへっと・・・それはどう言つ事ですか・・・?」

「全つ然分かんないんですけど・・・」

カザハラ「本来一つの意思しか持たない連中から複数の意思が感じられたって事は、

連中は単独ではなく、複数の存在が共闘している可能性

が高いって事だよ。」

アクセル「それも・・・同じような連中が、な。」

アルフィミィ「そうですね・・・

今までのがただのバーラアイスのシングルだとすると

と・・・

今回のチヨコとストロベリーを足してさらにキャラメルソースをかけた感じになりますの

リム「そ・・・それはビックリだ・・・！」

ジョッショウ「だからそういう説明で理解するなよ・・・！」

アクセル「あとお前は一々食い物で例えるんじゃない・・・！」

アルフィミィ「むう・・・だつて食べたいんですけど・・・」

リム「そうよね・・・久々に食べたいなあ・・・

アイス納豆ストロベリーソースがけ・・・

おいしかったよね〜、お兄ちゃん

ジョッショウ「・・・！」

あ・・・ああ。

ジョシュアは冷や汗流しながら、苦笑いで答えた。

今まで常に冷静であつた彼がうろたえたのを見て、周囲は驚かざるを得なかつた。

・・・特にごく一部の者は、彼女の言つそれがどんなものか想像できてしまった。

ブリット「（彼女・・・ひょっとして・・・もの凄い味音痴なのか・

・・・？

そしてジョシュアさんは・・・）

クスハ「・・・納豆アイス

フフ・・・健康に良さそつ・・・」

ブリットは見逃さなかつた、クスハの一瞬の黒い笑みを。

ブリット「（クスハ ッ！

まさか混ぜる気か！？

アレに混ぜる気くあ ッ……？」

リム「え？

納豆アイスじゃなくてアイス納豆だよ？

まず納豆を・・・」

ジョッショ「・・・リム！」

その話はまた後でしょ！

これ以上話がそれるのは良くないからな！  
なっ！」

リム「う・・・うん。」

ジョシュアは朗らかな顔と声でリムに言い聞かせたが、そのまま血走っていた。

周囲には蘇るトライウマを何とかして押さえ込もうとする彼の必死さがいやおつなしに伝わってきた。

アクセル「（同情を禁じえんな、ここつは・・・）」

アルフイミヤ「（でもちょっと面白かったのです・・・）」

ジョッショ「えーと・・・」

まあ、目的が同じ者同士や似通つた者同士が徒党を組むことは

別に珍しい事では無こと思つのですが、話を聞くといひこみると、以前のAINSTOでは考えられなかつた

事なのでしょうか？」

エリ「え・・・ええ、そうよ。

彼らの形態は多種多様だけれど、

ほんとにアインストは一つの意思、一つの目的の元で行動していたわ。

このあたりは、さつきも説明したわよね？」

カザハラ「例えるならば、蜂や蟻などの社会性昆虫や郡体生物に近い。」

一つの群れが一つの生命体・・・

いや、プログラムとして機能している。」

リシュウ「じゃが奴らの群れは一つのみ。」

そして奴らにとって他の連中は自らを進化させるための

餌・・・

共存などありえぬはずじゃった。」

ソフィア「・・・表現は悪いですが、共食いの結果とは考えられませんか？」

つまり、互いに吸収しあって・・・」

アルフィィミイ「いえ。」

それならば・・・感じ取れる思念は一つだけですの。・

・

でもそうではありませんでしたので。」

アクセル「最初はただ奴が強化しただけと踏んでいたが・・・」

複数のアインスト共が組んでいたとなるならば話は違つ

てくる。

今回出てきたあいつは俺達が遭つたアインストとイヒツ  
ツの能力を備えていたからな。」

ジョッシュ「先程の会話にもありましたが、

そのイエツツトといつのは、アインストの亞種のよつ

なものでしょうか？」

アクセル「簡単に言えば、アホな科学者共がアインストを捕らえて  
兵器運用しようとして

色々いじくつた結果、暴走した奴の事だ。

とつての間に倒した筈だったんだが、な・・・」

278

アルフィミニ「あなた達が見たと言つあの驚異的な吸収能力も本来は彼らのもの……」

少なくとも以前のアインストには無かつたものです

の。」

アクセル「おまけにあのクリスタル……あれは俺達もはじめて見た。」

あんなものはベーオウルフにもだが、アインストにもイエットにも無かつた。

だとすればおそらく……」

アルフィミニ「ええ……わたしが感じた3番目の力だと思いますの……」

クスハ「はつきり言つて……彼らの能力は未だに未知数……今回出てきたのが全てとは言い切れないんです。」

ジョッショ「……その3番目は一体何処から?」

アクセル「……それは俺達にも分からん。」

イエットのように改造でもされたのか……

ベーオウルフのように別の世界からやつてきたのか……」

リム「謎が謎を呼ぶ……ってやつですね。」

カザハラ「と言うより、今回の事件では分かった事よりも分からぬ部分が圧倒的に多い。」

龍虎王の敵、共闘するアインスト、存在しないはずの転移装置……」

ブリット「どれも今回だけでは結論を出せそうにありませんね。」

ソフィア「当然よ、なにしろ情報が少なすぎるわ。」

アクセル「だがこの話し合にもさほど無意味ではない。」

……地球圏に再び混乱が起こる事は間違いないのさ、

これがな。」

## 第4話 彼方からの落とし子 その6（後書き）

前回に引き続いて解説編です。

今回はAINSTO（？）編になります。

- ・・・というより本当は一つに纏めていた物を分割して色々推敲を繰り返した結果、かなりの量に・・・
- ジョッシュやリムのように全く知識がない人がいるからそのたびに軽く解説しなくちゃいけないので、

リムは会話の内容を聞き取るだけで精一杯でダンマリ。

ジョッシュは必要最低限の事以外はバツサリと割り切り、そのうえで解説＆分析をしています。

なんだかこの話を進めるほどにジョッシュの超人スキルがどんどん上がっていく・・・

『割となんでもテキパキ出来る苦労人』のつもりで進めていたのにどんどん底上げされていくなあ・・・

一応次回で第4話＆第4話解説・完結編の予定です。

アクセル達の所存をどうするかが現在の悩みどころです（へへ；）

追記：3／12／2009 解説パートをさらに追記、ギャグパートも追加しました。

## 第4話 彼方からの落とし子 その7（前書き）

誠に勝手ながら、前回のパートにわらに解説部分&ギャグパートを追記致しましたので、お読みになられていない方は、そちらを読んでからこちらのパートを読む事をお勧めします。

申し訳ございません m(— —) m

03 / 12 / 20

09

## 第4話 彼方からの落とし子 その7

ジョッシュュ「カザハラ博士・・・これからどういたしましょうか。各種データの採集はともかくとして、研究所がこれでは・・・」

カザハラ「復旧には当分時間がかかりそうだな。その間はどこか南の島でバカンスといきたいが、そういうかんだろうしな。」

〔軍の事情聴取と〕この調査で当分は寝る暇もないな。」

ジョッシュュ「では軍の方へ連絡を入れるのはいいとしても、〔〕の調査をするとなればそこそこの基地でないといけませんね。」

それなりに機材が必要になるでしょうから。」

カザハラ「その心配はない。」

「北米のラングレー基地に連絡を入れてくれ。」

ジョッシュュ「ラングレーに・・・？」

「随分と遠いですが？」

カザハラ「先日、あそこからとある依頼があつてね、

予算も機材もそれなりにあるらしいからな。」

「それにデカイ基地だ、なんどでもなるだろつ。」

ジョッシュュ「・・・分かりました。」

「先程の話が確かならばもうジャミングは収まっているはずですから、」

「検証も兼ねてやってみます。」

カザハラ「ああ、頼むよ。」

「ぐれぐれも、気をつけてな。」

ジョシュアはその場を離れ、通信装置のある管制塔の方へ向かった。

ブリット「ラングレー基地から・・・？」

「いつたいどんな?」

クスハ「と言うか、良いんですか?」

依頼とこの調査は別物だと思つんですけど・・・?」

カザハラ「いや、この調査も依頼とはあながち無関係とは言えないかもしけないからな。」

ブリット「それは・・・どういづ・・・!?」

カザハラ「・・・先日、ラングレー基地の近くで転移反応があつたらしいんだ。」

ブリット「・・・!?

まさか奴らの?」

クスハ「確かに、あそこには教導隊のみんながいるって聞いていましたけど・・・」

もしかして・・・!」

カザハラ「いや、彼らなら多分無事だよ。

依頼を入れてきたのはカイ少佐だったからな。

それに話によれば依頼を入れて来たのは転移反応があつてから

数時間が経つた後だそうだしな。」

クスハ「よかつた・・・」

ブリット「その様子だとこちらとは違いますね・・・

となると転移してきたのは奴らでは無い、ヒ?」

リシュウ「いや、詳しい事は僕らにもよく分からん。

何でも機密事項らしくての。」

アクセル「・・・もしや転移者か?」

カザハラ「それを確かめるためにも、だよ。」

エリ「ところで、龍虎王のことなんだけビ・・・」

ブリット「軍に接收されるでしょうね。」

おそらく、今の追撃任務にあてがわれるかと。」

カザハラ「今まで通り『原因不明の機能停止』なんて言い訳は通じ

ないだろ？」

「これだけ暴れればあの伊豆のタコ頭にだってバレるぞ。」

エリ「・・・おそらくケネス指令は最初からこれが狙いだったのか  
もしそれません。」

過去の経験上、再び田覚める可能性が高いと踏んだのだと思  
います。」

カザハラ「・・・で、その上で向こうで運用する、か・・・」

ブリット「見た田に反して細かい奴ですよ、まったく・・・」

クスハ「・・・まあ、結果的に私達と行動できるんですから、いい  
じゃないですか。」

リム「・・・軍の人つてそういう所が狭つ苦しいそうですね。  
わたしだつたら、きっとまいつちゃうな。」

クスハ「私も最初は・・・

でもすぐに慣れちゃいました。」

ブリット「・・・そういうば、さつきのジョシュアさんの話なんだ  
けど・・・」

詳しく述べてくれないか？」

リム「え・・・？」

何ですか？」

ブリット「・・・いくらあのがカスタム機だからって、

5対1で、動力部のバイパスのみを破壊し、それを攻撃  
を受けながらやるなんて、

俺にでも出来るかどうか・・・」

リム「・・・」

ブリット「あの驚異的な戦闘技術・・・」

武装カルト団如き相手じゃあそこまで出来ぬよつになん  
て成れる筈がない。

その理由を聞かせて欲しいんだ。」

リム「・・・？」

リムは少し沈黙したが、暫くするとその重い口を開いて話し始めた。

リム「……ここに来るのが一ヶ月前、南極を出たのが半年前つて言いましたよね？」

私達……ここに来るのは丸々五ヶ月かかつたんです。」

クスハ「い、五ヶ月も！？」

じゃあ、その間に……！」

ブリット「だが半年足らずでそこまで出来るものなのか！？」

リム「生きるため……ここに来るために……」

・・・食料もお金もある頃は殆ど無かったし……」

クスハ「も、もしかしてジョシコアさん……南極を出たときに持ち出したものって……」

リム「私とガナドウール……それにほんの少しばかりの食料だけでした。」

ブリット「そ、そんな無鉄砲な……」

クスハ「い、いくらなんでも無謀すぎます……！」

アクセル「だが今のあいつを見る限り、そういう事はしそうになさそうだが……！」

アルフィィミイ「どちらかといえば……計画性がありそうなタイプですの。」

リム「お兄ちゃん……今ではああだけじ、

昔は頭に血が上りやすくて、口より先に手が出るやつタイプだったんですね。」

けつこう荒れていた時期もありましたから……」

アクセル「想像できんな、こいつは……」

リム「でも……この半年ですっかり変わってしまったんです。」

お兄ちゃんは自分ができる」とは何でもやりましたから。」

アルフィィミイ「何でも……？」

アクセル「……PTの操縦できて、それを所持している奴が出来ることは……」

強盗か傭兵のどちらかだな。

ましてや命懸けだ、何をするか分かつたモンじゃないが・

・

・・・まあ、妹がいる手前、出来るのは後者だけだった  
るつが・・・」

リム「お兄ちゃんが本当は何をやっていたのかはわたしにもわかりません。

仕事をやっていた間は、わたし達は別の安全な場所にいましたから・・・」

アルフイミィ「（わたし・・・達・・・・？）」

アクセル「・・・傭兵つてのは技術は元より、

互いの信用や一定以上の対人能力を求められる面が強い。  
一匹狼じや食い殺されるのがオチだ。

出しゃばりはせずに、チームの和を乱さない奴が生き残りやすい。」

アルフイミィ「よつするに、よく気が利く下っ端と言ひ事ですね。」

「ブリット「・・・妙に気配りが聞いていたり、手際がいいのはそのせいいか・・・」

アクセル「それに時には仲間が死んだり、敵になつたりなんてのは

俺やお前達のような軍人より遙かに多かつた筈だ。

・・・割り切らなければ生き残れないのさ、これがな。」

クスハ「なら・・・ああいう性格になるのも・・・」

ブリット「だが・・・叩き上げの戦闘技術ではそこまでは・・・」

リム「・・・多分、あの頃は一番戦いが激しかったからだと思います。」

ブリット「そうか・・・！」

半年前は修羅やNDC残党との抗争が一番激しかった時

ゲリラ戦が一番多かった時期だ……！」

アクセル「その中で生き残つたのであれば……戦闘技術が上がるのは当然だな。

ましてや一対多数のシユチュエーションは最も多かつただろうしな。」

アルフィミニ「それに彼には護るべき人が……あなたがいましたものね。」

アクセル「技術向上の一役になつていたのは間違いないな。」

リム「そう……お兄ちゃんは……全部わたし達のために……」

クスハ「クリアーナさん……」

アクセル「……お前のため、と言つたな。

詳しく聞かせる、中途半端なのは好きじゃないのさ、これがな。」

ソフィア「……彼らの目的はガナドゥールの動力部の解体よ。」

アクセル「解体だと……!?」

あの機体……曰く付きなのか？」

カザハラ「……彼とシンクロしているんだよ、原因不明のね。

それに、南極にある同じものが妹のクリアーナ君と、ね……

・・

アルフィミニ「呪縛……あるいは枷のようなものですの？」

それを解くために……」

アクセル「成程な……テスラ研に来たのはそのためか……」

「……にか重大な副作用もあるのか……？」

エリ「そ、それは……」

エリ博士はその事を言つのを躊躇つた。

それを話す事は、彼女達を傷付けるのと同じだと思つていたからだ。

ジョッシュ「……それならオレが話しますよ。」

ソフィア「ジョ、ジョシュア君……!？」

アクセル「……聞いていたのか？」

ジョッシュ「一部始終、ね。

もちろん仕事はちゃんとやりましたよ。

ここ近くの基地に連絡を入れてくれるそうで、

1時間もすれば救援が来るそうです。

あとついでに、シェルターに避難していた職員達に直に救援が来る事を話して、

使えそうなバーツやデータの回収をするように指示を出しておきました。」

カザハラ「あ、ああ、それは結構だが……」

リム「あの……お兄ちゃん……」

これは……その……」

ジョッシュ「……別に隠す必要は無いわ。

俺が傭兵をやつていたのは事実だし、否定できないしな。

まあ、話す機会が無くて説明不足だったことは認めるよ。」

エリ「でも、いいの？」

レース・アルカーナの弊害……

そのことをここで話しても……？」

ジョッシュ「博士達があえてその部分に触れないように話してくれていたのには感謝します。

ですが、ここまで来て話さないのはフェアじゃないですから。」

リム「わたし達も……そう思います。」

リシュウ「そうか……」

クスハ「博士達は知っていたんですか？」

その……副作用について……」

カザハラ「副作用というか、影響だな。

……クリアーナ君にはそれがハツキリと出ているんだ。

「ブリット「え……!?」

クスハ「クリアーナさんに……!?」

リム「……」

アクセル「……だがそには見えんが……」

ジョッショ「見れば分かりますよ。

・・・クリス、リアナと話せるか?」

リム(?)「いや、別に問題ないけどさ、アニキ。

いきなり話振られてもこっちも困るんだよね。  
ずっと黙っているのって結構キツイんだからさ。」

ジョッショ「いきなり代わるなよ。

せめてワンクッシュョン置いてだな……」

リム(?)「ハハ、い、じゃん別に。

どうせすぐに慣れるよ。」

カザハラ「いやいや、私達だつてまだ慣れていないよ。」

クスハ「こ、これって……!？」

アルフィアミイ「まるで別人みたいですね……！」

ソフィア「……俗に言う二重人格よ。」

ブリット「に、二重人格……!？」

リム(リアナ)「え、と、一応自己紹介するね。

アタシはリアナ、さっきまでのクリスだよ。  
あ、そっちの自己紹介はいいから、全部聞こえて

いたし。」

クスハ「は、はあ……」

リム(リアナ)「あと……二重人格って言い方はやめて欲しいな。

アタシ達、一人いるわけだし。」

ブリット「それって……どう違うのか……?」

リム(リアナ)「ん……まあ、簡単な言い方をすれば、

二人で一人用のゲームをかわりばんこでやってい

るような感じかな。」

アルフイミィ「分かりやすい」説明、どうもです。

（でも・・・）の感じ・・・なんだかモヤモヤしますの・・・」

アクセル「影響とはそういう事か・・・

確かにこれは問題だな。

ということはお前も・・・？」

ジョッショウ「・・・え、オレにはそういう影響はまだ出ていません。

ですがいざれは何らかの形で出でくるでしょう。オレがガナドウールに乗り続けている分、そう遅くはない筈ですから。」

アクセル「・・・それを承知の上で乗り続けているという事は、お前自分を・・・！」

ジョッショウ「ええ、オレへの影響のプロセスがリム達にも応用できるかもしれませんからね。」

リム（リアナ）「でも・・・アーニキには悪いけど、

正直、今まで構わないんだよね、アタシ達。もうずっと昔から一人だったし、どっちがこの体の本当の持ち主だか

分からぬんだから。」

リム（クリス）「（リアナ、わたしもつてお兄ちゃんに言つて。）

リム（リアナ）「クリスもそうだつてさ。」

ジョッショウ「・・・だがこれから先はどうだかな。

今はいいかもしれないが、いずれどうなるか・・・カザハラ「クリアーナ君の例を見る限り、精神になんらかの影響を及ぼす可能性が高いな。

人格の変貌・・・記憶の混乱・・・精神の崩壊・・・

アクセル「・・・どう考えてもいい方向には行きそつとなさそうだな、こいつは。」

リム（リアナ）「なんか嫌なんだよね、そういう考え方。

まるでアタシ達がビヨーキみたいじゃない。

アタシ達はこれがフツーなのにさ。」

クスハ「でも、病気じゃないにしても普通じゃありませんよ・・・」

リム（リアナ）「・・・・・・」

事実を知った一同は、リムに対してある種の哀れみと恐怖が交わったなんとも言えない視線を向けた。

リム（クリス）「（リアナ・・・なんならわたしが代わるよ？）」

リム（リアナ）「（大丈夫だよ、クリス。

ある程度予想はしていたからさ、こういうのは。それにこいつ空氣、クリスじゃ耐えられない

でしょ？）」

リム（クリス）「（で・・・でも・・・・・・・・・・）」

クリアーナ・リムスカヤの中にいるクリスとリアナは性格はほぼ真逆といつていい。

クリスは引っ込み事案で臆病であるが、リアナは勝気で思つた事は遠慮なく口にするタイプだ。

彼女らには上下関係などないが、リアナがクリスを守つている傾向が強い。

だが一方でクリスが突つ走りがちなリアナを上手くサポートする場面もある。

だからこそ彼女らは誰よりも互いの事を理解し合い、誰よりも互いの事を心配し合つている。

それ故にこういった意見の衝突が起こる事も屢々受けられる。もつとも、傍から見ればただ黙つてているようにしか見えないが。

アクセル「・・・急に黙つたな。

どうかしたのか？」

ジョッショ「2人で会話しているんですよ。

・・・まあ、よくある事です。

・・・リム、大丈夫か?」

リム(リアナ)「いやさ。

クリスが代わらうかつて言い出したんだよ。  
さつきから空氣悪いしね。」

クスハ「ご・・・ごめんなさい・・・その・・・」

リム(リアナ)「クリスにも言つたけどある程度は想定していたから大丈夫だよ。」

ジョッショ「いや、オレが悪かったな・・・

やはりまだ黙つていたほうがよかつたかもな。」

リム(リアナ)「それは違うよ。アタシは今話せてよかつたと思っているよ。

後々面倒になるんだし、ハツキワさせたほうがいいじゃない?」

ジョッショ「お前がそなうなら・・・それでいいが・・・」

リム(リアナ)「それに、アニキ言つてたじやない。

どこかに隠れていれば嫌なことはしましても良いかもしねない。

でもそれでいいのかつて。」

ジョッショ「・・・・・・」

リム(リアナ)「アタシは嫌だよ。

そんな生き方はしたくないよ。」

アクセル「・・・随分と勝気な奴だな、こいつは。

それに根性もあるな。」

リム(リアナ)「でも、アンタ達は隠れたほうがいいんじゃない?

さつきの話、ずっと聞いていたし、アンタ達の事も見ていたけど、

お尋ね者か何かじゃないの?」

アルフイミイ「・・・おまけに結構鋭いですね。」

リム（リアナ）「いつも話している間にも軍はどんどん近づいているよ。」

「どうするの？」

アクセル「……察しの通り、俺達は軍の人間ですらない。  
と言つより元々連中の敵だったのさ、これがな。

それにベーオウルフの事もある……」

奴を探し出して決着をつけねばなるまい。」

ジョッシュュ「……どの道、ここは去るしかない、と言つ事ですか。

アルフィミイ「わたしと致しましては、できれば皆さんと一緒にいたいですの……」

今回の件、アクセルとわたしだけでは限界がありますので。」

カザハラ「こちらとしては出来るだけ戦力が欲しいところだから利害は一致するが……」

アクセル「それができれば苦労はせん。」

「……とつとど行くぞ、アルフィミイ。」

ジョッシュュ「でもあては無いのでは？

彼らの所在の手がかりはゼロなんですから。」

アクセル「……アルフィミイは、幽かだが連中を感じ取ることが出来る。」

以前もそりやつてイエッジトを追跡していた。」

ブリット「成程……あの時はそりやつて……！」

アルフィミイ「心配御無用！

「というやつですの。」

アクセル「……それで……連中の居場所は分かるか？」

アルフィミイ「……東……そつ……にこれからずっと東

の方……」

アクセル「相変わらず漠然としているな、こいつは。」

「もっとはつきり分からんのか？」

アルフイミィ「分かりませんの・・・」

彼らも以前とはまた変わってしまいましたし。」

ブリット「ここから東か・・・

・・・ちょうどビラングレー基地があるな。」

アルフイミィ「あら、偶然ですね

ならここはひとつ予定を変更して皆まとめて一緒に

と言つ事で・・・」

アクセル「それが出来んから単独行動するんだろうが・・・

大体お前・・・本当に東なのか?

単に楽したいだけじゃないのか?」

アルフイミィ「別に信じなくても構いませんのよ?」

北でも南でも西でもお好きなほうに・・・

でも・・・カピカピに干からびて野垂れ死んでも知

りませんから。」

アクセル「・・・信じるも信じないも、オレにはお前の勘意外にアテなど無い。」

それに野垂れ死になど真っ平ゴメンだ。」

アルフイミィ「ふふ・・・

分かつてればそれでいいですの。」

ジョッシュ「(苦労してるんだな・・・彼も・・・)」

アルフイミィ「と言うわけで、私達のほうはよろしいですの。

あとはそちらのじ都合がよろしければ・・・」

リム(リアナ)「えーっと・・・もう一度確認するけど、

あんたたち一応お尋ね者なんだよね?」

アルフイミィ「まあそう言えなくもないようなあるような感じです

の。」

アクセル「・・・以前は敵対関係にあつたが、今はこいつたはその意志は無い。」

だが向こうは聞く耳持たん・・・といったところだな。」

リム(リアナ)「ラングレーって言つたら北米最大の基地じゃない。」

鴨が葱背負つて鍋に飛び込むようなもんじゃ……

「ブリット」・・・あれ？それって鴨じゃなかつたっけ？

クスハ「えーっと・・・確か燕だつたような・・・」

リム（リアナ）「そ、そう言わると、何か自信が・・・」

アルフイミイ「ふふ・・・三人とも間違いですの・・・」

正解は・・・・・番組の最後

リム（リアナ）「ち、ちょっと今教えてよ！」

「気になるじゃない！」

アクセル「鴨で合っている・・・

と言つより茶番はそのぐらいにしろ。

俺達がラングレーに出向くのは元々無理な話だ、これが

な。

アルフイミイ「むう～・・・」

カザハラ「いや・・・あながち不可能じゃないな。

君らの人相は殆ど割れていな。

それに2人とも、データ上では既に死亡扱いになつてゐる筈だからな。」

ジヨッショ「なら話は簡単ですね。

こいつで個人情報をでつちあげるだけで済みますから。

「カザハラ「それに、君達がいればこちらとしても助かる面が多そつだ。」

アルフイミイ「あら・・・なんだか無理じゃないみたいですね。」

アクセル「・・・本気か？」

「こいつはともかく俺は・・・」

カザハラ「本気も何もこっちから依頼したいぐらいだ。

滅多にない機会だからな。」

エリ「私としてはあなた達の機体のデータが

超機人解析の何らかの糸口になるのかと思つています。」

ソフィア「それに、あなた達に敵対する意思は無いのであれば、

申し出を拒む理由は無いわ。」

クスハ「た、確かにそうですが・・・」

ブリット「いや・・・でも上層部がなんて言つか・・・」

ジョッシュ「まあ、誤魔化せねばあとはどうにでもなりますよ。

バレたときには巻き込むなり弱みを握るなりして口を封じれば良いだけの話ですから。」

ブリット「（い、今・・・さらっと凄い事を言つた気が・・・）」

アルフィミィ「じゃあ、わたし達もじこりしょにと言つ事で。

おひとつよろしくですの。」

ジョッシュ「ですが・・・二人が協力者という事でなんとか誤魔化せても・・・

あの機体のほうは・・・

リム（リアナ）「うん・・・

あがが目印つて言つんならなおさらだよね・・・」

彼らとの同行を阻む最大の問題は、彼らの機体そのものである。彼らの機体はあまりにも目立ち、一度見たら忘れないほどの強烈なインパクトがあり、

なおかつ連邦軍にはしつかりとデータが残っているからだ。搬送するのは困難を極めるだろう。

アルフィミィ「ああ、それでしたら心配後無用ですの・・・

それ

アルフィミィの一聲で、ペルゼインは勝手に動き出し、ソウルゲインの後方に立つた。

そして、埋もれるかのようにソウルゲインと一つになつていった。

エリ「ペルゼインが・・・ソウルゲインに・・・！」

カザハラ「こいつはいつたい・・・！」

アルフィミィ「このペルゼインはアクセルの巨人の一部を使って創り上げたものです。

ですからその逆もできますのよ。」

リシュウ「器用というかなんといつか・・・」

アクセル「・・・で、どうするつもりだ？」

いくらペルゼインを隠せても、俺のソウルゲインは立つぞ？」「

アルフィミィ「それはそれ。

ちょっと分割して適当に誤魔化せば・・・

アクセル「何を言い出すかと思えば・・・

・・・ソウルゲインはそう簡単に分解できるものじゃ・・・

・

アクセルが説教をしている最中、ソウルゲインは音を立てて崩れていった。

正確に言えば各部パーツとに分けられて重力に逆らえず落ちたのだ。

さらにそれのパーツはソウルゲインとはまるで違う・・・どちらかと言えばグランガスト系の色彩に変わっていた。一同は・・・特にアクセルは開いた口が塞がらなかつた。

ジョッシュ「・・・出来ましたね、分解。」

ブリット「丁寧に擬装用のペイントまで・・・」

カザハラ「これなら・・・まあ、運べるな・・・」

アクセル「おい・・・」

アルフィミィ「ああ・・・これはあれです。さつき一つになるときちょうどいと・・・」

アクセル「ハア～・・・」

アクセルはため息をつき、頭を抱えて大きくうなだれた。

ジョッショ「・・・苦労しますね。」

アクセル「お前が言うと嫌味にしか聞こえん・・・」

・・・だが彼の苦労はここから始まるのだ。

## 第4話 彼方からの落とし子 その7（後書き）

ようやく第4話完結です。

1パート一週間のペースで書き上げているつもりなんですが、中々上げられなくて自分としても辛いです（泣）

今回ばジョッショの苦労話と  
リムもとい、クリスとリアナの話です。

原稿段階ではジョッショは裏でかなり黒い仕事をしていたような事を書くつもりでしたが、書けば書くほどジョッショじゃなくなるのでそのあたりは没にしました。

アクセル達をビリヤつて続投するか悩んでいましたが、ペルゼインの力とアルフィミーの駄々を持つてすれば造作も無い事でした（笑）この辺りはかなりツツコミ所満載なのでツツコミたい方は遠慮なくツツコンで下さい（＾＾・）

次回は舞台を変えて宇宙の予定。

前々回出てこなかつた彼らが出てくる予定なのでお楽しみにノシ

## 第5話 a 交わる『刻』 その1

<????>

ベーオウルフ「ハアアアアア…」  
          フウウウウ…。  
          アクセルウウ・・アルマーメ…。  
          だが、次こそは…・この手で…。  
          ククク・・フフフフ・・・ハハハハハ…。」

男は激しい痛みと怒りに襲われていた。

だがその顔は不気味な笑みを浮かべながら古傷を掻き鳴っていた。  
人の力を超えた彼の指は容赦無く彼自身の肉を抉り、骨を砕き、血  
と髄液が床一面に滴る。

だが彼はやめようとはしない。

仇敵に再び巡り会えた歡喜とそれへの殺意がそつさせるのだ。

? ? ? 「・・・そのくらいにしておきな、大将。  
      見ているこつちまで痛くなる。」

ベーオウルフ「・・・！？」

おまえ・・・ら・・・」

薄暗い空間、その中にいるのは彼だけではない。  
彼以外の二つの意思が存在する。

現れたのは彼と似た姿をした青年、そして数mはあるう異形の魔人  
だ。

? ? ? 2 「貴様がしでかした事は…・・・

妨害分子の排除・・・という点から見ても大きく外れて  
いる・・・」

「ま、アイツがあんたにとつてどういう奴なのかは俺達もよく分かつてゐるつもりだがな。」

ベーオウルフ「・・・ならば・・・何故?」

「おいおい・・・

あんた仮にも元軍人でおまけに部隊長さんだつたんだろう?『任務に私情を持ち込むな』って下つ端だつた俺も散々聞かされたモンさ・・・

ま、俺達やもう軍人でも人間でもないんだけどな。」

ベーオウルフ「・・・

「確かにあれらは・・・我等にとつて障害に成りえるかもしけぬ・・・」

「だが俺達にはそんな余裕も時間も無い事ぐらい解つているだろ?」

「破滅の刻は迫りつつある・・・

「その前に我等は本懐を・・・」

ベーオウルフ「そのために・・・

邪魔者を・・・田障りな奴を・・・叩き潰して何が・

・・ワるイ?

奴は・・・ヤツG a・・・Y aツの・・・!」

「ハア・・・

頭冷やせよな、大将。  
思考が乱れてるぜ?」

「我等は・・・未だに完全ではない・・・特に貴様は・・・

ベーオウルフ「それが・・・な・・・ん・・・・・・」

「

男は気を失い、そのまま倒れた。

傷口から溢れ出る大量の血液のせいだろうか。  
否、原因は別にある。

？？？「あーあ・・・またぶつ倒れちまつたか  
世話焼かせるなよな・・・つたく。」

青年がそう呟くと、それに応えるかのように床が蠢きだし、  
倒れた男を飲み込んでいった。

？？？2「また・・・か・・・

もしや・・・我の・・・？」

？？？「・・・と言ひうより奴自身が耐えられないだけさ、

むしろあなたのおかげで大分マトモになつたんだぜ？

俺もかなり安定してきているしな。」

？？？2「・・・彼奴を・・・どうする？」

？？？「あの様子じや当分は戦力として期待できないな。

つたく幸先悪いたらありやしねえぜ・・・」

？？？2「だからといって・・・彼奴を切り捨てるわけにもいかぬ。

「

？？？「回復するまでは、アイツが持つってきたアレの調整でもやつ

てもうつさ。」

？？？2「ならば・・・次は？」

？？？「元からそのつもりだ。

頼むぜ、だが無理はするなよ。  
なにせこれは・・・」

？？？2「無論、解つていい・・・」

<地球連邦軍北米支部ラングレー基地 格納庫>

カイ「お久しぶりです、カザハラ所長。

遠いところ、わざわざ呼びつけるような真似をして申し訳あ

りません。」

ジョナサン「いやいや、これがお世話になるよ。

なにせ、研究所があのザマでは、ね。」

「…・・報告はこっちの方にも入っておりますで」「それこままです。」

ラトウー「龍虎王の田覚め、新たなるアイNST、そして迫りつ

つあるもう一つの勢力・・・」

リシュウ「農いが圃のもなんじやが、全く持つて謎だらけじやわ

い。」

アラド「・・・そうこや龍虎王といえば、

クスハ少尉とブルックリン少尉の姿が見当たらぬんスケ

ど?」

ジョナサン「彼らは元々、別任務の合間にテスラ研に来ていただけ

る。」

向こうの指令の鶴の一聲でトンボ返りだ。

龍虎王も一緒にね。」

ラトウー「ですが少尉達はともかくとして、龍虎王も行つてしまつてはデータ採取が・・・」

ソフィア「私達も一応は反対したのだけれど・・・」

ジョナサン「データ採取など任務完了後でかまわんだろ?が…」  
つて言られてそれで終わりさ。」

カイ「(ふむ・・・

あのケネスといえど、少々横暴だな。

その『任務』とやらが余程重要なのか・・・

それとも・・・)」

ジョナサン「まあ迎えが来るまで出来うる限りのデータは探つておいたから、

そつちのまつは眞面それでやるしかないな。

問題はこちらでの仕事だが・・・」

リシュウ「トリプルXクラスの機密とはのつ・・・

儂らが呼ばれたということは何かしらの機体開発かEO

T関連のものか?」

カイ「・・・それについては後ほど別室においてお話をいたします。

そこで会わせたい人物もありますので。」

ジョナサン「ほつ、奇遇ですな。

実は私達のほうからも会わせたい人物がありますな。

ラミア「会わせたい人物・・・?」

リシュウ「ああ、儂もおぬしらも知つてある奴らじやわい。」

カイ「では博士、これより客室の方へ案内いたします。

それとラミアと他の皆は彼らを連れてきてくれ。」

ラミア「了解しちゃつたりですのことよ。」

カイ少佐は博士達を客室へ案内するために格納庫を後にした。

ラミア「・・・では、我々も行くぞ。」

アラド「うん・・・」

ゼオラ「どうしたの、アラド?」

アラド「いや、リシュウのじいちゃんが知つていて・・・俺達も知つている奴・・・って誰かな~って。」

ゼオラ「クスハ少尉達はここには来ていないし・・・」

ラトゥー「名簿にも、知つた名前は無いわ・・・」

アラド「うん・・・一体どこの誰っスかね?」

<ラングレー基地 内部通路 >

アクセル「・・・物資搬入の手続き、終わったぞ。」

ジョッシュ「ありがとうございます、おかげで助かりました。」

アクセル「そつちのほうは？」  
ジョッショ「問題ありません。」

ジョッショは2枚の認証カードをアクセルに渡した。

アクセル「（ほつ・・・？）」

ジョッショ「・・・あなた達の許可証です。」

一応偽名で登録したので、注意しておいて下さい。」

アクセル「フ・・・忠告すまんな

だが、生憎そういうのは慣れているのも、少しつが。」

ジョッショ「あと、機密レベルは博士達のワンランク下のダブルAです。」

アルフィィミー「同じではありませんのね？」

ジョッショ「流石にトリプルAは軍でも佐官、民間でも博士達のような重要人物でないと無理だからな。」

オレやリムだつてデータ弄くつてなきゃ手に入らなかつたよ。」

リム（リアナ）「じゃあ、わたし達は博士達とは別行動つて事になるの？」

アクセル「どうだかな。

俺達は一応この度の事件の関係者だ。

何かしらの都合で呼ばれる可能性は十分にありえる。」

ジョッショ「そして俺達の立場は書類上、博士達直属のアシスタンストと書かれてる事になっている。」

それにワンランク差なら上の承認さえあれば博士達と同席も可能だ。

その辺りの根回しならカザハラ所長がなんとかしてくれるだろ？。」

リム（リアナ）「つまり・・・特に問題ないって事・・・

・・・でいいのかな？」

アルフイミイ「私に聞かないで欲しいのです。」

アクセル「・・・それにしても手回しが良いな。

データ改竄をはじめとして、ここへの手続きまで大したものだ。」

ジョッシュ「博士達の協力もありましたからね、以外とすんなり通りました。

それよりも、こちらにあなたの知り合いがいると聞いたもので

オレとしてはそちらが多少気がかりでしたが・・・  
幸い、あなた達のデータ更新はされていなかつたので助かりました。」

アクセル「知り合いでと・・・？」

ジョッシュ「ええ、カザハラ所長から聞きました。

特殊戦技教導隊所属、ラミア・ラブレス少尉・・・

現在、任務で他のメンバーと共に、このラングレーに駐在しているそうです。」

アクセル「何だと！？」

アルフィミイ「ラミア、というと・・・

あのございましたりでっしゃるうの人ですか・・・  
ちょっと会うのが楽しみだつたりしちやつたり『』ぞ

いますのです」

リム（リアナ）「な、何語なのそれ？」

アクセル「つくづくあいつらとは縁があるな、こいつは・・・

一応変装しておいて正解だったな。

話の前にバッタリ会いでもしたら流石に困る。」

リム（クリス）「変装つて・・・

研究用の白衣に着替えてダテ眼鏡を掛けて、

髪をオールバックにしただけじゃない。  
似合っていない上にモロバレだよ。」

ジョッシュ「普段と違う髪型や服装に変えているんだから十分『』変

装』だよ。」

リム（リアナ）「え……？」

特殊メイクとかラバーの仮面とか要らないの？」

ジョッショウ「……どこの怪盗だよ。

あとオレ達や博士達のいないところで口口口口代わらないように気をつけてくれよ。

一々説明するのが面倒なんだからな。」

リム（クリス）「はは。

分かつてるよ、アニキ。」

アルフィイミィ「アクセルのそのダサイ格好は別として……わたしまで着替える必要は無かつたと思つのです。ばれちゃってるの声だけですし。」

アクセル「さりげなく俺への罵倒が入っていたのはこの際聞き逃すとして、

お前が普段通りの格好で基地内をウロウロするのは流石にマズイだろうが。」  
ジョッショウ「100歩譲つてもパイロットスーツには見えませんしね。」

アルフィイミィ「正直……ちょっと動きづらいのです、コレ。」  
アクセル「それしか着れる服が無かつたんだから仕方ないだろ。しかし、まあ……なんと言つか……」

アルフィイミィの普段の服装は一般世間から見てもアバンギャルドな部類だ。

人前で出歩こうものならば、いやおうなしに田立つ。ならべくなら服装を変えたほうが動きやすい。だが女性が勤務しているとはいえ、

普通、研究所のような場所に、彼女が着れるサイズの服……つまり子供か小柄な女性の服はまず無い。

・・・しかしテスラ研には1人だけそれを可能とする人物がいた。

案の定、研究所の自室にそれを大量に持ち込んでいた。

おかげで着る服には困らずにすんだ。

・・・全てがフリフリの衣装だったといつて田を瞑れば。

アクセル「・・・なんでテスラ研にこんな服なんかがあるんだ？」

ジョッショ「・・・なんでもとある研究員の趣味だそうです。」

アクセル「なんだそりや・・・」

その人物の名は、ツグミ・タカクラ。

他人をフリフリの衣装でドレスアップするのが趣味のプロジェクト

TDのチーフである。

リム（クリス）「でもさ、すつぐ似合つてると思つよ。」

アルフィミイ「フフ

それはどうもですの」

アクセル「（はあ・・・

幸先悪そうだな、こいつは。）

＜ラングレー基地 地下監禁室＞

ラミア「・・・入るぞ。」

ハーケン「・・・よう、マイシスター。

今日はまた一段と綺麗だな。」

ラミア「綺麗・・・？」

10番台ナンバーの新陳代謝は人間のそれとは異なり・・・

ハーケン「・・・挨拶だ挨拶、一々真面目に答えられるといつちの身が持たん。」

ラミア「む？」

普通・・・逆なのでは？」

ハーケン「なにせこつちはお前と同じツラした不真面目の物臭と20年付き合っていたからな。

調子が狂つて仕方ないのか、これがな。」

ラミア「そ、そうか・・・

（いかんな・・・どうも慣れん。）

ハーケン「・・・ヒルギ、この間お前の仲間に頼んでおいたブツの件なんだが、

手ぶらの所を見ると、どうやら許可が下りなかつたようだな。」

ラミア「ブツ・・・？」

ハーケン「いや、こちとら検査以外は暇ですることが無いからな。

何かしら暇を潰せるものを頼んでおいたんだが・・・  
・・・もしかして聞いていないのか？」

ラミア「アラドが話していた嗜好品の件か。

それならば少佐が指定する範囲のものでよければ構わない  
そうだ。

現に、何人かはもう既に幾つか注文をしている。

ハーケン「成程・・・

という事は他の連中も俺と同じ様に独房暮らしつて訳か。

「ラミア「・・・正直、上からの命令とはいえ、すまないと思つてい  
る。」

ハーケン「まあ、俺は別に構わないさ。

日当たりだけは最悪だが、メシは不味くはないし、  
ベッドの寝心地もまあいいほうだ。

ただ・・・

ラミア「・・・？」

ハーケン「いいかげん仲間と話がらせててくれないか？

こう長い事顔を会わせていないと色々と不安でな。  
でもどうせ、そういうのは・・・

ラミア「いいだろう。」

ハーケン「無理だつて事は百も承知・・・  
・・・つて今なんつた?」

ラミア「余命を許可する、と言つたんだ。

元より、今日来たのはそのためだ。」

ハーケン「これはまた・・・

一体どういう風の吹き回しだ?」

ラミア「詳しいことは後で話す。  
表に出でもらおう。」

ハーケン「へいへい・・・

解りましたよ。」

ハーケンは渋々部屋を後にした。

＜ラングレー基地 ブリーフィングルーム＞

ゼオラ「あ、ラミア少尉。」

アラド「お疲れ様っス!」

ラミア「今、到着した。」

・・・コレで全員か?」

ラトウニー「・・・はい、ハーケン・ブロウニングを含む以下10  
名、全員揃っています。」

神夜「あ!ハーケンさん!!

お元気でしたか?」

ハーケン「久しぶりだな、神夜。」

それに皆も、な。」

アシエーン「お久しぶりで」せんす、艦長。

中々来ないのでつきり死んだものかと。」

ハーケン「その毒舌も久々だと不思議と嬉しいもんだな、こいつは。

」

リー「まあ、ハツキリ言つて私もアシエーンと同じ意見でしたが。」

鞠音「右に同じで。」

キュオン「キュオンもー！」

ハーケン「・・・つたぐ、

お前らつて奴は・・・」

錫華「人間、死んだほうが世のためといつ事もあるのだぞ？」

チヤラの介よ。」

アラド「なんか・・・久々なのに散々な言われようつスね、ハーケンさん。」

ハーケン「お慰めどうも・・・

だが、いつもの調子のようだ安心したよ。  
俺が思つていたよりずっと元気そだしな。」

鞠音「艦長を待つてゐる間、皆に一通り聞きましたが検査内容は大差なかつたそうです。

具体的には血液検査と身体のスキャニング、それに尋問が日  
に数回程。」

エイゼル「それはこの世界において異形である我らに対しても同じ  
だった。」

リー「検査にあたつた学者や医師達は少々面食らつてはいたようだ  
たが・・・

それ以外の扱いはそれなりでしたからこれといつて文句はあ  
りませんな。

あるとすれば生きた肉が食えなかつた事ぐらいでしょうか。」

神夜「私は部屋から出られなくて退屈極まりなかつたです・・・

あ、でもご飯はおいしかつたですよ。」

ハーケン「まあ、それには同意するな。」

錫華「ふむ。多少バラエティに欠けるが・・・

悪くは無かつたぞ。」

エイゼル「先ほどこの者達に聞いたのだが、我らに出された食料は全て合成モノだったそうだ。

だが、とてもそつとは思えぬ良い味だった。」

ヘンネ「・・・もし戻れたらウチの食料事情も見直したほうがいいかもね。」

キュオン「フォルミッドヘイムの合成レー・ション、あんまり美味しいしないしね。」

ハーケン「なるほどな・・・

んじゅ 部屋割りはどうだった?

俺は地下の独房だったが。」

鞠音「多少の差はあるけど似たようなものです。

検査と尋問以外部屋から一步も出られない軟禁状態だった事には変りません。」

ハーケン「・・・ん?

俺はてっきりドクターは解析の手伝いをしているかと思っていたが・・・?」

鞠音「勿論、私としてはやる気マンマンでしたわよ?」

ハーケン「・・・となると、原因はアンタ達か。」

ラトナー「・・・ええ。

あなた達が持ち込んだ物品や銃火器類は、

「このスタッフだけでは手に余る代物ばかりだった・・・

だから解析は専門家を呼ぶまで一時保留といつ事になつたの。

それにはあなた達の体のほうもまだ断片的な事ぐらいしか解つていないので。」

ハーケン「成程な・・・となると出来る事は尋問と軟禁ぐらいか。

お互に暇な一週間だったってわけか、こいつは。」

ゼオラ「ちょっとと瘤に障る言い方だけど、その通りだわ・・・」

アション「ちなみに正確には6日と11時間です、艦長。」

ハーケン「お前は相変わらず一々細かいな、アション・・・」

カツツヒ「ちょっとアンタ達、おしゃべりはその辺にしどきなさいよ。」

そもそも本題に入らないと、コッチの人たちが困るでしょう?」

向こうはオシゴトなんだし。」

アション「私はいつも真面目ちゃんですが?」

ハーケン「どの口がいつてるんだ、どの口が?」

エイゼル「さて、我らを一箇所に集めたその理由、聞かせてもらいうか?」

・・・」の世界の兵士達よ。」

ウニニア「・・・理由は至極単純だ。

先程テスラライヒ研究所から博士達を含むスタッフと機材が到着した。」

ハーケン「つまり、本腰を入れて調査に入る・・・と?」

ゼオラ「・・・そう。

でも機材の設置にはまだ少し時間がかかるの。  
だから・・・」

カツツエ「その間に博士達やスタッフにアタシ達の事を色々と知つてもうつたほうが仕事が早く済むわね・・・

そしてそれを手っ取り早く済ませるには。」

ハーケン「オレ達と直接会つて話し合つ・・・つて事か。」

ラミア「理解が早くて助かる。」

錫華「とはいっても・・・

わらわ達、この数日間で話せることは全て話してしまったぞ?」

今更何を話せばよいのやら・・・」

ラミア「博士達の前で質問を挟んで話してくれるだけでいい、これまでの経緯を含めたものもな。」

キュオン「え〜!?

それってなんかメンドくさい!」

ハーケン「百聞は一見にしかず、百見は一触にしかず……って昔から言うだろ?」

神夜「え、ええっと……つまり……?」

アシェン「……つまり女性のバストはサイズを聞くよりも直に揉んだ方が良い、

と言つ事でござりやがりますね、艦長。」

ハーケン「……概ね正しいが、俺に同意を求めるな。」

アラド「(否定はしないんスね……)」

ラミア「ちなみに会合は我々の監視下の下で行う。

何か質問はあるか?」

ハーケン「特にこれと言つて無いが……

じゃあせつかくだし、一つだけいいか?」

ラミア「なんだ?」

ハーケン「その……

あんた達が前に話していたマリオン博士って人も来ているのか?」

鞠音「ああ、私にソックリという方でしたね。」

ラミア「残念ながらマリオン博士はこちらには来てはいない。

それに博士はこの手の問題においては専門外だ。」

エイゼル「妙だな……

ナハトにアーベント、それにファンタムと似た機体がこの世界に存在しているとしても、

あれらは我らの技術で再現したたるもの……

カツツエ「技術者じやなくても、じつとしていられないものなんじやないの?」

アラド「前にも似たような」とがあつたんスけど。

思いつきりガン無視キメてたぐらいスから……

多分今回も……」

鞠音「・・・成程、つまり彼女は自身の能力、そしてこの世界の技術力に絶対の自信があるのですね？」

フフ「・・・倒しがいがありますわ。」

ハーケン「・・・倒してどうするんだよ。」

リー「その話から察するに、

私たちのような輩など存在 자체真っ向から否定しそうですね。」

ゼオラ「いえ、そこまで酷くは・・・」

錫華「だが、互いのために無意味な衝突は避けるべき・・・」

この度の会合もそれを踏まえた上で行つのであります。」

ラミア「無論そのつもりだ。」

博士達には会合の前に諸君らの存在を含めて今回の件を一通り説明する。」

アシエン「では、それが終わるまで我々はここで待機・・・といふところか。」

キュオン「それって、どのぐらいかかるのかな?」

カツツエ「その辺は博士達のさじかげんじやないの?」

ひょっとしたら何時間もかかつたりして。」

神夜「それだと・・・退屈極まりませんね。」

ハーケン「・・・ま、気長に待とうぜ。」

鬼や蛇が出るわけじゃあるまいし、な。」

## 第5話 a 交わる『刻』 その1（後書き）

大変長らくお待たせいたしました（＾＾；）

前回から実に、2ヶ月と1週間と2日ぶりの更新です（汗）  
仕事や体調不良のせいでなかなか書けないせいもあり、遅れに遅れ  
てしまいました。

現在、仕事等の都合で以前のように数日や一週間で書き上げること  
が不可能に近くなつてしましましたので、これからは10日あるいは  
は一週間に一本のペースで更新していくつもります。

宇宙編の予定でしたが中々構想が纏まらず、地上編の方を先に進め  
ることにしました。

こちらはハーケン組とハガネ（ヒュー）組の話を中心に書く予定  
です。

## 第5話 a 交わる『刻』 その2

「ラングレー基地 客室」

ジョナサン「ふむ・・・成る程、ね。

これはまた随分と風変わりな連中が来たもんだな。」

リシュウ「それにしても獣人に魔物、はては鬼か・・・

まるで御伽噺から飛び出してきたような輩じゃのう。」

エリ「しかし驚くべきは彼らがいた世界・・・

あらゆる種族や技術が混ざり合った世界はまさに無限の開拓地・・・！」

ソフィア「実に興味深いですが、一方で彼らが恐ろしくもあります。

彼らが協力的なのがせめてもの救いですが・・・」

カイは博士達にこれまでに調べ上げたハーケン達のデータと、これまでの経緯を全て話した。

これまで数々のEOTを解析し、その力を目の当たりにしてきた彼らではあるが、やはり動搖は隠せないようだった。

カイ「（・・・まあ、いくら博士達といえどもこの反応は当然か。）ここ数年で非常識のモノを見知り過ぎたとは言え、彼らの存在は一際異質だからな・・・」

ジョナサン「つまり我々の仕事は彼らの調査、と言つ事か・・・

私が言つのもなんですが、上層部はこの件をどうとうえておいでで？」

カイ「詳しい事は審議中だそうですが修羅の事もあり、少々過敏になつておりますな。

彼らは調査や移動の際には手錠の着用を義務付けされており、

調査以外は部屋に軟禁。

互いにコンタクトを取ることが出来ないようこの部屋はバラバラ。

スケジュールも分単位で調節し重複しないようにこつた感じで・・・

ジョナサン「・・・彼らには気の毒としか言いようが無いな。

調査報告によれば、あの地上戦艦には転移装置らしきものは積んでいないそうじやないか。

他の積荷は彼らが言っていたパーソナルトルーパーのレプリカ以外では

武器の類が幾つか、それと日用雑貨らしきものと食料がほんの少し・・・

まだ詳しくデータを探つてみないと断定できないが、証言通り不慮の事故でやってきたとみて間違いなさそうだな。」

ソフィア「ええ。

彼らの身体能力や技術力を持つてすればここから脱出することも

そう難しいことでは無い筈。

にも関わらず素直に従つているという事は自身の状況下を理解し、

そして自身の力に溺れていらない証拠・・・

エリ「・・・少なくとも、彼らは我々に近いメンタルであると考えられますわね。」

ジョナサン「それ故に彼らの処遇は慎重にせねばなりませんな。

・・・なにか対策は?」

カイ「彼らへの対応や解析に関する事柄は第一発見者である我々に一任されましたが、

いかんせん、待遇に関する件は上層部の許可が中々下りずに

苦労しております。

この間、ようやく嗜好品所持の許可が下りたばかりでして。」

リショウ「おぬしはどうも苦労が絶えんのう・・・・・」

「カイ「・・・もう慣れっこですよ。」

ソフィア「ですが彼らの保護という観点からみれば

教導隊を選択したのはベターな判断といえますね。

少佐達はこれまでに何度も異邦人や異星人と実際に接触をしてきたのですから。」

カイ「不本意ながら・・・そうなりますな。」

エリ「ところで今彼らは・・・?」

「うこうした場合、コントラクトは早ければ早いほどいいのですが。」

リショウ「善は急ぐに越したことはないしのう。」

カイ「そうおっしゃられると思い、現在ブリーフィングルームにてラミア達の監視の下、

待機させております。

もしよろしければ、これからご案内いたしますが・・・・・」

ジヨナサン「ふむ。ではそうさせてもらうとじょう。

何より、女性を待たせるのは良くないしな。」

◀ラングレー基地 ブリーフィングルーム▶

カイ「・・・というわけだ、今からそちらに行く。」

ラミア「了解しからいましたりなのです。」

ラミアはカイからの通信を受け、それを壁に伝えておつとした。  
だが・・・

「ラミア」「アラド、カイ少佐からの連絡があつた。

もうすぐこちらに来るそうだ、だから……」

アラド「わ、分かつてゐるつス！

で、でもこの勝負だけは……！

この勝負だけは……！」

ハーケン「どうやら、もうすぐリミットのよつだな。

ここでおりてもいいんだぜ？」「

アラド「負けっぱなしじゃ男が廢るつス！

それに、こういづのは最後に勝つたほうがカツコイインス

！……」

ハーケン「フッ……

その強がり、いつまでもつかな……？」

「ラミア」「この一人……何をそう意固地になつていてるのだ……？」

話は十数分前に遡る

アラド「あ、そうだハーケンさん。

ついでと言つては何スケビ、これ渡しつくッス。」

ハーケン「ん……？

ああ、コイツか。ありがとな。」

神夜「何々？

なんですか、それ？」「

ハーケン「何つて、暇つぶしに頼んでおいたモノだよ。

お前らも何かしら頼んだと聞いてたんが……？」

エイゼル「嗜好品の件か……

私は特に頼まなかつたな。」

ヘンネ「あたしも特に。」

ハーケン「でもいくらアンタらだつて暇ぐらい持て余すだろ？」

特にこんな状況じゃあ、な。」

エイゼル「・・・検査や尋問以外は軽い睡眠をとつていた。

極力、体力は消耗せぬほうが良いと考えてたのでな。」

ヘンネ「あたしはただ単に選ぶのが面倒だつただけさね。

別に無くとも困るモンでもないしさ、

メシが食えて寝る場所さえあれば文句はないさね。」

カツツエ「あらあら、相変わらずつまらない人達ねえ。

もつと人生楽しまなくつちや。

ちなみにアタシはファッショニ系の雑誌頼んだわよ？」

神夜「・・・流行りの服ですか。

そういうのちょっと気になりますね。」

錫華「ふむ。

わらわ的にはこの世界の服は見たところあまり好みではない

が・・・

まあ、流行りを知つておくに越したことはないのう。」

キュオン「ずーっとこの格好じゃつまんないしね。」

ゼオラ「（こ）ういうところは普通の女の子みたいなのよね・・・」

カツツエ「残念ながらまだ手元に届いていないのよねえ・・・

でも、そのほうが楽しみが増すつてものよねえ

キュオン「はい！はい！はい！」

キュオンはお菓子を頼んだよ～

甘いのい～っぱいでもう大満足

神夜「私もお菓子頼んだんですけど、ちょっとだけ悲しかったです・

・

きんづばもお饅頭も無いなんて・・・

錫華「その辺りは激しく同意するのう。

わらわ的にも大不満であるぞ。」

ゼオラ「な、無い事も無いんだけど、この辺りじや売つてないし、

取り寄せるとなるとまた別の許可也要るし・・・

・

アシェン「道は果てしなく険しい事ですね。」

神夜「とほほ・・・・

残念極まりないです・・・・

ハーケン「カグラアマハラガールズには少々厳しかったようだな、こいつは。」

リーヴ「そういう点は諦めるしか無いでしょうな。

私も食事に出てきた肉が合成品だったという時点で・・・・

ラトナー「・・・・うん。

天然食材はとても高いの。」

リーヴ「やはりですか・・・・」

神夜「アシェンさんは何頼んだんですか?」

アシェン「別に何も。

私はこの一週間爆睡しておりましたので。」

神夜「い、一週間も・・・・!?

いくらなんでも長寝にもほどがあります!」

鞠音「・・・長寝というのは例えですよ、楠舞姫。

大方、アシェンの機能を停止させてたのでしょうか?」

ラミア「その通りだ。

アシェン・ブレイデルは白兵戦特化の初期型Wシリーズ、いかに本人が抵抗の意思が無くとも野放しにする事はできん。

よつてこの一週間は機能維持以外のシステムをオフにしていたもつたまでだ。」

神夜「ちょっとそれってあんまりなんじや・・・・!?

アシェン「そこまでです無駄乳姫。

私のような戦闘アンドロイドに対しては当然の措置です。実際、今もプロテクトがかかっていて戦闘モードへ移行できないのであります。

何故かコードDTDも発動できませんし・・・・

錫華「それで妙に大人しいのだな・・・・

「ハニア、「・・・その不具合は恐らくセーフティープロトクトに私のものを流用したからだろ?」

初期型と後期型ではプログラムに多少の差もあるだろ?」  
私はコードDTDを殆ど使用した事がないからな。」

鞠音「ちょっとあなた・・・

アシェンの後継機のくせに生意氣ですわよ?

彼女は24年間、私がこの手で整備してきました。  
あんなところからこんなところまでもう隅々まで解析しつくして  
おりますので、

その気になればそんなプロテクトの一いや一つ作ってやりますのに。」

ラミア「協力的な発言は感謝する。

私とてやむを得ずやつた事だ・・・

上層部の許可が下りなかつた以上、こいつあるしかなかつた  
のだ。

アシェン「いや・・・むしろ、」のよつな形でも

この場に引き合わせててくれた事を感謝する、ハニア・ラ  
ブレス。」

ハーケン「・・・おまえの口から感謝なんて言葉、初めて聞いた気が  
がするぜ、アシェン。」

アシェン「何かおっしゃりやがりましたか、白髪頭?」

ハーケン「いや、なんでもない。」

ラミア「(アシェン・ブレイデル・・・

お前は不思議な存在だな・・・

自らをアンドロイドと割り切つていながらも、一方で人  
間らしくもある・・・

私は・・・どうなのだろうな・・・」

鞠音「まあ・・・アシェンの件は一万歩譲るとしても、  
私のほうはどうにかなりませんの?」

「ハニア、「そればかりは我々にはどうにもならないな。」

ハーケン「……一体何を頼んだんだ、ドクター？」

鞠音「何つて、あのロボット達に関する情報ですよ？」

なのに写真の一枚も寄越さないなんて……」

ハーケン「……そりや無理な相談だな。

「ういした状況下ではその手の情報はシャットダウンつてのがセオリーだろうしな。」

鞠音「でも私だって別にダダで見せろとは言つておりませんわよ？ そちらの解析に手を貸す代わりに、という条件で申し出たのですが……」

ハーケン「……なら、なおさら無理な話だな。

さつきの話からするとこの世界では

イレギュラーの介入はならべく避けたいつてのが『』の

ルールみたいだし、な。」

鞠音「残念ですわね……」

ところで、艦長は何を？」

アシェン「見たところカードの束……」

エロエロなブロマイドといったところでしょうか。」

ハーケン「……んなわけあるか、思春期のガキじゃあるまいし。

トランプだ、トランプ。」

神夜「あれ？」

ハーケンさんつて確か自分のとらんぶ持つていませんでしたつけ？」

ハーケン「あれはカーデ型爆弾だ。

今頃は他の武器と一緒に解析でもされてんだろうな。

一応普通もあるんだが、ツァイトに置き忘れちまたしな。」

ラミア「……私が持つてているデータによると、トランプは通常一人以上で遊ぶものでは？」

ハーケン「忠告どうも、突っ込みスター。だが情報不足だな。

一人用ゲームもあるのさ、こいつが。

キャンフィールド、クロック、ペラリッシュ、etcet

「…」  
ラミア「…済まない、私には娯楽に関するデータがあまり無い  
からな。

本来、Wシリーズには『娯楽』とこの概念すらないのだが・  
・」

ハーケン「…」

ならこれから学べばいいだけの話さ、これがな。  
それに、知らないことは別に恥ずかしい事じゃないんだ  
ぜ。

ま、親父の受け売りなんだがな。」

アシエン「それに能天氣の方が長生きするといいますので。  
…と私が言つても説得力ありやしませんが。」

ハーケン「…お前は絶対長生きするぜ、アシエン。」

アラド「あ、そうだ！」

せつかくトランプもあることですし、それで俺と勝負しま  
せんか？」

ゼオラ「ちょっと！」

今は仕事中でしょ！？」

アラド「いや、このまま待つてのも退屈だし…」

ラミア「そんな理由では許可できません。」

ハーケン「俺は別に構わないぜ。」

退屈には飽き飽きしていったところだしな。」

アラド「ほら…！」

ハーケンさんだつてああいつてるじゃないツスか！」

ハーケン「それに、親睦を深めるためのレクリエーションは大切だ  
ろ？？」

ラトゥー＝「確かに一理あるわ…」

ラミア「…い、いいだろ？？」

だが博士達が来るまでだ。

それから先は少佐の管轄に入るからな。」

アシヒン「なんやかんだで結構話が解りやがるですね、ハリハリハリ。

三國志

「……の雰囲気はどんでもしかんな……」  
調子が狂うというか・・・乗り気になつて

か・・・(」

ハーベン「オーケイ、じゃあ何をやる？」

スピード? セブンブリッジ? ブラックジャック?

アーラ・ビーチー・ジョンソン

ハーケン「ほう・・・・！？」

自信は・・・あるようだな。

アラド「俺もツス！」

なんつたつて勝率高い方つスから！」

初夜 なんとか とにかく極まりないで

賜撫「行狀」

「血が滾つてへるの。」

娘は元気で、高いところへ登る

だが俺だつて負けるつもりは無いぜ・・・！」

かくして火蓋は切つて落とされ・・・

ラトウ一一「……水を差すよつで悪いけどルールは大丈夫なの?」

アーティ&ハーレン——あ

・・・る前にルールの相違点を細かくチェックする事になった。  
こういうゲームにはローカルルールが多く、そのため揉め事が起  
ることが多くある。

ましてやお互い違う世界の者同士、名前が同じだけで中身は全く  
違うゲームなんてこともあります。

実際のところ、揉めに揉めた。

原則的なルールは同じだったが用語の違いは勿論、ポーカー・ハン  
ドの強弱、

ジョーカーの有無、アンティにベッド等々・・・  
例を挙げればきりが無かった。

最終的にアンティルール無しのジョーカーありのワイルド・ポーカ  
ーに落ち着いた。

ハーケン「これで・・・もう文句は無いな?」

アラド「ああ・・・!」

「これで準備は整ったッス・・・!」

ハーケン「・・・さあ、ショウタイムと行こうか!!!」

かくしてようやく火蓋は切つて落とされた。

ゼオラ「ところで・・・

「なんで私がディーラーなの?」

アシエン「ここは一つ、事なきれという感じで。  
お願いいやがります。」

そして時間は現在に戻る

ゼオラ「・・・じゃあ一人とも、心の準備はいいかしら?」

アラド「勿論完了だ！」

ハーケン「当然こちらも、な……！」

神夜「ハーケンさん！

ここで勝てば全勝ですよ！」

ラトウー二「アラドはここで負ければ全敗ね……」

リー「ハッハッハ。

お二人とも華があつて実に羨ましいですね。」

錫華「片方は明らかに違うぞな……」

渋々ディーラーになつたゼオラも中々乗り気になつていた。  
ハーケンとアラド以外のみんなもいつの間にか集まってこの勝負の  
結果を知りたがっていた。

ゼオラ「ではまずアラドから……！」

アラド「スペードのフラッシュでどうだ！」

錫華「ほほう？

黒剣の同色揃いか……！」

リー「今までで一番良い手ですな。」

ハーケン「この土壇場で出してきたか……？」

アラド「ダテに実力を運でカバーしてるわけじゃないッス……！」

ラトウー二「それ、全然自慢になつていない……」

ハーケン「フツ……」

だがその運もこれまでだ、これがな。」

ハーケンは自分の手札をアラドに見せた。

アラド「何……だと……！？」

ヘンネ「キングのフルハウスか……

ホント、運がないねえ、アンタ。」

ハーケン「……さて、もうそろそろ博士達が着ちまつが、また後

でやるか？」

アラド「も、もう勘弁ッス……」

ラトゥーイ「結果はアラドの12戦12敗0勝……」

リー「ハツキリ言ってボロ負けですな。」

錫華「情けない事このうえないぞな。」

アシェン「この解消無しが……」

アラド「つづ……」

もうカンベンしてくだしやい……」

ラミア「ようやく終わつたか。」

しかしどうも娛樂といつものは良くわからんな……

一体なんの意味が……？」

ハーケン「……意味が無いからこそ意味があるのさ、これがな。」

ラミア「む……？」

どういうことだ？」「

ハーケン「ま、暇潰しにはなつただろう？」

ナゼナニガール。」

アシェン「……艦長、こちひりて接近しづらつてくる動体反応をなんばか確認しちゃいますた。」

ハーケン「お前は相変わらずテキトーだな、アシェン。」

じや、「対面といきますか。」

ラミア「（遊び……娯楽……暇潰し……無意味の意味……）

さつぱりわからんな……？」

数回ノックをした後に、カザハラ博士達を連れたカイが入室してきた。

カイ「……入るぞ。」

ハーケン「お……？」

久しぶりだな、ダンディ少佐。

元気……そうでもなさそうだな。」

カイ「む・・・

まあ、な・・・」

ツヤの無い髪、荒れた肌、目の下には隈が出来かかっている。  
疲労が溜まつてゐるのは一目瞭然だ。

アシエン「前回より疲労と老け具合が数%ほど上昇してやがります  
な。

原因は過労と寝不足かと。」

神夜「お勤めが大変なのは分かりますけど、

適度にお休みになられた方がいいですよ?」

錫華「まあ、何が原因かは知らぬが、『ご苦労なこと』であるな。」

ハーケン「・・・プリンセシーズ、

その原因はどう考へてもオレ達だろうが。」

ジョナサン「(こりや思つた以上に苦労しているみたいだな・・・

少佐・・・)」

エイゼル「・・・貴殿らが研究所から來た博士達か。

無礼をお許しいただきたい。

何分、我等はこの世界のことに関するてはよく知らないのでな。」

エリ「い、いえ。別にこのぐらには・・・」

ハーケン「・・・エイゼルの旦那、あんまり顔を近づけないほうがいいんじゃないのか?」

レディースが怖がつてうつしやるぜ。」

エイゼル「む・・・これは失礼した。」

いかに博士達が我々の事を事前に説明を受けたとはいえ、初対面である事は変わりない。

ご婦人が驚かれるのは至極当然、我的顔は少々厳ついですからな。」

ソフィア「いえ、そんな事は・・・」

ハーケン「（いやいや、あなたのは厳ついてレベルじゃないぞ・・・  
・！？）」

錫華「（もしかして）いやつ・・・天然のかえ？）」

リシュウ「（ふむ・・・

いかに姿が異形といつても、儂らとそつ違はないよ  
うじやのう。

ちと驕がしそうな輩じやがな・・・）」

カイ「とにかく、ここで的生活にはもう慣れたか？」

ハーケン「まあ、慣れる事には慣れたが、

みんな正直言つて不平不満が無い方がおかしいって感じ  
だな。

ずっと籠りつくりの生活だしな。

体が鈍つちまうぜ。」

カイ「・・・窮屈な思いをさせてすまない。

俺も待遇改善のために上層部に掛け合っているんだが・・・

ハーケン「その気持ちだけでも感謝するぜ、ミスター。

まあ、さつき軽いレクリエーションをして、気も晴れて  
いるしな。」

カイ「レクリエーション？」

ラミア「その件に関しましては後ほど私とアラドが説明いたしちゃ  
つたりしゃいますので。」

アラド「どうぞ・・・博士達の紹介を・・・

カイ「あ、ああ分かつた。

（アラドが妙にしょぼくれているな・・・何かあつたのか？）

・・・では紹介しよう。

彼らがテスラライヒ研究所から派遣された博士達だ。」

錫華「博士というからもつと味気ない輩を想像しておつたが・・・

中々どうして個性豊かであるな。」

ジョナサン「褒め言葉と受け取つてよろしいですか、錫華姫？

私はテスラ研究所長のジョナサン・カザハラです。

この度の解析チームのチーフでもありますので、

何卒、宜しくお願ひ致します。」

錫華「む・・・?

こやつ中々・・・

神夜「な、なんだか・・・素敵なおじさまですね・・・」

ハーケン「気をつけなよ、お姫さん方。

「」いういう男程、心の中はウルフと相場は決まっている。

ジヨナサン「そういう君も人の事は言えないんじゃないのかな?」

ハーケン「・・・だがウルフがいない人生なんてつまらない事このうえない、だろ?」

ジヨナサン「よくわかつてゐるじやないか。」

アシェン「・・・どうやら艦長やダディの同類のよつでやがりますのね。」

リー「まあ・・・我々こうこうタイプには慣れておりますからな。これはこれでよしとしましょう。」

鞠音「失礼・・・?」

今、チーフとおっしゃいました?」

ジヨナサン「ええそうです、ドクター鞠音。

わざわざそちらからお声をおかけになられるとは恐縮ですな。

それにしても、私のよく知つてゐるマリオン博士と瓜二つで少々驚きました。」

鞠音「・・・茶番は結構です。

それよりも解析の件ですが、私も是非参加させていただきたいのですが。」

ハーケン「おいおい、ドクター。

さつきの話聞いていなかつたのか?」

鞠音「艦長は少々黙つてください。

大体私のツアイトをこれ以上他人に色々と弄られるのは癪にさわりますので。」

ジョナサン「いいでしょ。」

神夜「返答早ツ・・・・・!」

ハーケン「・・・どういつもりだ、ドクター・ジョナサン?」

「」いう場合、俺達の介入は法度なんぢやないのか?」

ジョナサン「何、君達の物は君達の力を借りて解析したほうが手つ取り早いと思つただけさ。」

我々の力だけじゃどうにもならな」ところだつてありそうだしな。」

カイ「とはおつしやられても、上層部は許可など出さないでしょ。」

ジョナサン「何、結果さえあればバレたつて文句はいわんでしょう。」

錫華「お主、無断でやる氣マンマンであると申すか・・・・・・」

軽率といふか大胆といふか・・・・・・」

鞠音「・・・まあ、よしとしましょ。」

あなた方の力、どの程度のものか見せてもらいますわ。」

ジョナサン「ハッハッハ。」

我々の力を見くびつてもらつては困りますな。

でも重要な箇所はあなたの手を貸していただきますので

互いに持ちつ持たれつという事で・・・・・

分からぬ点がございましたら手取り足取りといふ事

で・・・・・

ヘンネ「・・・どうもああいう輩は気に入らないね。」

底が知れないっていうか、何と言うか・・・・・」

カツツエ「ま、基本的にオトメの敵ですものねえ。」

アタシも身の危険を感じちゃうわ。」

中々よきげなオジサマで・す・し」

ジョナサン「うつ・・・な、なんだか背筋が・・・・・」

あの手の輩はどうもリアクションに困る・・・・・」

ハーケン「気にせず話を進めてくれ・・・・・」

そのほうが身のためだぜ?」「

リシュウ「……ではそれをせてもいいのか。

儂はテスラ研顧問のリシュウ・トウゴウと申す。

今回は主にお主いらのモーシュンティーダ、特に剣撃系のサンプリングを担当する。」

錫華「むづ・・・

わらわは横文字はどうも好かぬ。

翁の分際で生意氣であるぞ・・・!」

神夜「錫華ちゃん、お年寄りこそはまつと優しく接してあげなこと・・・

錫華「ではそなたは分かると申すか?」

神夜「・・・い、いえさつぱり・・・」

アション「要するに乳牛姫の剣術を盗もうハラと書ひの事でござるんす。」

神夜「ああ、そりなんですか、アションをさしつむありがと・・・  
・・・つてええ!?」

錫華「おぬしは反応がちと鈍いのう・・・

じやが楠舞の技を盗もうなどと不図き十萬であるぞ!~

といふかそちに出来るものかの?」

リシュウ「まあ、無礼な事じやと分かつてあるから無理ことはこわん。

じゃが儂も一端の剣術使いじやからしてな、

他流の、特に異界の剣技となれば一目見たくもなるわい。

神夜「お爺さんも剣術使いなんですか!?」

錫華「成程のう・・・

身のこなしからしてただの翁ではないと思つておつたが。」

アション「流石はなまこ姫、伊達に年は食つていないよつざんすのね。」

錫華「そち、褒める気ないであろう?」

リショウ「そういうえばお主らは儂らと比べて寿命が長いそうじゃの。おまけに若い時期も長いとは全く持つて羨ましい限りじやわい。」

ハーケン「いや、俺や神夜なんかはこの世界の人間と大差ないさ。他の連中がちょっとばかし長いだけだ。」

でも問題は長く生きるよりも、どう生きるのか、だろ?」

リショウ「フフ・・・口が達者なのは若者の特権じやな。」

じゃが、おぬしがその台詞を言うのはもう少し生きてからじやな。」

錫華「まあ、あと一世紀は早いのう。」

リショウ「嬢ちゃんや・・・

・・・儂、六十余年しか生きておらんのじやが。」

アシエン「その辺りの問題はツッコムのもメンンド臭いのでどうかスルーの方向で。」

エリ「でもそういう問題こそ無視できるとは言い難いですね。」

あなた方の文化や風俗、倫理觀等の解析担当は私なのですか

ら。」

エイゼル「ほう?」

解析するのは我らがもたらした兵器や戦闘に関するデータばかりと思っていたが・・・?」

エリ「・・・軍という組織である以上、それらが優先されるのは致し方ありません。」

ですが、その他のことをおざなりにしていい理由にはならないと私は考えています。

あなた方の証言がこの世界のオーパーツや

ロストテクノロジー解明の手がかりになるのかもしねないのですから。」

ハーケン「オーパーツ・・・

たしか考古学関係の用語だな。

もしかしてあんたは・・・?」

エリ「自己紹介が遅れましたが、私はエリ・アンザイ。

考古学者であると同時に、ロストテクノロジー調査研究機構

のメンバーでもあるの。」

神夜「お、お若いのに凄いんですね・・・」

錫華「そち、分かつたうえで申しておるのか?」

神夜「い、いえ・・・なんとなく・・・」

エイゼル「（それにしても考古学者まで呼び出されるとは・・・

この世界、我らの世界以上に混沌としているのやもしれんな。）」

ソフィア「最後は私ね。

私はソフィア・ネート。

主に武器の材質とあなた方の身体の解析を担当いたします。

ヘンネ「身体、ね・・・

あんたらから見ればアタシらみたいな連中は大層なお宝に見えるんだろうね。」

ソフィア「・・・正直に言えばその通りよ。

本来、生体工学は私の分野ではないのだけれど、

それでもあなた達の超人的な肉体には興味が尽きないわ。

カツツエ「超人的、ねえ・・・

アタシ達の体を解析したらどんな事ができるのかしら?..」

ソフィア「・・・例えば、私達から見て驚異的ともいえる肉体の若さと長寿、そしてパワー、

その秘密を解明することが出来れば、寿命と青年期の延長化は勿論、

身体機能の強化も可能となるでしょう。」

ハーケン「・・・まるで夢のような話だな、こいつは。」

エイゼル「だがそれは、そこにいる子らのような悲劇を生む悪夢にもなりえる。」

・・・違うか？「

カイ「な・・・！？」

ラトゥー「あなたもしかして・・・-？」

ヘンネ「・・・あんたも感付いていたのかい、エイゼル？」

連中の態度を見る限りどうやら本当らしいが・・・」

ハーケン「・・・リー、まさか『匂う』のかこいつら？」

リー「・・・ええ。それはそれは。」

カツツエ「もうブンブン『匂う』わねえ・・・」

ハーケン「成程な・・・そういうわけか、スカルフェイスの『匂つ

悪夢』って奴は・・・」

アシェン「この世界も中々どうしてえげつないようだ。」

錫華「『えげつない』という言葉ではとても済まぬがな・・・」

鞠音「なんですか・・・みんな気付いていらしたのですね？」

驚くかと思つてあとで言おうと黙つていたのですが・・・」

神夜「え・・・？」

な、なんですか悲劇とか悪夢とかえげつないとか・・・  
わけの分からぬ事極まりないんですけど？」

キュオン「勝手に話進めないでよ！」

キュオンもわかんなーい！」

アシェン「・・・約二名分かつていかないアホポンがいやがりますな。

ハーケン「エイゼルの旦那・・・あんたが話してくれないか？」

俺よりもあんたの方が深く見抜いているようだし、な。  
エイゼル「・・・いいだろう。

楠舞神夜姫、キュオン、心して聞け。

アラド・バランガ、ゼオラ・シユバイツァー、

そしてラトゥー・スウボータ・・・

この三名には長期に渡る過酷な特殊強化訓練と  
薬物投与による身体強化施術の形跡が見られる。

カツツエ「付け加えて言えば精神操作の類もやつてたんじやなくて

？」

キュオン「それってつまり、

こいつら無理やり強くされたって事なの？」

カツツヒ「そゆこと……

それも本人の意思とは無関係でね。」

神夜「それって……非道い事極まりないじゃないですか……！」

ゼオラ「……どうしてそこまでわかるの？」

ハーケン「俺はお前らを見てなんとなくそんな気がしていただけだが、

後は猫科の一人の鼻とお前らの反応でおおよそ分かった。

俺としては勘が外れて欲しかつたがな。」

カイ「……いつから気付いていた？」

エイゼル「初めて会った時から違和感を感じていた。

始めは少年兵や新兵の類かと思っていたが、

それを差し引いてもその子らは兵士としては少々幼すぎ  
る……

だが身のこなしや拳動には熟練した兵士のような動きを感じた。

そしてその身体は年齢にしては無駄が無さ過ぎる……

ヘンネ「一言で言えばあんたらは不自然に見えたのさ……

他所の世界から来たアタシ達から見ても、ね。」

リー「まあ匂いの具合からみて、もうそういう事はやつていよい  
のは分かつておりますがな。」

ジョナサン「こいつは驚いた……

凄まじい洞察力と嗅覚だな。」

ラトゥー「でも、あなたが言いたいことは別にあるんじゃないの。  
・？」

アラド「……エイゼルさんが言つた『悪夢』って言葉の意味ツス

ね。」

カイ「……おまえさん方の身体を解析し、それを軍事的に利用す

るとなれば

ラトゥーー達のよつた犠牲者がまた出でしまつ恐れがある、  
といつ事だな。」

エイゼル「・・・そうだ。

子供らの『完成度』を見る限り、以前のそれは途中で頓挫したのであるづ?」

ジョナサン「・・・元々は君達のイメージしていふよつたものじゃなかつた。

純粹にパイロットの早期育成を目的としたものだつたんだ。

だがある科学者の暴走により孤児を使った人体実験場と化し、

あまりにも強引な強化と無理な訓練により死亡者や精神崩壊した者が数多く出たそうだ・・・」

ゼオラ「私達三人は・・・その生き残りなの。」

ハーケン「胸糞悪い話だな、こいつは・・・」

神夜「むごいこと極まりないです・・・」

カイ「だがその事が明るみに出てしまいその機関は解散。

その科学者も既に戦死しており、

生き残りである彼らを利用しようとした連中も同じ末路を辿つた。

・・・彼らがここにいるのは純粹に彼らの意思だ。」

ハーケン「まあ、それならいいんじやないのかい。

あんたは悪い人間じやなさそだしな。

だが、この世界にはまだ心無い連中がいる事も事実、だろ?」

ジョナサン「・・・つまり君達は懸念しているんだな。

自分達の存在により、彼らのよつた悲劇がまた繰り返されるのでは、と。

なにより自分自身がその火種になつてしまふのでは、

と。」

カツツエ「そんな大それた事じゃないわ。

異世界の技術を使って痛い目にあつた先輩として、忠告しているだけよ。」

エイゼル「我らフォルミッドヘイムは結果的にとはい、

世界全体を滅ぼしかけてしまったのだからな……」

「ミニア」・・・理解しているのだな。

この世界にとつてお前達イレギュラーがどのような存在なのかという事を。」

リショウ「じゃが、一つ疑問がある・・・

それを知つておるのならば何故お主らはここにあるんじや？

儂がおぬしらなら真つ先に逃げ出さうとするがのう。」

ハーケン「・・・単に逃げられなかつただけつてのもあるな。

転移のショックでツアイトが損傷して動けなかつたし、身を隠そくにもあんたらと鉢合わせしちまつたしな。」

アシエン「ボロ艦一隻と巨大ロボ5体では勝負にもなりません・・・

ならば大人しく投降したほうが身のためかと。」

ラニア「しかし、お前達の身の安全が保障される根拠は無かつたのだろう？」

ヘンネ「その辺はアンタらの口振りとアタシらの扱い方からみておおよそ分かつたさね。

情報を言えれば、それなりの扱いはしてくれる連中だつてね。

「ラトウー二「あなた達が妙に自分達の事を素直に喋つていたのかが不思議だつたけど・・・

そういうわけだつたのね。」

ハーケン「それもあるが・・・本当のところは別だな。」

エイゼル「我らはこの世界の理を知り、見極める必要があつた。」

錫華「そのためにはわらわ達の理をそなた達に知つて貰うのが妥当

であろう?」

ハーケン「あんたちは俺達の事を理解できるだらう?」

何よりあんたらのリアクションを見れば俺達との違いも

分かる・・・

まあ、ギブアンドテイクってやつさ。」

ジョナサン「・・・・。

もし・・・

この世界に君達の言つ『悪夢』が起つてしまつた時  
はどうするつもりかい?」

ハーケン「本来、俺達のような異邦人は早々に元の世界に帰らなき  
やならない。

イレギュラーは世界のバランスを崩壊させかねないから  
な。

それが出来ない以上、俺達はこの世界で生きていくしか  
ない・・・

危険を承知の上でな。」

ヘンネ「その過程でアタシ達の能力を利用するのはこの世界の人間  
の勝手さ、

キツイ言い方かもしれないが、

そのせいできを見る結果になつたとしてもそれはこの世  
界の人間の責任さね。」

リー「ですが自分達のせいでの世界が滅んでしまつような事が起  
きるのは

ハツキリ言って良い気分ではありませんからな。

例え世界全体は無理だとしても、目の前の小火くらいは消し  
たいつてのが人情でしょ?」

ハーケン「大火灾でもかまわないので、俺は。

それで事が収まれば万々歳だしな。」

ラミア「・・・それがお前達の意思なのだな。」

カツツエ「そういう事、

あとはあなた達の返答次第。」

エイゼル「・・・そなた達に今一度問う。

我らを知る『自覚』と『覚悟』はあるか?」

カツツエ「・・・返答次第によつては、『』を突破しても出て行くわよ、アタシ達・・・」

ジョナサン「フツ・・・答えるまでもないな。」

エイゼル「何・・・?」

リシュウ「それしきの自覚と覚悟・・・初めから持つてあると言つ事じや。」

そうでなければここにはおらんて。」

エリ「ここにいる人間は過去に大なり小なり異世界や異星の技術に触れ、

その危険性を身を持つて知つていますからね。」

ソフィア「(そう、特に私は・・・)」

アラド「そうツス!」

俺達みたいなのは俺たちだけで十分ツス!!」

ゼオラ「『悪夢』なんて繰り返させたりなんかするもんですか!」

ラトゥー「『そうさせないために・・・私達はここにいる・・・!』

私達が今そう思えるのは・・・私達を支えてくれる人がいたから・・・!」

ラミア「あいも変わらず甘い考え方だな・・・

だがその甘さが私を・・・そして世界を救つたのも事実。

まあ、なによりも、悪くはないし、な。」

カイ「フツ・・・

また成長したな、ラミア。」

ジョナサン「ようするに私達は『』いう人間の集まりなのさ。」

・・・我々を信じてはくれないか?」

ハーケン「・・・・・・・・・。

・・・オーケイ、レディース&ジェントルメン!・

そこまで言われて「NO」「じゃ締まらないよな?」

ゼオラ「じゃあ・・・・・」

リー「私は艦長がそうおっしゃるのであれば。

・・・あと欲を言えれば生きた肉さえ出れば。」

鞠音「私はパーソナルトルーパーをこの手で分解できればなあ。」

ハーケン「そこはガマンしてくれないか、リーもドクターも。」

アシェン「ここでＫＹな発言もアレなので、取り敢えず同意という事でひとつ。」

ハーケン「取り敢えずってなあ・・・

まあ、その方がアシェンらしくていいか・・・・

カイ「お前も苦労が絶えん性質なのだな・・・・」

ハーケン「ダンディほどじやないか。」

アラド「じゃあ皆さん、改めてヨロシクツス！」

エイゼル「うむ。

これからも全面的に協力させてもらおう。」

アラド「（でも顔は怖いッス・・・・）」

キュオン「キュオンも大賛成～」

ヘンネ「ボスがそういうなら仕方ないさね・・・・」

錫華「わらわ的にもそなた達ならば信じても良いと考えてるのでな。

このたびは大賛成であるぞ。」

神夜「そういう事で、皆さんよろしくお願ひしますね」

ジョナサン「ではお近づきの印に、お茶でもしませんか、神夜姫？」

なんでしたら錫華姫も・・・・

錫華「すまぬがわらわには故郷に想い人があるのでな。

二股を掛けるわけにはいかぬ。」

ジョナサン「ははは。

これはまた手厳しいですな。」

リシュウ「おぬしは相変わらずじやのう・・・・

ハーケン「いいんじゃないか？

人間、「自分らしく」が一番だぜ？」

## 第5話 a 交わる『刻』 その2（後書き）

またしても一ヶ月ほど間が開いてしまいました。○、○、○

今回は上つ面だけだつた関係を互いに信頼する関係にシフトする過程を書いたつもりです。

人付き合いないんで、こういうのを書くのはどうも苦手として、上手く書けているかどうか非常に心配です。

予定通り10日前後で書きあげたものに修正と削除と付加と思いつきの悪ノリが加わればアラ不思議、元々の原型がすっかり無くなってしまいおまけに一週間以上経ってしまいました！（爆）

本当は体調の良し悪しもありそのたびに考えが変つたりして結構難産でした。

皆さんも体にはお気を付けて下さいね。

### 没案抜粋

- ・完全オリジナルキャラのラングレー基地指令の登場。ひたすら危険性を煽るビビリキャラ。
- 空氣読めない上に存在自体空氣になるので没。
- ・上層部にはハーケン達の事は報告していない。
- そのうちバレるし、話の幅が狭まるので没。
- ・楠舞靈術、錫華・美糸等を駆使して博士とカイ少佐達を拘束して本当に覺悟があるのか問いただす（ハーケン達は演技）
- 暴力的な手段に出る時点で円満解なんてありえないでの没。大体、神夜が協力するわけない。
- ・・・とまあ色々ありました。

次回は今回ハブられた彼らが登場します。

第5話 a 交わる『刻』 その3

＜ラングレー基地 第5大型倉庫兼テスラライヒ研究所仮設研究室＞

リム（クリス）「……お兄ちゃん、この装置の取り付けなんだけ  
ど……」

ジョッショ「どれどれ……？」

ああ……これはサブ関係だからメインのB-4に接  
続すれば……  
あつ、でも規格が違うから接続に変換プラグがいるな、  
これ……

それっぽいの無かったか？」

リム（リアナ）「それが……もうサッパリ。

二人がかりで探したけどそれらしいのが全然……

ジョッショ「じゃあ……先にこいつの書類整理のほう手伝ってくれ。  
そっちのほうは後で俺も一緒に探すから。」

リム（リアナ）「OK、アーニキ。」

博士達がハーケン達との会合を行っていたその頃、  
ジョシュア達はテスラ研から輸送した機材の組み立て作業に取り組  
んでいた。

機材といつても特機やPTに使うための大掛かりなものではない。  
高性能遠心分離機や小型原子間力顯微鏡のような所謂解析装置ばかりだ。

彼らの仕事は、それらを博士達が来る前に出来うる限り組み立てて  
設置する事と、

大量の書類（機材の代金請求書、許可申請書、事件の報告書など）の整理である。

アルフイミィ「・・・向こうはテキパキと進んでおりますのね。

それに比べてアクセルときたら・・・」

アクセル「少しでもそう思うのなら眺めていないで手伝つたらどうだ？」

アルフイミィ「だつてさつぱりわけわかんないんですもの。

そもそも組み立て方以前に、どれから手をつけていいのやら・・・

といつより、どう考へても多すぎますの。」

アクセル「・・・確かに4人で片付く量じゃないが、な。」

ジョッショ「まあ、お二人は休んでもらつても構いませんよ？

テスラ研ではこういふのは日常茶飯事ですから俺達は

慣れていますけど、

それでも今回はかなりキツイ方ですから。」

リム（リアナ）「この量じゃ、4人でやろうが2人でやろうがそんなに変わらないしね。」

アルフイミィ「ではお言葉に甘えさせて・・・」

アクセル「いや、喜んでやらせてもらつや。」

自分の食い扶持は自分で稼ぐのが俺の性分でな。

何よりコイツをこれ以上付け上がらせる訳にはいかん。」

アルフイミィ「むう〜・・・

そもそもなんでこのだだつ広い倉庫に私達だけしかおりませんの？

はつきり言つて理不尽ですの。」

ジョッショ「ここに入れるのが俺達しかいないからだよ。」

機密レベルダブルA以上の認証カードが要るからな。」

アクセル「それに仕事の契約上、ここはテスラ研の管轄に入った。」

ラングレーの研究員や軍人は原則的に入ることは出来な

いのや、こいつが。」

アルフイミイ「でも私達の他にもテスラ研の人は・・・」

アクセル「連中なら許可申請の手続きの真っ最中だ。」

だが期待はするなよ、どうせ丸一日はかかるだろうからな。

俺達がこうして早々ここにいられるのは、ひとえにジョシュアのお陰なのや。」

ジョッシュ「まあ、博士達の協力があつてこそですよ。」

アルフイミイ「でもそのお陰でとんだとばつちりを喰らつているわけですので・・・」

アクセル「文句を言つ暇があつたら少しば手を動かせ、手をわかつたらそこのホールドよ」せ。

あとレンチ。

アルフイミイ「・・・はいですの。」

アクセル「（しかし・・・身を隠すには都合はいいと思つたが、この仕事、4人だけだと流石にキツイ。）」

・・・強がりもそれなりにしないと、な。」

ジョッシュ「なんでしたらそつち手伝いましょうか?」

アクセル「おまえ達も忙しいんだろ?」

・・・あとで間違えてないかチェック入れてくれる程度でいい。」

アルフイミイ「要するに『べ、別に困つてなんかいないんだからねでいい。』

『一』  
と叫ぶ事ですね。」

アクセル「・・・お前には後でゲンコツを入れてやる。」

アルフイミイ「ほ、暴力反対ですの〜・・・」

アクセル「あんな機体に乗つているお前だけには言われたくない・・・

・・』

リム（クリス）「どつちもどつちだと思つけどな・・・」

リム（リアナ）「アーキはどうだと思う?」

ジョッショ「…………」

リム（リアナ）「あ、ゴメン。

うるさかった？」

ジョッショ「いや、ちょっとと考え事しててな。」

リム（クリス）「考え事……？」

ジョッショ「この倉庫の床、巨大なハッチになつてるんだよ。多分、地下に格納庫かドックがあるんだろうな。」

アクセル「なるほど、な。

大きさから判断すると……

レディバードでも余裕で入れるな、こいつは。」

アルフィミイ「要するにワンドバな倉庫ですね。」

リム（リアナ）「……それがどうかしたの？」

地下格納庫なんてテスラ研にもあつたじゃない。

ラングレーって北米最大の基地なんでしょう？

別にあつてもおかしくはないんじゃ……？」

アクセル「おかしくないどころか、実際この基地にはあるのや、こいつが。」

リム（クリス）「へ……？」

ジョッショ「ラングレーには特機用の地下ドックがあるんだよ。

テスラ研から持ち込んだ零式もそこに収納されたはずだしな。

特機の試作パーティに偽装したソウルゲインもな。」

リム（クリス）「へえ、そうなんだ……」

アクセル「だがジョッショアが言いたいのはそこじゃない。

・・・その中身が気になるんだろ？」

アルフィミイ「中身……？」

ジョッショ「……リム、カザハラ博士から今回の仕事の内容聞いたか？」

リム（クリス）「えっと……

確か何かの調査がどうとか。

それ以外は全く・・・  
博士も詳しい事は知らされていないって言つてた。

「アクセル・・・その話が本当だとすれば、今回の件、かなりのヤマかもしれんな。」

リム（リアナ）「・・・でも、ただの調査でしょ？」

ジョッシュ「ただの調査にトリプルAレベルの機密がかかるはずがないだろ？」

仮にここ地下になにかがあるとしても、

入り口に過ぎないこの倉庫に入るのにも認証がいること自体、妙だとは思わないか？」

アクセル「大体所長であるジョナサン・カザハラにまで秘密にする理由がわからん。

機密の一つや二つ知ったところで他人に喋るような人間ではない事ぐらい分かつている筈・・・」

アルフィミィ「これでもか！」

「・・・ってくらい怪しさムンムンですね。」

リム（クリス）「きっと凄い秘密があるんだね。

例えれば生きた宇宙人を捕まえた、とか？」

ジョッシュ「そのぐらいで秘密にするか？」

今時別に珍しくも何とも無いだろ、宇宙人だの異世界人だの、さ。」  
アクセル「フツ・・・違いない。  
だが今の俺達があれこれ考えたところで何がどうできるわけでもない。

「なにせ、何も知られていないのだから、な。

それに・・・今すぐに知る必要も無いだろ？」

ジョッシュ「そもそもそうですね、じきに俺達も説明を受けることになるかもしませんし。

それよりも目の前の問題をどうにかしましょう。

この機材と書類の山、ここつを早く済ませないと。

・  
アルフィミイ「ひつ・・・・」

ジョシュアが雑談を終わらせて作業を進ませようと提案したその時、アルフィミイが突然倒れこんでしまった。

リム（クリス）「び、どうかしたのアルフィミイちゃん・・・？」

アルフィミイ「・・・・・・・・」

リム（リアナ）「・・・ア、アルフィミイー・?・?」

すかさずリムが寄り添い呼びかけたが、アルフィミイは返事をしなかつた、いや出来なかつた。

なぜなら彼女は氣を失ってしまったのだから。

リム（リアナ）「な、何なの一体・・・?」

この子、どんどん冷たくなっていくよ・・・

ア、アニキ!-!」

ジョッシュュ「わかっている!」

すぐに救護室に・・・・

アクセル「ぐつ・・・!?

やめておけ・・・そいつは病気の類じやない・・・

（だが・・・）こつは・・・（）

アクセルもアルフィミイ程ではないが、変調をきたしていた。顔は青ざめ、息も絶え絶え、立っているのがやつとといったところだ。

明らかに普通の状態ではない。

ジョッシュュ「ア、アクセルさんまで・・・どうしたんですか?」

アクセル「俺は大丈夫だ……

多分そいつも……

・・・それよりも・・・お前達、ここから逃げろ……

いや、もう無理かも……しれんがな、こいつは……」

ジョッシュ「…………!?」

ジョシュアはアクセルの言動と彼らの容態の変化に戸惑ってしまった。  
だがそれは始まりに過ぎなかつた。

ジョッシュ「これは、地震…………!?」

いや違う…………この振動は…………!？」

突然の揺れ。

それは倉庫全体を揺さぶつた。

組み立てていた機材が次々に倒れ、倉庫の鉄骨は悲鳴をあげ、  
天井からはボルトや切れたワイヤー等、あらゆる金属片が落ちてき  
た。

さらに不可解な事に、揺れは地からではなく、空から起きていた。

ジョッシュ「（一体…………何が…………!）」

ジョシュアは度重なる状況の変化に対応できず、彼の頭の中は混乱  
が渦巻いていった。

◀ラングレー基地 管制室 ▶

連邦軍将校「何事だ！？」

「この揺れは一体！？」

揺れが起こっていたのはジョシュア達がいた倉庫だけではなく、ラングレー基地全体に及んでいた。

あまりにも突然の出来事で、皆半ばパニック状態に陥っていた。警戒のサイレンがけたたましく鳴り響き、基地内の非常灯が煌々と瞬き続けていた。

オペレーター「き、巨大な質量反応と転移反応を観測しました！」

予測座標は・・・

「この基地の真上です！」

連邦軍将校「何だと！？」

基地を揺るがすほどの空の揺れの正体。

それは転移反応、それも巨大な質量を持つた何かが。

オペレーター「目標・・・転移します！」

そしてそれがこのラングレー基地上空に転移してきた。

オペレーター「目標の位置が断定、基地上空約2000m付近・・・  
映像出ます！」

この基地は北米の守りの要という特性上、過去に何度も敵勢力の被害にあつている。

またエアロゲイター やインスペクター や修羅のせいで、転移反応＝敵勢力の出現という固定概念が出来上がってしまったため、ここにいる誰もが敵の襲来を迎え撃つ覚悟で挑むつもりだった。だが・・・

連邦軍将校「な・・・何だあれは・・・!?

オペレーター「・・・・・・・・・。

綺麗・・・」

現れたのは戦艦でもなければ、機動兵器群でもなかつた。

それはまるで巨大な宝石のような、いや、まさに宝石そのものに見えた。

例えるならば血のように紅いルビー・・・。

そしてその結晶は天を遮る様に現れ、空を夕焼けのように紅く染め上げた。

その幻想的な光景に皆は魅了されてしまった。

まるで吸い込まれてしまつたかのように・・・

連邦軍将校「・・・ハツ!?

な、何をしている!

早く目標のデータを!」

オペレーター「・・・は、はい!」

だが、さらにけたたましく鳴り始めたサイレンのおかげで皆がうじて正気を取り戻す事が出来た。

オペレーター「も、目標に反重力反応等は見られず・・・

このままだと基地に向かつて自由落下します!」

連邦軍将校「ええい!

迎撃システムを作動させろ!

対空防御だ!急げ!

オペレーター「りよ、了解です!」

第5、第8、パトリオット起動!

地対空ミサイル装填完了!

目標との相対距離確認！

ターゲット・ロック！

誤差修正・・・

・・・発射準備完了！

連邦軍将校「全弾射出！！」

あんな石つころなど碎いてしまえ！！！」

多数のミサイル群が結晶体めがけて轟音と共に発射された。ただの隕石やミサイル相手ならこの戦法で間違いないだろう。だが相手は転移してきた謎の結晶体、普通なら迂闊に攻撃など出来ない。

しかし向こうはこちらに向かつて真っ逆さまに落ちてくるのだ。迎え撃たなければこちらの被害は甚大になってしまつのは目に見えている。

したがつて、ここで迎え撃つ以外の術は無い。

オペレーター「目標との到達まであと

3・・・2・・・1・・・！」

基地の空は一瞬で紅い閃光と爆音に包まれた。

基地の上空でミサイルが目標の結晶体に着弾したのだ。

連邦軍将校「状況は・・・！？」

オペレーター「・・・センサー、回復します！

目標は・・・完全に粉碎されました！」

連邦軍将校「ふう・・・やつたか。

だがまだ安心は出来ん、残りの迎撃システムで基地に落下してくる破片を・・・」

目標の結晶体は粉々に破壊された。

指揮を執っていた連邦軍将校はもとい、管制室にいた者達は皆、危機を無事に回避できた事に安堵した。

だが彼らは田の前に迫つてくる危機的状況を回避しようとするあまり、

その中に隠された危険な可能性を見逃してしまっていた。

オペレーター「・・・・・！」

そんな・・・ありえない・・・・！」

連邦軍将校「ど、どうした！？」

オペレーター「粉碎した目標の破片のエネルギー反応が増大しています！」

連邦軍将校「な、何だと！？」

オペレーター「さ、さらに、確認しうる範囲ですが、全ての破片が基地に向かつて急速に落下を始めました！」

は、速過ぎます！

迎撃システム間に合いません！――

連邦軍将校「・・・まさかこれは！？」

彼らが見逃してしまった隠されたもの、それはこれが罠である可能性である。

結晶体はミサイルの爆発を利用して砕け散りつたのだ。

そしてその破片群は爆発の際に発生したあらゆるエネルギーを取り込んで

一気に落下速度を加速したのだ。

連邦軍将校「あ、あれは一体・・・！？？」

彼があれが何なのかを理解しようとした矢先、それは彼」と管制室を貫き、彼とその場にいた全員の命を終わらせた。

それは例えるならば電。

一片の大きさが数メートルで金属壁に衝突しても碎ける事のなく貫通する紅い雹である。

その無数の紅い雹は基地全体に降り注いだ。

基地に響き渡るのは人間の悲鳴と爆発音のみ。結晶は人の返り血を浴び、より一層深い紅に色付いた……

＜ラングレー基地 ブリーフィングルーム＞

カイ「……み、皆大丈夫か？」

ラミア「え、ええ、そのようで……」

突然基地が揺れ出したかと思えば、轟音に爆発音、さらには妙な落下音が続いた。

この唐突で不可解な事態に誰もが混乱していた。

ソフィア「それにしても一体何が……？」

神夜「じ、地震ですか……？」

錫華「な、ならば臍を隠さねば……」

ハーケン「それは雷だろう、へそプリ？」

リシュウ「いや、地震ではない……揺れは空から起つておつた。

そして雷でもない……！」

ハーケン「リシュウグラントの表情から察するに……」

この世界の自然現象つてわけでもなさそつだな、こいつは。

神夜「じ、じゃあ一体何なんですか……？」

エイゼル「揺れは三つ……」

一つ目の揺れは分からぬが、

二つ目の揺れはおおよそ見当がつく。

壁越しからでも聞こえる空を裂くよつた轟音・・・

そして数秒後の上方から聞こえた爆発音・・・

カイ「迎撃用の地対空ミサイルか・・・」

アラド「つてことは敵襲！？」

ゼオラ「もしかしてさつきのはMAPW！？」

ということは今の落下音は2発目の・・・？」

ラトゥー「落ち着いてゼオラ、

だとしたら私達も無事ではすまない・・・！」

キュオン「な、なんなの？」

その、Hムエーなんとかって？」

エリ「大量広域先制攻撃兵器・・・

主に大型の弾道ミサイルを指す言葉だけど・・・」

ハーケン「オーケイ、物知りビューティー。

要するにこの基地を軽く吹っ飛ばせるほどのモノって事

だろ？」

エリ「種類や威力にもよるけど・・・

そう解釈して構わないわ。」

錫華「な、なんちゅう物騒な代物よのう・・・」

鞠音「錫華姫、私達の世界にも似たようなものはありましたから、別に驚くほどのものではありませわよ？」

錫華「わ、分かつてある。

ちいと驚いただけぞな。」

エイゼル「そしてそれへの対応策もあるようだ。

現にこの基地の迎撃システムは作動した・・・

カイ「ああ。

だがどうやら一発・・・いや一段構えだつたようだ。」

エイゼル「一段構え？

一発ではなく・・・？」

ラニア「一発田もMAPWだつたとすればこの基地はもう跡形もない。

・・・おそらくは撃墜されても

なんらかの被害が出るような仕掛けが施されていたと考えるべきだ。」

ハーケン「成程・・・それで一段構え、か。

爆発音の後の大量の落下音・・・

今なお続いているあちこちから聞こえる爆発音と人間の

悲鳴はそのせいいか。」

リーハツキリ言つて悲惨な状況ですな。」

カイ「だが敵の目的が分からん・・・

基地の破壊が目的ならこのような一段構えにする必要は無い。

何發もぶち込めばいいだけの話だ。」

アラド「・・・もしかして一段構えとかじや無くて

ただ破片が落ちただけだつたりして・・・

ラトゥー「無くは無いと思うけど・・・

でもただの破片でここまで被害がでるものなの・・・

?」

アシェン「む・・・!?

・・・確かにただの破片ではないようだ。」

アシェンは身構えた、まるで何かを迎撃つかのように、だ。  
もつとも今の彼女では戦う事は出来ないのだが。

アシェン「艦長、落ちてきたのはかなりマズイ代物のようだ」  
「…………」

アシェン「どういうことだアシェン?」

アシェン「現在、この部屋の外に複数の動体反応を確認しちゃいました。」

ゼオラ「救助に来た人かしら・・・?」

アシェン「残念ながら人間のモノではありません。」

おまけにエネルギー反応も確認しちゃいました。

それにこの反応・・・過去のデータと酷似しちゃつております。」

ラミア「お前達が知つてゐるモノ・・・？」

ハーケン「・・・！」

おいアション、外にいる連中はまさか・・・！？」

アション「はい、アイнстです！」

カイ「！？」「

アションが答えたのとほぼ同時に招かれざる異邦者達が次々と強引に入室してきた。

分厚い金属の壁を異形の腕でやすやすとぶち破り、散乱した机や椅子を踏み潰しながら。

それらは骨のようなモノもいれば、植物のような姿をしたモノもいれば、重厚な鎧を着込んだモノもいた。そしてそれらは明確な敵意を持っていた。

カイ「・・・こいつらが！？」

ハーケン「ああ、間違いない俺達の世界にいたアイнстだ・・・！」

エイゼル「しかもこやつ等は・・・！」

エンドレスフロンティアの世界にいたアイнстは、この世界のアイнстでは僅かながら違いがある。一つはその大きさ。

この世界のアイнстは全てマチサイズだがエンドレスフロンティアでは全て人型サイズだった。

アラド「な、なんだこの真っ黒けなアイнстは！？」

ヘンネ「下がれ！」

こいつらは上位種だ！」

そしてもう一つの決定的な違い・・・

それは上位種の存在。

姿形は下位種と同じだが、全身が黒く細部が紅くなっているのが特徴で、パワーも段違いである。

そして部屋に入ってきた10体はいるであろう全てのアインストは黒一色だった。

カイ「ちいつ・・・・!」

カイがすかさず懐に持っていた拳銃でアインストを撃つた。だが彼らは銃撃にひるむことなくこちらに向かつて進んで来た。

カイ「た、弾が効かんのか!?」

「こいつら?」

ヘンネ「だから言つたろ! 上位種だつて!

「そんなの効きやしないのさ!」

ラミア「(強力な武器ならば効くかもしけんが・・・

私の手持ちも拳銃が一丁のみか。

白兵戦特化のアション・ブレイデルも戦闘モードに入れない。

何か他に手は・・・( )

ラミアが策を模索している間にも

アインスト達はゆっくりと、しかし確実に近づいてきた。

重厚な金属壁をもべニヤ板のように破壊できる彼らの力、

Wシリーズであるラミアは勿論、生身の人間が喰らえればひとたまりも無い。

そして逃げ場も無い。

カイ「（くつ・・・）」までもか・・・」

誰もが万策尽いたと思った。死を覚悟した者もいた。  
・・・だが、諦めていない者達もいた。

カツツエ「はーい

お嬢ちゃん&オジサマ達。

ちよつと下がつてね、巻き添え食うわよ?」

カイ「!??」

カイが「何を言つているんだ?」と詰め込んだが、  
次の瞬間、それを言つ必要は無い事を理解した。

カツツエ「手加減無しでいくわよ?

マウス・・・イイイタアアアツツー!」

なぜならカツツエの姿が消えた次の瞬間、  
10体は居たであろうアインストが一瞬にして消滅してしまったか  
らだ。

リシュウ「な、なんじゃ今のは・・・?」

アラド「何か・・・カツツエさんが消えて、  
もの凄い音がして・・・

そしたら・・・あいつら皆消えてて・・・」

ハリマ「（どうやらアラド達や博士達にも無理だったようだ。

当然だ、私のセンサーを持つてしても対応出来なかつ  
たのだから・・・」

ハーケン達以外の者は何が起こったのかさえ理解できずに居た。  
カツツエの一連の動作を肉眼で追い、判断できる人間はここにいる

この世界の住人には一人もいなかつた。

ハーケン「ヒュー

久々に見たが、相変わらず凄いな、ネコバロン。  
あなたの『マウスイーター』は。」

カツツエの得意とする技、『マウスイーター』が炸裂したのだ。  
簡単に言えばサマーソルトキックを複数の相手に連續で叩き込む技  
だ。

だが説明が簡単だからと言って、誰でも出来るというわけではない。  
カツツエの強靭な脚力と身のこなしの軽さによつて初めて成立する  
のである。

リー「私は初めて見ましたが、同じネコ科の獣人の私でもとても真似出来まんna。」

カツツエ「ムフフ。

アナタはもつとカラダ絞らなきゃねえ。

それに、今のアタシを煽てたつて何もでないわよ?」

アシェン「別になんの見返りも期待しちゃおりませんが。」

ハーケン「まあ、いいじゃないか。」

バロンのおかげで俺達は無駄弾撃たなくて済んだ事だし、  
な。

でも、見せ場ぐらいは残して欲しかつたかな?」

お前らいつの間に!?

カイが驚くのも無理は無い。

ハーケンを含め、彼らの手元には彼らの武器があつたのだから。  
厳重に管理されているはずの武器が、である。

ヘンネ「アタシらが敵に奪われた場合とか想定しないとでも思つて  
いたのかい？」

エイゼル「同一空間での転送など我らには造作も無い。」

キュオン「元々無かつたんだけど用心に越したことは無いからね。  
まあ前にどつかの誰かさんにやられちやつたからね。」

主にファンタムとかだけど。」

ハーケン「きつかけはそれか・・・

まあ、肝心のファンタム達には付いていないわけなのだが。  
が。」

鞠音「付ける時間が無かつたので。

それに試しも無しでやるのは気が引けましたので。」

ハーケン「それでナイトファウルを実験台にしたってわけか、親父  
が聞いたらなんていふか・・・

鞠音「黙つていれば問題はありません。

問題があれば外せばいいだけの話ですし。」

ハーケン「まあこの際いいさ・・・

でも本当に来るとはな、正直言つて半信半疑だつたんだ  
がな。」

鞠音「私の技術を疑つていたと？」

錫華「チャラ蔵はただ単に軽く文化的な衝撃を受けているだけぞな。  
もつと素直に喜ばんか、邪鬼銃王もこうして戻つてきた事だ  
しのう。」

神夜「そのうち慣れますよ、ハーケンさん！」

ハーケン「励ましをどうも、プリンセス達。」

ハーケン達は比較的穏やかだったが、こちらの世界の住人達はそう  
ではいられなかつた。

ラミア「あの転送技術・・・供述には無かつた。

それに加えあの身体能力、

測定に基づいて算出した最大値を大幅に超えている・・・！

小口径とはいって、銃弾をものともしない相手をいとも簡単に

に・・・

ゼオラ「隠していたのね・・・あなた達！」

ハーケン「おいおい、そうムキになるなよな、ガン飛ばしガール。

誰も全てを話したとは言つてないだろ？」

錫華「ほ～ほつほ。

まあ確かに話せる事は全て話したとは言つたが・・・

おいそれと話せぬ事までは話したとは言つておらぬしのひ。

アラド「（それ、思いつきり屁理屈だ・・・）」

ジョナサン「その、身体能力もかい・・・？」

リー「そつちのほづは結果的にそくなつてしまつた、と言つべきで  
しょうか。

本当は気遣いのつもりだつたのですが・・・

ハツキリ言つて身から出た鎧になつてしまつましたな。」

ラトゥー「どういう意味・・・？」

カツツエ「アナタ達の測定器、壊しちやまづいでしょ？」

アラド「へ・・・？」

エイゼル「我らが本氣を出せば壁や床ごと破壊しかねんからな。

修繕費用も馬鹿にならないだろ？」

カツツエ「結構大変だつたのよ？

壊さないように手加減するの。」

カイ「そ・・・そんな理由でか？」

リー「本気をだせばそちらは損害を被り、私らはより厳重な監視下  
におかれるわけですから。

互いのため、と思つてやつたことですので、ここのはどうか平  
にしてもらいたいのですな。」

カツツエ「でももうちょっと加減しておくべきだつたかしら？

あの程度で『超人的』なんて言われちゃつたぐらいだし  
ねえ。」

ソフィア「（彼らを悔っていた・・・

全てを出してはいなうだうとは思つていたけど、これ程のものだつたとは・・・）」

ハーケン「切り札は最後までとつておくもんだろ？」

そしてここにきて俺達が先に切り札を見せた意味、わかるか？」

ジョナサン「『全面的に協力する』・・・

その証明というわけだね。」

アシェン「そういう事です、スケベ博士。」

ラミア「・・・もしやアシェン・ブレイデル、お前が戦闘モードに移行できないといつのも？」

アシェン「いや、そつちは本当でござりますのよ。

なんかもう色々とダメな感じに調子が狂つて狂つて仕方なくつて

困り果てておりますの」とですでござこやがりますのよ。」

ハーケン「・・・」のままだと俺達まで調子狂つちまつた。

ドクター何とかできないか？」

鞠音「了解しました。

では副長・・・

リー「・・・アイアイ。

ふんつつ！――！」

鞠音の言葉に答えるかのようリーは躊躇無くアシェンに踵落としを極めた。

アシェンは勢いよく床にめり込み、周囲には破片が飛び散り、粉塵が巻き上げられた。

アラド「ゲホッ・・・ゲホッ・・・！」

な、なんスか？」

「ミニア「私の視覚系がおかしくなければ、

リー副長がW07めがけて攻撃を行つた事になるが……」

ジヨナサン「ああ、大丈夫。

私の目にもそう見えた。」

ソフィア「一体何を……？」

アション（DTD）「いついついついつ……たゞ！」

もつと手加減してよー！

この脳筋ネコ！」

リー「ハツハツハ。

いけませんな、蹴りなぞ久しぶりでしたからな。」

ハーケン「まあ、結果オーライって事にするか……」

ラミア「コードDTDが発動している……」

一体どうやって？

アション（DTD）「あ～……メンドウだからドクタークロシク  
ウ！」

鞠音「仕方ありませんわね、では僭越ながら。

・・・DTDは熱暴走により一時に身体能力と演算処理能  
力を上昇させるもの、

付け加えれば自己修復能力も上昇します。

いわば火事場の馬鹿力、本来は緊急用ですよ？

ハーケン「そういうばそうだつたな……」

アションは普段から息するみたいにホイホイ使つている  
から忘れてたぜ。」

錫華「ようするに奴の脳味噌は年がら年中沸騰しておるといつわ  
けか。」

アション（DTD）「スージー、後でその角引っこ抜くよ？」

鞠音「ゴホン・・・このDTDを発動する方法は二つあります。

一つはアションの意思でコードを発動させる意識的なもの、  
もう一つは自身の緊急事態の時に強制的に発動させる反射的  
なものです。

前者はプロテクトによつて発動を止めることが出来ますが、後者はいかなる場合においても優先させられます。

ジョナサン「あ～・・・分かつたぞ。

つまりはアシェン君を『緊急事態』に追い詰めて強制的に発動させたんだな。」

リー「なに、調子の悪い機械は叩いて直すに限りますからな。ちなみにアシエンの場合はサイドから延髄を狙つて踵落としを極めるのがコツです。」

リシュウ「お、大昔の家電製品じゃあるまいし・・・」

エリ「無茶にもほどがあるわ・・・」

ソフィア「もし壊れたりでもしたら・・・」

アシェン(DTD)「そん時はそん時だよ。」

神夜「む、無計画極まりないです・・・」

鞠音「ちなみにアシェンは暫くこのままで。」

DTDで新陳代謝を高めて自己修復していますからして。」

錫華「うざつたい事このつえないぞな・・・」

ハーケン「まあ、そのうち治まるだろ。」

アシェン(DTD)「それはそつと、大分マズイ状況みたいだよ、ハーキュン!」

ボク今センサーの感度ビンビンだから分かつちゃうんだけどさ、

今この基地、ミルトカイル石そつくりの反応がうじやうじやあるんだよね。」

ハーケン「なんだと!?」

神夜「楔石が・・・!?

カイ「そいつは確かお前達の世界にあつたといつ・・・」

ゼオラ「AINSTの結晶体・・・!」

アシェン(DTD)「しかもエネルギーの流れ見た感じだと、

どつもこの基地のエネルギー吸いまくつて成長してるっぽいんだよね。」

おまけに通信波のジャミング電波垂れ流してゐるし。

「ラトゥーー」「確かに、そうみたいね・・・」

ジョナサン「D・コンか・・・！」

ラトゥーーは自分のD・コンを取り出して通信状況の確認をした。

ハーケン「見たところ通信端末ってトロロか。

んでもってその様子からすると・・・」

ラトゥーー「ええ。

一般回線、軍用回線にも繋がらないわ。  
おまけに救難信号も・・・」

アラド「さ、救難信号もダメって事は俺達もつ・・・」

ゼオラ「落ち着いて、アラド。

無線は無理でも有線ならまだ・・・」

ラニア「今試してみたがこの部屋からでは有線通信も無理だ。

おそらく結晶体によって物理的に遮断されてしまったのだ  
うづ。」

ハーケン「・・・となれば、自力で脱出するしかない、な。

カイ「成長するアインストの結晶体・・・」

そして通信波のジャミング・・・

・・・まさか！」

ジョナサン「ああ、エント基地のパターンと全く同じだな。」

ハーケン「ちょっととまで、今なんて言った？」

ソフィア「今現在この基地に起つてゐる事態、これと全く同じこと  
が数日前にもあったの。」

エイゼル「その基地はどうなった・・・？」

ジョナサン「・・・完全に壊滅しそうだ。

それも一時間も経たずにね。

基地の規模はここの方が大きいがおそらく時間はそつ

かからないだろ？」

リシュウ「おまけに基地にいた連中はアイнстの支配下に置かれてしまつてのう。

儂らのいた研究所を襲いに来よつたわい。

おそらく儂らもじきに・・・」

神夜「そ、それって逃げた方が良くないですか？」

ヘンネ「それ以外の選択肢があるかい！」

こんなところに長居は無用さね！！」

錫華「丁度ドデカイ穴も開いてある事だしの。」

ラミア「それにこの部屋以外ならば有線通信も可能かもしれん・・・

！」

ハーケン「ならさつきの連中が来る前にセッタヒゾラするに限るな、こいつは。」

カイ「無論だ！』

総員、緊急退避！

全力でこの基地を脱出する！』

ハーケン「活路は俺達が开く！』

あんたちは道を指示してくれ！』

アラド「合意承知ッス！』

ゼオラ「さあ、博士達も早く！』

私達がフォローします！』

リシュウ「う、うむ。』

ソフィア「（でも彼らが・・・）』

ネート博士がジョシュア達の事を言ひおつとしたが、エリ博士がそれを止めた。

エリ「（ソフィア・・・

酷な言い方だけど、今は自分の命を優先させなさい。

そうしないと救える命も救えないわ。）』

ソフィア「（・・・・・）」

リシュウ「（何、心配要らんわい。）

あ奴らの底力は並みではないからのう。」

ジョナサン「（まあ彼らなりきつと自力でも脱出でさあやよ。  
途中で出合えたら合流しましょ。）」

ソフィア「（え、ええ・・・）」

リシュウ先生もカザハラ博士も氣丈に振舞つていたが、それがボーグであることは明らかである。

心配なのは皆一緒にものだから。

だが今は心配するような余裕は無い、自分達の事でが精一杯なのだから。

ソフィア「（ジョシュア君、皆・・・どうか無事でいて・・・）」

できぬ事は彼らの無事を祈る事だけである。

## 第5話 a 交わる『刻』その3（後書き）

今回はモンスター・パーティクモノでよく見かける孤立無援の脱出劇（開始編）です。

同一空間内転送の設定はオリジナルです（漫畫版の設定の曲解ともいえますが）。

本当は武器保管室まで取りに行く予定でしたが、ハーケン達の見せ場を作るためになんで没にしました。

ファンタム達がいないのはパワー・バランス調整の為です。

最初から一緒にいたら流石に余裕過ぎて緊張感がなくなるのでw

脱出の手立てはあるのか？ジョ・シュア達とは今流できるのか？アクセルとアルフイミィに何が起きたのか？そして来襲したアイントの目的とは？

・・・まあこの話が終わる頃には大体分かりますがw

それについてラングレーは一体何回壊滅すれば気が済むのでしょうかね（笑）

私はきっと本家でもまた壊滅するに違いないと思つております（ヒデヒ）

今週は体調も良く何とかほぼ一週間で書き上げる事が出来ました。来週はどうなるか分かりませんが・・・(^\_^;)

第5話 a 交わる『刻』その4

「ラングレー基地 通路」

「ラミア「・・・少佐、進路クリアで」」せんす。」

カイ「よし、だが警戒を怠るな。」

次はこの先のつきあたりを左へ、だ。」

ハーケン「オーケイ・・・

今のところはそれなりに順調のようだな。

・・・で、次はどう進めばいい、ダンディイ?」

カイ「この先の突き当たりを真っ直ぐに」

アション（D-T-D）「あ、チヨイ待ち!」

ハーケン「おいおい、まさか・・・」

アション（D-T-D）「ああ・・・来たよ、奴らがね・・・」

通路の奥から出てきたのは不気味に鈍く光る紅い眼まなこをした異形の群像達、

それらは狭い通路の中をひしめき合<sup>て</sup>ながら、ゆづくじとしかし確實にこちらに近づいて来た。

その血まみれの腕はまるで何かを求めるよ<sup>う</sup>に、力なくだらりと前に突き出していた。

物事は順調に進まないのが世の常、あらうひとかアイインスト群と鉢合<sup>あわせ</sup>になってしまった。

ハーケン「よりもよって団体さんか、しかも逃げよつてもどり<sup>もどり</sup>せ

逃げ道は・・・」

アション（D-T-D）「うん、ぶっちゃけて言つと袋小路だね。」

ハーケン「だと思つたぜ。」

ヘンネ「どにからともなくワカラワラと……」

ゴキブリかこいつら!？」

錫華「沸いた虫は駆除するに限るぞな。

わらわの邪鬼銃王で纏めて葬つてやろつか?」

神夜「いえ、錫華ちゃん。

ここは私が……！」

神夜の手には彼女の刀『護式斬冠刀』が握りしめられていた。護式の名が指す通り、その刀は人を殺める為の刀ではない。人を護り、悪を薙ぎ、善を助く活人剣である。

彼女の刀はまさにこのような時の為にこそ真価を發揮する。

その事は神夜自身、そして長年彼女と共にいる錫華はよく知っている。

錫華「……まあ、よかろう。

どの道このような狭いところでは邪鬼銃王は扱い難い。ここは一つ、稽古見がてらおぬしに任せるとしよう。」

神夜「では……！」

神夜はその場から跳躍、そのまま回転して天井を蹴りアイNSTの目の前に出た。

リショウ「（なんという身のこなしの軽さ！）

それにあの大刀、並々ならぬモノを感じる……」

ゼオラ「け、剣一本であるの数と戦おうって言つの？」

いくらなんでも無茶つてものが……！」

ハーケン「オーケイ、テンパリガール。

少し黙ってくれよ、見てりや分かる事だし、な。」

ゼオラ「……？」

リショウ「（さて、楠舞一刀流……）

どれほどのものが見せてもらひますか。」

神夜「先鋒、楠舞神夜・・・

推して参ります！

舞え！月輪の渦よ！」

彼女は刀を振ると同時に、言葉を発した。

そしてその言葉に応じるかのように、刀の峰に施された装飾部分が突然宙を舞い始めた。

その装飾の正体は三日月形をした戦輪『月輪』である。

それは神夜の思うがままに舞い、万物を切り刻み、巻き起こす旋風は鎌鼬を生み出す。

神夜「・・・楠舞一刀流、火鼠の衣。」

彼女は刀を一振りしただけである。

だがその一振りの間に敵対するアインスト群は鋼鉄と真空が織り成す斬撃によって

バラバラに切り刻まれてしまった。

だが彼らのしぶとさは人間の比ではない、急所であるコアを破壊されなければ自己再生できる。

現に間合いの外にいたためかコアの破壊をからうじて免れた個体は既に修復を始めていた。

神夜「・・・逃がしません！」

だが、それを黙つて見逃すほど、彼女は甘くもなれば容赦もない。彼らはコアをその届かなかつた筈の間合いから、刃で突かれ、峰の月輪で抉り裂かれたちどころに物言わぬ塵と化した。

神夜「蓬莱の枝・・・・」

それは刀身を分離させることで、間合にそのものを伸ばす技である。

錫華「ふむ、腕は劣つておらぬようだのう・・・・  
むしろ磨きがかかつておるな。」

神夜「はい。」

お師匠様に稽古つけて貰いましたから。」

錫華「それに技名の後言いとは、なかなか・・・・  
わらわ的にも高得点であるぞ。」

ハーケン「確かに・・・・

あの腰のキレ、そして揺れ具合、以前より増しているな。

ジョナサン「やや不謹慎だが、

ボディコンはやつぱりいいものだ、うん。」

錫華「普通、そこに目がいくかいの・・・・?

この一人・・・・やはり同類よな。」

アシソン(DTD)「ハーキューンとその工口オヤジが特別なだけだ  
と思うけどね。」

カツツエ「他の方達はみんな開いた口が塞がらないって顔してるので  
にねえ。」

リシュウ「楠舞一刀流、か・・・・

儂の示現流、そして儂が見てきた

どの流派にも当てはまらん動きじやな。

強いて言えば舞に近いものを感じる・・・・

錫華「ほほう。

剣の使い手なだけに、中々良い目をしておるな、翁よ。」

アラド「うーん、動き云々の事はよくわからないんスけど、

その刀、もの凄え仕掛けだらけだつたんスね・・・・

色々飛ばしたり、バラバラになつたり。」

エリ「どうやって動かしているのかとても興味深いわね。」

神夜「まあそのあたりは靈術で軽くちょちょいのちょいですよ

ラトウー「それにも、口も酷い有様ね・・・」

錫華「分け入つても分け入つても血の海とは・・・」

許されたがたき暴虐ぞ、アイнст共め・・・！」

ヘンネ「血の量と散らかし具合から察するに、随分派手にやらかしているようだな。

バラバラすぎてどれがどの部分かわからやしない。」

リー「まさに、ミンチですな。」

ラミア「（それにしては肉片が少なすぎるよつな・・・？）」

ハーケン「ここで立ち止まつてもどうしようもないだろ？」

わっさと、逃走劇の続きと洒落込もうか、フォーリナーズ。

ちやんとエスコートしてくれよ？」

アシロン（D-T-D）「ついでに脱出方法も考えてチョ～ダイ！」

ラミア「つまりは丸投げという事か。」

カイ「・・・みんなまで言つな。

ある程度は考えてはいるが、何分敵の数が多い。

そこでここは一つ、アシロン・ブレイデルの力を使わせても

らう。

アシロン（D-T-D）「ボクをご指名？

アンタも好きねえ〜。」

カツツユ「オジサマはロボフェチって訳？

ヒトのショミにとやかく言つつもりはないけれど、  
アタシの魅力に気付かないなんて不憫だわあ。」

ハーケン「そういう意味じや無いだろうが。

アシロンを使ってどうするつもりだ、ダンディ？

カイ「彼女の探知能力を利用させてもらひただけだ。

障害となる結晶体や小型アイнстの反応を探つてもらひ。

ハーケン「それならわっさからやつてるだろ？」

カイ「流石に気まぐれでやつているような調子では困る。

可能ならフルタイムかつ最大出力で頼みたい。」

アシェン（DTD）「うつひやー・・・

ハーキュンよりロボ使いが荒いなこのヒゲオヤジは。」

ハーケン「ここで鉄屑になるよりはマシだろ?」

アシェン（DTD）「まーね。」

と言うわけでこのほどばしる熱暴走のフルパワー、最大限に活用しちゃうよん!

熱探知、動体探知、電磁波探知、その他もうもろのシステム、フルドライブ!」

神夜「な、なんだか物凄い事極まりないですな!」

錫華「大掛かりなだけだな。」

で、脱出のツテはあるのか?

髭よ?」

カイ「・・・輸送機が幾つかある。」

だがこの大惨事だ、使える機体があればいいのだが・・・

ハーケン「輸送機?」

俺達を運んだあのマッシュブなヤツか?」

カイ「レディバードか・・・

他にもあるがならべくならそのぐらいの大きさがいい。アレなら大人数での脱出も可能だ。」

鞠音「と言つ事は、その輸送機で脱出するのは私達だけではないと?」

カイ「ああ、可能な範囲内でこここの職員や兵士の救助を行つ。」

ゼオラ「出来ればみんな助けてあげたいけど・・・」

ラトゥー「分断された状況ではそれは不可能に近いわ。」

でも救える人は救つてあげたい・・・」

ラミア「ですが少佐、彼らを無関係の人間に見せるのは機密に反します。」

後に重大な処分を受ける事になると思しますが？」

カイ「そんなもんは救える命と引き換えになら幾らでも受けたやるわ！」

ハーケン「・・・全く、熱い男だな少佐。

俺も一口乗らせてもらひや、ダンティーズの人助けにな。

そういうのはやつて気分が悪くない仕事だしな。」

リー「ハツキリ言つて面倒ではありますかね。」

錫華「そう言う出ない。

仁義を欠いては世はまかりならんものぞ？

例え戦場と言えどもな。」

アシヒン（D+D）「ここで頑張ればポイント高いからね～。

流石ハーキュン、黒い！汚い！

錫華「黒いのはお主の腹だけぞな・・・」

ヘンネ「この状況下で味方の救援とはねえ、

随分と優しいんだな、この世界の軍隊は。」

ゼオラ「何だか癪に触る言い方ね・・・！」

ラミア「ある意味で予想内の答えではあるがな。」

ヘンネ「そんなつもりじやないさね。

我が身可愛さに仲間を見捨てたり裏切る連中はゴママンと見てきた。

そしてアタシ自身も・・・

だから正直羨ましきのを、そういう優しさが許される軍隊

つてのは。」

ラミア「（優しさ、か・・・）」

エイゼル「あの戦争を止められなかつた我としては正直耳が痛い話だ。」

ヘンネ「別にアンタが気にする事じゃないさね、エイゼル。

十年以上も前の話を。

第一、傭兵風情にそんな事言つのがアンタの仕事じゃない

だろ？」

エイゼル「…………」

「…………そうだな。」

ハーケン「ほう・・・・・・

「ウイングガールにもセンチな面があるとはな。  
ヘンネ「アタシはそんな柄じゃない。

少しばかり昔を思い出しだけさね。」

ハーケン「色々聞きたいのは山々だが、

そいつは脱出した後のお楽しみとしようか。」

アシェン（DTD）「まあそれがベストかもね」

「ぶつちやけて言うと、只今AINSTが絶賛接近

中だよん」

ハーケン「そう言う事は早く言え・・・・・！」

念のため人間の生体反応も重複して調べとけ、  
ここへ向かって逃げ延びている人間がいる可能性は捨て

きれんしな。」

アシェン（DTD）「ういーっす！」

ハーケン「・・・それと、神夜はさがってくれ、次は俺が行く。」

神夜「え！？」

「私まだまだイケますよ？」

エイゼル「体力温存のためだ。」

「ならべく足手まといは増やしたくない。」

ハーケン「だがバックアップは頼むぜ。」

「後ろと博士達の護衛は任せる。」

神夜「は、はい！」

カイ「ふう・・・・

「頼りがいがあるが、何も出来ない自分達が情けなくなつてしまふな。」

ソフィア「仕方ありません。」

「私達にはアレを倒せる強力な武装も強靭な体力もないのですから。」

ジョナサン「我々は例えるなら無力な子羊と言つたところかな？」

ハーケン「そう寂しい事言つくなよな。

ところで、その輸送機つてのは何処にあるんだ？」

カイ「幾つかあるが、最も近いのは第5区画の格納庫エリアのモノだ。

先程、博士達を資材と共に運んだヤツがまだある筈だ。」

ソフィア「（第5区画）・・・・！」

確かあの倉庫もあそこに・・・

・・・いえ、この状況ではもう・・・・」「

ハーケン「オーケイ、セオリ一通り言つたとしてそこへの進路は？」

カイ「このまま屋内通路を通ればいけるはずだが・・・・」

アション（D-T-D）「あー、ダメだね。

ドでかいエネルギー反応がビンビンしてるよ。

あとビンビンしている連中も急接近中だね。」

カイ「数は分かるか？」

アション（D-T-D）「ぱつと見でわつと桃乳姫が倒した数の2、3倍ってどこかな？」

アラド「ち、チョイ待ち！

さつきのでもこの通路いつぱいいつぱいだったじやねえか  
！」

ゼオラ「その2、3倍つて・・・・！」

一体どれだけの数のアインストがこの基地にいるのよー。」

ラミア「アインストが物量戦なのは今に始まつたことでは無い。

気になるのは生きている人間の数だが・・・・？」

アション（D-T-D）「それがさ、

さつきから人間の反応拾おうとしてもこつらしが引っかかるんだよね。」

ゼオラ「ひょっとして・・・生き残つてゐるのは私達だけなの！？」

ラミア「あのアインストは我々の携行武装程度では全く歯が立たない。

結果を想像するのは至極容易だ。

我々が助かっているのは彼らが側にいたからに過ぎない。

アラド「生き残つてこう言うのもナンすけど、

氣の毒としかいよいよが無いツス・・・」

カイ「（彼らにはなんの言葉をかけていいのかわからん・・・

しかし妙だ・・・

連中にやられたとしても、死体の一つも見当たらないのは

何故だ？」

ハーケン「おつと！？」

ストップだぜ、みんな。

行列の先頭が到着のようだ。」

ハーケンの言う通り、アイнстト達は獲物に群がる蟻の様にこちらに向かっており、

その先頭集団が今までに田の前にいる。

そして後続には先ほど対峙したものとは比べ物にならない程のアイнстトが控えている。

フニア「（まるできりが無いな。

この数の多さ・・・過去のアイнстトの比ではないが、  
全て転移してきたとしても多すぎるな・・・

小型ゆえの特性なのか・・・？）」

アシェン（D-T-D）「・・・ビーするよハーキュン。」

錫華「こやつらを纏めて相手をする暇はわらわ達にはないぞよ？」

ハーケン「えーっと、ダンディイ？」

他のルートは？」

カイ「あとは屋外に出て直接向かう以外にないが・・・」

ラトゥー「この状況では一步も進めませんね・・・」

ハーケン「オーケイ、ようは外に出りやいいんだな・・・」

アラド「・・・トランプ！？」

ハーケン「レディース&ジェントルメン！」

怪我したくなかったら伏せてな！」

ゼオラ「え・・・？」

ハーケンは目の前にいるアイнстロムがけてカード型爆弾を投げた。それは接触した瞬間、爆散し、アイнстロムを怯ませた。

ハーケン「やつぱ怯ませるので精一杯か……  
だが……！」

ハーケンは仕留めるためにカードを投げたわけではない。  
チャージの為の時間を稼ぐために怯ませるのが目的である。

ハーケン「……クロンダイク・モード！  
エネルギー充填完了！」

ハーケン・ブロウニングが持つリボルバー『ロングトゥーム・スペシャル』はその銃身を開き、大出力のエネルギー弾を発射する形態『クロンダイク・モード』に変化させることが出来る。

その威力は彼が携帯する武装では最大の破壊力を有するが、  
それ故に隙は大きく、連射する事は出来ない。  
正に最後の切り札である。

ハーケン「……でいいいいやつ……」

ハーケンはエネルギー弾を打つと同時にロングトゥーム・スペシャルを大きく振りかぶった。

それはまるで巨大な光の剣のようであった。  
そう彼は撃つたのではない、薙ぎ払つたのだ。

アイнстー「…………？」

先行したアイнстー群は迫り来る巨大な光の刃になす術も無く飲み込まれ

塵一つ残さず消滅してしまった。

錫華「ほつまう……！」

これはまた爽快であるな。」

アシェン（DTD）「今ので敵の半分ぐらいは消えちゃったかな？」

ハーケン「ふう……久々にフルチャージでぶつ放したが、

・・・何か前よりパワーアップしてないか？」

鞠音「フフフ……」

これも一重に私の調整の賜物です。

それに艦長、今のは中々の使い方でしたわ。」

神夜「ハーケンさんとつても凄かつたです！」

まるで光の剣みたいでしたね。」

ハーケン「一度やつてみたかったのさ、これがな。」

アシェン（DTD）「でもクリスタルのほうはビンビンのギンギンだね。」

鞠音「ちつ・・・忌々しい！」

ジョナサン「この切れ味、まるでPT用のプラズマカッターだな……」

・！」「

ソフィア「一体その小さな銃の何処にそんなエネルギーが……？」

ハーケン「さあな。

詳しい事はドクター・マリオンにでも聞いてくれ。」

鞠音「後でじっくりとお聞かせしますわ。」

できれば生き残った後で。」

ラミア「確かに凄まじい威力だ……」

だが今の攻撃で通路が分断されてしまったな。」

ハーケン「慌てんないで、揚げ足ロイド。

道をふさいだんじゃない。

作つたんだよ。」

エネルギー弾はAINストのみならず、

基地の外壁を部屋や柱もろとも破壊してしまった。

だがそのお陰で外に繋がる大きな穴を作る事が出来た。

ハーケン「ま、一拳両得つてやつせ、こいつがな。」

ジョナサン「成程・・・

で、ここから降りようといふのかい?」

ハーケン「ああ、我ながら悪くない作戦だと思つが?」

ラトウー「一つ聞きたいんだけど・・・

「ここからどうやって降りるつもりなの?」

ハーケン「ん・・・?」

ハーケンは嫌な予感を胸に穴の外を覗いた。

ハーケン「あー・・・思つたより結構高いな、こいつは。」

カイ「高いも何も・・・

「ここを何階だと思つているんだ、貴様は!」

鞠音「全く・・・

「その場のノリで後先考えないからこうなるのです。」

リー「艦長の悪いクセですな。」

ラトウー「・・・いつもこんな調子なんですか?」

ハーケン「まあ、な。

「だがなんとかなつちまうのが俺の凄いところだ、スマーチガール。

アラド「(うわ)・・・

失敗を棚に上げて自慢話する人間なんて初めて見た・・・

」

アシロン（D-T-D）「うーん……

だいたい20メートルちょっとでトコロだね。」

ヘンネ「騒ぐと思えばその程度かい。

なら、迷う事はないさね。」

ヘンネはそう言つと翼を広げて飛び立つた。

予想していたとはいえ、この世界の住人には衝撃的であった。

エリ「あの翼……本当に飛行用のものだったのね。」

カツツエ「伊達や醉狂で生えてるわけじゃないじゃない?

ま、あの子の場合他にも使えるらしいけど。」

ジョナサン「あれで羽が白ければまさに天使だな。」

ハーケン「だが当の本人がアレジや良くて破壊天使だな。」

ヘンネ「何か言つたかい……？」

ハーケン「おっと、お早いお帰りで。

「どうかしたかい、ブラックエンジェル?」

ヘンネ「ただの質問さね。

飛べるのはアタシとキュオンだけだろ。

他の連中はどうする気だい?

飛び降りるのか?」

エイゼル「我やカツツエなら問題はないだろ?が……」

アラド「む、無理ッス! 無茶ッス!」

「こんなとつから落ちたらあの世行きッス!」

ヘンネ「・・・つたくこの世界の連中は本当にヤワだね。」

神夜「わ、私だって落ちたらペちゃんこですよ!？」

錫華「わらわもだぞよ、鳥女よ!」

鞠音「いかに妖精族の血が入つてているとはいえ、体の強度は人間と大差ないのであるよ?」

ハーケン「俺は遺伝子段階で身体強化されてるとは思つが、この高

それで無事に済むとは思えん。」

エリ「改めて聞くと本当に多種多様なのね、あなた達。」

ヘンネ「ただの『ごつ』た煮つてだけさね。」

エイゼル「こうなれば一人ずつ抱えて降ろしていくしかないな。

頼むぞ、ヘンネ。」

ヘンネ「あ・・・

リーダーの命令じや仕方ないさね。」

エイゼル「キュオン、お前には先行して降下地点周辺の戻候と降下中の護衛を命ずる。」

キュオン「え？、何でキュオンが？」

エイゼル「地上での護衛と警戒は我にでも出来るが、空中ではどうはいかん。

ヘンネの手が離せない「え？」非常に危険を伴うが、この任務はお前しか任せられんのだ・・・」

キュオン「キュオンは頼りにされてるって事？」

じゃあ・・・思いつきり張り切っちゃうからねー。」

キュオンは嬉しそうに戦術砲機『ブロンテ・クラフト』に乗つて外に飛び出した。

先程この世界の住人はヘンネの飛行に睡然としたばかりだが、またも同じリアクションをとらざるを得なかつた。

ラトウニー「・・・飛べるってそういう意味だつたのね。」

アラド「ホウキに乗つて空を飛ぶつて・・・

まんま昔話の魔法使いだな、アレ。」

ジョナサン「全く、君らのやる事は我々の科学の常識を悉く破壊してくれるな。」

ソフィア「それよりも、彼女を一人で行かせて大丈夫なのかしら？」

ハーケン「あー・・・あのリトルデーモンなら心配ないさ。」

前に言わなかつたか？

ああ見えてヤリ手だつて。」

ゼオラ「でもあの子、全然強そうに見えないけど……？」

錫華「あやつは見た目で判断するなといついい見本ぞな。

何度も痛い目にあった事やら……」

アシエ（D.D.D）「ホント、あの見た目での火力ってのは正直反則だよね。」

ヘンネ「伊達にオルケストル・アーミーの幹部やつてたわけじゃないさね。

親衛隊もいたぐらいの実力もあつたしね。」

アラド「（あの見た目じゃ 親衛隊つづりより、ただのファンクラブなんじや……）」

キュオン「やつほー！」

たつだいまー！」

エイゼル「……戻ってきたか！」

アラド「つていうか早ツ！」

エイゼル「状況は……？」

キュオン「えーっとね。

あいつら、基地の外にはあんまりいないみたいだよ。

あ、そのぶん建物の中にはギツチリ詰まつていた感じだ

つたよ。」

ハーケン「つまり、外の方が安全つて事なのか……？」

キュオン「うん。

ミルトカイル石がちょっと生えていく程度であとはフツ

ーな感じだよ。」

エイゼル「……念のため、我が先行して降下地点の護衛をする。

我が家着地したら、降下作業を始めろ。」

カツツエ「アラ、そういうのはネコ科のアタシの仕事じゃなくつて？

この程度の高さ、余裕なのはアナタも知っているでしょ

？」

エイゼル「……いや、カツツエ、お前には殿を願いたい。」

カツツエ「上階のほうの護衛ってワケね・・・

それは構わないけど、アナタ一人で大丈夫かしら？」

リー「何でしたら私がお供いたしましょ。」

何を隠そう私もネコ科でありますからして。」

錫華「隠すもなにも全面的に宣伝してあるではないか・・・」

ハーケン「・・・ついでだアシェン、お前もいってやれ。

センサーで護衛のサポートと生存者の探索をしておけ。」

アシェン（DTD）「えー！？

「この高さから落ちたらボクしんじやうよ～（棒）」

鞠音「私の調整は完ぺキでしてよ？

この程度の落下の衝撃程度で壊れるような事はありませんわ。」

アシェン（DTD）「う～・・・

「こっちはまだ修復中だつて言つの・・・」

鞠音「黙らつしゃい。

そう思うのならさつさと治しなさい。

なんなら私がこの場で素直に言つ事を聞くように調整してあげま<sup>s</sup>」

アシェン（DTD）「あーーーもつーーー！」

一番、アシェン・ブレイデル！

行つきまーす！」

リー「ハツハツハ。

気の早い奴め。

では私もお先に失礼いたします、エイゼル殿。」

アシェンとリーは率先して飛び降りた。

前者は半ば自棄で、後者はそれに呆れて。

鞠音「・・・つたく、アシェン。

そんなに私の調整がイヤだと・・・！？」

ハーケン「カリカリすんなよ、ドクター。

結果オーライだる?」

鞠音「まあ、今回だけはよしとしましょ?」

エイゼル「・・・では我も続こう、

後は頼むぞ、ヘンネ、キュオン。」

ヘンネ&キュオン「「了解!」

エイゼルはヘンネとキュオンの言葉を確認すると躊躇無く飛び降りた。

ゼオラ「あ、あの人達・・・本当に飛び降りちゃったわ・・・！」

ヘンネ「ウチのボスはあんなのなんでもないさね。」

ハーケン「・・・ヤレヤレ、この高さでもなんとも無いとは。

流石は特殊任務実行部隊のリーダー、ヤワな体はしていない、か。」

一同が呆れている中、暫くすると地響きのよつた着地音が聞こえた。

ヘンネ「・・・着地したようだね。

行くよ！

取りあえず、そここのボウズからだ。」

アラド「え！・・・え！？」

な、なんでオレ何スか！？」

ハーケン「持ち運びがよさそうで、丈夫そだからじやないか？」

アラド「そ、そんな理由ツスか！？」

ヘンネ「グダグダぬかすな！

時間が無いんだ、しつかりつかまつとくんだけ！」

アラド「ホ、ホントに大丈夫何スか、コレ?」

カイ「落ち着け、降下訓練だと思えば・・・」

錫華「落下傘は無いがな。」

アラド「や、それってただの飛び降り血や・・・って  
「やああああああああああああ・・・・・・・・・・」

アラドはヘンネに抱えられて悲鳴と共に下に落ちた。

ジヨナサン「う～む、美女に抱えられるのも悪くはないと思つてい  
たが・・・

不安になつて来たな。

ハーケン「どういづ時、この世界ではどうあるんだ?」

シミガサン 一 とけあえず神に祈る

ハーベンとともに同じだった

ラングレー基地 第5大型倉庫

怖いのはアタシやアニキだつて同じなんだから。  
お願いだからちょっと黙つててー！」

リム（クリス）「（わ、分かつたからどうならないでよう・・・）」

リム（リアナ）「熱毛元に寝つているみたいだし、呼吸毛安定して

いる  
・  
・  
・

多分、もう大丈夫。

「アーヴィングの『ジ・ブリーチル・ガーデン』」

この分だとすぐ止までも起きあがれると想ひ。

ジョシュア達はあの騒動の中にもかかわらずその場から動こうとはしなかつた。

理由は二つ、

一つはアルフィミニが謎の昏睡状態に陥ってしまった、そしてアクセルも暫くして同じく気を失ってしまったからだ。

リム（リアナ）「良かつた・・・」

「人とも一時はどうなるかと思つたけど・・・」

アクセル「う・・・」

「気を失つていたか・・・不甲斐ないな、こいつは。」

リム（リアナ）「ア、アクセルさん・・・！？」

大丈夫なんですか！？」

アクセル「だから言つたろ・・・こいつは病気の類じやないとな。」

ウツ・・・？」

アクセルは立ち上がろうとしたが、何故かその場で転んでしまった。目覚めたばかり、というのもあるだろうが、彼はそうとは思えなかつた。

アクセル「（何だ・・・？

体が動かしづらい・・・？

いや、何か違うような・・・？」

ジョッシュ「ほら、

あまり無理はしないほうが・・・」

アクセル「・・・いや、もう大丈夫だ。

それより何が起こつた？」

ジョッシュ「けたたましい警報音とミサイルの発射音、その後何かが大量に落下して・・・」

奴らが・・・？」

アクセル「奴ら・・・？」

ジョッシュ「・・・お見せします。

リム、アルフィミニを頼む。  
すぐ戻る。」

リム（クリス）「・・・分かつた。」

ジョッシュはその場から離れ、倉庫の扉の方へ向かった。  
そして扉をほんの少し開け、その隙間からアクセルに外の様子を見  
せた。

ジョッシュ「どうだ・・・」

アクセル「こいつは・・・！？」

そこには地獄があつた。

どう控えめに見ても地獄にしか見えなかつた。  
耳に入るのは銃声と人間の阿鼻叫喚と獣の嘶き。  
目に映るのは半壊した建物と  
外からでも識別できるほど彩られた紅い通路と  
そこで群れなす異形の群像達、  
そして血を吸つて成長しているかのような紅い結晶体。  
扉の隙間から漏れてくるのは肉が焦げるような嫌な臭い。  
そこにもはや兵も人間もない。  
いや、いられる筈が無い。

これがジョシュアが動かなかつたもう一つの理由である。  
ここから出ると言つ事は、地獄の釜に身を投げ出すのと同意語だか  
らだ。

ジョッシュ「過去のデータには無い小型のアインストです。

人間を集中的に襲つてゐるようです。」

アクセル「あちこちに落ちてゐるのは拳銃に、サブマシンガンか？

何故武器があんな所に?」

ジョッシュ「使っても意味の無い武器なんて逃げるのに重くて邪魔なだけです。

それに対してもう一つは人間をボロ雑巾のよう引きたるに切る事ができる馬鹿力に加え、

飛び道具も備えています。

・・・そんな奴らとともに戦おうとする方がどうかしていますよ。」

アクセル「対人戦に特化したAINST」というわけか。

(そしておそらくはアルフイミィが話していた第3のAINST)

ジョッシュ「エント基地の生存者が全くいなかつたのが不思議でしたが、

その理由がようやく分かりました。」

アクセル「ああ。

「こうなつてしまえば近代的な兵器は無意味、あるのは一方的な虐殺だ。」

ジョッシュ「・・・これでもまだマシになつたほうです。

数分前までは悲鳴と断末魔で酷いもんでしたよ。」

アクセル「・・・俺とアルフイミィが倒れてどのぐらいだ?」

ジョッシュ「10分あまりと言つた所でしじつか。」

アクセル「たつた10分で、か。

それにあのクリスタル・・・

となると、通信回線はオシャカか?」

ジョッシュ「確かに強力なジャミングですが、短距離用の通信なら何とか。

ですが長距離用は完全に使用不能、SOS信号も出せないので救援要請は無理です。」

アクセル「外の連中、そして俺達を見る限り、まだ操られているよ

うな様子は無いな・・・

(通信回線もまだ一部生きているところを見ると、単純なパワー不足なのか?)

それとも何か別の・・・?」

ジョッショ「・・・戻りましょう。

「ここに長くいると連中に気付かれます。」

アクセル「ああ・・・」

ジョシュアは扉を閉め、アクセルと共にリアナ達のいる場所へ戻つた。

あの地獄から逃げるために。

リム(リアナ)「アニキ、外の様子は?」

ジョッショ「酷くなる一方だ。」

悲鳴がだんだん聞こえなくなってきた。」

リム(リアナ)「そ、それってつまり・・・」

ジョッショ「向こうつの建物にいる人間がいなくなつたら、次はここに来るかもしねり。」

リム(リアナ)「他所の基地から救援とか来ていいの?」

「こんなになつてるんだから気付いてもいいんじゃないじゃ・・・」

「ジョッショ「まだこいつって10分かそこらだ、いくらなんでもそんなに早くは無理だ。」

一番近い基地から出発したとしてもここまで到着するのに最低でも一時間以上かかる。

気付いてはいるだろうが、望みは持たないほうがいい。」

アクセル「救助が来る頃には基地の模様替えは終わっちゃってるだろ?」

そしてそいつらも俺達もテスラ研を襲つた連中の仲間入

りつてわけだ。

その前に俺達がアインスト共の餉食になるのが先かもな。

「  
リム（リアナ）「だ、だつたらこんなとこじゃ・・・」  
ジョッショ「長居は無用、と言いたいだろ？が、よく考えてみる。  
まずこの基地には生半可な銃火器をものともしない化  
物が何百もいる。」

強行突破は出来ない。」

リム（リアナ）「じゃあ隠れながら出口を探すってのは？」  
ジョッショ「この基地は広すぎる。」

それについて連中のコントロール下におかれるか分かつ  
たもんじやない。」

出口を探す時間なんて殆ど無いに等しい。

そもそも出口なんかあるのかすら怪しいがな。」

アクセル「戦力的に、時間的に、こちらが圧倒的に不利、というわ  
けなのさ。」

リム（リアナ）「ようするに絶望的ってわけね・・・」

氣休めでもいいから望みがあるとか言つて欲しいな・

・・・

ジョッショ「現実的に物事を述べただけだ。」

もつとも、励ましでこの戦況が変るとは思えないがな。

「  
リム（リアナ）「（なんかクリフみたいな言い方だな・・・）」  
アクセル「なら、白旗でも揚げるか？」  
ジョッショ「だが、それ通じないからなんとかするしかない、でし  
ょ？」  
アクセル「フツ・・・おまえも大概に諦めが悪い奴だな。」  
ジョッショ「でなければ南極くんだけからここまで来たりしません  
よ。」

「もつとも、手の打ちようが無ければ別ですがね。」

アクセル「違いない。」

リム（リアナ）「アーキ、ひょっとして何か策でもあるの？」

ジョッショ「思いつき程度ならな。」

リム（リアナ）「聞くんじゃなかつた……」

アルフイミィ「なにやら……すさまじい展開になつてきただよつたよつですのね。」

リム（リアナ）「ア、アルフイミィー……？」

アクセル「何だ、起きたのか……？」

アルフイミィ「アクセル、その言い方はあんまりではありますんの？」

もつとこいつらいっぽい抱きしめて泣いて喜ぶとか……

・

ジョッショ「冗談が言えるよつですから心配は要らなによつですね。」

アクセル「だな。」

アルフイミィ「あ、あんまりですの。」

「これでもまだ結構フラフラですのに……」

ジョッショ「冗談だよ。」

体の具合は流石に本調子じゃない、か。」

アルフイミィ「はい。」

ですが、そもそも言つていられないようすでありますので。」

アクセル「まるで今まで起きていたような口ぶりだな？」

アルフイミィ「そう睨むのは勘弁して欲しいですの……」

確かに先程から意識はハツキリしていましたが、  
体の自由が利くようになるのに時間がかかりまして……

・

リム（リアナ）「な～るほど……」

狸寝入りを決め込んでいたつてわけ？

アクセル「いや、今回ばかりはそうではないよつだ。」

俺も目覚めた直後は似たような目に遭つた。」

アルフイミィ「やはり、アクセルも……」

アクセル「金縛りとはまた違つよつた感じだったが……

何か分かるか？」

アルフイミィ「恐らくは、私とアナタと彼らの同じ部分が互いに引かれたのだと思つます。」

リム（リアナ）「同じ部分……？」

アクセル「搔い摘んで言つと、俺は昔こいつに命を助けられた。

こいつの持つアイнстの力を使つてな。」

ジョッショウ「では、アクセルさんが彼女と共にいるのは……！」

アクセル「変に考えるな。

ただの成り行き同士だ、こいつがな。」

リム（リアナ）「（な、なるほど……）」

アルフイミィ「でもあの時私は既にアイнстではなくなつていました。

ですがアイнстを祖とする事には変りませんの。  
そしてその力で命を取り留めたアクセルも……」

ジョッショウ「……引かれたつて事は、一種の感應のようなものか  
？」

アルフイミィ「近いけど遠い……今の私に分かるのはそのぐらい  
ですの。

もう彼らは違つすぎてしまつてしますので……」

アクセル「遡いすぎる、か……

ベーオウルフの事もある、イエツツの時のよつて  
ただ暴れまわつているだけと言つわけではなせうだが・

・？

アルフイミィ「『めんなさい、彼らの声はもつ私にも……』

ジョッショウ「正直、謎だらけで困るな……」

アクセル「言つな、それよりも

今はこの状況をどつきりぬけるかだが……

む・・・？」

アクセルは話を切り出そうとしたが、その時一つの異変が起こった。ほんの数秒だが空気を劈くような音が外から聞こえてきた。

アクセル「何だ……この音は！？」

建物が崩れる音ではないぞ！？」

ジョッシュ「まさか……！」

ジョッシュ「クッ……！」

ジョシュアは扉の方へ走り、外の様子を見た。ジョシュアは見た、基地が両断されているほどの巨大な破壊の爪跡を。

そしてこの状況でそんなものを見て希望を連想する人間はない。

ジョッシュ「クッ……！」

ジョシュアは扉を閉め、リム達の待つほうへ体を向けた。その時、まるで地響きのような音が遠くから聞こえたのを彼は耳にした。

リム（リアナ）「どうかしたの、アニキ！？」

ジョッシュ「……奴らが、基地の破壊を始めた……」

ハーケン達の存在を知るはずも無いジョシュアにとってはそう判断するしかなかつた。

リム（リアナ）「そ、それってつ、つまり……！」

アクセル「……一つの目的が完了し、次の段階に移つたと言つ事だ。」

ジョッシュ「最初の目的が人間を殺す事、だとすると……」

アルフィミィ「もうあの基地には誰も……」

アルフィミイが言いかけたのとほぼ同時に、

赤く光る何かが、倉庫の天井を貫き、リムの体をかすめた。

リム（リアナ）「あ・・・？」

あ・・・・・あ・・・・？？？」

リムの足元の床には穴が開き、熱を帯びた色をしていた。

彼女の肌は余波の熱により火傷をしてしまったが、

今のリムにとつてはそんな事を気にする余裕など無かつた。

穴の開いた天井から覗くそれは新しい獲物を見つけた事を確認した。そして彼女もその事を理解した。

その瞬間、彼女の意識は遠のいた。

ジョッシュ「！？

リム「ツ！」

ジョシュアは叫びながらリムに駆け寄り、

その硬直した体を抱きかかえ、すばやく身を引いた。

数コソマ遅れてアクセル達も気付き、ジョシュアと同じ場所に移動した。

アクセル「天井からだと！？」

奴らが近づくような音などは全く・・・・・？」

アクセルの疑問はもつともである。

AINSTOは基本的に空を飛べない。

飛べるのはアルフィミイのペルゼインとクノッヘンの亞種だけだ。だが前者と後者には大きな違いがある。

ペルゼインは宙に浮いて空を飛ぶが、

クノッヘンは翼で羽撃くかあるいは変形した体で飛行機のように飛

ぶ事しか出来ない。

だが、今の攻撃の前後には羽撃きの音はおろか一切の移動音が無かつた。

そもそもクノツヘンは物理的な攻撃しか出来ない。  
ビームや電撃の類など撃てるはずがない。

アクセル「こいつは一体……！」

だがアクセルの疑問を他所に、紅い雷が次々と天井を突き破り、  
そしてついには大穴が開き、その無音の飛翔体が降下してきた。  
それと同時にアクセルの疑問は解けることになる。

アクセル「なるほど、な……」

現れた異形は鳥のようなシリエットをしていたが、  
その姿は鳥とはかけ離れていた。

異形の殻を身に纏い、触手が寄り集まつてできた異形の翼を持ち、  
その体は血のような紅とベドロのような黒で彩られた毒々しいモノ  
だった。

そのモノの名は『ヘルツオーク』

音も無く空を浮遊し、雷を操るアインスト。

そしてこの世界には存在しないアインストである。  
つまり、彼らには知りようが無い存在なのである。

ジョッショウ「あ、あんな奴はデータには……！？」

アクセル「ああ、俺も初めて見た。

正真正銘の新顔つてワケだ。」

天から舞い降りたそれはたつた一体。

だが抵抗する術を持たない彼らにとつては十分すぎる恐怖を与えた。

そしてそれは獲物を追い詰める獸のよつにゅくつと降りてきた。  
だが彼女にはそつは見えなかつた。

ヘルツォーク「…………」  
アルフイミイ「（やう・・・アナタは・・・そしてアナタ達は・・・）」

ヘルツォークはその異形の翼を前に伸ばし  
アルフイミイ達のいる方へ近づいていた。  
アルフイミイだけはその行動を理解していた。  
だが彼女以外は敵が迫つてゐるようだしか思えなかつた。

アクセル「（・・・まいつたな、じいつは。）」「  
ジョッショ「（・・・すまない、リム。）」

「ラングレー基地 屋外」

リシュウ「と、年寄りには」こつはちときつこの「・・・」  
ヘンネ「これでも精一杯なんだよ、ジイちゃん。

じゃ、次行くからな。」

ヘンネはそつこつと翼を羽ばたいて一気に上昇した。

リシュウ「凄いもんじゃ の、一瞬で上に・・・」  
エリ「降下速度より早いかもせんね。」

ソフィア「あれば降下といつよりもしごろ落<sup>ハ</sup>と書つたほうが適切で  
すよ。」

リシュウ「全く、悲鳴をあげる暇も無かつたわい。」

エイゼル「博士達はどいつも今のうちに少しでもお体を休めるよつて勤めてもらいたい。

護衛は我等が致しますので。」

ジョナサン「そうさせてもらひつた。」

リー「しかしハツキリ言つて手間がかかりますな。」

アション（D-T-D）「いへんじやない？　

もう少しなんだし。」

アラド「だ、だれか少しほ俺の心配もしてくだしゃい……」

リー「何を言うかと思えば、

大の男がだらしないですな。」

アラド「こいつのに男も女も関係ないと思つけど……

「ひづ・・・」

最初のダイブの時にヘンネはいつものように下降した。

落下速度に翼のパワーを加えて高速で下降、そして地面ギリギリで羽ばたいて落下速度を相殺して着地する。

それは彼女にとつてはなんとも無い事だつたが、

アラドにとつては胃と脳が口から出てしまいそうなほどの一大事だつた。

お陰でヘンネは手加減をして降下するよりは氣をつける事にしたが、最初で最後の被害者アラドは未だにまともに立ち上がる体力すら回復していない。

ジョナサン「こいつては何だが、

最初がアラド君で助かつたよ。

君は肉体強化と訓練を受けていたからその程度ですんでいるが、

そうでない我々だったら降下どころか昇天してしまつていただろうからな。」

ソフィア「でも一步間違えればアナタと言えども危なかつたわ。」

アラド「へへ・・・

悪運の悪さとしぶとさが俺の長所ツス！

それより・・・何か暑くないツスか？」

リー「あー・・・それはアシエンのせいですな。

なにせ熱暴走モードですからして。」

アシエン(DTD)「今ならマジでヘソでお茶が湧かせるよ〜ん。

アラド「出来れば熱いのより冷たいのが欲しいツス・・・

ジヨナサン「やれやれ・・・ところでアシエン君？

ハーケン君から言われた生存者の探索のほうはどうなつた  
つているかい？」

アシエン(DTD)「それが中々ビリしてサッパリなんだよね。

ミルトカイル石の怪電波が強くなつていて探しに  
くいつたらありやしない。

リー「ハツキリ言つて、期待できそうにはありませんな。」

アシエン(DTD)「一応生体反応は出ちやいるんだけど、

なんかミヨーな感じで・・・

ん・・・・?

リー「どうした、アシエン?」

アシエン(DTD)「ちょいまつて・・・今は・・・

人間の声!?

アシエンは確かに耳にした。

近くから聞こえる人間の叫び声、それは断末魔でも悲鳴でもない。

誰かの名を叫ぶ声だ。

アシエンは声がした方向にあらゆるセンサーを向け解析を始めた。

アシエン(DTD)「人間の生体反応・・・間違いない生存者だよ

!!

場所は・・・あの倉庫の中!~!

ジヨナサン「本当か!?

(確かあの倉庫は……)「

アシロン(ロード)「けどこれは、限りなくヤバイ!」

リショウ「どう言ひ事じや!?」

ソフィア「もしや、すぐ側にアイнстが……!?」

アシロン(ロード)「ザッシュライツ!-!」

エリ「じゃあ、このままだと!?」

リー「間に合つか、アシロン!?」

アシロン(ロード)「違うね!」

間に合わせるんだよッ!-!』

アシロンは蒸氣を上げながら全速力で生存者のいる倉庫の方へ田指  
した。

彼女がいた場所には高温に熱せられた空氣だけが残つた。

アラド「な、なんつーデタラメな速さ……」

ジョナサン「……詳しく聞く間もなく行つてしまつたか。」

リー「しかし、アシロン……今回は結構長いですな。」

アラド「あのDTDつてヤツッスか?」

ジョナサン「それだけ君の踵落としが強烈だつたんだろう?」

リー「いえ、それでも元に戻つてもい頃合だと思いますが……

そうなると少し厄介な事になるやもしれませんな。」

エリ「どう言う事かしら?」

リー「いえ、以前ドクターから気になる事を聞いたのですが、

アシロンのやつ、モードを解除すると一時的にパワーが落ち  
るやうで、

その度合にはDTDの長さに比例するとか。

あと今回のような場合はモードは自分で制御できないので何  
時終わるのか

アシロン自身にも分からないとか……」

ソフィア「……つまり、もし今の状態で強制的にモードが解除さ

れでもしたら……」

リー「おっと、その先は言わないでください。

アシェンが離れた今、今までココを動くわけにもいかんでしょう。

行くのは艦長か、姫様方が着き次第、それまでは……私は……！」

ジョナサン「ふう……神に祈るのは今日で二度目だな。」

リー「（だが問題は、アシェン、おまえがそれを知っていると言う事。

知つていて何故……？）

そうアシェンは気付いていた。

もうリミットはすぐそこにまで迫つていてと言つ事を。

だが彼女は戸惑うことなく助けに行く事を選んだ。

それは彼女自身の意思もあるが、彼女の失ったはずの記憶メモリーが叫んでいたからだ。

あの人を守れと、あの人を救えと。

アシェン・ブレイデル、その名前は魔法にかけられた物語の主人公のもの。

その魔法は彼女をどびきりにしてくれるが12時の鐘を過ぎれば、元のみすぼらしい姿に戻ってしまう。タイム・リミット

物語の主人公はそれを知つて王子様の前から逃げ出した。だがこの彼女はそれでもなお逃げる事を選ばなかつた。

何故ならそこには彼女の大切な人の大切な王子様なのだから。

## 第5話 a 交わる『刻』 その4（後書き）

次週はどうなることやらって書いた矢先にもう一ヶ月半近く経つてしましました（ＴＴ）

その分、今回は大幅増量です。

ついでにこぼれ話も増量です（オイ

最初書いたときには半角で5000字程度だったので  
アイデアを練り直したり付け足したりした結果4倍近くなってしま  
いました（笑）

分割も考えましたが間がかなり開いたのと分割すると  
少しテンポが悪くなるのであえてそのまま掲載です。

かたやズルに近い無敵兵器満載で順調に脱出中なのに対し、  
かたや抵抗手段ゼロの四面楚歌状態という酷い格差が出てしまいま  
した（＾＾；）

正直、両サイドのパワーバランスの差が激しそぎて書いてて困りま  
した。

妙に多いアインスト軍団、その正体が分かるのは次回。  
でもワリとストレートに書いたつもりなので大方の人は分かってい  
るはず（汗）

実は今回グロ描写多めの予定でもっと事細かく書くつもりでしたが、  
OG組とEF組で温度差があつたり、  
アラド達が倒れたり吐いたりやさぐれたり立ち直つたりと  
話が一向に進まないのでその辺りは削除＆書き直しをしました。

今回終盤のアクションの『シンデレラ』になぞらえたくだけば

『無限のフロンティア』をプレイしてハーケンと神夜の召シーンを見て思いついたもの。

モチーフになぞらえながらモチーフに反する事でキャラとして確立する手法は書いてて楽しいけど正直難しい（汗）

さて次回はどうなる?とやら・・・

## 第5話 a 交わる『刻』 その5

＜ラングレー基地 第5倉庫＞

アシエン（ロード）「だあああつりやあああああああああッ！」

異形の翼がアクセル達に迫ろうとしたその刹那、アシエンは両の脚で壁に大穴を開け、そのままヘルツォークを倉庫の壁に叩きつけた。

ジョッシュ&アクセル&アルフィミィ「……ツツツ…？」

「

アシエン以外の全ての者は攻撃の衝撃波でその場から吹き飛ばされた。そして土煙の舞う中、アシエンは動けずにいた。

アシエン「（モード解除を確認…

だがパワーの消耗が激しすぎた…

・・・何・・・だ・・・この・・・妙なノイズは…

？）」

？？？『W0・・・の子を・・・がい・・・それと・・・

何故なら今、彼女自身にとつても不測の事態が起こっていたからだ。長時間の熱暴走モードがそうさせたのかどうかは定かではない、が、彼女の失われたメモリーの一部が呼び覚まされようとしていた。

< ? ? ? >

アシエーン』・・・

「これは・・・どこだ・・・?

調整力プセルの中・・・?

声が・・・聞こえる・・・『

アクセル「まだこんなところにいたのか、レモン?」

レモン「あら、アクセル?」

てっきりもう行ったものかと思っていたのだけど。」

アクセル「これから行くところを。」

「ここに来たのはついでだ、これがな。」

レモン「フフ・・・相変わらず口下手ね、アナタは。ま、そういう事にしておいてあげるわ。」

アクセル「・・・こいつに、何を吹き込んでいる?」

レモン「ただのメンテナンス。」

「これが最後になるかもしないし、ね。」

アクセル「・・・まだソイツらに未練があるのか?」

レモン「・・・さあて、ね。」

アクセル「こいつ等のプロジェクトはとつの昔に凍結された。」

「本来なら、破棄されてもおかしくはない。」

「PLAN E Fとやらで『向こう側』へ行くことになつたとしてもそいつ等は・・・」

レモン「でも、用心に越した事は無いでしょ。」

「転ばぬ先の杖つて言うじゃない?」

アクセル「・・・なら俺はそんな事が起きないよう祈るさ。」

「じゃあな、テスラ研で待つていろ。」

レモン「行っちゃったか・・・」

「私もそろそろ行かなきやね。」

「・・・お休み、W07。」

「あの子をお願いね、それと・・・出来ればアクセルも、ね。」

アシエソウ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ラングレー基地 第5倉庫へ

アシハナ「……今のラジコンは……」

ノモリ・・・・なのが  
何故今になつて・・・

ジョッシュ「な、何が起こつたんだ!?」

この人は一体・・・！？

ニヤ、アラシヒコリ・・・(「アラシヒコリ」)

ナでのところで間に合つたようだな。」

物語集

「アハーロードー。」

（二）、（三）は確かで、（一）は（成程、ならばテスラ研への依頼というのは……）

「ええ、（この声……！）さつきのメモリ

どうか・・・私を駆り立てていたのは恐らく・・・  
・・・だからといって、私がするべきことは変わらな

۱۰

救援に来た、負傷者はいるか？

ジョッシュ「あ、ああ。

俺は良いが、リムが・・・

そうだ！リムッ！リムッ！――」

ジョシュアは慌ててリムを探し、側により、呼びかけ続けた。

リム（クリス）「う・・・うひ・・・

お、お兄・・・ちゃん？」

ジョッシュ「よ、よかつた・・・」

アクション「外傷は軽微・・・生体反応も正常値だな。

・・・立てるか？」

リム（クリス）「は、はい！大丈夫です、なんとか・・・

リム（リアナ）「（アニキ、何この変なカツコした人？）」

ジョッシュ「（救援に来たんだそうだ・・・

よくなはないがアクセルさんの話によれば、アン

ドロイドらしに。）」

リム（リアナ）「（アンドロイド・・・？）」

アクセル「・・・おい、W07。」

アクション「何ですか、ロリコン野郎。」

アクセル「・・・誰が口り・・・まあいい、構つてたら話が進まん。

リム（リアナ）「（・・・の割には、随分口は悪いようだけど？）」

アクセル「・・・救援に来た、と言つたな。

他に生存者がいるのか？」

アクション「その回答に関してはイエスちゃんがつたりしちゃいます  
のだ。」

リム（クリス）「（それに何か、喋り方も変だよ・・・？？？）」

アクセル「・・・人数は？」

アクション「もうそろそろ来る筈なので」勝手に見やがりませ。」

ジョッショ「？？？」

<ラングレー基地 脱出組 第5倉庫に向かつて移動中>

ハーケン「つたくアションのヤロー。

まさかとは思うがヘマしてねえだろうな・・・？」

錫華「そう思うのならもつと速う走らぬか、チャラ男よ。

あのポンコツなら十分ありえる話ぞ？」

ハーケン「そういう台詞は自力で走つてから言つもんだぜ、横着プリンセス。」

皆が走る中、錫華は邪鬼銃王の上に乗つて移動していた。  
だがハーケンのように文句をいう輩はいても、その横着な行為をやめさせる人間は1人もいなかつた。

錫華「別にわらわだけが楽しよつとしてやつてているわけではないぞ？」

ジョナサン「まあ楽ではあるのは事実だがね。」

リシュウ「揺れも思つていたより大分少ないしのう。」

何故なら錫華は博士達、非戦闘員を邪鬼銃王を使って運んでいたからだ。

アラド「しつかし・・・

まあ、なんといつかよく乗せられるよなあ・・・

錫華「ほつほつほ！」

流石に百人は無理だが、

この程度の数、わらわが作った邪鬼銃王にとつては無きも同

然ぞ！」

ゼオラ「確かに、強度的には問題ないかも知れないけど……」  
ラトゥー「姿勢制御装置はおろか、動力も無いのにどうやって……」  
・？」

錫華「強いて言えば、ひとえにわらわの天才的な腕がなせる技、と言つたところかのう。」

アラド「（微妙に答えになつてない気が……）」

ハーケン「で、ドクター・カザハラ。

あの倉庫に居るのは4人、全員あんたらの部下、つて事でいいんだな？」

鞠音「というか、私達を調べるというのに数が少なすぎませんか？」  
ジョナサン「もちろん本来なら数十人のスタッフで対応するところだ。

だが彼らの仕事はそのスタッフが来るまで下準備を済ませておく事だ。」

エリ「それに機密上の関係もあつて人数には制限が付けられているの。」

リシュウ「下準備程度に人数は割けられんという訳じやわい。」  
リー「どこの世界でも泣きを見るのは下つ端と相場は決まってりますな。」

ハーケン「ウチの場合……逆じゃないか？」

鞠音「それは艦長がまだまだひよっこだからですわ。」

錫華「そろそろ駄弁りはそのぐらいにしておけ。

ほれ、見えてきたぞ？」

彼らの視界はアシェンが向かつた第五倉庫を捕らえた。  
願うことなら無傷でいて欲しかった、がその倉庫には甚大な被害が及んでいた。

カイ「……壁に大穴が開いているな。」

リー「あの壊し方からしてやつたのはアシェンですな。

これはまた随分とハーテにやらかしたものですね。」

ハーケン「ハア・・・何事も無いわけがなかつたか、こいつは。」

〈ラングレー基地 第5倉庫〉

ハーケン「おーい！

アシェン、いるかー！？」

アシェン「これはこれは艦長、それに皆々様方。

遅いおつきで。」

ハーケン「おまえが突っ走るからだろ？が、おまえが！」

アシェン（D T D）「あ～あ～、聞こえない。」

錫華「誤魔化すのも大概にせい、ポンコツが。」

ヘンネ「・・・分解するなら手伝おうか？」

リー「それは勘弁して欲しいですな。」

アシェンがいないとドクターの科学者としての欲望の捌け口  
が一つ減りますからして。

それはそれは大変な事になりかねませんので。」

鞠音「副長、少し冗談が過ぎましてよ？」

リー「ハハツ、これは失敬。」

ハーケン「その分だと、いつもの調子に戻つたようだな。

状況は？」

アシェン「見たままでやがります。」

ハーケン「オーケイ、シンデレラ。

いつもの調子だな、こいつは。

1・2・3・4・・・・と一応人数は合つた。」

ハーケンは道中博士達から聞いた倉庫にいる人間の人数と生存者数

を照合した後、

後方で待機している邪鬼銃王にいる博士達のほうへ報告に向かつた。

ジミシア達はどういって、この珍妙なチームに畠然としていた。この半年間、非日常を日常としてきたジョシュアでさえ、呆然とするしかなかった。

ジヨツシユ「（な、なんだ、この人達・・・？

いや、それ以前に人……なのかな?」

リム（リアナ）「（ア、アタシに聞かないでよー）」

アルフイミィ「何だかとつても賑やかな人達ですのね、アクセル。」

アクセル「今俺に話しかけるな・・・頭痛がしてきた。」

どうやら考え方を改める必要があるな、」( )

ハーケン「ドクター・カザハラ?

「…」全頃無事のようだぜ？」

二十九

ノラマスル」ハシテ

あなた達が無事で・・・本当に。」

ジョッショ「カザハラ所長！それにネート博士！」

「無事で…」

「……………それに私達が言いたい『』したわ

い、いえ、あの女の人が来てくれなければ自分達は・・

[ 5 ]

アシェン「そうだ、もーと褒め称えるがいい！」  
錫華「おぬしはその口を閉じよ。」

リシュウ「まあ、そう自分を卑下するでない。

儂らも運で助かつたようなもんじゃわい。

それに、ほれ、運も実力の内といつじやろうじ。」

ジョッショ「リシュウ先生・・・！」

ハーケン「おつと、再会でハッピーになるのはいいが、

そのガールは大丈夫なのかい？

見たところ、怪我しているようだが・・・？」

リム（クリス）「だ、大丈夫です。

なんとか歩けますし・・・」

ハーケン「アシェン・・・」

アシェン「言つておきますが、わだすのせいではあります事よ。

アクセル「W07の言つとおりだ。

そいつの怪我は侵入したアイнстによるものだ。

寸でのところでこいつに助けられた、それだけの事だ。

ハーケン「フオローディもな、ミスター。」

アクセル「礼には及ばんさ、これがな。」

ハーケン「ん・・・そういうや、アンタ何でアシエンのコードナンバーを？」

アラド「ゼエツ・・・ゼエツ・・・や、やつと追いついた。」

アシエン「おやおや、これはまた遅い到着で。」

ゼオラ「ア、アナタ達が速すぎるのよ！」

神夜「そうですよ！」

置いてけぼりなんて酷いじゃないですか！」

ラミア「確かに・・・いかに人命救助を最優先させるとはいえ、

理由無くチームを分裂させるのはいたさか同意しかねるな。

戦力的にバランスがとれん。」

カイ「それ以前に各チームの生存率が下がるだろうが。」

エイゼル「故に我とカツツエは後詰に回ったのだがな。」

カツツエ「お姫サマは単純に足が遅かっただけのようだけどねエ。」

ハーケン「そいつはどうも、オコロトは脱出した後でたんまり聞く

とするか。」

ジョッショ「…………。

猫が増えた……それに骸骨……?????

リム「……いいか、気をしつかりもつんだぞ。」

リム（クリス）「（うう……お兄ちゃん、ゴメン。

気が遠くなりそう……）

リム（リアナ）「（ちょっとクリス、根性見せなさい！）

カイ「……状況は？」

ハーケン「生存者は4名、うち1名が怪我をしているが大丈夫のようだ。

例によつてこれから質問攻めになるハズさ、これがな。

ラミア「……お前は！」

アクセル「久しづりだな、ラミア・ラブレス。

そして教導隊の面々、か。

どうやら今日はとことん運が悪いらしいな、こいつは。

アルフィミィ「あら、この状況で知り合いばかり、

といつう点では決して悪いとは言い切れませんのよ、

アクセル？

ゼオラ「アクセル・アルマー！！

それに、もしかしてその子は……」

ラトゥー「アルフィミィ……なの？」

アルフィミィ「大正解ですの

つていうか全然変装の意味がありませんでしたね、

アクセル。」

アクセル「この状況では意味があるまい。

それに俺からバラしたんだから変装云々は関係無いだろうが。

ハーケン「軽くツツコミが入つたところで尋ねるが、

知り合い同士か、あんたら？」

カツツエ「というより因縁めいたものを感じるわねエ。」

アシエーン「先日のラミアたちの証言で

ソウルゲインの操縦者の名前がアクセル・アルマーとなつていやがります。

それと・・・先程復旧した私のメモリーの中にもその男がありました。」

錫華「あの大好きな『闇騎士』の使い手か・・・！」

鞠音「ちょっとお待ちなさい！」

アシエーン、今メモリーが復旧した、といいましたね？」

アシエーン「はい。

数分にも満たないノイズ的な映像記録でしたが。」

ハーケン「20年以上も眠っていたメモリーがこのタイミングで目を覚ますとは・・・

（あの暴走もそのせい、か・・・？）」

アクセル「（20年・・・だと！？？）」

アルフイミィ「と言づか、いい加減あなた方がどういった方達なんか教えて欲しいのです。」

カツツエ「ヨソの世界からの異邦者ヒトランゼ・・・

」ういえば分かるかしら、お嬢ちゃん？」

ジョッシュ「じゃあ、あなた方もアクセルさんと同じ・・・！」

アクセル「そう言つ事らしい。

同じにされてあまりいい気分にはならないがな。」

ラミア「だが聞きたいことはそこではない。」

そうでっしゃる？

アクセル隊長。」

アクセル「・・・ああ、聞きたいことは山ほどある。

だが、どうやらそんな暇はないらしいな、」いつは。」

ハーケン「む・・・？」

アクセルは気付いていた。

何かが暗がりを這いずり回るよつた音を立てて何かが動いているの

を。

そしてそれが、小動物の類ではないと言つ事を。  
それは幽かな呻き声をあげていた。

? ? ? 「タ・・・・テ・・・・・・ス・・・・」

ジヨツ シュ「何か・・・動いている?」

アシエソ「艦長、反応が何か妙です。」

ハーケン「どう妙なんだ?」

アシエソ「数十cm程度の小さな動体反応を確認したのですが・・・

神夜「こっちに近づいてる・・・?」

錫華「姿があぼろげながら見えてきたが・・・」

カツツエ「迎撃なら、いつでもオーケイよ。」

アルフイミイ「いえ・・・その心配はありませんの・・・

何故なら・・・」

這いすり回っていたそれは日の光の下に現れた。  
そしてその姿を見て誰もが驚愕せざるを得なかつた。

ラトウーー「まさか・・・!」

アラド「こんなのがアリかよ!」

そこには今まで斃してきた異形の一体の一部だつた。  
だが、破壊され、中身が溢れ出たそれは、  
おぞましくも哀れな姿をしていた。

? ? ? 「タ・・・・ス・・・・ケ・・・・テ・・・・」

ハーケン「・・・・・アシエソ、もう一度言つてくれ。」

アシエソ「・・・はい。」

映像解析の結果、殆どが解析不能でしたが、

数%ほど人間のそれと・・・合致しました。」

アルフィミィ「（そう・・・彼らは人を襲っていたわけではありませんの。

ただ、助けを求めていただけ・・・」

その正体は、ほんの数分前までは自分達と同じ姿をしていたものだった。

かるうじてそれがそうと分かるのは、所々に自分達と同じ皿や口や手や足などがあつたからだ。

『かるうじ』でしか分からなかつたのは、それら全てが蕩けて混ざり合つていたからだ。

そつ、彼らは助けを求める一心で手を伸ばし、声を上げていただけ・

・  
ただ、その手はもつて者を傷付け、死に至らしめる事しか出来なくなり、

その声は他者を恐怖に陥れる悍ましい唸り声になつっていたのだ。

↖ラングレー基地 ↘?

地獄と化したこの建物の奥深く、

薄暗く氣味悪いほどに静かな場所にそれはいた。

この地獄を作り出した亡者達を統括するに足りうる存在はこの基地における戦果を分析していく。

だが、その後姿はどこか虚ろめいていた。

? ? ? 「 · · · · ·

融合係数 · · · 持続時間 · · ·

思念体への影響 · · ·

やはり・・・これでは・・・

? ? ? 2 「どうみても駄目、だな。」

? ? ? 「・・・貴様か。」

そこに音も無くそこに現れた者は、彼と同じ、統括者足りるもつ一つの存在。

だが彼とは異なり人に限りなく近い姿と振る舞いをしていた。  
しかしこの光景を目の当たりにして眉一つひそめない事が、それが人間では無い事を証明していた。

そしてそれも彼と同じく、戦果を分析し始めた。

? ? ? 2 「うーん・・・やっぱ本来の目的とは大分ズレた事になってるな。

個体差はあるようだが、体が元の状態を維持出来てねえし、思念もオシャカ、

残つてるのは生存本能の欠片ぐらいか。

駒として使うんならこれで十分だが、この分だと他所のほつも期待は出来ねえな・・・

・・・ん?

? ? ? 「ならば我らの悲願は・・・」

? ? ? 2 「・・・つたぐ、なんであんたはそう短絡的且つ自己完結なんだよ。

大体こうなるのはあんたも分かっていたはずだろ。

ま、後押ししたのは俺だけよ。

それに、今回は・・・

? ? ? 「今まで言つたな・・・

しかし・・・

? ? ? 2 「ふう・・・

そうガツカリするなって。

俺達の不安定さが再確認できただけでも儲けモノだろ?.

やつぱ『力』が足りねえ以上、先走んなつてこつたな。  
いくら時間が無いとは言え、な。」

? ? ? 「ならば今は『力』を・・・」

? ? ? 2 「・・・ああ。

今回は元々そのための作戦だからな。  
俺はちょっと他所の方を見てくる。

あんたは、ここを頼むぜ。

くれぐれも計画通りに、な。」

突然現れたそれはまた消えるように突然その場からいなくなつた。

? ? ? 「分かっている・・・全ては再生と進化のために・・・！」

その言葉を発すると同時に、その場所そのものがまるで生きている  
かのように脈動を始めた。

## 第5話 a 交わる『刻』 その5（後書き）

えー・・・今回『も』大分遅くなつてしましました。

ぶつちやけると創作意欲が全く湧かなかつた事と、アイデアが煮詰まつてしまつた事が原因です。

本当に申し訳割りませんでした。

（反省タイム終了）

この4ヶ月の間に色々起きましたね。

『スーパー口ボット大戦NEO』

参戦作品が世代的には直撃なんんですけど、

テレビ東京系列が全く映らなかつたり、当時エルドランシリーズ見ていなかつたり、見ていたのはむしろ勇者シリーズ一択だつたりなので喜んでいいのか悪いのか微妙な気分です（苦笑）  
でもやつてみるとストーリー爽やか、頑張りすぎなポリゴンアニメーション（特にガンバルガー）、頑張りすぎなBGMとやってて楽しいスパロボでした。

更に来年2月には『無限のフロンティア』の続編が出でやつよ！  
しかも前作のキャラ続投だし、

まさかのアクセルヒル（西方生鷲）も参戦だよ！

おまけにロアまで・・・

バンプレストは鬼です、今から待ち遠しくてたまりません、もちろん真っ先に予約しましたよ、ええ。

でもこの小説は書き続けます。

昔の偉い人は言いました。『アレはアレー・コレはコレ』

アクセルとハーケンの関係はとりあえずJIGでは明かしません。

互いに軽い説明のみにしたのは単純に話が進まなくなるから（血涙）

B級ホラーゾンビ系まつしぐらなAINスト。  
ゾンビと違うのは人を襲う動機が食欲だの殺意だのではなく『助け  
て欲しい』『生きる事への執着』である事。

次回は・・・というより今回の一のパートを書き上げた後、すぐ  
にアップするのではなく、次のパートを書きつつ、修正していくと  
いう手法をとっていますので、現在書き上げている『その7』が終  
わり次第『その6』をアップします( ^ ^ : )  
ではまたノシ

## 第5話 a 交わる『刻』 その6

＜ラングレー基地 第5倉庫＞

アシエーン「・・・目標の消滅を確認。

「これでようしいでじょうか、艦長・・・」

アシエーンは内蔵式小型ミサイル『ドラゴン・スケイル』にて『目標』を攻撃し、跡形も無く焼き払った。

ハーケン「・・・助けられない以上、こいつするしか他に無いだろうが。」

神夜「それに、今まで私達が斃してきたのも多分・・・」

錫華「それ以上は言うな、神夜・・・」

アシエーン「・・・勝手ながら、破壊する前に各種データをサンプリングしましたが、

アレからは既に生命反応が感知できませんでした。」

ハーケン「代わりに、AINSTの反応が、か・・・？」

アシエーン「・・・その通りです。」

ソフィア「・・・死んだ体組織を新たにAINSTとして再構成していった、と？」

エリ「そう予測して間違いはないわ・・・」

リム（クリス）「ど、どういう事・・・？」

ジョッシュ「理屈は分からんが、ここで死んだらみんなああなっちまうつて事さ・・・！」

アラド「畜生ッ！」

俺たちや将棋の駒かよ！」「

ラトゥー「あまりにも惨い・・・惨過ぎる・・・」

ジョナサン「だがこれで分かった……」

この広い基地で生存者が殆ど発見できなかつた理由が・

・・・」

エイゼル「いなかつたのではなく、変えられてしまつたのだな、全て・・・」  
カツツユ「・・・冷たいようだけど、感傷に浸つてゐる暇は無くてよ?」

『一秒でも早く脱出してこの事實を知らせや。』

それがアタシ達が彼らに對して報いる唯一の口ト・・・  
そうじやなくつて・・・?』

アクセル「同感だな、こいつは・・・

で、脱出の手立てはあるんだろうな?』

カイ「・・・この先の格納庫にレディバードがある。

それを使えば・・・

ムツ・・・?』

カイがそこまで言いかけた時、再び大きな揺れが発生した。  
しかもそれは地面からでもましてや空からでもない。

ジョッシュ「な、なんだこの地響きはツ!?

アショーン「後方から無数の熱源反応がこちらに向かつて押し寄せて  
いるようです、

それも結構な速度で。」

ハーケン「どうやらおしゃべりはここりで終わつたほうが多い  
しいな。

・・・走るぞー!』

<ラングレー基地 屋外>

ハーケン達は倉庫を後にし、レティバードが待つ格納庫に向かって全速力で走り出した。

だが・・・

ジョッシュュ「これは・・・！」

リム（リアナ）「嘘・・・でしょ・・・！」

目指すべき格納庫には既に無数のアインストが取り付いていた。そして、格納庫の天井を砕き、巨大な翼を広げて彼らを嘲笑うかのようにそれは現れた。

ハーケン「なんだ・・・！？」

あのふざけたサイズはッ！？」

アション「データ分析完了。

どうやらアレがレディバードのようです。」

カイ「そんな馬鹿な・・・！」

ラミア「いえ、よく見ると痕跡があるのがわかります。

おそらく、敵に乗つ取られたのでしょうか。」

アラド「じゃ、じゃあどうやって脱出するんスか！？」

アクセル「落ち着け・・・カイ・キタムラ、P.TやAMの格納庫は何処だ？」

カイ「ああ、どうやらその手を使うしかないようだな。」

神夜「ど、どうするんですか？」

ハーケン「どうやらスーパー口ボツツに乗り込んで逃げる、といふ事らしいな。」

カイ「問題は、奴らが既に手を出しているかどうかだが・・・」

ハーケン「フツ・・・分の悪い博打はいつもの事さ。」

アルフィミィ「でも率を上げるには越したことはない、ですのよねアクセル？」

アクセル「ムツ・・・

成程そう言ひ事が、こいつは。」

アクセルはアルフィミイの表情を読み取り、そして一人はそのまま足を止めた。

ジョッシュュ「ア、アクセルさん！？」

ヘンネ「捨て駒にならうつてのかい！？」

アルフィミイ「そのつもりはありませんの。」

アクセル「殿になるだけだ。」

とつとと乗り込んで来い。」

リム（リアナ）「でも武器も無いんじゃ・・・！」

アクセル「その心配は無用なのさ、これがな！」

その言葉に呼応するかのように、地下から何かが突き破つてきた。  
それらは敵の軍団を薙ぎ払い、瞬く間に形勢を逆転させた。

ハーケン「あれは・・・なんだ！？」

腕だ！

脚だ！

巨大な体だ！

それらは旋風を巻き起こしながら一つとなり、  
蒼と紅の2体の巨人が大地に降臨した！！！

アラド「ゲエ・・・ツ！」

ペルゼインにソウルゲイン！？？」

リム（リアナ）「何か今、もの凄く有り得ない登場の仕方だつたけ  
ど・・・！？」

アルフィミイ「よく分かりましたですね、アクセル。」

アクセル「お前の事だ、バラバラになつたソウルゲインに何か仕込んでいるのは目に見えていた。

それだけの話だ、これがな。」

ジョッショ「常識ハズレのバーゲンセールだな、コリヤ。」ラミア「ですが、今の攻撃でかなりの数が殲滅出来ちゃつたのは事実です。」

アクセル「だが恐らく一時凌ぎに過ぎん・・・」

「すぐに第二波が来る。」

アルフィミイ「ですからここは私達にお任せして欲しいのですのー。」

二人はそう言ひとソウルゲインとペルゼインの「クピット」に乗り込んだ。

この予想外の出来事に一同は驚愕したが、この6人は別の意味で驚いていた。

錫華「（大きさ）異なるが、あの紅の方は紛れも無くあの時の・・・

・  
それを操るあの小娘・・・それとつるむあの男・・・」

エイゼル「（忘れもせぬ。

あの姿は・・・ノース・オリトリニアでの死闘で・・・

！」

ハーケン「（アクセル・アルマー・・・それにアルフィミイとか言ったな・・・

何モンだ、こいつら・・・？」

リシュウ「ム・・・

「どうしたかの？」

神夜「いつ、いえ何でもないです！」

ハーケン「あ、ああ、合体口ボなんて始めてみるから驚いてるのさ。」

アラド「ま、確かにあの登場の仕方は予想外だけど・・・

つか俺達も初めて知つたし。」

カイ「状況が状況だ、もう形振り構つてられん。」

アシェン「皆様、思うことはあると思いますが・・・」

ハーケン「ああ、分かってる。」

あのガールとミスターは味方だ・・・

今はそれでいい。」

カツツエ「・・・全く持つて正論だな。

なあ、エイゼル?」

エイゼル「・・・理解している・・・」

ヘンネ「何ボサツとしてる!」

早く行くぞ!」

鞠音「(む・・・これは?)」

皆はこの場を一人に任せて一目散に格納庫を目指した。

アルフィミニ「皆さん行つた様ですね。」

「このままおいとましますか、アクセル?」

アクセル「お前、何気に黒いな・・・

だがな・・・!」

ソウルゲインは、いやアクセルは逃げるどころか、両の足を大地を踏みしめ戦いの構えをとつた。

アクセル「借りの作りっぱなしは性に合わんでな、

「こでさつきの分を返す。」

アルフィミニ「フフ・・・そうおっしゃると思つていましたの」

アクセル「行きがけの駄賃だ!」

まずは・・・!」

アクセルは照準をレディバードを取り込んだ巨大アイнстロロッ

クした。

アクセル「田障りな貴様からだつ！  
食らつてくたばれ！」

玄武剛弾！」

ソウルゲインの主武器の一つ、玄武剛弾は所謂ロケットパンチだ。参式のドリル・ブーストナックルのように高速回転した拳を飛ばし、対象を挟み込み、打ち貫く。巨大アインストには大きな穴が開通し、断末魔をあげながら大地に倒れた。

アクセル「意外と脆いな……」いつ。「アルフィミイ」「多分、まだ完全に融合しきっていなかつたせいだと思います。」

アクセル「なら暇を与えなければいいだけの話、だな……」「アルフィミイ」「はい、では遠慮なく……」

＜ラングレー基地 P.T.格納庫＞

ハーケン「……つと、ここにもお姫さんがあのじやうじやうじやがるようだな。」

アシェン「ですが、機体への融合の兆候は今のところまだナッシングもしくは軽微でいやがります。」

ハーケン「そいつは重畠つてやつだな、こいつは。」

やはりここにも居るのもアインストのみ、いや『アインストになってしまった』者達のみが蠢いていた。

ラトゥー＝「でも、生存者は1人も居ない……」

アラド「クソッ・・・もつこの基地には、こいつらしか居ねえのかよ……」

ゼオラ「もう、倒すしか・・・方法が無いの……!?？」

ハーケン「ストップだチルドレン・・・！」

ハーケンは迷うことなく、二丁の銃で敵アイнстを打ち砕き、

ハーケン「それ以上泣き言は、本当に生き残ってから言いなッ……」

神夜「ここが勝負どころです！」

今は、迷いは払ってください！」

神夜は月輪で切り刻み、

アシェン「乳牛姫も少しは言つになりましたね。」

アシェンは力技で強引に薙ぎ倒し、

錫華「ほれ！とつとと乗り込まんか！」

錫華は邪鬼銃王で粉々に粉碎して、弱音を吐く三人に檄を飛ばしながら、彼らの道を作つていった。

ラトゥー＝「（許してとは・・・言わない！）」

そして彼らはその道をただ走りぬく。  
今は、振り返らずに。

キュオン「も～！」

敵多すぎッ！！

あの二人、ちゃんと働いてるの～！？

カツツエ「元からここに居たんじゃ仕方ないでしょッ！…」  
ヘンネ「それにあの団体だ・・・打ち漏らした連中も一ひとちに来るんじやないか？」

エイゼル「我ら以外は全て敵、と考えて間違いあるまい！」  
リー「全く！！」

猫の手も借りたいとはこつ云つ事らしげになッ！…」

一方でオルケストルアーミーとリーは博士達、非戦闘員のガードに務めていた。

キュオンはブロンテ・クラフトで打ち払い、  
カツツエは片っ端から蹴り倒し、  
ヘンネはフェーダー・レイで穴だらけにし、  
エイゼルはアックス・マックスで爆碎し、  
リーは持ち前の叩き上げの格闘戦術でまだ息のある敵に止めを刺して。

ジョナサン「くう～・・・」いやもう対人戦なんて生易しいモンじゃないな。」

リシュウ「フム、儂の出る幕はなさそうじゃの。」

ソフィア「これはもう、そういう問題ではないと思いますが・・・」

エリ「鞠音博士・・・？」

鞠音「（さつきのが見間違いでないとしたら・・・

「いえ、私が見間違えるはずはありませんわ・・・！  
なら・・・！）

鞠音博士は見逃していなかつた。

ソウルゲインが空けた地面の穴から僅かに見えていたそれを、  
赤い地上戦艦、サイト・クロコディールを。

そして、それが、正確にはそれに搭載されているものが、今の自分達にとって大きな戦力となる事を理解していた。

ハーケン「チツ・・・もつそろそろ弾切れか?」

神夜「まだ起動できないんですか!?」

ラミア「今乗り込んだばかりだ。」

起動には・・・もう少し時間がかかる!」

ハーケン「こんな『カブツ』がボタン一つで動く筈はない、か。」

アシェン「成程、こっちのほうをプランBにしたのはそういうワケでやがりましたか。」

錫華「出来るだけ早うせい、小童共!」

こちらとて押されてられるのにも限度がある!」

ハーケン「(こんな時にアイツ等がいれば・・・)」

鞠音「艦長!」

・・・『ホール』、可能ですか。」

ハーケン「マジか・・・!?

タイミングよすぎるだろ!?

鞠音「ツァイト、どうやら地下に保管されていたようです。」

ハーケン「そうか・・・!さつきの攻撃で・・・

なら・・・!」

C A L L ! S P E C T E R E S

!

アラド「うおっ、眩しつー?」

ゼオラ「今度は何なのー?」

その呼び声と同時に三つの光の柱が突如として空間を裂いて現れた。そして、光が收まり、その中心に居たのは・・・

「ニア、「・・・!?

あれはつ・・・!-?」

現れたのは『幽靈』の名を冠す機械の兵士達  
漆黒の追撃者・ファントム

蒼き鋼鉄の孤狼・アルトアイゼン・ナハト

紅き白銀の墮天使・ヴァイスリッター・アーベント

アラド「アルトに、ヴァイス・・・それにゲシュペン!-?」

ゼオラ「これがあなた達が言っていた・・・!」

ラトウーー「小型のパーソナル・トルーパー・・・!」

神夜「呼べないんじゃなかつたんですか・・・?」

ハーケン「『召喚』が出来ないだけだ。

近距離なら『ゴール』でワープして来るよう<sup>に</sup>設定して

たのです。」

錫華「ふむ、からくり共が何処にあるのか分からねば、呼んでも意味が無いと言う事か。」

アション「もし来なかつたら只の痛い人になつていきましたね、艦長。

ハーケン「本当に痛いところ突くなよな、アション。

さあ、仕切りなおしだ、幽靈共!-!」

物言わぬ機械の兵達は、ハーケンの意思を汲み取り、瞬時に敵性体を識別し、

自身の持つ力の全てを使ってアイнстラクター達を的確に排除していった。

ファンタム「・・・・・・・」

フォントムは格納庫内、特にハーケン達の武器の射程外のアインストラクターを『ブلاスター・キヤノン』で焼き払い、

近距離の敵は『プラズマサイズ』や『グラン・プラズマカッター』で切り裂いていき、

アーベント「…………」

アーベントは宙を舞い、ファンタムやハーケン達の攻撃を免れて機体に取り付こうとするアイнстトを『パルチザン・ランチャー』の狙撃でフォローし、

ナハト「…………」

ナハトは屋外で格納庫に近づくアイнстトを『レイヤード・クレイモア』で殲滅し、

打ち漏らした相手には『リボルビング・ブレイカー』で打ち貫いてトドメを刺していく。

ラトルー「…………TC-O5、起動完了。」

アラド「ジョンレーター、出力安定！」

ゼオラ「各武装、ほぼ異常無し。」

ラミア「コンディション、イエロー。」

カイ「ハッチは壊していく！」

もう援護はいらん、格納庫から退避しろ！』

ハーケン「オーケイだ、スーパーロボツツ！」

みんな、下がるぞ…………！」

＜ラングレー基地 屋外＞

アクセル「……殆ど片付いたな。」

アルフイミイ「でも皆さん大丈夫でしょうか？」

結構打ち漏らしちゃいましたけど。」

アクセル「ム・・・？」

「どうやらあの連中、そこそこはやるようだな、ここにつま

ソウルゲインのモニターが格納庫から脱出する教導隊を捕らえ、彼らの無事を知らせた。

カイ「皆、無事か？」

ラミア「装甲に一部損傷した箇所がみられちゃいましたが、戦闘には支障ありません事よ。」

ラトゥー「ラプターも問題ありません、変形用のサーボモーターも生きています。」

ゼオラ「こつちはテスラドライブが損傷・・・だけど何とか飛べます。」

アラド「ビルガーは装甲がオシャカになつちましたから、バージするしかなかつたつス。」

カイ「ダメージチェックはもういい、俺の改式も似たようなもんだ。それより他のメンバーは？」

ハーケン「こつちはノープロブレムだぜ、少佐。」

エイゼル「そちらから2時の方向、数十メートル先に待機している。」

「

彼らが心配した矢先、

教導隊の通信回線に突然ハーケン達が割り込んできた。

ラトゥー「生命反応捕捉、間違いありません。」

カイ「しかし通信だと？」

「一体ビッグやつて……？」

鞠音「ファンタムには一通りの電子戦装備をしてあります。

通信回線の割り込みぐらい朝飯前ですわ。」

ハーケン「と言つ事だそつだ、早いとこ拾つてくれないか?」

カイ「分かつている。

断つておぐが、マニユピレーターの乗り心地は悪いぞ。」

ハーケン「命がかかってるんだ。

文句はないさ、ミスター。」

教導隊はハーケン達のほうへ向かい、救出作業を始めようとした。

アルフイミイ「・・・!?

いけません!」

アクセル「・・・!」「いつは!?

彼らの機体が格納庫から出撃したのと同様に、他の格納庫からも幾つもの機体が出撃してきた。

カイ「な・・・!?

こいつらは!?

ラミア「リオン、バレリオン、ガーリオン、それに量産型ヒュッケ

バインMK-II・・・!?

ラトゥー二「ガヴァメントにバンドルグ・・・それにメッサーまで・

・・・!?

アラド「全部この基地の機体じゃねえか!?

もしかして俺達みたく脱出してきたのか?」

ゼオラ「・・・違うわ!

よく見て!」

現れた機体を注意深く観察すると、それぞれに無数の小型アインストが取り付いているのが分かった。

それも一目では区別が付かないほど巧妙に同化していた。だが、巧妙なのはそれだけでは無い。

ラトウーー「……どちらも連邦軍の識別信号が出ています。」ラミア「それに、熱源パターン、各種センサー共に通常のそれと全く変化ナッシングです。」

カイ「成程……！」

擬態というわけか。」

アクセル「カイ・キタムラ。」

こいつらまさか……？」

カイ「……ああ。」

このラングレーの戦力がそのままやつらの手に落ちたと考えて間違はあるまい！」

ラトウーー「それも最悪の形で……！」

アラド「まさかこいつら……最初からそのつもりで！？？」

アルフィミニ「他人のフンドシでお相撲するなんて、あまり感心しませんですの。」

アクセル「『奴』の狙いは本当にソレなのか……？」

いや、戦略的に見て基地機能を潰した時点でもう勝ちは決まっている。

そもそもあのゲシュペNST共が現れないのは妙だな。

・

それとも別の狙いが……？」

？？？「（各機、展開……）  
・・・攻撃、開始。」「

何者かの意思に呼応して、アインストの僕達は動き出した。

ゼオラ「こちに来る……!?」

回避行動・・・

・・・ダメっ反応速度が！？』

戦闘機やリオンを取り込んだアインスト機は、まず、動きが鈍くなつたファルケンに狙いを定めた。

ラミア「ゼオラ、フォローする！」

シャドウ・ランサー、発射！」

ラミアはすかさず左腕のシールドから槍状のエネルギーを放つ『シヤドウ・ランサー』で

敵アインスト機めがけて攻撃した。

攻撃は見事命中し、敵の動体には幾つもの穴が開き、爆散した  
・・・かみえた。

ラミア「・・・馬鹿なつ！？」

バラバラになつたはず破片は、映像を巻き戻すかのように一瞬で元通りになり、

当のアインスト機は何事も無かつたかのよつに反撃してきた。

カイ「ぐつ・・・何が起つた！？」

ラトゥーー「・・・敵機撃墜後、周囲のクリスタルから強力なエネルギー反応を確認しました。

恐らく、それが原因かと。」

ゼオラ「クリスタルが基地中のエネルギーをかき集めていたのは・・・このためなの！？」

アラド「ま、まさか無限に復活するって事が！？」

ラトゥーー「少なくとも、エネルギーが続く限りは……」

アクセル「妙だな……

さつき、レディバードを取り込んだ奴は普通に撃墜でき  
たが……

アルフイミィ「完全に融合を果たした……

その結果だと思いますの。」

アクセル「成程、『奴』の経験から学んだか……  
だが元を断てばいいだけの話だ！」

受けろ！青龍鱗！――

アクセルは近くにあるミルトカイル石にめがけて『青龍鱗』を撃ち、  
その直線状にいるアイнст機ごとの破壊を試みた。

アクセル「やつたか……？」

ミルトカイル石は一瞬ではあるが、確かにバラバラなった。  
だが破片となつたそれは『青龍鱗』のエネルギーを吸収し、  
それぞれの破片が破壊される前のそれと同じ大きさにまで成長して  
いった。

更に悪いことに巻き込まれたアイнст機も同様に増殖して復活し  
てしまつた。

アルフイミィ「どうやら逆効果だつたようですねの……」

アクセル「……言わんでもわかる。」

ラミア「自身の破壊すらも増殖の手段にするのか……」

アラド「こ、これじゃラチがあかねえ所の話じゃねえぞ！……」

カイ「ええいつ！

E系の武器は使うな！

格闘戦、もしくは実体弾で牽制！

「ミニアとゼオラは空の連中を…」

ゼオラ「は、はい！」

ラミア「了解！」

カイ「アラドは俺と地上の敵を！」

ラトウニーは非戦闘員の護衛をしつつ後方支援を頼む…！」

アラド「了解っス！」

ラトウニー「了解…！」

アルフィミィ「アクセル、私達はどういたします？」

アクセル「降りかかる火の粉を払うのはやぶさかじやない。

それに借りもまだ返しきったとは言えん。」

アルフィミィ「フフ…そう言う事にしておきますわ。」

キュオン「うー、なんかティッカイのが出てきたよー！」

カツツエ「小さいほうがやたら格納庫に押しかけてきたけど。

どうやら、中のロボットがお皿当てだつたようね。」

ジョナサン「数が多い上におまけに不死身とは…。

（今度こそ、万策尽きた…かな？）

鞠音「…・・・・・。

艦長、ちょっとファンタムをこちらへ。」

ハーケン「何する気だ、企みドクター？」

鞠音「私の切り札を使うときが来たようです。」

ハーケン「何…・・・!？」

鞠音博士はファンタムの胸部ハッチを開けて、中からコンソールを取り出して作業を始めた。

## 第5話 a 交わる『刻』 その6（後書き）

2009年、大晦日。

この一年、大変お疲れ様でしたm(—\_—)m  
年始はちょっと用事がありまして更新が出来ませんので、今のうちに投稿しておきます。

一日早いお年玉、だと思ってくれれば幸いです、プライスレスですが（苦笑）

常識ハズレには常識ハズレで対抗です。

つて言うか、ジョッシュの一言が全てを物語っています（笑）  
でもソウルゲインとペルゼインの登場の仕方は本当にコレでよかつたのかと正直書いた自分自身でも未だに悩んでいます（^\_^;）

呼ばれて飛び出てスペクターズ。

最初は鞠音博士から時計型遠隔装置渡して呼ぶ、といった感じでした。

掛け声は勿論「スペクターズ、ショウタイム！」

・・・あからさま過ぎますね、はい。

やつと出でてきたスーパー口ボット達。

最初からダメージ受けてるのはスパロボ的に言えば『難易度調整』犠牲になつてもらつたのは装甲と運動性、あとHP  
柔らかいビルガー、避けないフルケン、少ないHP、  
おまけに敵は『ド根性』＆『条件付増援』という、スパロボ的にかなりイヤなステージ・・・  
ガンバレ！耐えろ！逆転イベントは田の前だ！

それではまた来年でノシ

## 第5話 a 交わる『刻』 その7

アラド「コールドメタルソード…」

ビルガーは長剣、『コールドメタルソード』にて突貫してきた敵アインスト機を文字通り真つ二つにした。

右と左に分かれたそれは、それぞれうつ伏せになつて倒れた。  
しかし・・・

アラド「くそつ・・・またか！？？」

それは磁石でくつつかのよつに元通りに一つとなり、這い蹲つた体勢からそのまま飛び掛ってきた。

カイ「ぬうんつー」

すかさず改式が割り込み、敵機を蹴り飛ばした。

だが敵は関節をあらぬ方向に曲げて着地し、瞬時に立ち上がり始めた。

これらの拳動はどれをとっても機械ロボットのそれを凌駕する。

そして碎かれた箇所は瞬く間に修復されていった。

その際、機械の面の下からは人間の皮を剥いだような生々しい顔が見え隠れしていた。

ラトゥー「再生能力だけじゃない・・・！」

あの動き・・・まるで獣・・・いや、それ以上・・・

！」

アクセル「そして例によつて、中身は既に別物か・・・」

カイ「アラド、奴らに斬撃や銃撃は無意味だ！」

蹴るなり殴るなりして押し戻せ！

アラド「わ、分かつてゐッス！」

けど、それじゃ・・・」「

ゼオラ「敵のエネルギーの消耗を抑えているのも同然・・・」

アラドの言いたいことは分かるけど・・・！」

ラトゥーー「敵のエネルギーの総量が分からぬこの状況じゃ、

闇雲に戦つても意味が無いわ・・・」

アクセル「おまけに制空権を押さえられている以上、離脱も出来ん、か。」

ラミア「それに連中を野放しにしておくにはあまりに危険すぎる・・・」

カイ「『生存者は守る』、『連中は叩き潰す』・・・

両方やらねばならんのが辛いが、文句をいう余裕も無い、か。

まあ、いつものことだ・・・！」

アルフィミイ「（でも、彼らの動き・・・何か妙ですの・・・）」

アクセル「（ここから離れようとする動きが全く無い・・・）

ただ単におれ達を狙つてゐるだけ、か・・・

それとも・・・？」

打ち倒した敵はすぐに再生するのだから数は一向に減らない。

また、下手にエネルギー攻撃を使おうものならクリスタルに吸収され、敵に利用されてしまう。

接近してそれらの破壊を試みよつにも敵が立ち塞がり行く手を阻め、近づく事すら出来ない。

なにより自分達の背後にいる生存者は何が何でも守りぬかなければならぬ。

あらゆる修羅場をくぐってきた彼らであつと、この状況は困難を極めていた。

そんな時・・・

ラーニング・ツール

地下格納庫から第5倉庫ハッチへ移送？

「さういふ事なかつた」

力と運営の二重性

それこそ、新たな熱原又心も感知しました！

「新手か!?」

ラトカ——「違う、」の反応は・・・。」

地下格納庫から第5倉庫に送られたソレは、倉庫の壁を強引にブチ破つて現れた。

縦に埠上華船

# アクセル「地上戦艦・・・？」

見かことの無いタトガが……」

カイ　あれば彼らが乗ってきた……しかし、どうやつて！？

鞠音「どうやら、成功したようですわね。」  
神夜「あれってハーケンさんのツアイトじゃないですか！？」

「どうしてあそこから？」

部掌握、

地下に格納されたツアイトを直接あそびに搬送するよ。

「口からおしゃた

ハリケンーでもうで、無人のツアイトが動いているのは・・・?」

込んでおきました。

・・・」なんことあひつかど。

フフフ……一度言つてみたかつたのです、この台詞。

神夜「わ、笑つていいのに、恐ろしいこと極まりないです・・・・・」

鞠音「ゴホン・・・それよりも切り札はここからです。」

鞠音博士はファンタムを介してツァイトに新たな指令を伝達した。  
そしてツァイトはその指令を忠実に実行した。

鞠音「目標、巨大ミルトカイル石。

・・・一斉発射！」

ツァイトの主砲がミルトカイル石にめがけて次々と特殊弾頭弾を発射した。

それらの着弾と同時に、全てのミルトカイル石はまるでもやが消えるように消滅していった。

そしてアインスト機はまるでゼンマイが切れかかった玩具のように動きが鈍くなつていった。

ゼオラ「クリスタルが・・・消えた！？？」

リム（リアナ）「あ、あの髭口ボットのビームにビクともしなかつたのに！？」「

ジヨッシュュ「あのクリスタルを破壊したのか！？」

それもこうもアッサリと・・・！？」

錫華「むむっ？」

あの散り方、見覚えがあるぞ・・・！？」

エイゼル「対ミルトカイル破碎弾『アントラクス』か・・・！？」

ジヨナサン「確かに、君等の世界で開発された特殊弾頭弾だつたか・・・！？」

報告書で一通りは読んではいたがまさかこれほど効果

覗面とは・・・！」

ヘンネ「だけど、戦艦用の弾頭なんて聞いたことも無いぞ・・・・・」

ハーケン「……ドクター、これも『いんな』ともありますかと……  
·かい？」

鞠音「流石の私でもそこまでは……  
ただ、少し前に『ロシー』との悪魔小娘と一緒に着あつた事  
がありましたね、

その時ファンタム達を出したら、それはもう、快く研究データー  
タを差し出してくれまして……  
アレは、その後の勢いでついに作ってしまっただけの代物です。

「キュオン」う・・・

お、思い出したらトリハダガ・・・・

神夜「『』、極悪極まりないです・・・・」

錫華「といふか『勢いで作った』のあたりもどうかしてゐるがな・・・・

「リーマリオン博士は勢いがつくと、もうびりひり止まらないマッ  
ドサイエンティストなのだ。」

ハーケン「オーケイ・・・・

今回ばかりはドクターのサイエンティック・リビデーに

感謝しないとな。」

鞠音「軽くセクハラが入つてゐるような気がしましたが、聞かなか  
つた事にしましょう。

あと、ツアイトまじめに向かわせるように指示をしておき  
ましたので、

あちら方へそのように伝えておいてください。」

ハーケン「へいへい、相変わらず上司使いが荒いって……」

ハーケンはファントムを使ってカイ少佐に通信をつなげた。

カイ「・・・む？」

彼らからか。」

ハーケン「これで連中は再生できなくなつた筈だぜ、少佐。」

ラミア「確かに・・・

敵アイнст機、再生出来ないようでござります。」

ラトゥー二「それに、機動力の著しい低下も確認しました。」

アラド「一体、どんな手品を使つたんスか！？」

ハーケン「種明かしはショウガ終わつてからだぜ、ボウズ。

俺達はツァイトで脱出する、ルートを確保してくれ！」

カイ「了解だ・・・！」

あのクリスタルさえなればこっちのものだ！」

アクセル「理屈は知らんが、流れは俺達にあるようだな、こいつは

！」

カイ「ああ、奴らを叩くなら今しかない！」

各機展開！

敵アイнст機を殲滅しろ！」

ラミア「了解・・・！」

ターゲット、プルーラルロック。

リミット解除。

「一ド・ファントムフェニックス！」

アンジュルグの最強兵装、『ファントムフェニックス』

エネルギーを一点集中させた一矢はその名の如く燃え盛る不死鳥の姿を連想させる。

それが生み出す炎の渦は動きの鈍つたアイнст達を一欠けらも残さず焼滅させていった。

アラド「俺達も負けてらんねえな！」

ウイング展開！ドライブ全開ツ――！

本気出すぞ、ゼオラ！――！」

ゼオラ「ええ！

パトーンTBS、

クロスアレンジ！

ブースト！――」

空のアインスト達も、もはやこの百舌と隼の格好の餌食でしかない。高軌道且つ高速のコンビネーションは戦闘機やリオン如きでは何をされたのかを理解する事すら難しい。

あるものは切り裂かれただろう、あるものは撃ち抜かれただろう、だが過程は問題ではない、何故ならどれも最後には・・・

アラド&ゼオラ「ツイン・バード・ストライクツ――！」

跡形もなく碎け散ったのだから。

アインスト機「・・・・・」

いくり弱りきつたからといって、アインスト達が攻撃の手を辞める理由にはならない。

物量では彼らのほうが上回っている、それに被害はまだ彼らのほうが少ない。

カイ「ム・・・・!？」

彼らは狙いを一つに絞り、銃火器の連続放火を浴びせた。

常識的に考えれば疲弊した一体に対して複数でかかれば確実に撃墜おとす事が出来る。

そして、動かなくなつたそれに確実に止めを刺すべく接近していつ

た。

だが彼らが狙つた獲物にその常識は当てはまらない。

カイ「フン・・・

これほど見え透いた手、まるで話にならんな。」

アイнст機「！！！！！！！」

接近してきたアイнст機は頭を握りつぶされ、その胴体に懇親の  
プラズマステークを打ち込まれ、爆散した。  
異変に気付いたがもう遅い、既にカイ・キタムラが駆る改式の射程  
内だからだ。

カイ「プラズマ・ジェネレーター、フルドライブ！

全サーボモーター、強制排熱！

ダブル・プラズマステーク、セット・・・！」

改式から立ち上る蒸氣は、まるで搭乗者の気迫そのものの様だった。  
だが、彼らがそれを認識したのは自身が打ち滅ぼされていく最中だ  
った。

カイ「ぬおおおおッ！」

回し蹴り、踵落とし、正拳突き、逆突き、手刀打ち・・・  
誰も彼も刹那の中でその技の前に散つていった。

カイ「・・・ふうー。」

これを天下無双と言わばして何と言ひつか。

アクセル「・・・一気に叩く！」

援護しろ！」

アルフイミィ「はいはい、いつもの事ですのものね。」

ペルゼインの両肩部に浮遊している鬼面型のパーティ『オーボサツ』が分離、巨大な傀儡に変化し、

『ヨミジ』と呼ばれる破壊光線を放った。

アクセル「・・・受けろ！」

舞朱雀！――

発射と同時に、ソウルゲインは敵の懷に飛び込み両腕のブレードで高速で斬り刻んでいった。

そして『ヨミジ』が命中する刹那、ソウルゲインはあらかじめ分かつていたかのように離脱し

AINスト達だけがその攻撃を受けて宙を舞い、

アクセル「でいいやつ！」

最後にはソウルゲインの渾身の一撃を受けて爆散した。

ラトゥー「・・・逃がさない、誰一人として！」

ラプターはこれらの攻撃から逃れようとするAINスト機をハイパー・ビームライフルで片つ端から撃ち落していった。

只、淡々と、只、黙々と。

錫華「ほーほつほ

こつも圧倒的とは氣分爽快であるな。」

ハーケン「まあ、大きい分、ウチのロボッソよか迫力はあるな。」

リー「艦長、どうやら全員乗り始めたようです。」

鞠音「全パーソナル・トルパー、収容完了」。

ツァイトももう少しだけなら無茶できますわー！」

ハーケン「オーケイ、ケツまくつて逃げるぞー！」

リー「アイアイサー！」

ツァイト・クロコトイール、フルドライブ！」

全員を乗せたツァイトは煙を点てながらも全速力で基地脱出を目指して発進した。

ラミア「全ターゲットの撃墜を確認。

再生も見られないようです。」

ラトゥー「それと、地上戦艦の脱出を確認しました。」

カイ「良し・・・！」

全員、地上戦艦に続いてこの場を離脱だ！

アラド「了解っス！」

アクセル「・・・・・」

ラミア「どうかしましたでっしゃ ろうか、隊長？」

アクセル「・・・アルフィミヤ、おまえはどうだ？」

アルフィミヤ「なんともいえませんの・・・

ですが・・・」

アクセル「なんとはなしに嫌な予感はする、か。」

? ? ? 「全戦力・・・消滅・・・

計算外の・・・正体不明の敵による・・・クリスタルの消滅を確認・・・

これより・・・最終段階へ移行する・・・

全ては・・・予定通り・・・」

次の瞬間、全ての機体のモニターにアラートメッセージが奔った。

その内容は彼らの血相を一瞬にして変えるには十分すぎるものだった。

「トゥーー」「さ、基地地下部ジヒネレーターより異常熱量反応！？」  
それに、このエネルギー値は……！？」

フニア「熱量膨張の加速度から推測して、

爆発まで一分とかからないでしあわうと思します……」

更にこの基地の火器類と連鎖反応を起した場合……

アクセル「もうそれ以上言うな……」

「ういう事か、こいつは……」

アラド「ど、どういう事つスか？」

アクセル「奴らは全員ブラフだ！」

おれ達をこの爆発に巻き込むためのな！」

ゼオラ「お、匪だつたってこと……？」

アラド「あ、あれ全部がか！？」

アルフィミィ「彼らはここから離れようとはしませんでした。

それに理由があつたのだとしたら恐らく……」

「フニア「確かに……」

そう考えればあれらがわざわざ擬態していたのもつなづける。」

アクセル「ああ。

アレ以上に食いつきやすいヒサは無い……！」

アラド「・・・クソッ！」

俺達やまんまとハメられたって事かよ！？」

カイ「話は後だ！」

総員、全速力で離脱だ！」

事態は、フニアの予測通りに起つた。

基地は一瞬のうちに炎のドームに包まれ、  
ソニックウェーブ  
衝撃波と爆音が唸りを上げ、

巨大的な巨大なキノコ雲が立ち昇つていった。  
だが、その爆心地で起きていた事など、このとき誰が予想していた  
であろうか。

？？？「・・・・・」

〈荒野地帯 ラングレー基地より十数キロ地点 基地自爆より数分後〉

ハーケン「・・・み、皆、怪我は無いか?」

錫華「み、皆ぬしと似たようなザマであるぞ・・・」

神夜「こ、今回の衝撃は凄まじい事極まりなかつたです」・・・」

ハーケン「アシェン、何が起こつたかわかるか?」

アシェン「天井と床が2・3回程入れ替わったのを記録いたしました。」

御覧になりやがりますか?」

ハーケン「ハツ・・・冗談きつぜ。」

アシェン「そうですか、爆乳姫の上とか下とかがそれはもう大変な事になつていたのですが・・・」

ハーケン「・・・いや、やっぱり艦長として艦に関する記録映像はキッチリ見ておくべきだな。」

神夜「ハ、ハーケンさん・・・?」

錫華「今はそれ所ではないであろうに・・・。」

お主がチャラ助平なのは元からとしてもだがの。」

ハーケン「いやいや、これは軽いジョークさ。」

天井と床が入れ替わった・・・

それはつまりヴァイト・クロゴティールが引っくり返されたと言つ事を意味していた。

ラングレーを一瞬で燃やし尽くした爆発の衝撃波は、遠く離れたこの巨大な地上戦艦を転がすだけのパワーを持っていたのだ。

エイゼル「フム、特に目立った外傷も無いな。

問題あるまい。」

ジョナサン「相変わらずとんでもないタフさだな、君達は・・・

つあ、痛づづ・・・

こりゃ骨にヒビでも入ったかな?」

キュオン「うう、キュオンも痛い!」

ヘンネ「アンタはまた頭撃つただけだろ?」

キュオン「痛いものは、痛いの!」

リシュウ「我慢が足りんの、お嬢ちゃん。

この程度、気合と日頃の鍛錬があれば・・・  
むぐぐ・・・」

ジョッシュ「所長も先生もあまり無理はなさらないほうが・・・」

エリ「ジョシュア君、そういうあなたは大丈夫なのかしら?」

ジョッシュ「経験上、似たような目に何度も遭っていますんで。

それより・・・リムは!?

リム(リアナ)「アタシなら平氣だよ、アニキ。」

ジョッシュ「無事でよかつた・・・

怪我はないか・・・?」

ソフィア「私達3人なら、大丈夫よ。

この方々が助けてくれましたから。」

リー「礼には及びませんよ。

ウチのドクターを助けるついででしたから。」

カツツエ「それにこういった動体視力とか瞬発力だったら猫科のアタシ達の出番でしょ?」

ハーケン「グッジョブだな、キャットガイズ。

で、さつそくだが我等がドクター・マリオンに聞きたいことがあるんだが・・・」

鞠音「ツアイトの事でしたら、暫くお待ちください。

なにしろひつくり返されたなんて初めての経験ですからして。

ハーケン「流石のツアイトも今回ばかりは手探り、か。

今度何か仕込むんだつたら、反重力システムとかにしてくれよ。」

鞠音「いいですね、それ。」

神夜「でも、どうしてこんなことに?」

ハーケン「アシエン、はぐらかさなくていい・・・

ありのままを言つてくれ。」

アシエン「・・・ツアイト後方から巨大な熱量反応と衝撃波を感じしちゃいました。

規模と方向から推測して、おそらくあの基地そのものが・

・・・

錫華「爆滅したと・・・?」

ジョナサン「基地地下のジェネレーターと配備されていた爆発物・

・

それらが一瞬で連鎖反応を起こしたと考えるのが妥当だろうな。」

ハーケン「解説感謝するよ、ドクター。」

・・・それよりも、あの連中は?」

エイゼル「あの規模だ、直前で脱出したとしても・・・恐らく・・・

・

カツツエ「・・・イイ人だつたわよね、彼ら・・・」

ヘンネ「ちょいと五月蠅かつたけど、ね・・・」

リシュウ「・・・お主ら、そう早々と葬式気分になるでないぞ。」

ハーケン「リシュウグランパの言う通りだな。」

グリーフワークにはまだ早すぎる。」「

ジョナサン「それがああ見えて彼らも結構しぶとい性質だからね、君達と同じで」

「応答せ……ら……イ・キタム……  
くりかえ……答せよ……」

ハーケン「つと……言つてゐ側から來たようだな。  
なんか妙にタイミングが良くないか?」

アシエン「割と前から電波は飛び交つていやがりました。  
ですが皆様何かとお忙しそうなので繋ぎませんでした、  
あえて。」

ハーケン「お前は暇だろ? が、アシエン。  
ひとつと繋げろ!」

カイ「むう……

応答が無いな……

アラド「ま、まさか爆発に巻き込まれたんじゃ……。」

ラミア「その可能性は低いだろ?」

私達より早く脱出した分、向こうのほうが距離がある。」「

ウトウー「ただ単に通信機能が故障してこるだけかもしれない。」

・

ゼオラ「それにわたし達がこうして生きている――

だから、生きてる……必ず!」

アルフィミイ「あら、アクセル。

『ぐだらん、とんだ茶番だ』とかいいませんの?」

アクセル「連中からはまだ何も聞いちゃいない。」

探し出して、聞くだけ聞いたらずらかる、それだけだ、  
これがな。」

アルフィミイ「『た、助けるのは自分そのためなんだからね!』『

と云つ事ですね。」

「ハリマ、「（隊長、流石です。

バリエーションも豊富だ・・・」

ハーケン「あー・・・」ハリマ「アイト・クロ」「ブライール、全員無事だ、どうぞ。」

アクション「ちょっと聞いて楽しかったですぅ、ビーズ。」

ラミア「・・・発信源、補足しちゃいました。」

アルフィイミィ「あら、意外と早く見つかりましたのね。」

アラド「つて言うか今の聞いてたのかよ!」

## 第5話 a 交わる『刻』 その7（後書き）

ようやく戦闘パート開始、そして終了（早つ）  
な第5話7回目です。

今回は

『最強伝説澄井鞠音』

『ラングレー大爆発、ぶつちぎつバトルスーパー口ボツツ』  
の一本でお送りしました。

・SFの世界で一番重要なのは、兵士でもロボットでもなく  
マッドサイエンティストだと思います。

それこそ頼もしいサポートーからラスボスまで  
鞠音博士は前者ですが（笑）

・なんだかんだで爆発オチですが、これで終わってわけじゃあり  
ません。

その辺は次回で（＾＾；）

・「あれ？ そういえばアレが確かテスラ研から・・・」

その辺も次回で（汗）

丁度一月ぶりの更新になりました。

このぐらいのペースで更新できれば良いのですが、

とりあえず、次回は2月25日前までは投稿するつもりです。

理由はEXCEEDをプレイして妙な影響を受けないようにするため。

いえ、EXCEEDの設定もガンガン使っていますけど私個人の  
解釈も織り交ぜたいので主にアクセルとハーケンの関係とかですが。

それではまたノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6527f/>

スーパーロボット大戦OG

2010年10月8日21時47分発行